市道市場岡田線新設に伴う

岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書

泉南市文化財調査報告書 第二十八集

― 本文及び図版編 ―

1995

泉南市教育委員会

正　誤　表

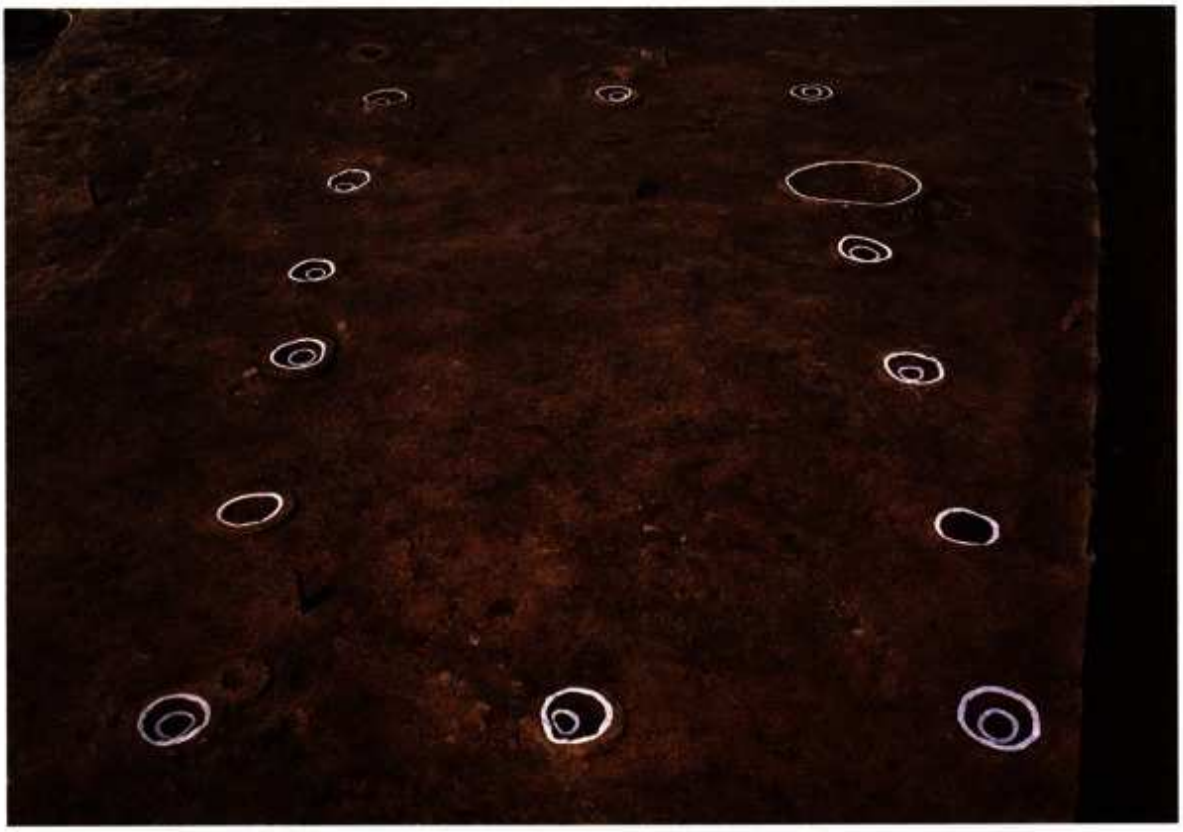
訂　正　箇　所	誤	正
P．３０　第15図　中央左	ＳＫ04	ＳＫ03
P．３０　第15図　中央右	ＳＫ03	ＳＫ04

遺跡全景

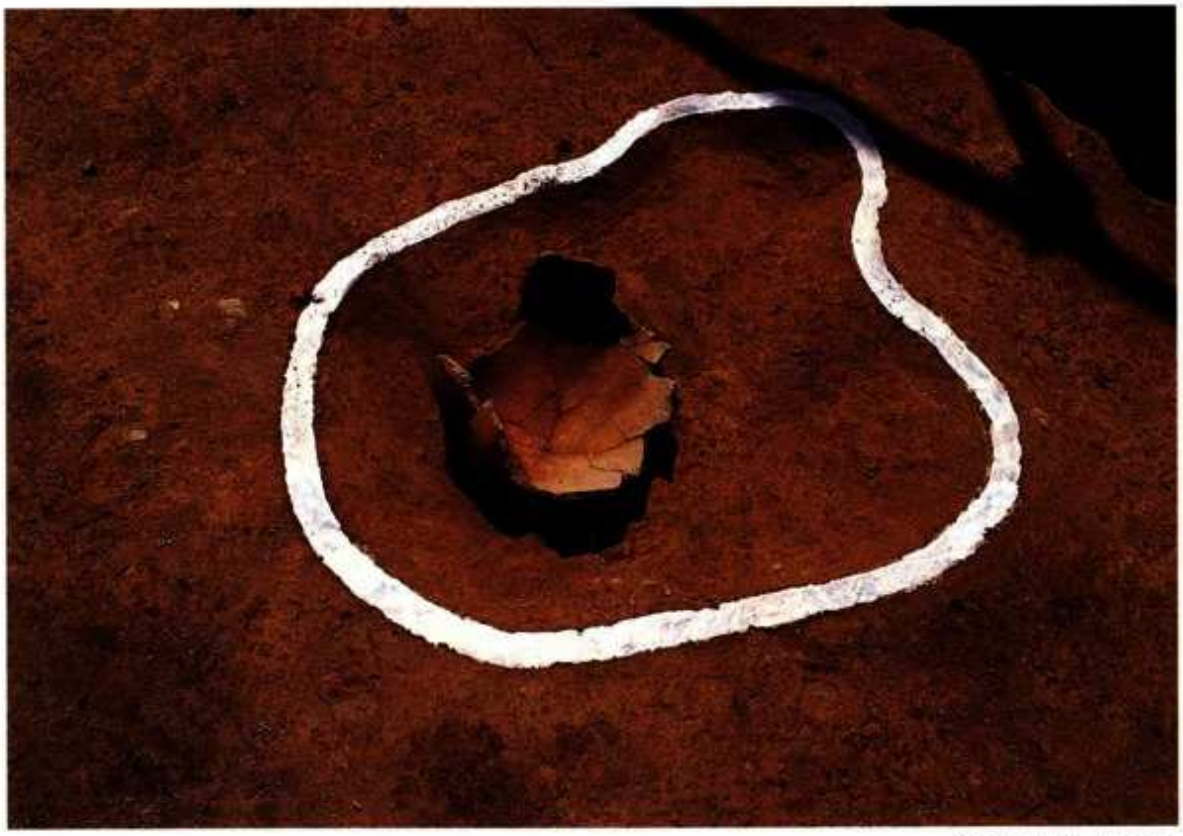
第1調査区　SD02・04

第1調査区　SE01

第2調査区　SE01



第3調査区　SB01



第3調査区　SK01

序　　文

私達のまち泉南市は今、ここ数年来の関西国際空港建設並びに昨年９月の開港に伴う関連開発事業の急増等により、その姿を大きく変貌させようとしています。新空港の建設は関連産業に一定の経済効果を与え、また道路設備等の都市基盤の充実により私達の市民生活は確かに暮らしやすいものになりつつあります。

ところがその一方で、開発の急増はその地域の自然豊かな景観を変質させ、過去のさまざまな文化を現代人に見えにくいものにしがちであります。埋蔵文化財の発掘調査はその行為から先人の残してくれた文化遺産を守り、後世に伝えていくための最たるものといえるでしょう。

本書は、関西国際空港から「りんくうタウン」、泉南市域へと導くアクセス道路の一端となる「市道市場岡田線」予定地内で確認された『岡田西・氏の松遺跡』発掘調査報告書でございます。

この発掘調査から得られる「先人の偉大なる過去」を皆様にご理解頂き、古代の泉南の姿を脳裏によみがえらせて頂くだけでなく、これからの泉南のまちづくりへと想いをはせる「滑走路」に本書がなり得れば幸いと存じます。

文末ではございますが、この調査にご援助、ご協力、ご理解をいただきました近隣住民の皆様並びに関係諸機関に対しまして、厚く御礼申し上げますと共に、今後とも文化財行政に対し、旧倍のご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成７年３月31日

泉南市教育委員会
教育長　赤井　悟

例　　言

1．本書は、都市計画道路市道市場岡田線新設に伴う岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書である。

2．本書は、本文及び図版編と別冊図版編の二冊により構成される。

3．遺跡は、岡田西遺跡が泉南市中小路及び岡田、氏の松遺跡が岡田に位置する。

4．調査は、泉南市事業部の依頼を受け、泉南市教育委員会が実施した。道路用地の面積は、およそ11,000㎡である。

5．調査は、まず、試掘調査を平成元年12月から平成２年３月まで実施し、泉南市教育委員会　社会教育課　岡田直樹が担当した。この結果をもって、平成３～５年度の間に、１～３次にわたって、社会教育課　石橋広和を担当者として本調査を行った。

6．整理作業は、本調査開始と同時に並行して行い、平成６年度には報告書作成作業が行われ、本書の刊行に至っている。

7．本調査にあたっては、泉南市事業部都市計画課および土木課をはじめ、用地に隣接する地元農家並びに、中小路・岡田区の周辺住民の方々には、多大なご迷惑をおかけする一方、格別なるご協力・ご配慮も賜った。ここに記して厚く感謝の意を表する次第である。

8．本調査及び整理の過程では、下記の方々に有益なご教示を頂いた。記して感謝の意を表する。（敬称略）

向井俊生（泉南歴史研究会）・広瀬和雄（大阪府教育委員会）・土井孝之（財団法人和歌山県文化財センター）・中沢道彦（日本考古学協会員）

9．遺物実測は、石橋をはじめとして、横井佐絵子、真珠久美、久世佐紀子、大多和恵が行った。またトレースは、真珠、大多和の他、芝野智津子、横井佐和子、河村公美子によるものである。

10．この他の調査・整理の実施にあたっては、下記の方々に協力を得た。

［現場作業］

松本堅吾（現島根県斐川町教育委員会）・田上信一・高山智史・蔵田弘幸・塔田政男・日田光司・平野伸一・松下隆・岩橋良典・梶本太昭・松下徹・氏田英利・長谷典彦・広尾昌幸・山田朋宏・服部雄二・丸谷昌男・亀田大介・石川和男・阿久根光敏・油野健介・植田哲也・上山剛司・阿波屋昌樹・大家優昭・一色和・奥田邸史・梶本禎之・藤野渉

［整理作業］（現場と重複するものは除く）

上井憲代・山本紀子・大西和歌子・玉置由紀・日垣愛・八羽康代・上野友紀代・大川美佳・久保真理・巴山忍・宮沢薫・小野泉・江尻美代子・村上佳子・時松恵里・松本真規子・宮下明子

11. 本書は、第Ⅲ章を社会教育課　河田泰之（現在財団法人　大阪府埋蔵文化財協会に派遣中）が執筆し、石橋が全体を調整した。その他の章は、石橋が執筆した。
12. 本書の編集は、石橋が行った。

凡　　例

1．本書で掲載した地形図、遺構実測図、その他の図の北方位は、すべて座標北を表す。

2．本書で使用した平面図の座標数値は、国土座標第Ⅵ系を基準にしX、Yを示しているが、kmは省略している。また断面図の位置は、平面図中にアルファベットでA－B、C－Dなどとして示され、その場所が一致する。

3．発掘調査及び、本書記載のレベル高は、T.P.（東京湾標準水位）＋の数値を使用しているが、T.P.＋は、省略している。

4．遺構の名称は、下記の通りアルファベットの組み合わせによって表しているが、一部適当な呼称法の見つからないものは、そのまま日本語の名称によって呼称している遺構もある。また、遺構番号は2桁を原則とし1桁の数字には前に0を付している。

ＳＢ　建物　　ＳＤ　溝　　ＳＫ　土坑　　Pit　柱穴

5．本書で使用した土壌色は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』1988を使用して命名しているが、色相・明度・彩度の数値を記したのは挿図及び図版の中だけで、本文中は、これを省略している。

6．遺物実測図の断面は、須恵器を黒塗りにし、縄文土器・弥生土器・土師器・陶磁器を白ぬき、瓦器・瓦質土器を網のトーンに塗り分けて表現している。

7．遺構番号及び遺物番号は、各調査区ごとに通し番号を付し、本文と実測図及び写真図版では、番号は統一している。

8．遺物の出土量を表すのに用いたコンテナは、容積約27.5ℓのものである。

目　　次

巻頭カラー図版

序文

例言

凡例

第Ⅰ章　調査に至る経緯 …… 1

第Ⅱ章　調査区割りと調査方法 …… 4

　第１節　地区割り方法 …… 4

　第２節　各調査区の調査方法 …… 5

第Ⅲ章　位置と環境 …… 7

第Ⅳ章　調査の成果 …… 12

　第１節　層序 …… 12

　　１．第１調査区 …… 12

　　２．第２調査区 …… 14

　　３．第３調査区 …… 17

　第２節　検出遺構 …… 20

　　１．第１調査区 …… 20

　　２．第２調査区 …… 24

　　３．第３調査区 …… 26

　第３節　出土遺物 …… 33

　　１．第１調査区 …… 33

　　２．第２調査区 …… 40

　　３．第３調査区 …… 46

第Ⅴ章　まとめ …… 52

　第１節　遺跡の推移 …… 52

　第２節　弥生集落について …… 55

　　１．時期と集落構成 …… 55

　　２．泉南地域における弥生時代の開始 …… 56

　　３．周辺微地形から見た集落立地と生産地 …… 57

　第３節　水路と水の流れについて …… 58

文化財一覧表 …… 61

報告書抄録 …… 巻末

挿 図 目 次

第1図　泉南市の位置 …… 1
第2図　調査区位置図 …… 2
第3図　調査区配置図 …… 4
第4図　各調査区内の地区割り配置図 …… 6
第5図　周辺の主な遺跡 …… 8
第6図　泉南市出土の縄文土器 …… 9
第7図　第1調査区A区土層断面図 …… 13
第8図　第1調査区B区土層断面図 …… 14
第9図　第2調査区A区土層断面図 …… 15
第10図　第2調査区B区土層断面図 …… 16
第11図　第2調査区C区土層断面図 …… 17
第12図　第3調査区A区土層断面図 …… 18
第13図　第3調査区B区土層断面図 …… 19
第14図　第3調査区SK01・02遺物出土状態 …… 28
第15図　第3調査区遺構平面図・断面図 …… 30
第16図　第3調査区A区土坑群土層断面図 …… 31
第17図　第3調査区SD01平面図・断面図 …… 31
第18図　第1調査区SD02出土の木杭 …… 33
第19図　第1調査区出土の有舌尖頭器 …… 35
第20図　第1調査区出土の平瓦 …… 37
第21図　第1調査区出土の貨銭 …… 38
第22図　第1調査区出土の鉄製品 …… 39
第23図　第1調査区出土の砥石 …… 39
第24図　第2調査区出土の石器 …… 41
第25図　第2調査区出土の貨銭 …… 44
第26図　第2調査区出土の鉄製品 …… 45
第27図　第2調査区出土の砥石 …… 46
第28図　第3調査区出土の敲石 …… 49
第29図　第3調査区出土の石器 …… 50
第30図　第3調査区B区出土の遺物 …… 51

第31図　調査区周辺の微地形 …… 58
第32図　調査区周辺の水路と水の流れ …… 59

巻頭カラー写真目次

巻頭カラー1　遺跡全景　第1調査区　SD02・04
巻頭カラー2　第1調査区　SE01　第2調査区　SE01
巻頭カラー3　第3調査区　SB01　第3調査区　SK01

図　版　目　次

PL. 1　泉南地域の文化財
PL. 2　第1調査区　SE01・SD01・SD05　平面図・断面図
PL. 3　第1調査区　SD02～04　平面図・断面図
PL. 4　第2調査区　SE01・SD01・02　平面図・断面図
PL. 5　第3調査区　A区　SB01　平面図・断面図
PL. 6　第3調査区　A区　SB02・03　平面図・断面図
PL. 7　第3調査区　A区　SB04・05　平面図・断面図
PL. 8　第3調査区　A区　土坑群
PL. 9　第1調査区出土の遺物　1
PL. 10　第1調査区出土の遺物　2
PL. 11　第2調査区出土の遺物　1
PL. 12　第2調査区出土の遺物　2
PL. 13　第3調査区　A区出土の遺物
PL. 14　第1調査区　全景（真上から）（山側から）
PL. 15　第1調査区　A区　第I面（山側から）（海側から）
PL. 16　第1調査区　B区　第I面（山側から）（海側から）
PL. 17　第1調査区　第I面　鋤溝群（北から）　石組暗渠（北から）
PL. 18　第1調査区　A区　第II面（山側から）（海側から）
PL. 19　第1調査区　B区　第II面（山側から）（海側から）
PL. 20　第1調査区　SE01・SD01（南から）　土層断面（南から）
PL. 21　第1調査区　SD02・03　検出状況（北から）　同掘削後（北から）

PL. 22　第1調査区　SD02土層断面（北から）（西から）
PL. 23　第1調査区　SD03（南東から）（南西から）
PL. 24　第1調査区　SD04（東から）　SD05（東から）
PL. 25　第1調査区　SD06（南から）（北から）
PL. 26　第1調査区　SD07（西から）　鋤溝群02（西から）
PL. 27　第2調査区　全景（真上から）（山側から）
PL. 28　第2調査区　A区　第I面（山側から）（海側から）
PL. 29　第2調査区　B・C区　第I面（山側から）（海側から）
PL. 30　第2調査区　第I面　鋤溝群（北西から）（南東から）
PL. 31　第2調査区　A区　第II面（山側から）（海側から）
PL. 32　第2調査区　B・C区　第II面（山側から）（海側から）
PL. 33　第2調査区　SE01（西から）（南西から）
PL. 34　第2調査区　SE01土層断面（西から）（北から）
PL. 35　第2調査区　SD01・02（北から）土層断面（北西から）
PL. 36　第2調査区　第II面遺構　SD03・鋤溝群01（北西から）SD04（南西から）
PL. 37　第2調査区　第II面遺構　SD07・08・09（西から）　同詳細（北西から）
PL. 38　第2調査区　第II面遺構　SD11（南東から）　鋤溝01（北西から）
PL. 39　第3調査区　全景（真上から）（海側から）
PL. 40　第3調査区　全景　A区（真上から）　B区（東から）
PL. 41　第3調査区　A区　第I面（山側から）（海側から）
PL. 42　第3調査区　A区　第I面（北から）（北西から）
PL. 43　第3調査区　B区　第I面（山側から）（海側から）
PL. 44　第3調査区　A区　第II面（山側から）（海側から）
PL. 45　第3調査区　B区　第II面（山側から）（海側から）
PL. 46　第3調査区　SB01（南西から）（南東から）
PL. 47　第3調査区　SB01（北西から）（西から）
PL. 48　第3調査区　SB02（西から）　SB03（北東から）
PL. 49　第3調査区　SB04（北東から）　SB05（南東から）
PL. 50　第3調査区　SK01（東から）　同詳細（西から）
PL. 51　第3調査区　SK02（北東から）（北西から）
PL. 52　第3調査区　SB01及び土坑群（南東から）（南から）
PL. 53　第3調査区　SK13（北から）　SD01（南東から）

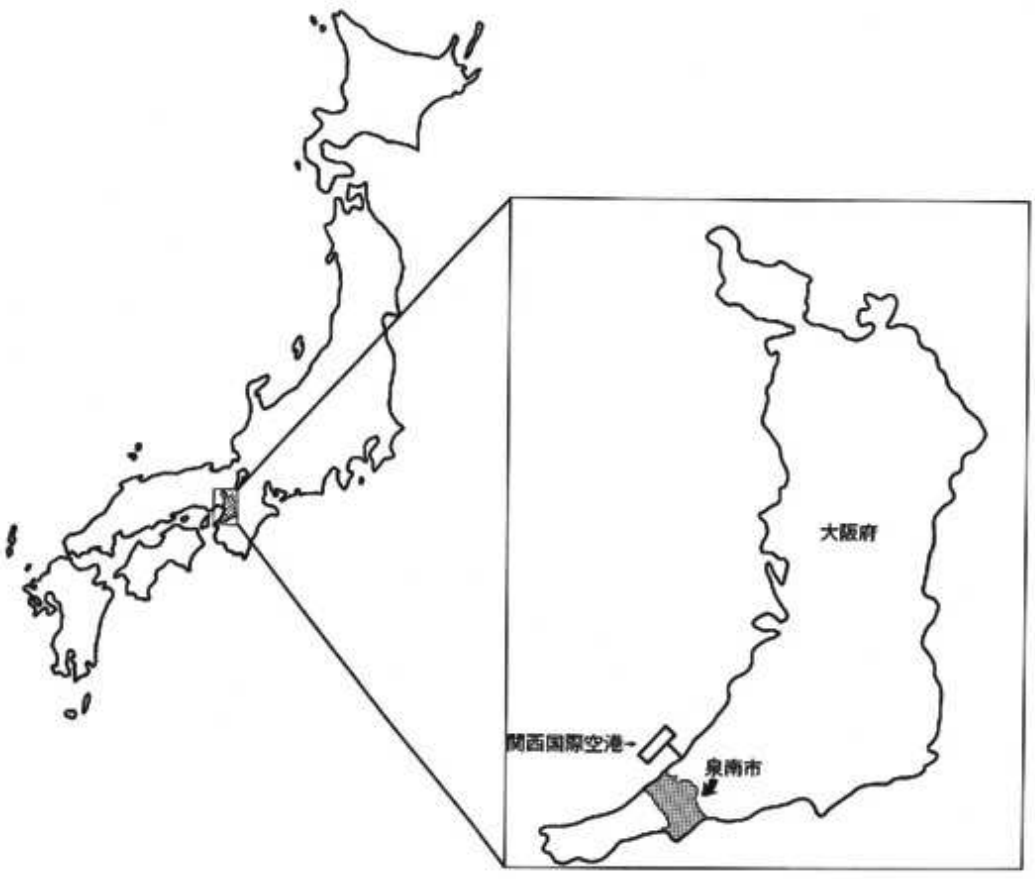
PL. 54　第3調査区　SD02（北から）　B区谷地形（東から）
PL. 55　第1調査区出土の遺物
PL. 56　第1調査区出土の遺物
PL. 57　第1調査区出土の遺物
PL. 58　第1調査区出土の遺物
PL. 59　第1調査区出土の遺物
PL. 60　第1調査区出土の遺物
PL. 61　第2調査区出土の遺物
PL. 62　第2調査区出土の遺物
PL. 63　第2調査区出土の遺物
PL. 64　第2調査区出土の遺物
PL. 65　第3調査区出土の遺物
PL. 66　第3調査区出土の遺物
PL. 67　第3調査区出土の遺物
PL. 68　第3調査区出土の遺物

第Ⅰ章　調査に至る経緯　（第1・2図）

大阪府泉南市は、近年急激に都市化されつつある。特に、関西国際空港建設が具体化するに従い、これに伴うさまざまな大規模な関連事業が予想され、産業発展及び豊かな市民生活を提供するための交通網の整備は急務となった。

このようななか、関西国際空港の機能を支援・補完する南大阪湾岸整備事業、通称「りんくうタウン」は、最も大きな関連事業のひとつに数えられる。この大規模事業に対応するための交通網の整備、すなわちアクセス道路新設こそが重要な課題であった。市道市場岡田線は、この課題を解決するために、主要地方道泉佐野岩出線から、りんくうタウンを縦断し、泉佐野田尻泉南線（臨海線）にいたる道路として昭和61年12月に都市計画決定の変更によって計画された。

道路着工に先立って道路用予定地内の埋蔵文化財についての取扱いが問題となった。そこで泉南市長より泉南市教育委員会教育長宛てに埋蔵文化財の有無を確認する試掘調査の



第1図　泉南市の位置

依頼が提出され、関係機関との協議の結果、教育委員会は平成元年12月から平成２年３月までの間の約４カ月にわたって試掘調査を行うこととなった。この時点において、用地買収は、予定地の全域が完了していなかったものの地形的にはほとんど全域を知り得ることのできるトレンチを設定している。

試掘調査の結果、用地のほぼ全域にわたって、縄文時代晩期から江戸時代までの遺物包含層が確認された。また、遺構については、上層・下層、２面の遺構面を確認するという予想以上の成果を上げることとなった。

この成果により、道路予定用地のほぼ南半分が「岡田西遺跡」、北半分が「氏の松遺跡」として周知され、同時に予定用地のうち主要地方道泉佐野岩出線から海側の府道中小路岡田樽井線までの約650m、11,000㎡の全面について発掘調査が必要であるとの結論に至った。

このため本調査については、泉南市事業部をはじめとする関係諸機関と泉南市教育委員会との間で、再度協議がなされることとなり、再協議の結果、発掘調査は平成３年度から開始することとなった。以後、平成５年度までの３カ年度にわたって試掘の結果判明した

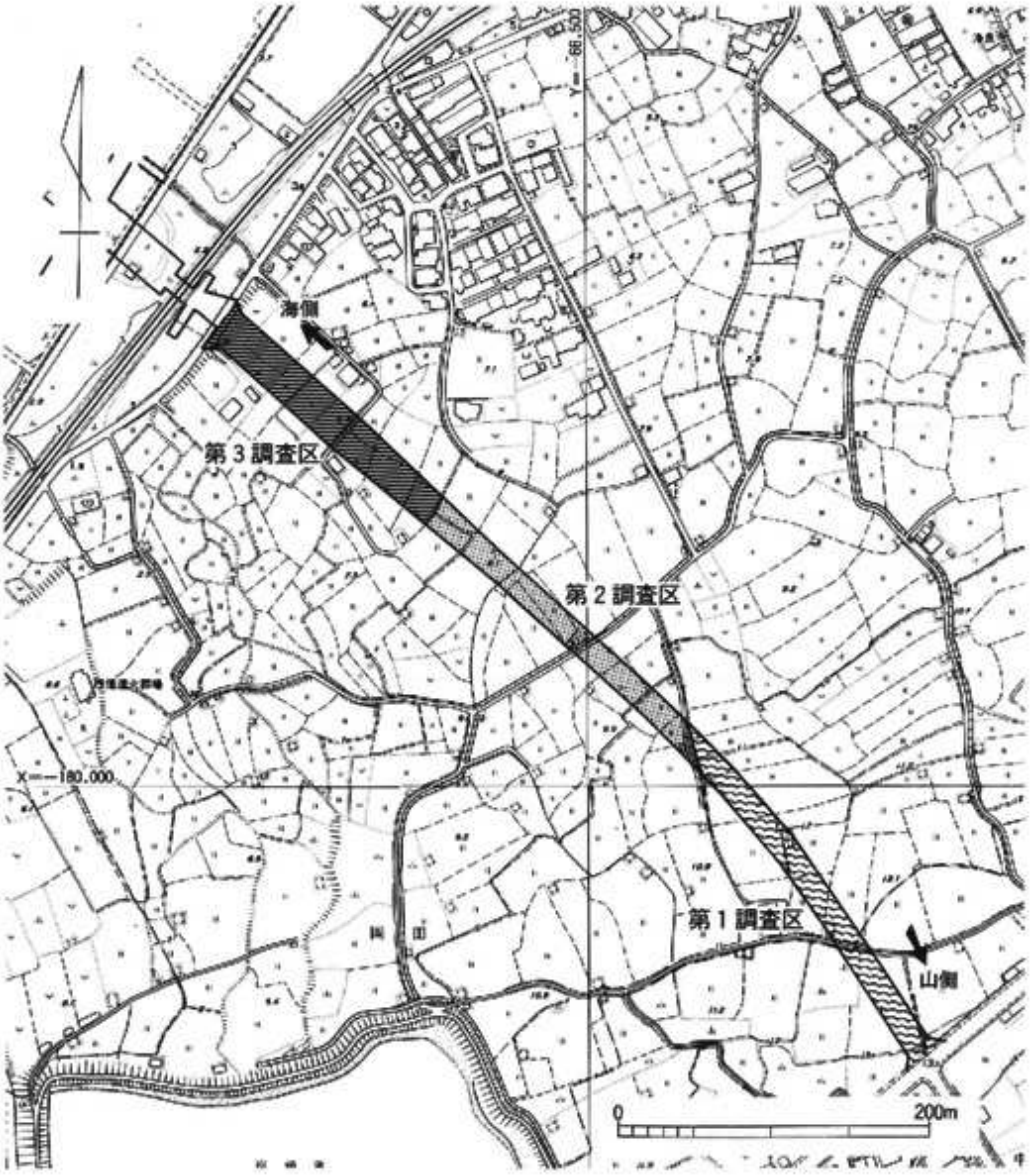
第２図　調査区位置図

土量に従って調査区をほぼ3等分し、泉佐野岩出線側から中小路岡田樽井線に向かって調査を行った。一方、発掘調査に伴う整理作業は、平成3年度から5年度まで本調査と並行して行われた。また、平成6年度は報告書作成のための整理作業が行われ、本書の刊行に至っている。

第II章　地区割りと調査の方法

第１節　地区割り方法（第３・４図、別冊図版１）

遺構の記録は、基本的に航空測量による1/20の図面による。これら航空測量及びその基準点は、すべて国土座標法による新平面直角座標第Ⅵ系のＸ・Ｙ座標を用いている。平成３年度の調査開始時に、今後の調査予定地すべてに使用できる位置に３級基準点を数点打設し、平成４、５年度においてもこれらから航空測量の基準点を起こし、メッシュを組ん



第３図　調査区配置図

だ。

一方、遺物の取り上げ及び遺構検出の地区表示単位は、同じく航空写真測量で使用している国土座標を基にした、5×5mの区画を用いている。これらの区画割りの方法は、大阪府都市計画図の1/2500の地形図を基にし、この地形図を12等分した500m方形区画を作り、AからLまでの記号を付す。さらにこの一つの区画を25等分し100m方形区画を作り、01から25までの番号を付す。この100mの区画を400等分したものが、5×5mの最小単位である。

しかしながら本報告書内においては、今後の調査における互換性を期するために、これら区画単位表示法は、現場調査だけに使用することとし、遺構やトレンチの位置表示については、すべてX・Y座標に再び置き換えて表示している。

また、調査は、先述の通り予定地をほぼ3等分して、3カ年にわたって行われている。調査区総延長は、約650mにも及ぶ。このため本書では、平成3年度調査区分を「第1調査区」、平成4年度調査区分を「第2調査区」、平成5年度調査区分を「第3調査区」として呼称し、調査区別に各節を設けて報告することとする。さらに、第1～3の各調査区は、里道や水路によって分断されているところがある。これらを各調査区内での小単位として、第1調査区のA・B区、第2調査区のA・B・C区、第3調査区のA・B区と呼ぶこととする。また、文中の語句の中には、第1調査区のA区から第3調査区のB区へ向かうにしたがって、便宜的に「山側」から「海側」という表現も使用している。

第2節　各調査区の調査方法（第4図）

第1調査区は、最も山側の主要地方道泉佐野岩出線に取りつく部分から始まりトレンチの延長は約240m、面積は3,631.71㎡である。トレンチのすべてが岡田西遺跡内に含まれている。

調査以前の現状は、大半が水田であり、調査区内である道路用地以外にダンプ、バックホウ等の侵入可能な地域は存在しなかった。そのため、調査区の北東側半分に砕石による工事用侵入路を造成した。そして、これを利用し重機を侵入させ、まず海側のB区の半分を調査し、工事用道路と一緒に反転してB区の調査を終了した後、山側のA区の調査も同様に反転して行った。

そのため、航空写真測量は、A区・B区それぞれ2回に分けて行ったことになり、さらに上面・下面を合わせると合計8回の撮影を行っている。なお、平成4年2月11日には、B区部分で現地説明会が行われ、多数の見学者があった。

第2調査区は、第1調査区の山側に位置する。トレンチの延長は約220mで、面積は、

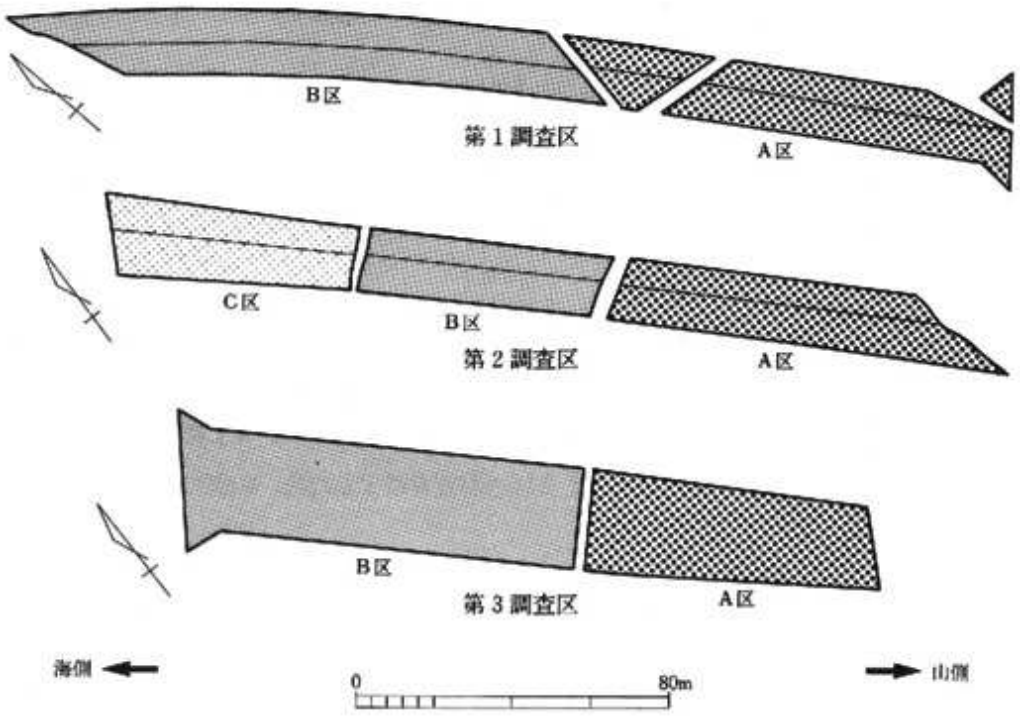
3,565.39㎡である。遺跡の範囲としては、A区までが岡田西遺跡にあたり、B・C区は氏の松遺跡にあたる。調査法は、基本的に第1調査区とほとんど同じ工法が採用された。まず、B・C区を一括で半分ずつ反転して調査を行った後、同じくA区を半分ずつ調査した。航空測量もA区とB・C区でそれぞれ2回、上下の面を合わせて8回行っている。

第3調査区は、最も海側に位置し、府道中小路岡田樽井線へつながる側道部分もあることから道幅が大きく拡がっている。トレンチの延長は約180mを測り、面積は4,206.07㎡である。トレンチのすべてが氏の松遺跡に含まれる。

調査法は前2回と異なり、A区部分に侵入路を造成し、反転せずにB区を一括して調査した。その後、A区も一括して調査を行った。航空測量は、それぞれ1回ずつ、上下面合わせて4回である。

なお、いずれの調査区とも検出した遺構は、上記の調査1回ごとに番号をつけて登録している。そのため、反転調査をした部分では、同じ遺構でも別番号を付けていることになるため、本書で報告する遺構番号はすべて各調査区ごとに新たに付け直している。

また遺構は、擁壁や高架橋などによって破壊される部分を除いて、すべて真砂土による埋め戻し養生が行われ、最低限度の保存処置が取られていることをつけ加えておきたい。



第4図　各調査区内の地区割り配置図

第Ⅲ章　位置と環境　（PL. 1、第5・6図）

はじめに、当遺跡の位置する泉南地域の地理的特徴を概観する。泉南地域は、南東には和泉山脈がひかえ、北西には大阪湾がひらけている。和泉山脈から派生する丘陵および洪積段丘面が発達しておりその大部分を占め、沖積地は河川の下流域のごく限られた地域において形成されている。

泉南市地域も同様に、丘陵および洪積段丘が海岸付近にまで迫り、沖積低地の発達をみるのはごく限られた樫井川左岸と、男里川右岸から長山丘陵までに限られる。このような地形の中で、岡田西遺跡・氏の松遺跡は、山地から海岸線まで続き、市域の大部分を占める洪積段丘面の先端付近にあたる、樫井川左岸の低位段丘面上に立地する。

以上のような地形において、人々の生活はどのように移り変っていったのか、泉南市域を中心に旧石器時代から中世まで、その歴史的変遷をみていくこととする。

旧石器時代の遺物としては、滑瀬遺跡、長滝遺跡、湊遺跡、壇波羅遺跡、三軒屋遺跡、郷之芝遺跡などでナイフ形石器が出土している。

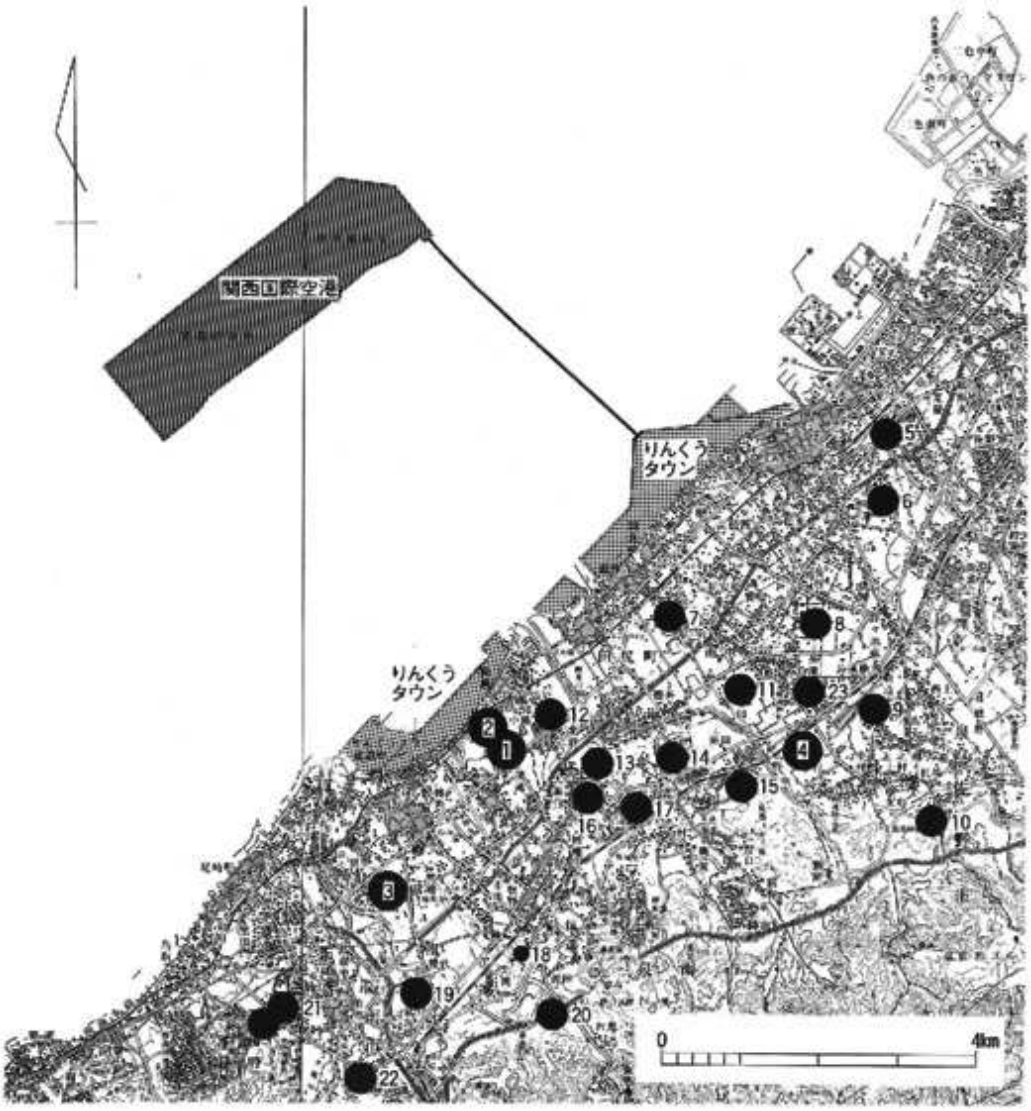
縄文時代は、すでに草創期から遺物がみられる。滑瀬遺跡、玉田山遺跡、神光寺（蓮池）遺跡から有舌尖頭器が、また、海営宮池遺跡からは、木葉形尖頭器が出土している。一方、岡田東遺跡からは、早期の後半にあたる押型文をもつ高山寺式土器が出土しており、市域だけでなく泉州地域においても最古級の土器に比定できる。（第6図　A）前期においてはフキアゲ山東遺跡で、後期では岡田東遺跡、三軒屋遺跡で土器がそれぞれ確認されている。

晩期における当地域の状況は、より明らかになりつつある。樫井川流域では、三軒屋遺跡で集落の一部が確認されており、船岡山遺跡B地点や当調査の契機となった岡田西遺跡の試掘調査（第6図　B）、男里川流域の男里遺跡などでも土器が確認されている。このことから、すくなくとも縄文時代晩期以降、低地に集落を営む傾向がみられ、それらは樫井川流域のもの、その河口付近の段丘上のもの、男里川流域のものの三群にわかれることが指摘できる。また、これらの遺跡のうち弥生系土器と突帯文系土器と共伴を示すものが幾つか確認されている。三軒屋遺跡や船岡山遺跡B地点で、それぞれの前期新段階のものが突帯文系土器と共伴している。一方、男里遺跡では、突帯文系土器との共伴関係はみられないものの、前期新段階の土器が確認されている。このように、これまでのところ泉南地域においては、河内地域等とは異なった様相を呈しており、この事実が何を意味するのかは検討を要するだろう。

続く、弥生時代中期においては、泉南地域の拠点的集落が確認されている。樫井川流域

の三軒屋遺跡、男里川流域の男里遺跡がそれにあたり、男里遺跡では、最近の調査により集落域の実体が明らかになりつつある。

中期後葉には、船岡山遺跡等、従来見られるような沖積段丘上に位置するものに加えて



1　岡田西遺跡　2　氏の松遺跡　3　男里遺跡　4　三軒屋遺跡　5　湊遺跡
6　壇波羅遺跡　7　船岡山遺跡　8　長滝遺跡　9　郷ノ芝遺跡　10　棚原遺跡
11　諸目遺跡　12　岡田東遺跡　13　海会寺跡　14　新家オドリ山遺跡
15　フキアゲ山東遺跡　16　海営宮池遺跡　17　向井山遺跡　18　林昌寺銅鐸出土地
19　高田山古墳群　20　滑瀬遺跡　21　神光寺（蓮池）遺跡　22　玉田山遺跡
23　禅興寺跡

第5図　周辺の主な遺跡

丘陵上に集落が出現する。樫井川左岸の樫井丘陵に位置する新家オドリ山遺跡、その南東に位置する棚原遺跡、金熊寺川の丘陵上に位置する滑瀬遺跡などがそれにあたる。

これら異なった立地を示す集落は、その消長を異にする。つまり、沖積段丘上に位置する集落は、遺構の確認は少ないものの遺物の散布状況から、継続して営まれていたと考えられるが、丘陵上に新たに出現する集落は後期初頭には廃絶し、その存続期間は限られることである。これらの状況が何に起因するものか、今後検討すべき問題のひとつであろう。

また、中期における墓域の状況がいくつか確認されている。樫井川流域の三軒屋遺跡、諸目遺跡、向井山遺跡において方形周溝墓が、男里川流域の男里遺跡で木棺墓が確認されている。またさらに南西の男里川左岸に立地する神光寺（蓮池）遺跡でも方形周溝墓が確認されている。

以上、当地域では、弥生時代中期以降、集落は多少の変動はあるものの、基本的には樫井川流域のものと男里川流域のものの二群によって構成されるといえる。なお、男里遺跡の南西約２㎞の愛宕山より扁平鈕四区袈裟襷文銅鐸が出土しており、男里遺跡を中心とした弥生時代の農耕祭祀との関係が窺われる。

弥生後期において、この地域では三軒屋遺跡、男里遺跡等で遺物が散見されるものの、これらの集落の実体は不明な点が多く、今後の調査が期待される。

墓制が画一化する古墳時代、泉南地域に前期古墳はいまのところみとめられない。当地域における古墳を概観すると、200ｍを越える巨大前方後円墳は、５世紀に相次いで築造された西陵古墳、宇土墓古墳のみで、そのほとんどが５世紀後半以降に築造された円墳等の小規模なものである。それらの立地を見ると、樫井川と新家川に挟まれた丘陵上にフキアゲ山古墳群、新家古墳群、兎田古墳群が、金熊寺川と山中川に挟まれた丘陵上に高田山古墳群、玉田山古墳群が位置し、おおきく二つの群を形成しているといえる。また、低地の三軒屋遺跡でも削平された状態でいくつか古墳が確認されており、今後これらとの関係も非常に注目される。

古墳時代の集落では、前期では三軒屋遺跡、船岡山遺跡Ｂ地点における竪穴住居等が確

A　岡田東遺跡出土　B　岡田西遺跡試掘調査出土

第６図　泉南市出土の縄文土器

認されている。また、後期では、岡田東遺跡で後期の造付けのカマドを備えた竪穴住居、男里遺跡では、柱穴の掘方や集落に関係したと考えられる大規模な溝が確認され、着実な史料の増加が認められる。

飛鳥～平安時代の集落を示す資料として、男里遺跡、湊遺跡等があげられる。これら低地に営まれる時期に加え、海会寺の調査で確認された集落のように新たに出現するものもみられる。また、この時期に海会寺、禅興寺が相次いで建立される。海会寺は、樫井川左岸の洪積段丘上に、この時期の集落を伴って出現する。法隆寺式の伽藍配置を採用し、山田寺式や川原寺式の軒丸瓦を用いている。さらに軒丸瓦の中には、木之本廃寺、四天王寺の軒丸瓦と同笵関係にあるものもある。禅興寺は、遺構は未確認であるが、史料よりその存在を窺うことができる。これまでの調査で、川原寺式、山田寺式、紀寺式の軒丸瓦が出土しており、今後の調査が期待される。これらの新たな集落や寺院の出現は、この時期の当地域においてなんらかの社会的変革を窺わせる。特に寺院の建立などは、前代までの状況から考えると、在地勢力によるものとは考えにくく、この時期なんらかの外来勢力の介入を想定することができるだろう。

律令体制の整備において泉南地域は当初、河内国日根郡とされていた。その後、河内国から分割され、和泉監日根郡、757年に和泉国日根郡となる。和泉国日根郡は、近義・賀美・呼唹・鳥取の四ケ郷からなり、当遺跡周辺は呼唹郷にあたる。また、この呼唹郷には、南海道に伴う馬屋が設置されており、これは現在の男里に比定されている。

平安時代以降の泉南市域における荘園は、史料によると鬼田荘、新家荘、信達荘などがあったことがわかる。当遺跡の位置する周辺は、信達荘にあたり、平安時代末期には、摂関家となっている。泉南地域において、その面積の大半を占める洪積段丘へと開発が広がるのは、このころからである。また、これ以降中世を通して、洪積段丘の開発にともない集落が展開する。それらは、現存する旧村落の位置とほぼ一致しており、このころ以降、現代の景観が徐々に形成されたといえるだろう。

主な参考文献

角川日本地名大辞典編纂委員会『角川日本地名大辞典27　大阪府』（1983）

泉南市教育委員会『男里遺跡発掘調査報告書』（1978）

泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅴ』（1988）

泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅷ』（1991）

泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅹ』（1993）

泉南市教育委員会『泉南市遺跡群発掘調査報告書Ⅺ』（1994）

泉南市史編纂委員会『泉南市史通史編』（1986）

泉南市教育委員会『海会寺』（1987）

泉佐野市教育委員会『船岡山B地点発掘調査報告書』（1985）

泉佐野市教育委員会『三軒屋遺跡』（1993）

（財）大阪府埋蔵文化財協会『滑瀬遺跡』（1987）

（財）大阪府埋蔵文化財協会『男里遺跡』（1994）

第Ⅳ章　調査の成果

第１節　層序

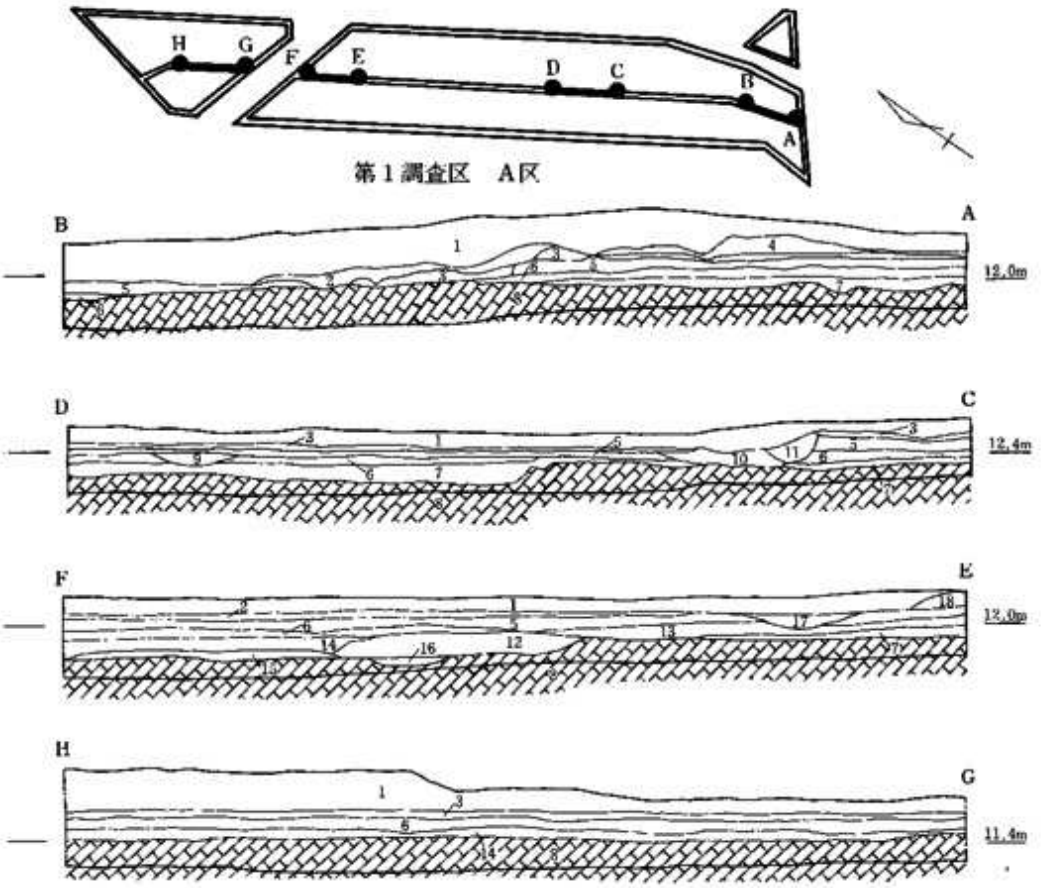
１．第Ⅰ調査区（第７・８図）

遺構面は、試掘調査から２面存在することがわかっている。本調査では、基本的に第Ⅰ面を検出した面までの層を第１層として、地山である第Ⅱ面までの土層を第２層、Ａ地区の山側部分で一部地山が落ち込み深くなっている部分を第３層として掲げている。

以下、各地区ごとの層序をまとめてみたい。

Ａ区ではさらに２地区に分けることができる。山側の面積の大きな地区では、20～30cmの現代の耕作土及び盛土層を機械によって除去すると、明褐色の現代床土層が約５cm、黄褐色系の砂質シルトが約10cmほどみられ、この下層に第Ⅰ面を検出した黄褐色の砂質シルト層が存在する。トレンチのほぼ全域で約10cmの厚さで認められ、鋤溝が数多く検出された。この層を掘削すると、黄褐色系や明黄褐色系の同じく旧耕土と思われるシルト層が20～40cmにわたってみられるが、トレンチの山側半分では確認されなかった。さらにこれらの下層には、にぶい黄橙色系の非常に粘性の強いシルト層が存在する。堅く締まった土質で、マンガンを含んだ部分もある。これらも山側に近づくほどほとんど確認されなくなる。また部分的ではあるが、中央付近でこれらの粘性の強いシルト層の下層にさらに粘性の強い暗灰黄色の土層が認められた。厚さ約10cmほどでマンガンを多く含んでいる。地山は、明黄褐色系のシルトで、部分的にクサリレキなどを含んでいるが、基本的に良好なシルトの面であった。地山のレベルは、山側で約12.5m、海側で約11.6mを測る。一方、海側の小地区は、第Ⅰ面まではほとんど同じ層序を示すが、第２層中の地山付近で確認された粘性の強いシルト層は存在せず、砂質系の旧耕土層と思われる層が１層又は２層だけ確認された。地山は、やや明黄褐色系の礫を多く含んだシルトで、部分的には礫だけのところもあり、検出した遺構の密度は低い。レベルは約11.4mを測る。

Ｂ区は、Ａ区の山側で確認された層序とほとんど同じであるといってよい。現代耕土・床土をそれぞれ10～20cmほど除去すると、第Ⅰ面として検出された黄褐色系の砂質シルト層がみられる。この面で、非常に多くの鋤溝を検出した。部分的にはこの土層に砂質系の旧耕土層が10cmほど認められるところもあるが顕著ではない。なおトレンチ山側から中央付近の一部では床土を除去するとすぐに地山に至る部分もあった。第２層は、第Ⅰ面で検出した黄褐色シルトの下層に20cm程の同じく砂質系の旧耕土層が２層ほど確認された。これらの最下層には、暗黄灰色の非常に粘性の強いシルト層がみられるものの、山側の一部分に限定されている。一方、海側では地山の直上に明黄褐色系の非常に粘性の強いシルト

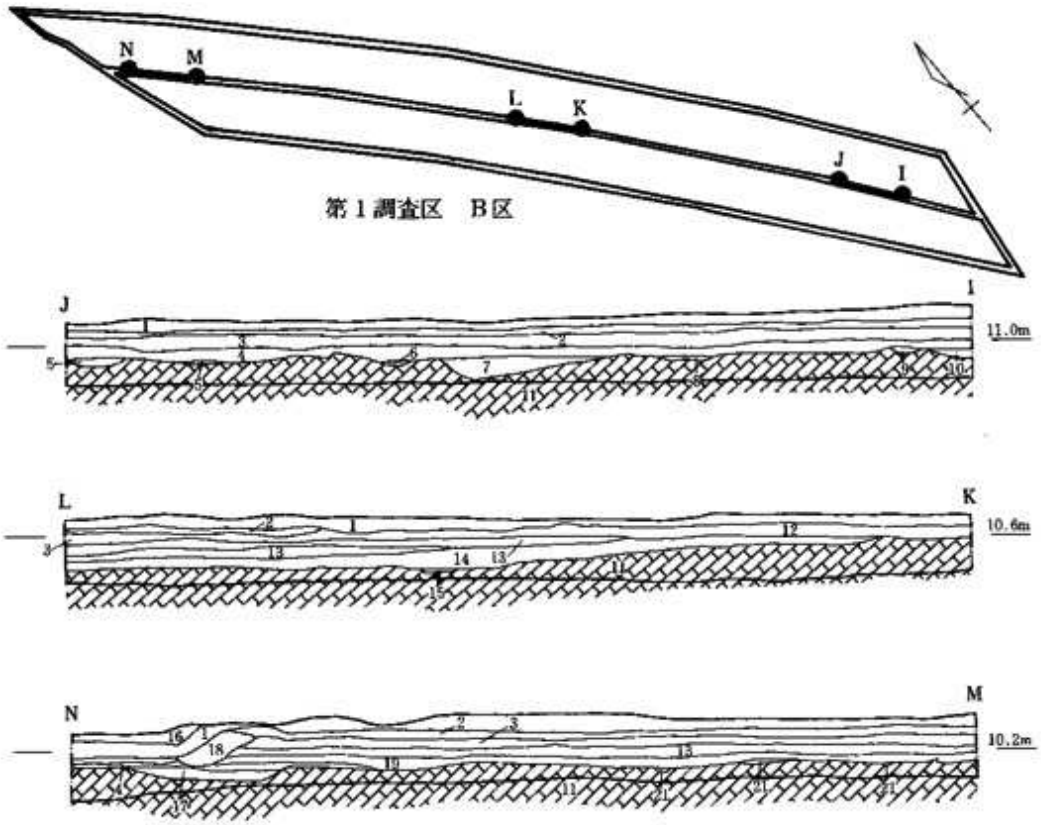


第7図　第1調査区A区土層断面図

層で、旧耕土層に対応する床土層とも考えられる層が、約10～20cm程確認されている。

地山は、A区と同じ黄褐色系のシルトで礫を一部含むが非常に安定している。遺構が密集するのは、山側と海側で、トレンチの中央付近では、ほとんど検出されなかった。レベルは山側で約11.2m、海側で約10.0mを測り、ゆっくりと海側へ向かって下がる。

第1調査区の層位の時期は、第Ⅰ面までの中で現代床土層には、一部近世を含むが、そのほかは、大半が室町時代以前のものである。第Ⅱ面までの層は、古墳時代や古代のものも出土するが、これらの時代の単純層は確認されないことからすべて中世の範囲におさまるとみてよい。



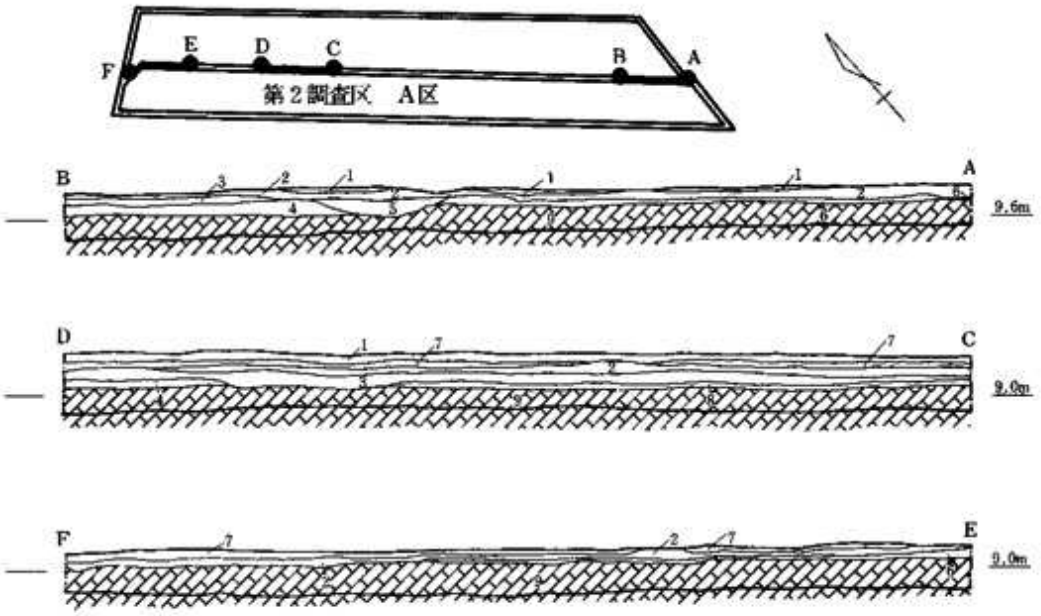
1 現代耕土
2 5YR 4/8 赤褐色シルト(現代床土)
3 10YR 5/6 黄褐色シルト
4 10YR 5/4 にぶい黄褐色粘性シルト
5 2.5Y 5/3 黄褐色粘性シルト(細溝埋土)
6 2.5Y 5/3 黄褐色粘性シルト(細溝埋土)
7 2.5Y 5/3 黄褐色粘性シルト(細溝埋土)
8 2.5Y 5/3 黄褐色粘性シルト(細溝埋土)
9 2.5Y 5/3 黄褐色粘性シルト(細溝埋土)
10 2.5Y 5/3 黄褐色粘性シルト(細溝埋土)
11 10YR 7/8 黄橙色シルト(遺構面)
12 10YR 5/6 黄褐色砂質シルト
13 2.5Y 4/6 オリーブ褐色シルト
14 7.5YR 5/2 灰褐色砂質シルト
15 2.5Y 6/4 にぶい黄色粘性シルト(細溝埋土)
16 砺 土
17 2.5Y 6/2 灰黄色粘土
18 10YR 4/6 褐色砂質シルト
19 10YR 5/4 にぶい黄褐色粘性シルト
20 10YR 6/8 明黄褐色粘性シルト
21 10YR 6/3 にぶい黄橙色粘性シルト(細溝埋土)

第8図　第1調査区B区土層断面図

2．第2調査区（第9～11図）

第2調査区は、A～C区の3つに分かれる。里道や水路で区切られて、層位はそれぞれ若干異なるようである。

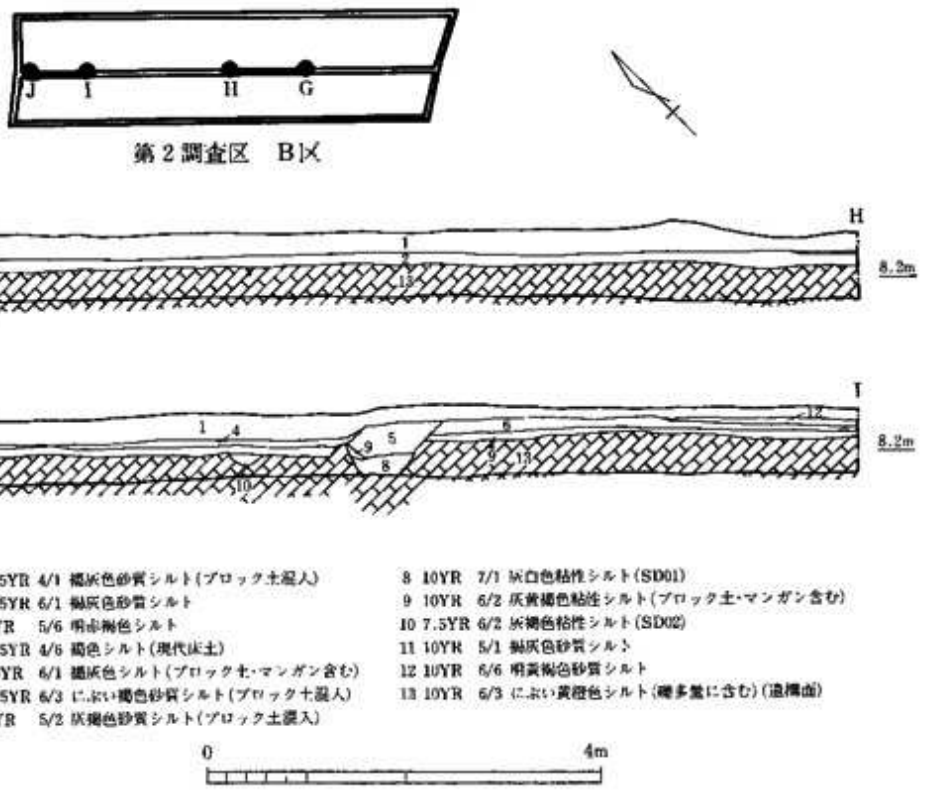
A区は、約10～20cmの現代耕土と床土が存在するが、すでに失われている部分も多かった。この下層に、にぶい黄褐色系の砂質シルトが10cmほど入り、第Ⅰ面の明黄褐色系のやや粘性を持つシルト層に至る。また、トレンチ中央部では、この明黄褐色シルト層は確認されず、灰黄褐色砂質シルト層が第Ⅰ面となった。一方、山側半の一部では、床土層を掘削した時点でほとんど地山が検出され、第Ⅰ面の遺構は海側に集中することとなった。第



第9図　第2調査区A区土層断面図

I面の層を掘削すると、トレンチ中央付近だけに数層の旧耕土が約30cmほど存在し、最下層には、暗黄褐色の非常に粘性の強いシルト層が確認された。地山の土をブロック状に含むところもあり、耕作による攪乱と考えられる。トレンチ海側及び山側部分は、第I面の層を掘削するとすぐに地山層に至る。地山は、トレンチ山側半分においては黄橙色の礫層がほとんどで、SE01などが検出されている。海側に近づくにつれ、シルト層へ変化する。レベルは、山側で約9.6m、海側約20mまでほぼ水平であるが、これ以降、徐々に落ち込み、海側で約9.0mを測る。

B区は、全体に包含層は希薄である。約10cmの現代耕土と床土を除去すると褐灰色系の砂質シルトが10～30cmの厚さで認められる。これを第I面として検出したが、遺構はほとんど検出されなかった。また、そのすぐ下層には地山が検出された。トレンチ山側では、床土の直下に地山であるところがかなり見受けられた。同じく、山側では床土層より切り込む粘土採掘坑でかなり攪乱されている。地山は、にぶい黄橙色の礫層で、第I調査区やA区でみられたものとやや質が異なるようである。海側のわずかな部分だけがシルト層に

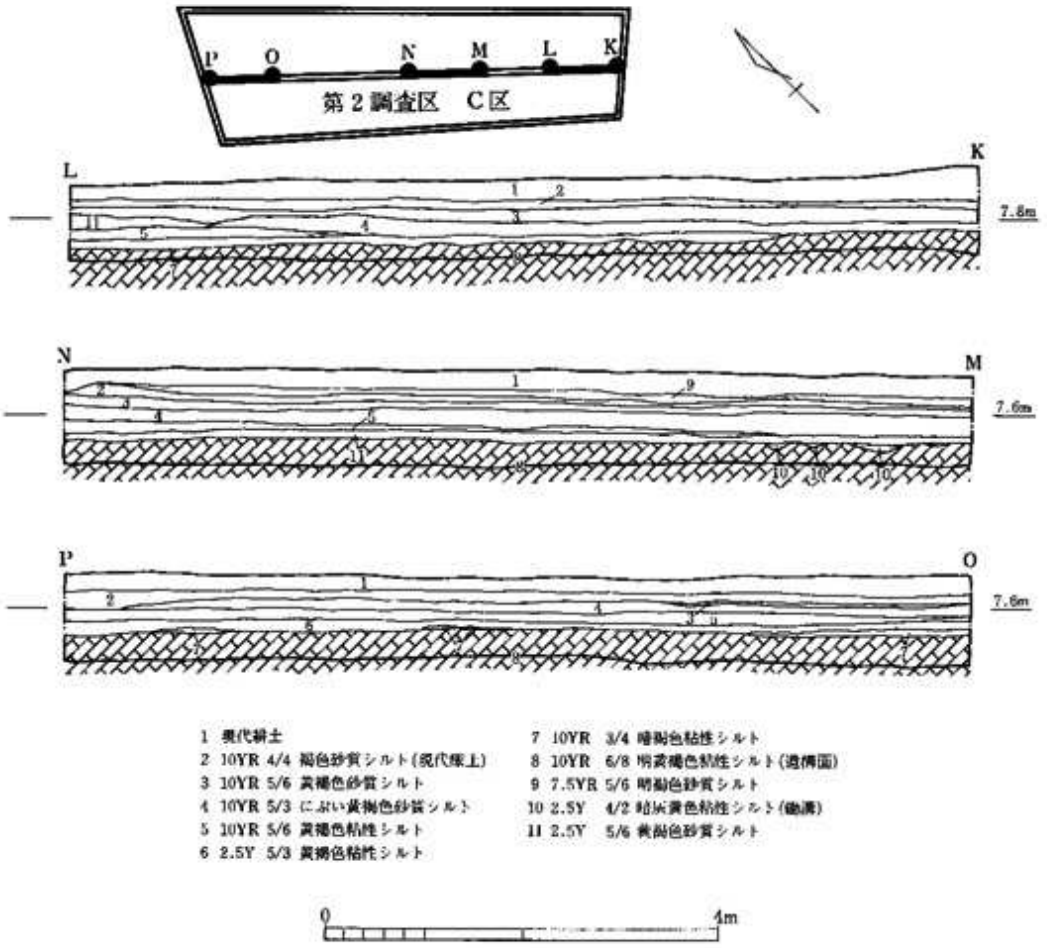


第10図　第２調査区Ｂ区土層断面図

なっており、遺構はこの部分だけで検出されている。レベルは8.2～8.4mで、ほとんど水平である。

Ｃ区は、全調査区で最も濃厚な包含層が確認され、最も厚いところでは約60cmを測る。層位的には、第１調査区Ａ・Ｂ区と近似する。現代耕土約30cm、床土層約20cmを除去すると、砂質の黄褐色シルト層がほぼ全域で約10～20cmにわたってみられる。その下層には、第Ⅰ面であるにぶい黄褐色シルト層が存在する。遺構は、海側に集中しており山側に近づくほど散漫である。この層を約20cm掘削すると黄褐色系、暗褐色系の粘性の強いシルト層が数層、約30cmにわたって介在し、明黄褐色シルトの地山層に至る。第Ⅰ面下の粘性の強いシルト層は、地山付近においては地山土をブロック状に含んでいる。地山は、山側部分約1/3は、礫層に変化する。この部分には、遺構はまったく検出されていない。レベルは、Ｂ区とＣ区の間には水路があり、そこから大きく落ちている。Ｃ区だけでの地山のレベルは、7.4～7.7mで、ほとんど水平であるといってよいだろう。

第２調査区においても、すべての層位の時期は、中世よりさかのぼるものはないと考えられる。

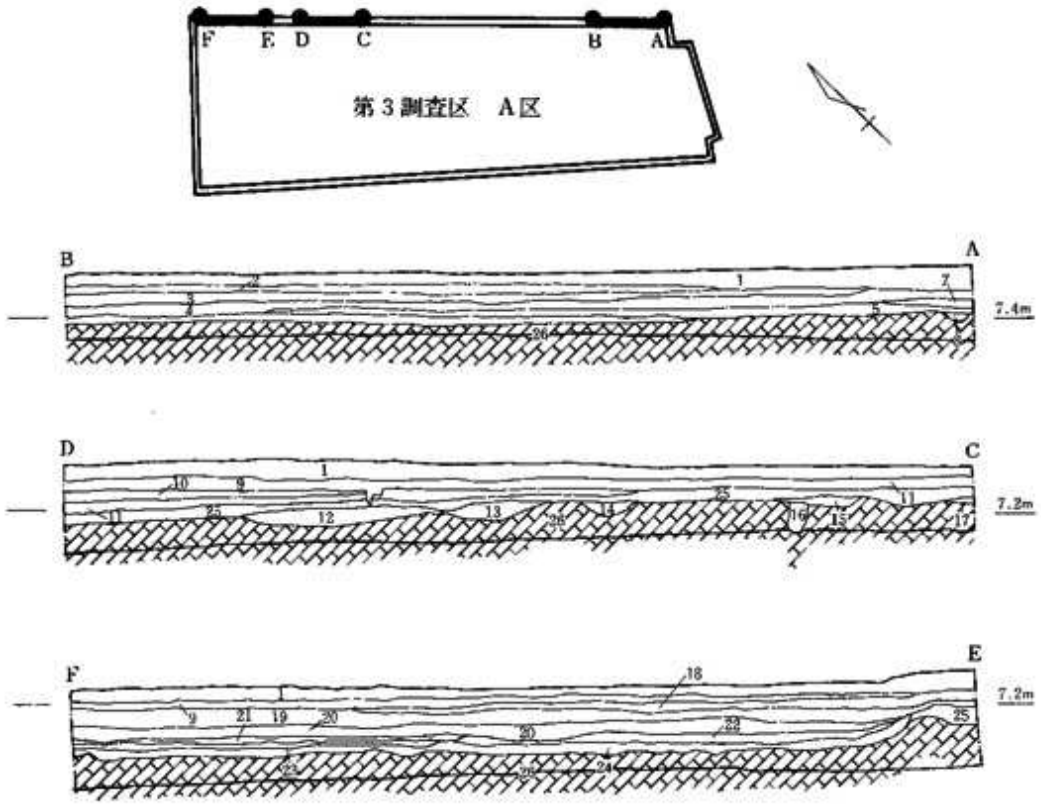


第11図　第２調査区Ｃ区土層断面図

３．第３調査区（第12･13図）

第３調査区は、２地区に分けられる。それぞれまったく異なった層位を示しており、また、第１・２調査区とも大幅に異なったものであるといえる。

Ａ区では、山側部分では第２調査区のＣ区で検出された中世の遺構面の続きが検出された。層位は現耕作土、灰色の旧耕土層を約40cm除去すると、にぶい黄色系の砂質シルト層が確認され、第Ⅰ面を検出した。その下層に約30cm、２層の旧耕土層が介在し、黄褐色系シルトの地山層に至る。トレンチの中央部分から海側にかけては、弥生時代の遺構面と包含層を確認した。約20cmの現代耕土を除去すると、床土層はほとんどなく、にぶい黄褐色粘性シルト層が認められた。その他の旧耕土層とはかなり土質が異なり、弥生時代の遺物しか出土していない。また、遺構の密集した部分だけに確認されている。最も海側では、周辺地形に沿って谷地形が確認された。この谷地形から海側は、再び中世以降に形成された層となる。地山は、弥生時代の遺構の存在する部分だけ浅黄色系の礫を少量含んだ砂質

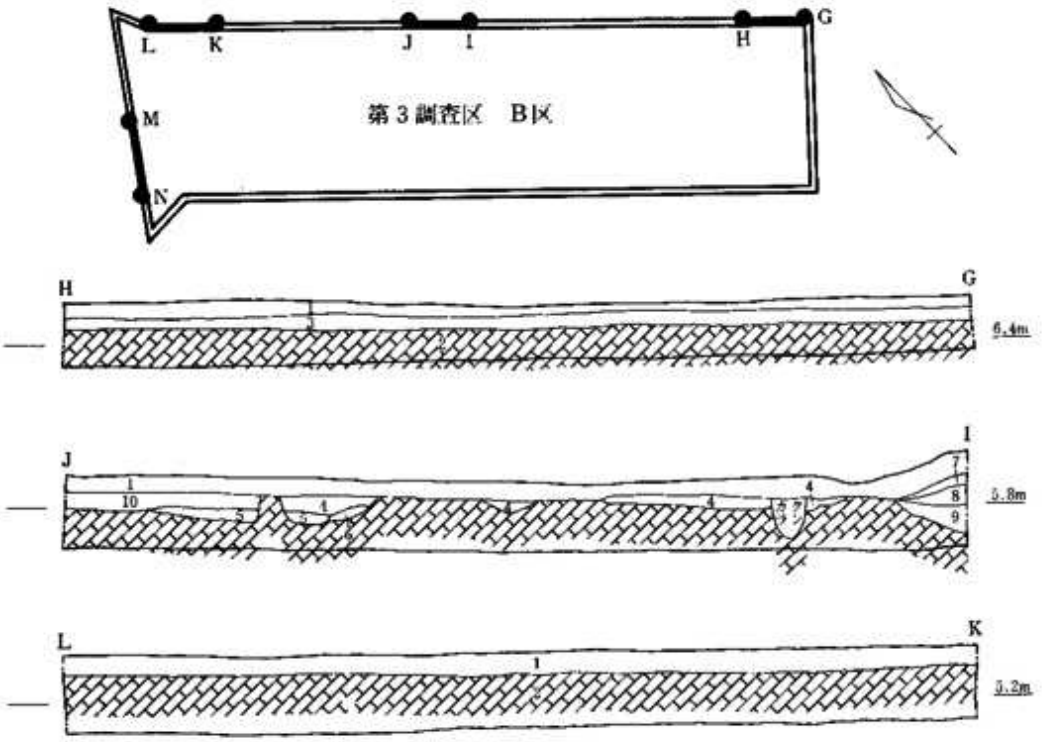


1 現代耕土
2 5Y 6/1 灰色砂質シルト
3 2.5Y 6/3 にぶい黄色砂質シルト
4 2.5Y 5/2 暗灰黄色砂質シルト
5 10YR 5/3 にぶい黄褐色粘性シルト
6 10YR 5/6 黄褐色粘性シルト
7 5Y 5/2 灰オリーブ色粘性シルト
8 2.5Y 6/1 黄灰色粘性シルト(遺構埋土)
9 2.5Y 5/2 暗灰黄色シルト(現代床土)
10 2.5Y 7/2 灰黄色砂質シルト(マンガン少量含む)
11 2.5Y 5/3 黄褐色砂質シルト(マンガン少量含む)
12 10YR 3/2 黒褐色粘性シルト(遺構埋土)
13 10YR 3/3 暗褐色粘性シルト(遺構埋土)
14 10YR 3/2 黒褐色粘性シルト(遺構埋土)
15 10YR 3/2 黒褐色粘性シルト(遺構埋土)
16 10YR 3/3 暗褐色粘性シルト(遺構埋土)
17 10YR 4/3 にぶい黄褐色粘性シルト(遺構埋土)
18 2.5Y 6/2 灰黄色砂質シルト
19 2.5Y 6/3 にぶい黄色砂質シルト
20 5Y 6/2 灰オリーブ色砂質シルト(谷地形埋土)
21 10YR 6/4 にぶい黄橙色砂質シルト(谷地形埋土)
22 10YR 4/6 褐色砂質シルト(谷地形埋土)
23 10YR 4/4 褐色粘性シルト(谷地形埋土)
24 2.5Y 7/3 浅黄色粘性シルト
25 10YR 4/3 にぶい黄褐色粘性シルト(弥生時代包含層)
26 2.5Y 7/4 浅黄色シルト(部分的には礫)(遺構面)

第12図　第３調査区Ａ区土層断面図

のシルトで、これまで検出した地山とはまったく異なる。レベルは、他の地区同様、山側で約7.4m、海側で約6.7mを測りゆっくり落ち込んでいる。しかし、弥生時代の遺構の集中する付近はやや高くなり、海側の遺構が希薄になる地域からは、再び落ち込んでいる。

B区では、山側半では現耕土、床土を除去するとすぐににぶい橙色シルトの地山が検出され、第Ⅰ面は、ほとんど確認できなかった。この部分では、近世の粘土採掘坑が多数検出されている。海側半では現耕土下は、床土もほんんど確認されず、すぐに黄褐色系シルトの地山が検出されている。レベルは、約6.6～5.4mであるが、最も海側で大きく落ち込む谷地形を確認し、その最も下層は約4.0mを測る。



第13図　第３調査区Ｂ区土層断面図

第2節　検出遺構

1．第1調査区

第Ⅰ面（PL.15～17、別冊PL. 2・4）

第1節で先述した通り、遺構面は2面存在する。そのうち第Ⅰ面は、すべて旧耕作土層の中で検出されており、基本的に、耕作に伴う鋤溝を検出するためのものである。

以下、各区ごとに概略を述べたい。

A区は、ほぼ全域にわたって鋤溝が検出された。ほとんどのものが、幅15～40cm、長さ0.5～1mまでであるが、長いものは10mを越えるものもある。深さは、いずれも5～10cm程度である。埋土は、灰褐色系の砂質シルトである。山側は、ほぼ東西方向、海側は南北方向を示し、ほぼ中央部分で、溝の方向が変化していることがわかる。B区も、ほぼ全面にわたって鋤溝が検出されている。特に海側で集中し、山側になると検出密度は低くなっている。方向は、A区山側と同様に、ほぼ南北方向を示している。トレンチのほぼ中央部分では、一部分だけ南北に走る溝が検出される地域がみられ、そのなかで石組の暗渠が2本検出されている。また、山側では畦畔に沿って存在する水路状の溝も多数検出されている。これらの鋤溝は、いずれも道路用地の外に続く現在の水田や畑の耕作方向とほとんど一致することが指摘できる。

遺物は、ごく少量ながら出土しているが、耕作面であるため細片で、摩滅が著しい。現代の床土層から切り込んだ鋤溝や水路は、近世以降の遺物を含んでいるものの、検出面で見つかった鋤溝からは、近世のものが出土していないことから、現在の耕作は、中世からほとんど変わることなく行われていることが指摘できる。

第Ⅱ面（PL. 18・19、別冊PL. 3・5）

第Ⅱ面は、すべて地山における検出である。第Ⅰ面と同様に鋤溝群の他、水路、井戸など中世の耕作に伴う遺構が多数検出されている。

SE01（PL. 2・20）

A区大地区の最も海側に位置する、井戸と考えられる大型の土坑である。北側は、里道の調査区外へ伸びる。南東部分は、やや隅丸であるが、南西コーナーは、ほぼ直角を示している。検出された部分だけで推定すると、平面形は、一辺約5m以上の長方形または正方形を呈していたと考えられる。深さは約90cmを測り、断面は、遺構の肩から底までは急激に落ち込み、底の部分はほぼ平らである。埋土は、最も上層には、整地状の層が施され、中層から下層にかけては、地山のブロックを含んだシルト層や礫を大量に包含した層などがかなり入り混じって認められる。これらは、明らかに人為的でかつ、かなりの短期間で

の埋め戻し土と考えることができる。さらに、最下層10cmほどには、自然堆積と考えられる灰色系の粘土層が存在する。また、これを除去した遺構底面からは、かなりの湧水が認められた。遺物は、上層より土師器片や瓦器片がわずかに出土しているが、いずれも図化できるものはなかった。

また、南側約1mには幅0.2m前後、深さ約5cmを測る小型の溝が、ほぼSE01の南辺に並行に4本並んで検出されており、井戸に関する付帯施設の可能性もある。

SD01（PL. 2・20）

SE01の南東及び南西のコーナー部分に取りつく溝である。検出長は、南東側で2.5m、南西側で13.5m、幅約0.3～0.6m、深さは10～20cmを測り非常に浅いものである。やや蛇行して両方向とも調査区外へ伸びる。埋土は灰黄色系の粘性シルトであるが、水が常に流れていた痕跡は無い。SE01との関係は、遺物は出土しなかったものの、土質や切り合いからの状況から、ほぼ同時期に存在していたと考えられる。溝の底面のレベルは、南東側はSE01に向かって低くなり、南西側はSE01から調査区外へ向かって低くなっている。このことから、井戸への水の引き込みや排水のための機能を持つものだったと考えてよいだろう。

SD02・03（PL. 3・21～23）

B区の最も山側に位置する。切り合うかなり大規模な溝である。

SD02は、南の調査区外から中央の反転調査用の側溝付近まで検出され、SD03を切って再び調査区外へ出ている。また、遺構の東肩は、すべて調査区外であった。検出長は、約12mで、検出幅は、最大で約3mを測る。深さは、溝の底部と考えられる部分は、一部分しか検出できなかったものの、最も深いところで約1.3mを測る。断面は、すべてを検出できなかったため不明であるが、西側の落ちの状況から想定して、ほぼV字形を呈していたと考えたい。溝の方向は、南側は底面まで検出されず、北側は断面による観察から急激に曲がっていることがわかる。埋土は、上層約50cmは、黄色または黄褐色系のシルト層で、粘性のブロック土を多く含んでいる。ブロックは地山である黄褐色系のシルトとみられ、人為的な埋め戻し土と考えられる。下層は、土質が大きく変化し、粘性が強く水分を多く含んだ灰色系の粘土層であり、かなり長期間による自然の堆積であろう。最下層は、粘土に粗砂なども含むようになり、湧水が著しくなる。また、木杭（52～55）や木葉等の有機物も最下層から出土している。

SD03は、南側をSD02によって切られ、北側は調査区外に伸びている。検出長は、約10m、遺構の東肩は、トレンチでは検出されていないが、北側の土層断面では確認することができた。これによると、幅約1.6m、深さ約40cmを測り、断面は、凹面形を呈する。

埋土は、上層は粘性の強いシルト層で、ＳＤ01と同じく埋め戻しの整地を施しているようである。下層には、黒褐色の有機物を大量に含んだ層が認められ、最下層は、粗砂層で水が流れていたことが窺える。ＳＤ02では、遺物は土師器や瓦器片がごくわずかに出土しているが、上層の整地層からのもので、これら溝の掘削年代を特定するものはない。ＳＤ03は、土師器片や土錘が出土しているが、同様のことがいえる。

ＳＤ04（ＰＬ．３・24）

ＳＤ02の中央から取付いて始まり、西側のトレンチ外に伸びている。また、やや幅の狭い溝が、途中でＴの字状に南に分かれＳＤ02に沿って、かなり蛇行しながらトレンチの外へ伸びている。東西方向への溝は検出長約16.5m、幅0.5～0.7m、深さ20～25cmを測り、断面はＵ字形を呈している。埋土は、上層は黄色系のシルト層であるが、下層は水分を多く含んだ粘土層になり、水によってかなりゆっくりと堆積した層のようである。南北の溝は検出長約８ｍで、Ｔの字に交差する部分は、幅約1.3mを測るが、南側では0.2～0.3mと急激に細くなる。深さは5～15cmで、断面は緩やかな凹面形である。埋土は、東西方向の溝とほとんど同じだが、南側では黄色系のシルト１層になる。遺物は、出土しなかった。ＳＤ02との関係では、切り合いはなく、ほぼ同時期のものと考えられる。また、溝のレベルは、ＳＤ02に取付く部分の方がわずかに低いことから、ＳＤ02に水を流し込む機能を持っていたと考えてよいだろう。

ＳＤ05（ＰＬ．２・24）

Ｂ区の山側で、ほぼ東西に伸びる溝である。検出長18.4m、幅1.0～1.5mを測るが、検出されたほぼ中央の反転調査用の側溝部分で、約0.4mと急激に狭くなっている。また、西側では、遺構の肩がやや乱れている。深さは10～20cmを測る。断面は、北側はやや落ち込みが急で、南側になるとゆっくりと上がっていることがわかる。埋土は、東側は数層の粘性シルトで構成されるが、西側はにぶい黄褐色粘性シルトの１層だけである。埋土からは、常時水が流れていた形跡は認められないが、この溝の南北には、同じ方向を示す他地区では検出されなかった非常に規模の大きな鋤溝が約15mにわたって検出されており、水田等へ水を引き入れる水路または、区画の溝の可能性もある。遺構底面のレベルは、ほとんど同じであることからいずれの方向へのものかは不明である。遺物は、瓦器片が少量出土している。

ＳＤ06（ＰＬ．25）

Ｂ区の最も海側で、現在の里道及び水路に並行な溝である。検出長は約30mを測るが、かなり蛇行している。幅0.6～1.2m、深さ約10cm程であるが、一部は、完全に削平されてしまっているところもあり、残りが悪い。断面は緩やかな凹面形を呈し、埋土は灰黄色の

粘性シルトである。遺構の底面は、南から北へ向かって低くなっている。遺物は、出土しなかったが、埋土の質からその他の溝と同じく中世と考えられ、現在の水路とも並行であることから、水田耕作に伴う当時の基幹水路と考えられる。

SD07（PL.26）

A区の山側調査区外から北北西に伸び、再び調査区外へ出る溝である。この溝もやや蛇行しているものの、現在の水路とほぼ並行である。検出長は約23m、幅0.5～1.2m、深さ約15cmを測る。断面形は、凹面形で、埋土は暗灰黄色の粘性シルトの1層である。遺構の底面のレベルは、山側から海側へ低くなっており、SD06と同じように、水田へ水を引き入れる当時の基幹水路と考えてよいだろう。遺物は、出土しなかった。

鋤溝群・杭列（PL. 26）

上記の遺構以外に、第Ⅰ面と同様に鋤溝が数多く検出されている。またこれらは一定の群となって検出されている。

A区では、SD07の西側に東北東から西南西の方向に向かって鋤溝群01がみられる。幅は20～50cm、長さ1m前後のものがほとんどである。深さは10cm前後を測り、埋土は褐灰色系の粘性シルトを呈する。

また、この鋤溝群の海側約5mには、鋤溝群と並行にピット列が検出されている。いずれも径10cm程のものばかりで、埋土は灰色系のシルトで、粗砂を含むものもある。また、腐食した木が検出されるところもあった。これらは水田の畦畔などを守るための矢板用の杭跡と考えられる。このような杭列は調査区の各地で検出されており、これら杭列を境にして鋤溝群がとぎれている場合が多いことが指摘できる。

B区では、SD02・03・04・05付近に鋤溝群02が検出されている。ここで検出された鋤溝群は、検出長約16m以上、幅0.5～1.2m、深さ15cm前後の規模を持ち、他の溝よりはるかに大きなものばかりである。埋土も黄褐色系の粘性シルトで、他の鋤溝とはやや異なることが指摘できる。これらの方向は、SD05を挟んで並行に検出されている。SD05は、水路と考えられ、この水路を中心とした他のものとはやや異なった耕作方法が想定できる。さらに、この鋤溝群02の海側には、通常の規模を持つ鋤溝群03が海側に向かって幅約50mにわたって検出されている。この鋤溝群も、水路であるSD06を境として区画されていることがわかる。

これら鋤溝群からは、中世の土師器や瓦器など少量出土しているが、図化できたものは、B区の鋤溝群02より出土した（1・2）だけである。

2．第2調査区

第Ⅰ面（PL.28～30、別冊PL. 6・8・10）

第1調査区同様に、第Ⅰ面は、鋤溝群を検出するためのものである。

以下、各区ごとに概要を述べたい。

A区では、トレンチの海側半分で特に集中しており、山側ではほとんど検出されなかった。いずれも幅0.2～0.5cm、長さ1m前後であるが、長いものは、5～6m以上のものもあり、かなりばらつきがある。深さは、2～5cmとかなり浅いものばかりである。方向は、第1調査区と同様に、周辺の現況の水田や畑の耕作方向とほとんど一致していることが指摘できる。

B区では、様相は一変し、まったく鋤溝は検出されなかった。トレンチ山側で、床土層直下より切り込む巨大な土坑が検出された。検出長約20mで、深さ1～1.5mを測る。埋土は、礫を非常に多く含んだ土で、一度に埋め戻されている。時期的には近代以降で、近隣の聞き取りからも瓦工場の粘土採掘が昭和初期まで盛んに行われていたとのことで、この粘土採掘坑と考えられる。また、トレンチ中央でも小規模な粘土採掘坑とみられる土坑がいくつか検出されている。こちらは出土遺物から、若干さかのぼり近世のものと考えられる。

C区は、海側半分で鋤溝を集中して検出した。また、水田の区画になると思われる帯状の溝も確認した。鋤溝の規模は、A区と同じく、幅0.2～0.5m、長さ2～3m、深さ2～5cmのものがほとんどである。

A～C区までの鋤溝より出土した遺物は、耕作面であるため、細片で非常に摩滅したものばかりである。時期的には、第1調査区と同じく近世以降のものは含まれていないため、これら鋤溝は、中世からほとんど現在まで姿を変えることなく耕作が続けられてきた査証となるだろう。

第Ⅱ面（PL. 31・32、別冊PL. 7・9・11）

第Ⅱ面においては、第Ⅰ面と同じく鋤溝群の他、井戸、水路、区画溝、杭列など多数を検出している。

SE01（PL. 4・33・34）

A区山側に位置する素掘りの井戸と考えられる大型の土坑である。平面形はやや乱れて検出されたが、ほぼ円形を呈していたと考えられる。また、一部、試掘時のトレンチによって攪乱されている。径約6m、深さ約1.3mを測り、断面は底へ向かってかなり急激に落ち込むが、底面の部分はほぼ平らである。この遺構の存在する地山はこの付近だけ礫層を

呈し、埋土掘削後はかなりの湧水にみまわれた。埋土は、最も上層では、灰黄色系のシルトに拳大の礫を非常に多く含んだ土で、人為的な埋め戻しで整地を行ったものと考えられる。下層は、褐灰色系や灰黄褐色系の粘土や粗砂層などがみられ、水性のかなりゆっくりした自然堆積と考えられる。また、最も下層からは、松の枝・葉・マツカサなど有機物が出土している。土器は、上層の整地層から（3）と下層の粘土層から（2）が出土している。時期的には、ほとんど差はなく、掘削されて埋め戻されるまでには、さほどの時間差はなかったものと考えられる。

ＳＤ01・02（ＰＬ．4・35）

Ｂ区の山側、Ｂ区とＣ区を分ける現水路とほぼ並行で、北東から南西の方向に伸びる2本の溝である。ＳＤ01は、トレンチの西端でＳＤ02によって切られ、時期的に先行するものである。幅0.4～0.6m、深さ20㎝前後を測り、やや蛇行している。埋土は、黄橙色系の粘性シルトで拳大の礫を多く含んでいる。

一方、ＳＤ02は、幅0.2～0.4m、深さ10～15㎝程とかなり浅いものである。北東の約1/2は、近世以降の粘土の採掘坑によって失われている。埋土は黄褐色系のシルトで、クサリレキなどを多く含んでいる。また、これらの溝に沿ってかなりの杭跡が検出されている。

遺物は、ＳＤ01より中世の土師器片が少量出土しているが、いずれも図化できるものはない。また、ＳＤ02からは、遺物は出土しなかった。これらの溝は、現水田の区画に沿って検出され、また現水路とも並行であることが指摘できる。第１調査区で検出されたＳＤ02・03のように大規模ではないが、同様に灌漑用の基幹水路とみてよいだろう。

ＳＤ03～11（ＰＬ．36～38）

ＳＤ03はＡ区で、ＳＤ04～11はＣ区で検出された。いずれの溝も、幅0.4～1.2m，深さ15㎝前後を測り、断面形は、緩やかな凹面形を呈したものばかりである。全長は、すべてが検出されているものの中で、最も短いものでも約10mを測るかなり長いものばかりである。そのため鋤溝とは明らかに異なることがわかる。埋土は、暗灰黄色系の粘性シルトのものが多い。また、これらは、近くに同じ方向をもつ鋤溝群を伴っている。特に、ＳＤ03や04は、溝を境に鋤溝がなくなっているということからみて、水田を区画する畦畔の水路や溝と考えられるだろう。さらに、これらの溝の方向はいずれも、調査区外の現在の水田の耕作方向と一致していることが指摘できる。

鋤溝群・杭列（ＰＬ．36・38）

第Ⅱ面でも、第１調査区と同じく鋤溝群が多く検出されている。また、これらは、一定の群をもって検出されている。

A区では、ＳＤ03を境にして、海側から約15mの範囲で鋤溝群01が検出されている。幅0.2～１m、長さ１～５mで、比較的規模の大きな鋤溝である。深さは10cm程度で、ごく標準的な規模の鋤溝群である。また、ＳＤ03に沿って杭列とみられるピット群が検出されている。

C区では、ＳＤ04を境にして、海側西部分に約15mにわたって鋤溝群02が検出された。幅0.2～0.5m、長さ１～1.5m程のものがほとんどで、やや小型の鋤溝群であるといえるだろう。

なお、B区では、まったく鋤溝は検出されなかった。

３．第３調査区

第Ⅰ面（ＰＬ．41～43、別冊ＰＬ．12・14）

第１・２調査区と同じく、第Ⅰ面は鋤溝を検出するための面である。

A区山側部分から約25mでは、第２調査区の続きで旧耕土が良好に遺存しており、多くの鋤溝が検出されている。中央部分では、先述の通り、床土を除去するとすぐに地山や弥生時代の包含層に至るため、鋤溝はほとんど認められなかった。海側端から約20mでは、再び旧耕土層が存在し、鋤溝が検出されるようになる。溝の規模は、前２回分の調査とほとんど変わることはなく、長さ１～５m、幅0.3～0.5m、深さは数cmのものがほとんどであるが、一部、長さが20mを越えるものもあった。

B区では、旧耕作土はほとんど存在せず、鋤溝はほとんど確認されなかった。他方、床土層の直下より近世以降の粘土採掘坑と考えられる土坑が、数多く検出された。これら土坑の埋め戻し土の上面にも鋤溝が確認されたため、第Ⅰ面では掘削していないものがほとんどであるが、第Ⅰ面で掘削した粘土採掘坑と、第Ⅱ面検出時で掘削している土坑とは性格的にも、時期的にも同じものである。詳細は、第Ⅱ面で述べたい。

第Ⅱ面（ＰＬ．44・45、別冊ＰＬ．13・15）

第Ⅱ面は、他の調査区と大幅に異なりA区では、弥生時代の包含層と遺構面が検出されている。検出した遺構は、掘立柱建物や土坑などで、当該期の集落の中心地であるものと思われる。

B区では、近世以降の粘土採掘坑が非常に多く検出され、それ以前の遺構面はかなり失われているものと考えられる。また海側は地山の削平が著しく、旧耕土層はまったく確認できなかった。

ＳＢ01（ＰＬ．５・46・47）

A区中央北寄りに位置する。桁行5間（6.8m）、梁行2間（3.7m）。柱間は、桁行1.0～1.5m、梁行1.7～2.0mを測るが、北東側柱列の2つめのピットは土坑によって切られ検出されなかった。柱筋は、ほぼN－29°－Eを示す。面積は約25.2㎡で、確認された建物の中では最も大きい。ピットの平面形は、円形のものがほとんどであるが、楕円形や不整形のものもある。これらのほとんどで柱痕を確認している。ピットの規模は、径22～30㎝、深さ10～30㎝を測るが、大半が20㎝以上遺存しており、他の建物のピットと比較して残りは良い。また、海側北西柱列の中央のピットの外側約40㎝で、やや小型ではあるが、ほぼ同質の埋土を持つピットが1個検出されている。この建物に関連したものと考えられ、棟持柱である可能性が高い。遺物は、小片の弥生土器が掘方や柱痕からわずかに出土しているが、いずれも図化できるものはない。

SB02（PL. 6・48）

A区海側の南寄りに位置する。桁行4間（4.6m）、梁行2間（4.0m）。柱間は、桁行1.0～1.4m、梁行1.4～2.5mを測るが、南北側柱列の柱間がやや不均等であることが指摘できる。柱筋は、ほぼN－10°－Eを示し、面積は約18.4㎡である。ピットの平面形は、円形や不整形とかなりまちまちであるが、ほとんどで柱痕を確認できた。ピットの規模は、径22～32㎝、深さ12～25㎝を測る。遺物は、掘方より小片の弥生土器がわずかに出土しているがいずれも図化できるものはない。

SB03（PL. 6・48）

SB01の南側に近接する。桁行3間以上、梁行2間（3.7m）だが、北西隅のピットは土坑によって切られ、検出されなかった。柱間は、桁行1.2～1.3m、梁行2.1mを測るが、東西両面の柱間が対応しておらず、建物としての認定は検討の余地もあるかもしれない。柱筋は、ほぼN－15°－Eを示す。ピットの平面形は、円形や不整形とかなりまちまちであるが、柱痕を有するものが多かった。ピットの規模は、径25～35㎝であるが、深さ10～15㎝とかなり削平が著しい。遺物は、弥生土器が掘方・柱痕ともにわずかに出土しているが、図化できたものはPitAの掘方より出土した（4・5）だけである。

SB04（PL. 7・49）

A区のほぼ中央に位置する。2間（3m）×2間（3.6m）と考えられる建物であるが、南東側柱列の中央のピットは確認できなかった。また、柱間は、北東・南西側が1.5～1.7mであるのに対し、北西側は、1.3～2.3mと位置的にもずれる。また中央のピットは、他と比較して小型であることから補助的な柱とも考えられ、1間であった可能性も指摘できる。また、北西側柱列の外側、約0.8mにもピットを1個検出しており、SB01と同じく棟持柱を持った建物と考えられる。柱筋は、ほぼN－25°－Wを示す。面積は、約10.8㎡

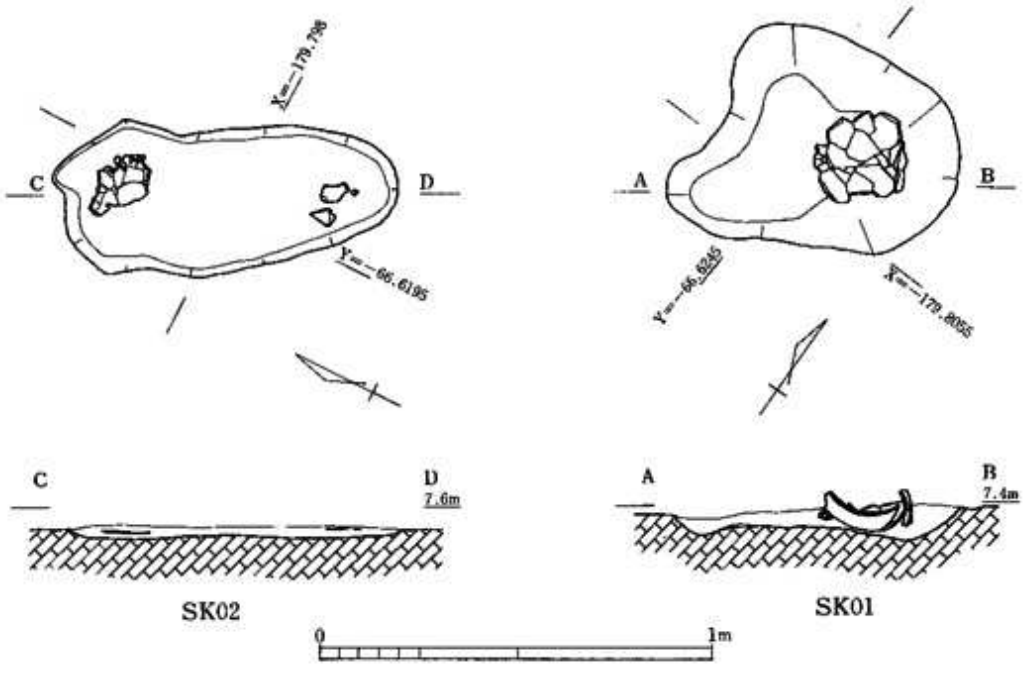
と最も小さい。ピットの平面形は円形で、柱痕はほとんど確認できなかった。ピットの規模は、径17～22cm、深さ８～12cmほどで非常に小さく、削平が著しい。遺物は、まったく出土しなかったが、埋土の質から他の建物と同じく弥生時代のものと判断した。

ＳＢ05（ＰＬ．７・49）

Ａ区山側南に位置する。梁行２間以上（4.1m）、桁行２間（2.7m）。北東隅のピットは、ＳＤ01を切って検出された。柱間は、梁行1.7～1.95m、桁行1.2～1.35mを測る。柱筋は、ほぼN－26°－Eを示す。ピットの平面形は、円形であるが、柱痕はほとんど検出されなかった。ピットの規模は、径19～32cmとかなりばらつきがある。深さは、いずれも15cm前後しか遺存していないが、南東隅のピットだけ35cmとかなり深いことが指摘できる。遺物は、弥生土器の小片が掘方よりわずかに出土しているものの、いずれも図化できるものはない。

ＳＫ01（ＰＬ．50、第14図）

ＳＢ05の北西約７mに位置する不整形の土坑である。長径1.5m、短径0.8mの規模を持ち、ほぼ中央で、第Ⅰ様式新段階に属すると考えられる壺（３）が出土した。深さは、最も深いところでも10cm、浅いところでは２cmほどしか遺存しておらず、削平が著しい。そのため、検出時にはすでに土器が遺構より飛び出した状態であった。土器の出土状況は、壺が横向きになった状態であるが、口縁部や底部はすでに失われ、胴部の下方約1/3だけ



第14図　第３調査区ＳＫ01・02遺物出土状態

が遺存しているだけであった。また土器は、完全に遺構の底面に密着しておらず、わずかに浮き上がった状態であった。

SK02（PL. 51、第14図）

SB04の西方、約2mに位置する。長楕円形で、一部不整形を呈した土坑である。規模は長径2.2m、短径0.6mを測る。深さは6cmほどしか遺存しておらず、削平が著しい。断面は凹面形を呈し、埋土は黄褐色系の粘性シルトの一層である。遺物は、南と北に別れて北に甕（2）、南に壺（1）が各1点づつ出土した。

SK03（第15図）

SK01の北側、約0.5mに近接する瓢箪形の土坑である。規模は、長径2.3m、短径0.45m、深さ10～18cmを測るが、西側端で径20cm、深さ10cmほどのピット状の落ち込みを確認した。全体に削平が著しいことが指摘できる。断面形は緩やかな凹面形で、埋土は暗褐色粘性シルトである。遺物は、小片の弥生土器と石器（25）が出土した。

SK04（PL. 49、第15図）

SB02の西側約1.3mに位置する。西側部分を中世以降の水田の段によって大きく削平されているため、もとの平面形は不明である。最大検出長は2m、深さは10～15cmを測る。埋土は、暗褐色粘性シルトである。遺物は、（7・8）をはじめ、弥生土器片が少量出土している。

SK05（PL. 8・52、第16図）

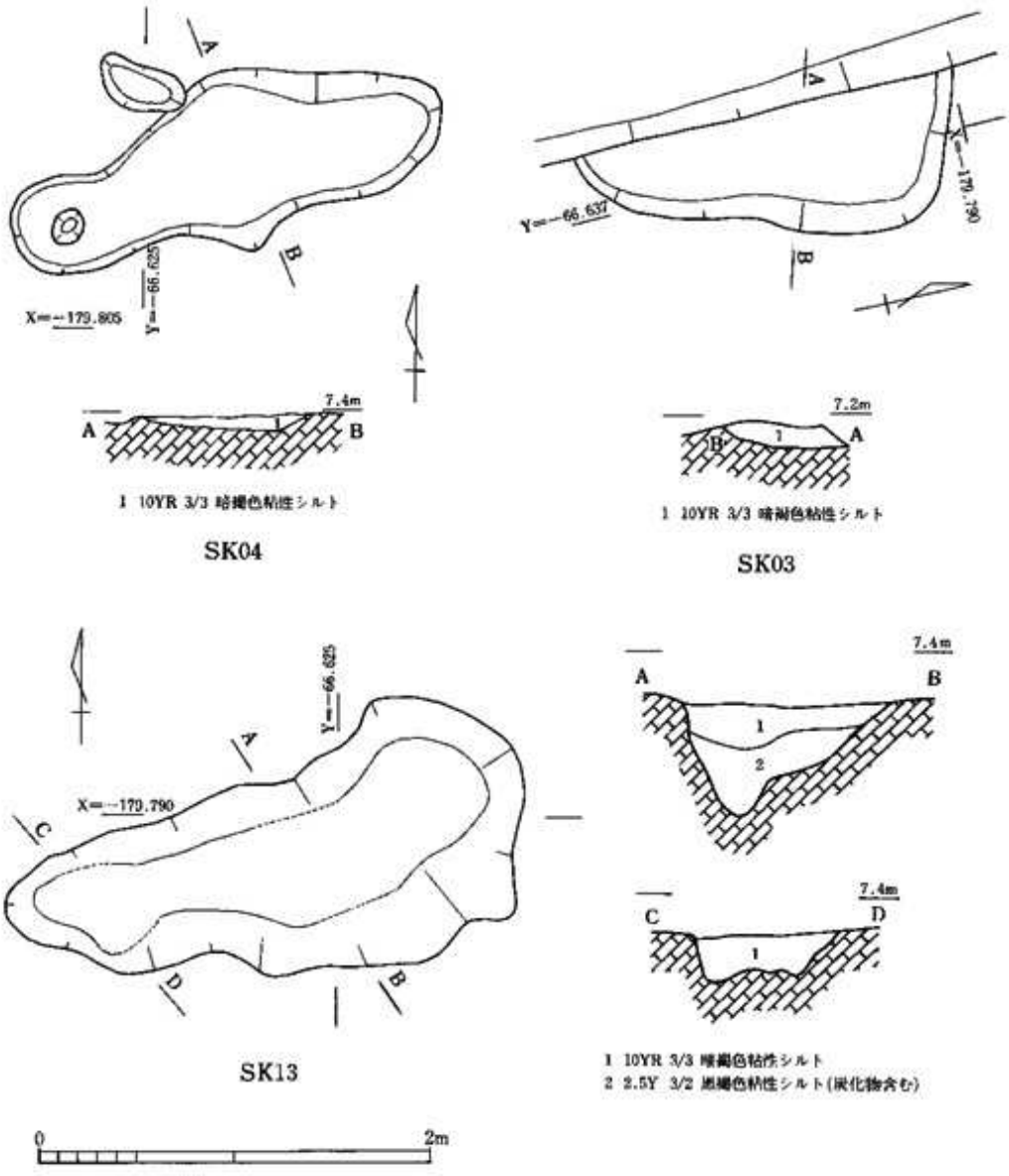
SB01の海側に位置する。ほぼ円形を呈する土坑である。径約0.6mを測るが、深さ10cmと非常に削平されている。断面は逆台形を呈し、埋土は暗褐色粘性シルトである。遺物は、弥生土器（6）が出土している。

SK06～11（PL. 8・52、第16図）

SK05の他に、SB01の海側には同様の土坑群がみられる。いずれもややいびつな円形または楕円形を呈する。長径0.46～0.82mで、深さは、削平のため数cm程しか遺存していない。断面は、逆台形または緩やかな凹面形を呈し、埋土は暗褐色または黒褐色の粘性シルトである。遺物は、SK06・07より、弥生土器片やサヌカイト片がわずかに出土しているが、いずれも図化できるものはない。また、その他の土坑からは、遺物は出土しなかった。

SK12（PL. 8・52）

土坑群よりさらに海側に位置する不整形の土坑である。長径0.9m、短径0.44m、深さ10cm前後で、埋土は、黒褐色粘性シルトである。遺物は、弥生土器（9）などが少量出土している。



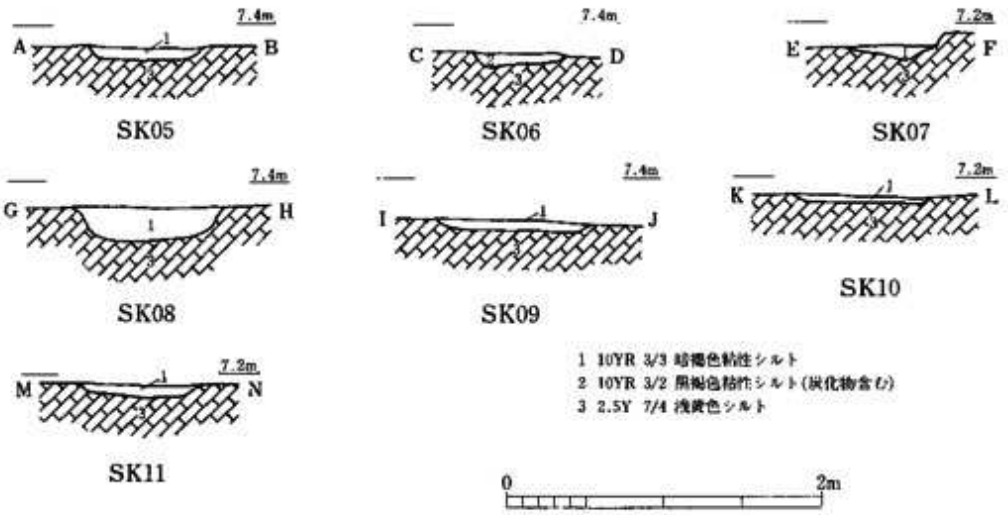
第15図　第３調査区遺構平面図・断面図

ＳＫ13（ＰＬ．53、第15図）

上坑群の南で、ＳＢ01の北東に位置する比較的大型の土坑である。長径2.7m、短径0.7mを測り、平面形は不整形である。肩から底面まで一気に落ち込み、底面はかなり凹凸が激しい。最も深い部分で56cmを測り、埋土は、上層は暗褐色、下層は黒褐色のいずれも粘性シルトである。遺物は、炭化物のブロックが少量出土している。

ＳＤ01（ＰＬ．53、第17図）

Ａ区中央南寄りに位置する。ＳＢ05によって切られている。全長10.7m、幅0.35～0.78mを測るが、深さ５～15cmと削平が著しい。断面は、緩やかな凹面形を呈し、埋土は暗褐

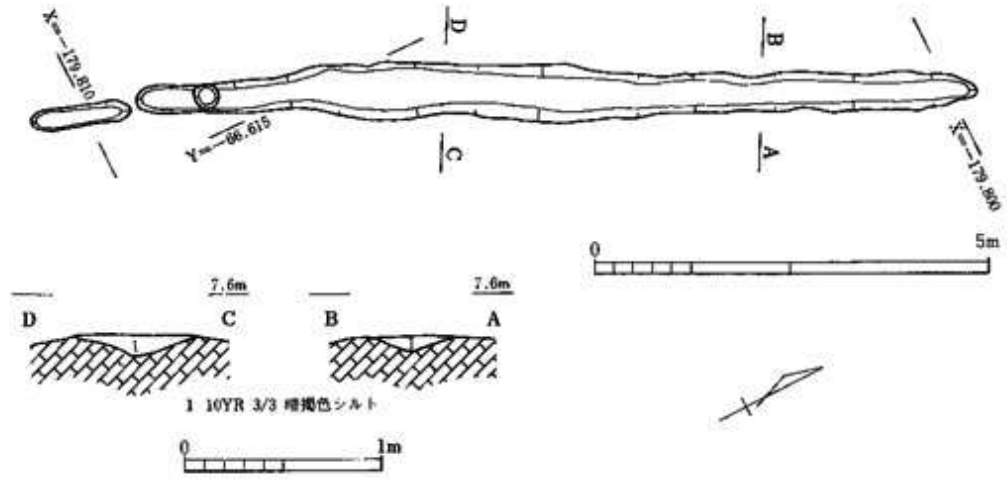


第16図　第３調査区Ａ区土坑群土層断面図

色の粘性シルトである。溝の方向は、北北東から南南西で、現在の水田区画の方向と一致する。また、南に全長1.15～0.25m、幅0.22mほどの小さな溝が検出されているが、もとは一連の溝で、削平のため二つになったと考えられる。遺物はまったく出土しなかったが、埋土の質から、建物や土坑群と同じ弥生時代のもと判断した。さらに、この溝を境に山側に向かって地山はわずかずつ下がり、そこから山側には、弥生時代の遺構はまったく検出されていないことから、当該期の集落を区画する溝の可能性がある。

ＳＤ02（ＰＬ．54）

Ｂ区のほぼ中央部分を縦断し、ほぼ直線に伸びる溝である。上層からの粘土採掘坑によってかなりの部分が失われている。検出長約24m、幅0.5～0.7m、深さ15cm前後と非常に浅



第17図　第３調査区ＳＤ01平面図・断面図

く、かなり削平されているものと考えられる。断面形は凹面形を呈し、埋土は灰黄褐色系のシルトである。遺物は、土師器皿（31）の他、土師器や須恵器などが少量出土している。第１・２調査区において検出されたものと同じく、中世以降の灌漑のための基幹水路と考えられる。

粘土採掘坑群

B区の山側半分のほとんどで、不整形または長方形の土坑群を検出した。本来、第Ⅰ面でも検出されており、一部すでに掘削しているが、これらの上面に鋤溝が検出されたものは、第Ⅱ面で掘削しているものもある。いずれも、第２調査区のB区で検出されたものと同じく粘土採掘のための土坑と考えられる。最も大きいものは約15×２m、最も小さいもので約８×４mを測る。深さは、50～100cmのものばかりで断面は、ほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦をなす。埋土は褐色、褐灰色系の砂質シルトで、旧耕作土とよく似ていることが指摘できる。また、ひとつの土坑内でも何度かに分けて掘削され、採掘された形跡が認められた。さらに、土坑の形は、現在の道や水田などと垂直方向に掘られていることもわかる。

遺物は、近世の陶磁器や土師質の鉢壺、土錘などが少量出土している。これは、第２調査区で検出されたものより、さかのぼるものである。この辺りの地山土は、赤褐色系の良好な粘質土で、煉瓦、瓦などを焼くほかに家の壁土など、さまざまなものに用いられている可能性があり、近世以降延々と小規模な採掘が何度も行われていたと考えられる。

谷地形

A区では、最も海側部分で、北に向かって開く浅い谷状の地形を確認した。弥生時代の遺構面の存在する海側の水田の部分から落ち込み「ハ」の字状に開いて調査区外へ続く。深さは30cm前後、断面は逆台形状で、底面は平坦である。埋土は、褐色系の粘性シルトが主で、鋤溝を検出した旧耕土層とほとんど同じである。遺物も、弥生土器の他に中世のものがかなり混入しており、中世の開墾の開始時期に埋められたものであろう。

B区でも、最も海側（府道と調査区の段丘の先端部分）で、西に向かって落ち込む谷状の地形が検出されている。（ＰＬ．54）

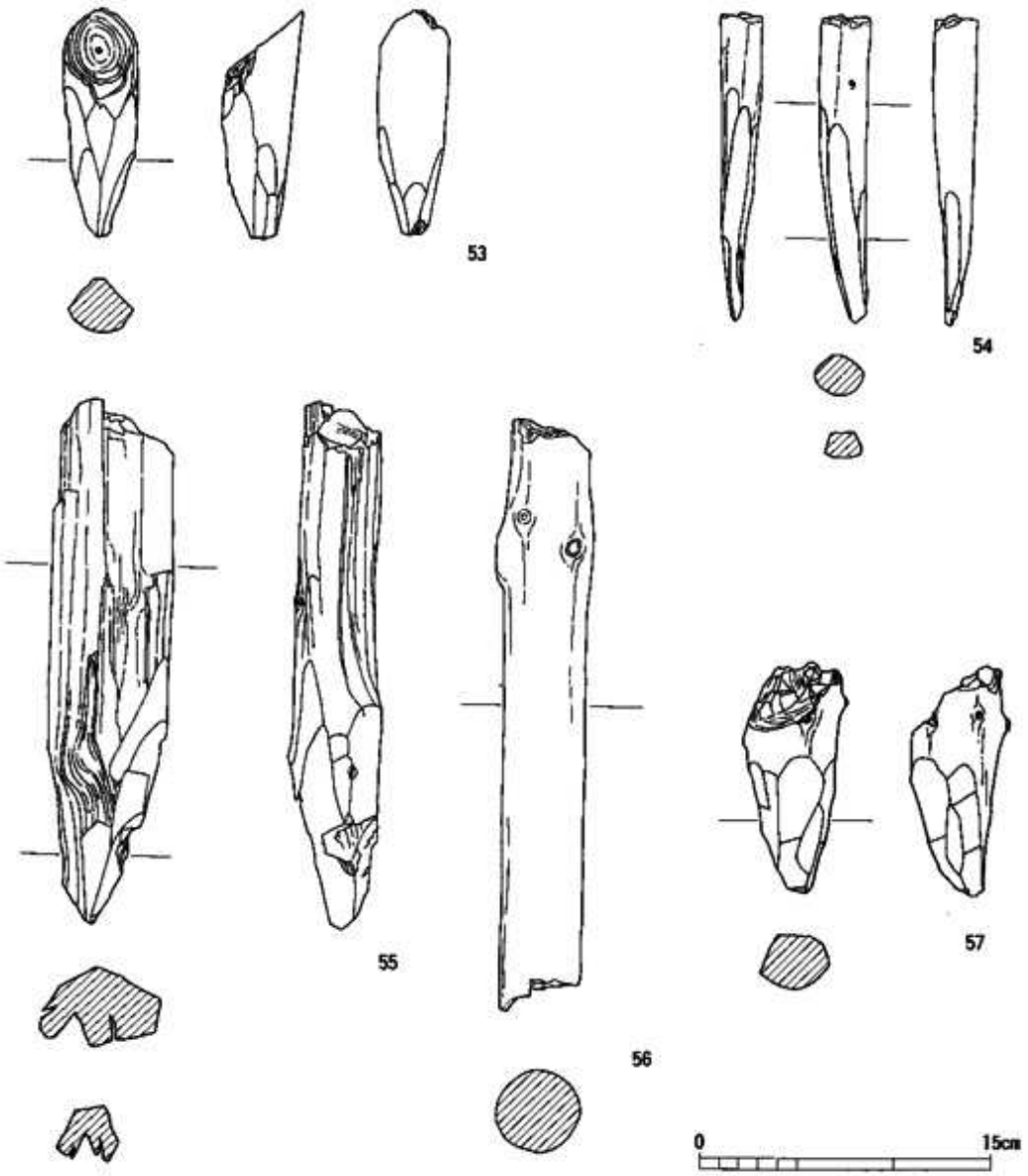
検出長約19m、深さは、最も深い部分で約2.5mを測る。埋土は、下層は粘性の強いシルトであるが、上層は砂質系のシルトや礫層、黄褐色の地山土をブロック状に含む層などがみられ、整地を行っているようである。遺物は、中世の鉢壺（33～35）他、近世の陶磁器（32）・瓦なども少量出土している。このことから、この最も海側の段丘面上が耕地として利用されはじめたのは、近世以降であることがいえるだろう。

第3節　出土遺物

1．第1調査区

当調査区においては、遺構から出土した遺物はほとんどなく、また図化可能な遺物となるとさらに少ない。また、ほとんどが中世以降の旧耕作土中より出土したもののため、破片でかなり摩滅した状態で出土している。時期的には、平安末期から中世を通してさまざまなものが出土しているが、古墳時代～古代の遺物も少量ながら出土している。

1・2だけが、遺構出土の土器である。（PL．9）



第18図　第1調査区SD02出土の木杭

1・2は、第II面における鋤溝群02から出土している。1は、紀州系の土師器の甕である。体部から緩やかに屈曲し口縁部に至る。口縁部は立ち上がり気味で、端部をつまみ上げる。2は、比較的立ち上がりのきつい瓦器椀の口縁部で、1回のヨコナデを施している。また、内面には、小片であるもののヘラミガキが良好に残る。焼成は良好である。

53～57は、SD02の下層より出土した木杭と考えられる木製品である。（第18図）

打ち込みの尖端部分と杭本体の部分が出土している。材質は、いずれもマツと考えられる。直径の違いで3タイプに分けることができる。

55は、尖端部分である。最大径6.2cmを測る。断面形は不整形を呈し、かなりの腐食が認められるため、元はさらに大型のものであったと考えられる。尖端部分の調整は、一方向だけを削り取り、面取りを行い尖らせている。面取りの単位は、幅約2cm、長さ約10cmを測る。53・56・57は、径が4.5～5.2cmを測るものである。57は、55と同じく片面だけ削っているが、53は、反対側の一部分も削り取っている。面取りの単位は、幅2～3cm、長さ約8cmを測る。56の杭本体は、53や57の尖端に接続するものと考えられる。いずれも断面は円形を呈する。54は、最大径2.6cmで最も小型の尖端部である。これも、片面だけを削って面取りを行っている。面取りの単位は、幅1～2cm、長さ約10cmを測り、細長い面取りである。断面は、円形を呈する。

以下は、包含層出土の遺物である。

古代以前の遺物

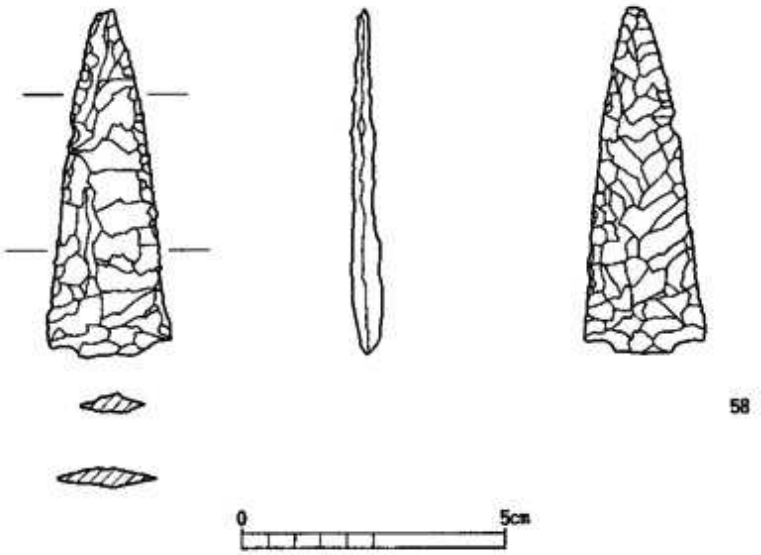
○石器（第19図）

58は有舌尖頭器である。

有舌尖頭器は、現在では縄文時代草創期から早期前半の時期のものと考えられている。A区の第II面直上より出土している。平らな基部から中子が作り出される平基式[9]であると考えられるが、中子部分の大半は欠損し、先端部分も欠損している。石材は、サヌカイト製であるが、全体に風化が進行しており剥離面は、明瞭さがなくなっており、色調も灰白色を呈している。残存長6.7cm、最大幅2.4cm、厚さ0.8cm、重量8.48gを測る。このほかに、サヌカイトの剥片が数点出土しているが、この有舌尖頭器ほど風化が進行していないものばかりで、時期的にはかなり新しいものと考えられる。

○須恵器（PL. 9）

3と4は杯である。4は、口縁端部を欠損しているが、いずれも口縁の立上りがかなり退化したものであり、6世紀末～7世紀初頭のものであろう。B区からの出土で、かなり摩滅している。



第19図　第１調査区出土の有舌尖頭器

５は、壷または瓶の口縁部であろう。回転ナデによって仕上げられ２条の凹線文を有する。６は、高台部分である。高台の貼付部分はかなり粗雑である。Ａ区の出土である。時期的には、平安時代前半ごろで最も新しいもののようである。いずれの土器の胎土もかなり粗く、砂粒を多く含んでいる。

平安時代末期～中世以降の遺物

○須恵器（ＰＬ．９）

東播系の捏鉢と甕が出土している。口縁部の形態からいくつかの型式にわけることができ、かなり幅広い時期にわたって出土しているのがわかる。７は、口縁端部内面がまっすぐ立ち上がり、外面もほとんど拡張されていないもので最も古い様相を示す。８や９は、内面が弧を描いて立ち上がり、外面も同様に丸く仕上げられている。10・11は、さらに口縁部外面が大きく拡張されているものである。12や13は、拡張された口縁部外面が垂下するようになり、14は垂下した部分が薄くなる。また、14の段階は、口縁部の重焼き痕は認められなくなる。15と16は、捏鉢の底部である。16は焼きが甘く軟質である。15は底部から体部の外面に指ナデを施している。内面は、使用による擦痕が明瞭に認められる。

甕は、17だけである。大きく外反する口縁部で、端部は上方へつまみ上げられている。焼成は良好で、堅緻である。12･13･15･16はＡ区から、その他はＢ区から出土している。

○土師器（ＰＬ．９）

皿と甕・鍋がある。なお、蛸壷及び土錘については、別項にて述べることとする。

皿は非常に残りの悪いものばかりである。図示したものは２点だけである。いずれも口

径が6.9～7.2cmの小型のものである。18は、底部からの立ち上がりがやや屈曲をなし、口縁部はヨコナデによって形成され、端部は丸く仕上げられている。クサリレキを含み、明褐色を呈する。19は、底部からの立ち上がりが不明瞭で、緩やかに口縁部に至る。端部はやや尖り気味である。色調は、赤褐色を呈する。いずれもB区より出土している。

20～22は、紀州系と考えられる甕の口縁部である。口縁部の形態から、3つに分類可能である。20は、体部から口縁部に向かって丸みを帯びて強く屈曲している。口唇部は丸みを帯び、口縁端部は上方へつまみ上げられている。色調は、橙色を呈している。21は、遺構出土の2とほぼ同じ型式であると考えられる。体部から緩やかに屈曲し、口縁部は立ち上がり気味で、端部をつまみ上げる。色調は、にぶい黄橙色を呈している。22は、小さく外反しやや立ち上がりの急な口縁部である。口唇部は平坦で、口縁端部は斜め上方につまみ上げられている。色調は、橙色を呈している。型式[3]では20はB、21はC、22はDにあたるだろう。また、20・22はA区、21はB区より出土している。

23は、土鍋の把手と考えられる。半円を描いて上方を向く把手である。砂粒を多く含み明るい橙色を呈するが、かなり摩滅している。

○瓦器（PL. 10）

椀と皿がある。椀では、口縁部がふんばるようにして立ち上がり、ヨコナデ2回を施す24が最も古い様相を持っている。その他は、口縁部に向かって大きく開き、ヘラミガキもかなり省略されたもの（25～29）ばかりである。この中で、ほとんどのものが摩滅を受けているのに対して、25・26は、焼成も良好で残りが良いことが指摘できる。高台部分では、断面が逆台形を呈してしっかりと立ち上がるもの（30）と、断面三角形で、非常に低いもの（31）がある。

皿の出土は非常に少なく、実測可能なものは、2点のみである。このうち33は、比較的密なヘラミガキを有し土器の遺存状態も良好である。なお、32がA区より出土した他はすべてB区からの出土である。

○瓦質土器（PL. 10）

羽釜と脚部、擂鉢がある。

34・35は、在地系の羽釜で、口縁部がやや内彎して立ち上がる。3条の凹線を有し、口縁端部は平坦をなす。鍔部は水平で、先端部は、34はやや尖り気味、35は平坦をなしている。調整は、34は摩滅のため不明であるが、35は内面に横方向のハケ目を施す。口径は、34はやや小さく23.2cm、35は33.2cmを測る。一方、36は外来系の羽釜の三足部分である。体部に接続していた部分からわずかに外側に曲がり、下方へ9.2cm遺存している。断面形は、ほぼ円形を呈し、径2.3cmを測る。35・36はA区より、34はB区より出土している。

37～39は、擂鉢である。口縁部は、２つの型式がある。37は、口縁部が肥厚され断面三角形を呈するが、下方に拡張されないものである。他方38は、口縁部が下方に拡張され、口縁端部がやや尖り気味のものである。内面にはそれぞれ、わずかに卸目の痕跡が認められるが、摩滅のため調整はまったく不明である。39は底部である。外面にはヘラケズリ、内面は卸目が明瞭に認められる。37はA区、38・39はB区より出土している。

○陶磁器（ＰＬ．10）

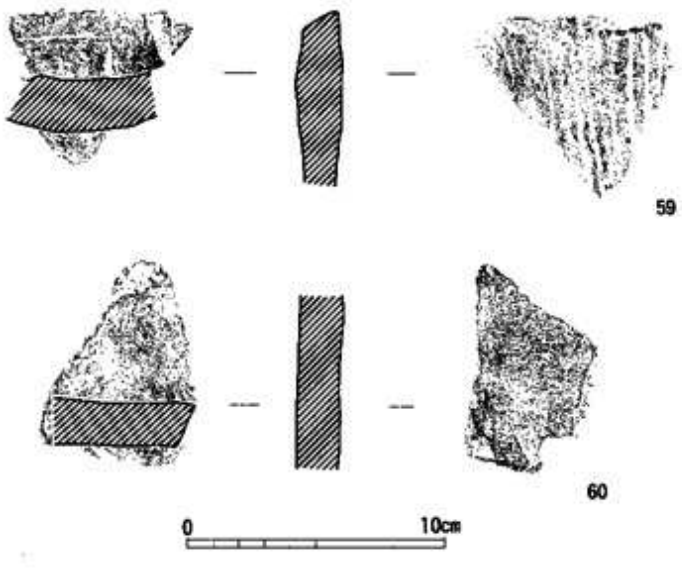
国産と中国製の輸入陶磁器がある。

40は、常滑焼の頸部から口縁部と考えられる。口縁部に向かって大きく外反し、下方へ断面三角形をなして垂下する。また、口縁端部は上方へ丸くつまみ上げられる。釉薬は、内面から口唇部、頸部の外面にかかり緑灰色、施釉されていない部分は、暗赤灰色を呈している。B区からの出土である。

41～43は輸入陶磁器である。41は蓮弁文をあしらう青磁である。釉薬は、オリーブ色または淡黄色を呈している。また、胎土もやや粗く、粗悪な印象を持つ。42も青磁である。高台は低く、緩やかに立ち上がる。釉薬は、明緑灰色を呈し、ガラス質釉である。胎土は良好である。43は、白磁である。非常に低い高台で、緩やかに立ち上がる椀であろう。釉薬の中には気泡がみられ、釉の一部は、高台から底部まで施されている。いずれもB区からの出土である。

○瓦（第20図）

59は、凸面に縄叩き目、凹面には布目痕が施される。叩き目の条は、側縁に対して平行



第20図　第１調査区出土の平瓦

である。凹面側端縁部分には、ヘラケズリを施して面取りをしている。全体に摩滅が著しい。60は、59に対してかなり新しいものと考えられる。凸凹面ともに、わずかにハナレズナが認められる。また、凹面には炭素の付着が認められないことが指摘できる。側縁の面取りは鋭い。いずれもB区からの出土である。

○その他の遺物

このほかの遺物としては、蛸壺・土錘などの漁労具、貨銭・鉄釘などの金属製品、砥石などの石製品がある。

蛸壺（PL. 10）は、すべて真蛸壺であった。破片を含め非常に多く出土している。44～46は、ほぼ同じ型式のものである。いずれも口縁部を指頭圧痕によってわずかに外反させ紐掛部を形成している。胴部から底部は長胴の砲弾型になるものと考えられるが、底部はまったく出土しなかった。実際に使用されていたようで摩滅が著しい。胎土は粗く、淡黄橙色を呈するが、45だけは、二次焼成を受けたようで、灰赤色を呈している。いずれもB区の出土である。

47～52は、土錘である。（PL. 10）

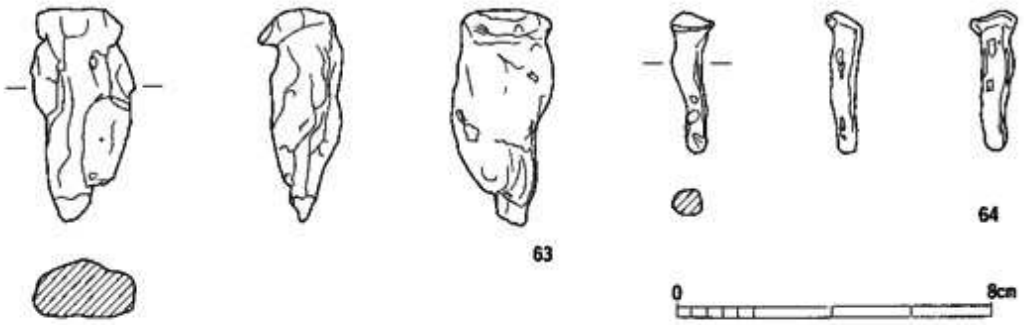
3つの型式が存在する。47は、筒状を呈するものである。全長6.1cm、最大径3.5cm、孔径1.8cmを測るが、一部欠損し、非常に摩滅している。48は、寸胴の楕円形を呈したものである。全長4.4cm、最大径4.4cm、孔径2.1cmを測る。摩滅しているものの、焼成は良く、硬質である。49～52は、小形の管玉状のものである。破片を含め、最も多く出土している。全長2.9～4.1cm、最大径1.0～1.1cm、孔径0.3～0.5cmを測る。すべてB区より出土している。

61・62は、B区より出土した貨銭である。（第21図）

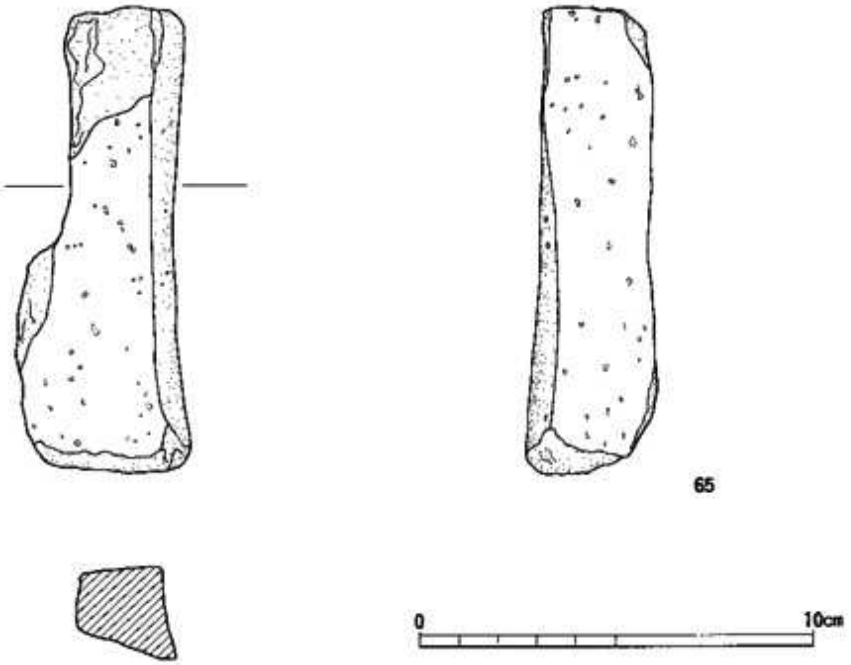
裏同志で2枚ぴったりと引っ付いた状態で出土した。61は、銭文は「景徳元寶」[3]で、初鋳年代が1004年で北宋時代のものである。銭径2.4cm、重量は2.55gを測る。62は、錆の進行が著しく判別不可能であったが、61に対して、内径がやや大きいため、別のものと考えられる。銭径2.2cm、重量2.06gを測る。

63・64は、鉄釘である。（第22図）

第21図　第1調査区出土の貨銭



第22図　第１調査区出土の鉄製品



第23図　第１調査区出土の砥石

63は、大型のものである。断面は扁平で、楔状を呈する。頭部は折り曲げられ、平坦をなす。全長5.4cm、頭部径2.2cm、厚さ1.5cm、重量35.80ｇを測る。64は、やや小型である。断面は方形で、頭部を折り返して平坦になしている。全長4.2cm、頭部径1.1cm、厚さ0.6cm、重量3.91ｇを測る。いずれもＡ区の同一地点からの出土である。

65は、砥石と考えられる。（第23図）

４面のうち２面の研磨面が遺存しているが、もう１面欠損している可能性がある。どちらの面も、凹面を呈し、かなり使い込まれている。石材は、凝灰岩製と考えられる。

2．第2調査区

第2調査区においても、第1調査区と同様に遺構からの出土は非常に少ない。また、遺物の出土した層位が中世の旧耕作土であることも、第1調査区とほとんど変わらないことである。

1～3は遺構出土の土器である。（PL．11）

1は、C区のSD04より出土した瓦器椀である。やや立ち上がりの緩い口縁部で、一回のヨコナデを施す。全体に摩滅が著しく、調整は不明である。

2と3は、SE01より出土している。

3は、上層の井戸の埋設時の整地層とみられる土層より出土している瓦質土器の擂鉢である。肥厚する断面三角形の口縁部で、端部は下方に垂下する。外面は、摩滅のため確認できないが、ヘラケズリが施されていたものと思われる。内面は、口縁部に横方向にハケ目を施し、その下方に卸目がわずかに認められる。焼成は軟質で、表面がかなり剥離している。

2は、最下層の粘性土より出土している瓦質の羽釜である。やや内彎しながら立ち上がる口縁部を持ち、端部は平坦に仕上げられてる。鍔部は水平で、体部外面はヘラケズリ、内面は口縁部だけ横方向のハケ目を施している。また、外面鍔部の下方は、びっしりと煤が付着した状態で出土しており、土器自体もほとんど摩滅していないことから、遺構の埋没開始の年代を示すと同時に、これを使用した集落が付近に存在したという査証となるであろう。

以下は、包含層出土である。

古代以前の遺物

○須恵器（PL．11）

4は、器台の口縁部である。端部手前で急激に屈曲させて端部に至る。体部には2条以上の櫛描波状文を施しているが、櫛目の数が少なく、波状文はあまりシャープではない。内面には降灰がみられ、胎土は、白色粒や黒色粒が目立ち非常に粗いことがわかる。また、内外面の色調が、灰色または灰白色を呈するのに対して、断面の中心だけが赤灰色を呈している。5は、蓋であると考えられる。天井部と口縁部の境に凹線を1条有し、口縁部に向かってやや外反している。焼成はやや異なるものの、胎土は白色粒が目立ち4と非常によく似ている。これら2点は、須恵器の中では最も古いもので、6世紀代中頃に遡るものと考えられる。

6は、杯である。受部からの立ち上がりは非常に低いものである。摩滅が著しく、調整

はまったく見えない。色調や胎土・焼成は、4と非常に似通った点がある。このような胎土の須恵器は、第1調査区で出土した中にも同様のものが数多くある。

7は蓋である。裏側にかなり退化した返りを有しており、7世紀後半に比定できる。裏側には、重ね焼き痕が認められる。8は、杯または台付壺と考えられるが、高台部分の一部しか遺存していない。やや新しく8世紀代以降のものであろう。

この2点は、非常に良好な焼成で、非常に密な胎土を持つ。特に8は、砂粒をほとんど含んでいないことから非常に対照的なものであることがいえる。すべてC区より出土している。

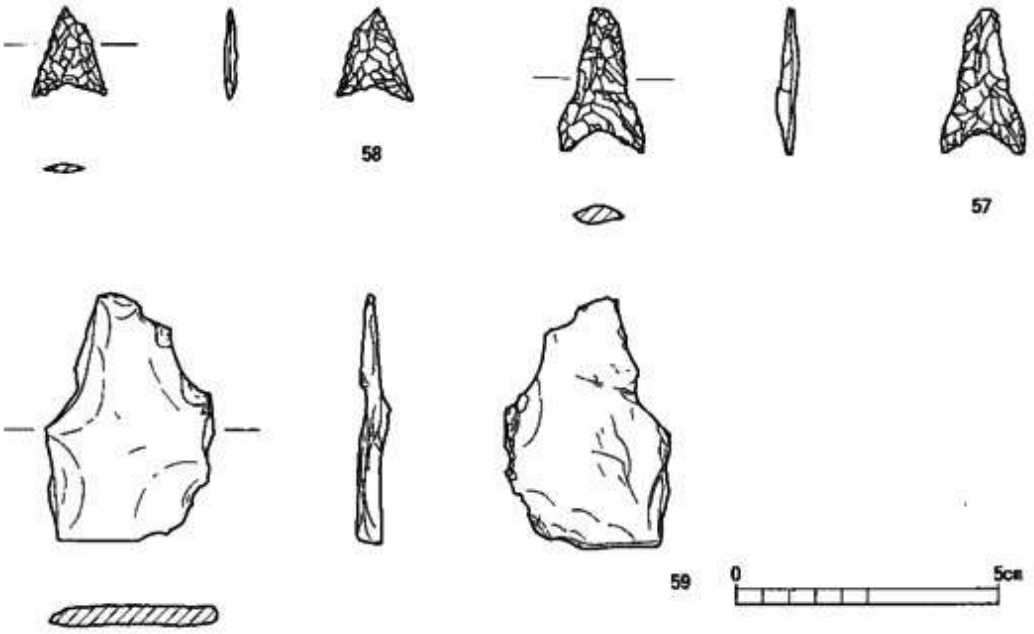
○土師器（PL. 11）

A区から出土した甕が1点だけである。9は、ほとんど外反しない口縁部で、端部に向かって尖らせている。内面は口縁部に横方向の細かいハケ目を施し、体部は斜め上方に向かってのヘラケズリを施している。外面は摩滅のため不明である。胎土は、砂粒はほとんど含まず、橙色を呈している。あまり出土例をみないものであるが、時期的には、6世紀末から7世紀初頭と考えておきたい。

○石器類（第24図）

ほぼ完形の石鏃が2点とサヌカイトの剥片が出土している。石鏃は、いずれも凹基無茎式である。石材はサヌカイト製で、C区からの出土である。

57は、先端よりわずかに内彎して基部に至る。基部の凹みは緩やかなU字形である。断



第24図　第2調査区出土の石器

面は、菱形を呈する。全長2.8cm、基部径1.6cm、最大厚0.35cm、重量1.11gを測る。

58は、基部の凹みは緩やかなV字形を呈し、側辺はまっすぐで、先端は鋭く尖ると思われるが、欠損している。エッジには細かな鋸歯状の剥離を施す。断面は、扁平な菱形を呈する。全長1.9cm、基部径1.4cm、最大厚0.2cm、重量0.41gを測る。59は、サヌカイトの剥片である。全長4.8cm、最大厚4.5cm、重量8.08gを測る。

平安時代末～中世以降の遺物

○須恵器（PL. 11）

東播系の捏鉢と、産地の不明な、高台を持った底部がある。

10～12は、東播系の捏鉢である。口縁部の形態から3型式に分けられる。10は、器壁がかなり薄い。内面がわずかに屈曲して立ち上がり、端部は尖り気味である。また、外面は、ほとんど拡張することはない。また口縁端部には、重ね焼き痕が明瞭に認められる。12は、内面はわずかに屈曲して立ち上がるが、端部は、肥厚され丸みを帯びた平坦をなす。外面は下方に大きく拡張され、やや丸い断面三角形を呈するが、垂下しないものである。11は、内面はほとんど平坦に立ち上がり、端部はやや尖り気味を呈する。外面は下方に大きく拡張され、垂下するものである。また、外面には、自然釉がかかる。いずれもC区より出土している。

13は、産地の不明な底部で、断面三角形を呈した低い高台を持つ。胎土は粗く、砂粒を多く含む。また内面には、自然釉が認められる。A区からの出土である。

○土師器（PL. 11）

皿・甕・土釜がある。

14～20は、皿である。14・15は、口径が10.8～11.2cmとやや大きいものである。口縁に向かって、体部が立ち上がりながら、わずかに屈曲する。16～19は、口径が6.8～9.0cmで、小型のものである。16は、底部は平たくあまり立ち上がらない。口縁部をヨコナデによって仕上げ、端部を上方へつまみ上げて尖らせている。底部は、指頭圧痕を施す。19は、口縁を強いヨコナデによって作りあげ、整形時の段が形成される。底部には、同じく指頭圧痕を施す。17・18は、ほとんど立ち上がらない口縁部で、浅いものである。20は立ち上がりが大きく、深みのある皿である。色調は、明褐色や赤褐色を呈するが、18だけが、黒褐色であることが特徴である。15・18がA区出土の他は、C区の出土である。

21は、紀州系と考えられる甕である。体部から緩やかに屈曲し、口縁部に至る。口縁部は、わずかに下方へ拡張され、端部は斜め上方へつまみ上げられる。胎土は、片岩とともに在地系の土器にも含まれるクサリレキを多く含んでいる。いずれもC区からの出土であ

る。

22は、水平に短く、どっしりとした鍔を持つ土釜である。明赤褐色を呈し、硬質なものである。C区からの出土である。

○瓦器（PL. 11）

椀・鉢がある。

23～30は、椀である。口径が、15cm前後でやや大きなもの（23・27）と、12.8～13.2cmの小型のもの（24～26・28）がある。このうち24は、口縁部に、二回の鋭いヨコナデを施している。そのほかは、口縁部には一回のヨコナデ、体部は、ユビオサエを施している。また、25・26は、口縁部の器壁がやや肥厚される。29～30は、高台部分である。断面が三角形で強いヨコナデによって仕上げられ、しっかりと立ち上がるもの（29）と、平坦な粘土紐を張り付けただけのもの（30）がある。いずれもC区からの出土である。

31は、鉢である。しっかりと立ち上がる体部である。口縁部は、2回のヨコナデを施し、端部が平坦に仕上げられる。体部外面には指頭圧痕がみられ、内面はナデ調整を施す。焼成は良好で、胎土は砂粒をほとんど含まない。両面とも、灰色を呈している。32・33は、鉢の高台部である。がっちりとした断面三角形の高台で、高台の端部はやや丸身を持つ。いずれもC区の出土である。

○瓦質土器（PL. 12）

羽釜と脚部・擂鉢・鍋・甕がある。

34・35は、羽釜である。34は、内傾して立ち上がる口縁であるが、凹線を持たない。端部は平坦で、全体に指頭圧痕が多くみられる。外来系の羽釜であると考えられる。色調は、灰白色で瓦質はほとんど失われている。35は、在地産のものである。やや内傾して立ち上がる口縁であるが、端部は欠損している。鍔部は水平で、端部は平坦をなす。全体に摩滅が著しい。36は、三足の一部である。34のような外来系の羽釜の体部に接続していたものと思われる。下方に9.1cm遺存している。断面は、ほぼ円形を呈して、径2.9cmを測る。いずれもC区の出土である。

37は、擂鉢の底部である。底径9.0cmを測り、体部に向かってかなり緩やかな立ち上がりを示す。外面は、左斜め上方に向かってヘラケズリが施され、内面は、卸目が密に認められる。C区の出土である。

38は、鍋の口縁と考えられる。端部へ向かって、内側に緩やかに屈曲しているが、体部はまったく欠損している。摩滅が著しいが、ヨコナデが施されていることがわかる。

甕の出土は非常に少なく、図示し得たのは、39の1点のみである。口縁部に向かって短い頸部が、ほぼまっすぐに立ち上がる。端部は、外側に向かって丸みを帯びて拡張される

が、垂下しない。頸部から口縁部はヨコナデ、体部外面は横方向のタタキ、内面は横方向のハケ目を施す。

以上、39がA区出土の他は、すべてC区の出土である。

○陶磁器（PL．12）

国産陶器の擂鉢と輸入陶磁器がある。

40は、近世の堺産擂鉢と考えられる。欠損のため卸目の本数も不明である。胎土は砂粒を多く含み、かなり粗い。暗赤灰色を呈する。

41～46は、中国製の輸入陶磁である。

41は、外面に蓮弁文を持つ青磁椀である。釉薬は緑灰色を呈し、ガラス質釉である。龍泉窯系と考えられる。42も同様に、龍泉窯系の青磁椀と考えられる。内面には、劃花蓮華文の一部が認められる。釉薬は緑灰色を呈する。43は、底部から鋭く屈曲し、わずかに外反する青磁皿である。釉薬は、灰オリーブ色を呈し、底部と体部の屈曲部分まで施釉される。見込み部分には櫛状の工具により文様が付けられ、底部には、ヘラケズリが施される。同安窯系と考えられる。41はB区、42・43はC区の出土である。

44は、白磁である。口縁部が大きく開き、わずかに外反する浅い椀である。体部外面下方には、ヘラケズリを施す。釉薬は、灰白色を呈する。45は、白磁の高台部分である。しっかりとした逆台形の断面で、外面はヘラケズリを施している。内面には、重焼きで釉薬が施されない部分が認められる。一方、46は、かなり径が小さく、低いものである。外面にはヘラケズリを施す。施釉は、外面は高台からやや上方までしか行われていない。胎土は粗く、釉薬の中に気泡がみられる。44・45はC区、46はA区の出土である。

○その他の遺物

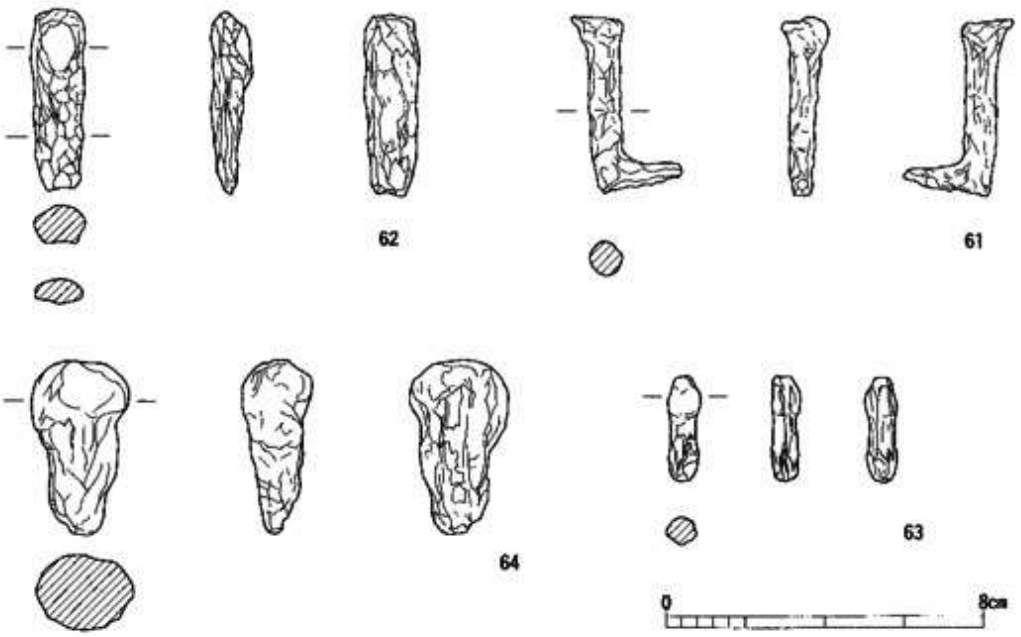
このほかの遺物としては、第1調査区と同じく蛸壺・土錘などの漁労具、貨銭・鉄釘などの金属製品や砥石などの石製品がある。

蛸壺は、第1調査区と同じく真蛸壺だけの出土である。（PL.12）

破片も含めると土師質の土器の中では、最も多く出土している。指頭圧痕によって外反させて形成した紐掛け部を持った口縁部である。胎土は粗く、クサリレキなどを含んでい

60

第25図　第2調査区出土の貨銭（1：1）



第26図　第２調査区出土の鉄製品

る。色調は明褐色のものばかりである。48はＡ区より、47・49はＣ区より出土している。

土錘は、４型式に分けられる。（ＰＬ．12）

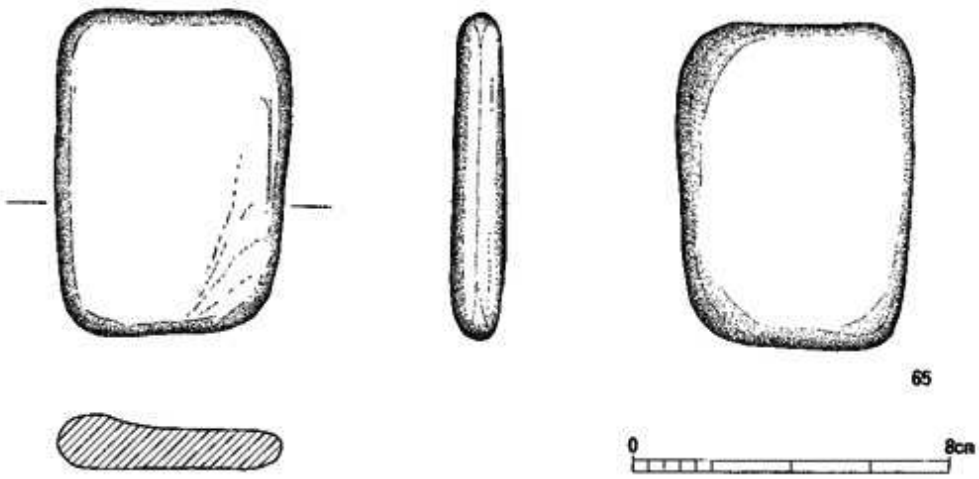
50は、大型のものである。非常に硬質で、明褐色を呈する。孔径2.1cmを測る。Ｃ区の出土である。51は、中型で筒形を呈するものである。砂粒を多く含み、胎土は粗い。全長7.8cmを測る。52も中型で、ラグビーボール状を呈する。全長4.7cm、孔径0.8cm、最大径2.6cmを測る。摩滅が著しい。どちらもＡ区からの出土である。53～56は、小型で管玉状を呈し、最もたくさん出土をみたものである。全長3.4～4.8cm、孔径0.2～0.3cm、最大径0.8～1.4cmを測る。53・56はＡ区、他はＣ区より出土している。

60は、貨銭である。（第25図）

銭文は、「淳化元寶」（北宋、990年初鋳）[8]と判読できる。書体は草書で、一部欠損しているものの、腐食はほとんど認められず、比較的残りが良い。銭径は2.45cm、重量は2.06ｇを測る。Ｃ区の出土である。

61～64は、鉄釘である。（第26図）

62は、扁平な楔形を呈し、断面は長方形を呈する。全長4.7cm、重量8.65ｇを測る。61はＬ字形に屈曲するもので、断面は円形を呈する。全長4.5cm、重量6.02ｇを測る。63は、全長2.7cmとかなりの小型のもので、1.70ｇを測る。64は、楔形を呈し、全長4.5cm、重量21.49ｇを測る。いずれも、頭部を折り曲げ平坦をなしていることがわかる。すべてＣ区からの出土である。



第27図　第２調査区出土の砥石

65は、砥石と考えられる。（第27図）

扁平な長方形を呈し、角はかなり丸い。両面に研磨痕が認められる。全長8.4cm、最大径5.9cm、厚さ1.4cmを測り、材質は砂岩製である。C区からの出土である。

３．第３調査区

第３調査区において最も注目されるのは、A区において、他調査区ではほとんど出土しなかった弥生土器、石器などが出土していることである。また、これらは遺構に伴うものもかなりある。その他は、古墳時代の須恵器や中世以降の土師器、須恵器、瓦器、瓦などが出土している。ただし中世以降の土器については、細片が多く、図化できるものがほとんどなかった。

まず、A区の遺物について説明したい。（ＰＬ.13）

１・２は、ＳＫ02より出土している。１は、外方へ斜めに開く口縁部を持つ壷である。頸部には削出突帯上にヘラ描沈線文を２条、胴部上方には同じくヘラ描沈線文が４条施される。体部は、胴部が大きく開いて扁平になると思われる。調整は、口縁部はヨコナデ、その下方は横方向の非常に密なヘラミガキで、削出突帯から口縁部に向かってハケ目が施される。内面は、胴部と頸部の接合部に指頭圧痕を施した後、密なヘラミガキを行っている。胎土は、石英などの砂粒を多く含み、焼成は非常に良好で堅緻である。口径は、13.2cmを測る。２は、甕である。外反する口縁部で、口唇部に刻目を施す。頸部には、４条のヘラ描沈線文を有する。口縁部はヨコナデ、体部外面の胴部はやや粗いハケ目調整が行われる。内面は板ナデの後、ナデを施す。胎土は砂粒を多く含み、焼成は良好で、明赤褐色を呈する。また内面には、大きな黒斑が認められる。口径は、37.2cmを測る。これら２点

は、形式的に最も遡るものといえるだろう。

3は、SK01で横倒しの状態になって出土した。口縁部と底部は、欠損している。胴部はやや扁平である。最大径は、中央よりやや上方にあり、33.0cmを測る。最大径のやや上部に8条のヘラ描沈線文帯を有する。頸部は筒状で、断面三角形の突帯を強いヨコナデによって貼り付けている。頸部径は、14.7cmを測る。外面は、胴部は主に横方向、頸部は斜め方向の密なヘラミガキを施し、内面は、胴部と肩部の粘土の接続部分を指頭圧痕によって仕上げ、ヘラミガキ調整を行っている。胎土はチャートなど砂粒を非常に多く含み、焼成は良好である。

4・5は、SB02のピットAの掘方より出土している。4は、斜め上方に開くと考えられる壷の口縁部である。内外面ともヨコナデ調整が行われる。砂粒を多く含み、暗褐色を呈する。5は、甕である。外反する口縁部で、口唇部には刻目を施すが、あまり明瞭ではない。頸部には、ヘラ描沈線文を4条以上を有している。調整は、口縁部にはヨコナデが認められる他は不明である。胎土はやや粗く、砂粒を多く含み、色調はやや白っぽい褐色であることが指摘できる。口径は、21.6cmを測る。

6は、SK05より出土している甕の口縁部である。外反する口縁で、口唇部には刻目、頸部には5条のヘラ描沈線文を施す。調整は、口縁部にはヨコナデを行い、体部は、沈線部分からハケ目調整を施す。焼成は良好であるが、胎土は粗く、2mm以上の砂粒を多く含む。口径は、20.6cmを測る。

7・8は、SK03より出土した甕又は鉢の口縁部と考えられる。7は、外反する口縁部を持つと考えられるが、口唇部は欠損している。口縁部にはヨコナデが施され、ヘラ描沈線文を3条以上有する。8は、ヘラ描沈線文を2条以上有するものである。いずれも胎土は石英など砂粒を多く含み、赤褐色を呈する。

9は、SK12より出土した甕又は鉢の口縁部であるが、口唇部は欠損している。ヘラ描沈線文を3条施す。砂粒を多く含み、明褐色を呈する。

10～13は、遺構からの出土ではないものの、A区中央付近において、床土を除去するとすぐに地山が検出される地区からの出土である。いずれもほとんど摩滅しておらず、さほど原位置を動かされていないようである。非常に削平された遺構に伴っていた可能性が高い。SB01の北側付近の同じ場所から出土している。

10は、甕である。倒鐘型の体部に、直口する口縁部を持つ。口縁下方2cmには、鍔状の貼付突帯を有し、これに刻目文を施している。口径は18.9cm、器高は21.5cmを測る。調整は、口縁部は強いヨコナデで、口唇部は丸く仕上げられている。外面胴部は、ハケ目調整で、底部から上方約3cmには、横方向のヘラミガキを施している。内面は、ナデである。

焼成は良好で、胎土はチャートなどの砂粒を多く含んでいる。色調は、内面や口縁部は明褐色を呈するが、体部外面は二次焼成のためか暗褐色で、煤の付着しているところもあり、非常に残りが良い。

11・12は、同一個体と考えられる壺である。口縁部は、大きく「ハ」の字状に開く。頸部は欠損するが、胴部はやや扁平になるものと考えられる。胴部やや上方には、4条のヘラ描沈線帯とその上には、2条以上のヘラ描沈線文帯を有す。外面は、密なヘラミガキ調整が施され、内面は頸部と胴部の接合部を指頭圧痕によって押えられている。胎土は、角閃石などを含みチョコレート色を呈する生駒西麓産のものである。また、口縁部と胴部の一部には黒斑を有する。

13は、壺の頸部である。外側に向かってかなり大きく開くと考えられるが、口縁部は欠損している。頸部の最も狭い部分にヘラ描沈線文を2条有する。調整は、外面は縦方向にハケ目調整の後、密なヘラミガキを施す。内面は沈線部分までは、非常に密なヘラミガキで、それより下方はナデを施す。

以下は、包含層からの出土である。

14～22は、弥生時代の包含層である、にぶい黄褐色粘性シルト層より出土したものである。

14は、大きく外反する壺の口縁部である。ヨコナデの後、非常に密なヘラミガキを内外面とも施している。口径は、28.4cmを測る。胎土は、砂粒をやや多く含み、色調は、暗褐色である。

15・16は、同一個体と考えられる壺である。SD02の西方付近から出土している。あまり外反しない口縁部でヨコナデの後、ヘラミガキを施す。胴部はハケ目調整の後、ヘラミガキを施す。内面はナデ調整である。口径は15.5cmを測る。砂粒を非常に多く含み、にぶい橙色を呈している。17は壺の頸部である。筒状を呈し、6条のヘラ描沈線帯を有する。頸部径は、9.8cmを測る。調整は、内外面とも摩滅のため不明である。砂粒を多く含み、褐色を呈している。

18・19は、17とほぼ同じ地点から出土した甕の口縁部である。18は、斜めに外反する口縁部で口唇部には刻目を有する。刻目の部分には、横方向の線が一直線に並んで認められ、刷毛原体による刻目と考えられる。口縁の下方は、斜め方向のハケ目調整の後、4条以上のヘラ描沈線文を施す。胎土は、石英など砂粒を含みやや明るい褐色を呈している。19は、直口内彎気味に立ち上がる口縁部であるが、口唇部は欠損している。やや下方に、刻目を有した断面三角形の貼付突帯がめぐる。さらに下方には2条以上のヘラ描沈線文が施される。摩滅のために調整は不明である。

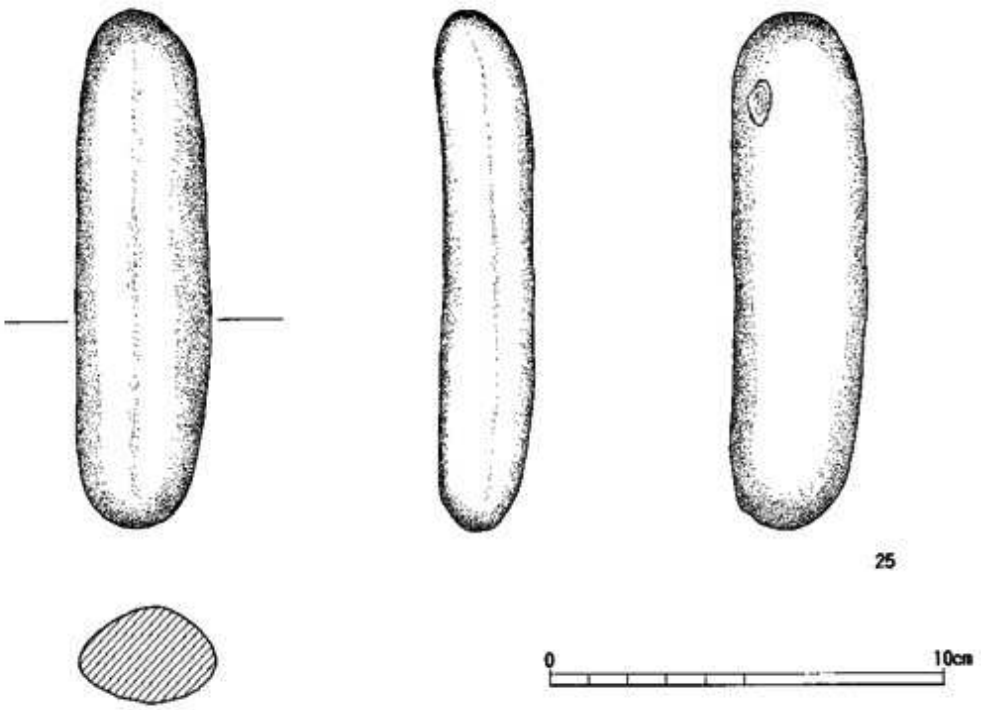
20～22は、底部である。21は、摩滅のため調整は不明であるが、20・22は、外面にハケ目調整を施している。また、22は底部に網状の圧痕を有する。

23・24は、第1・2調査区の包含層と同じ中世以降の旧耕作土層から出土している。23は、甕または鉢の口縁部であるが上方は欠損している。ハケ目調整の後、やや間隔の大きなヘラ描沈線文が4条以上施されている。砂粒はほとんど含まず、色調は橙色を呈している。24は、須恵器の杯蓋と考えられる。口縁部は欠損しているが、かなり器高の低い扁平なもののようである、天井部には回転ヘラケズリと刺突文を施す。全体に摩滅が著しい。胎土は、砂粒を多く含み灰色を呈している。

25～29は、石器である。（第28・29図）

砂岩製の敲石とサヌカイト製のものが出土している。サヌカイトは、剥片はかなりの数出土しているものの、製品になるものはほとんどなかった。製品は、石鏃、スクレイパーなどがある。

25は、敲石である。SK04より出土している。僅かに屈曲した長楕円形を呈し、断面は円形である。先端からやや下方に敲打痕が認められる。全長13.2cm、最大厚1.8cm、重量175gを測る。26～28は、いずれも凹基無茎式である。27は、基辺の凹みが非常に浅く1.5mmを測る。側辺は基部に向かって斜め直線に伸び、途中で角度が変化する。断面は、菱形



第28図　第3調査区出土の敲石

を呈する。全長2.05cm、基部径1.6cm、最大厚0.3cm、重量1.04gを測る。26と28は、基辺の凹みが4～6mmと比較的大きなものである。側辺は基部に向かって僅かに内彎するが中央よりやや下半で大きく開く。断面は、扁平な菱形を呈する。26は、全長2.5cm、基部径約2cm、最大厚0.25cm、重量1.13gを測る。28は、全長2.45cm、基部径約1.8cm、最大厚0.4cm、重量0.71gを測る。29は、スクレイパーと考えられる。階段状剥離により刃部を作出している。全長4.7cm、最大厚0.7cm、重量8.07gを測る。なお28と29は、谷地形より出土し、そのほかは包含層より出土している。

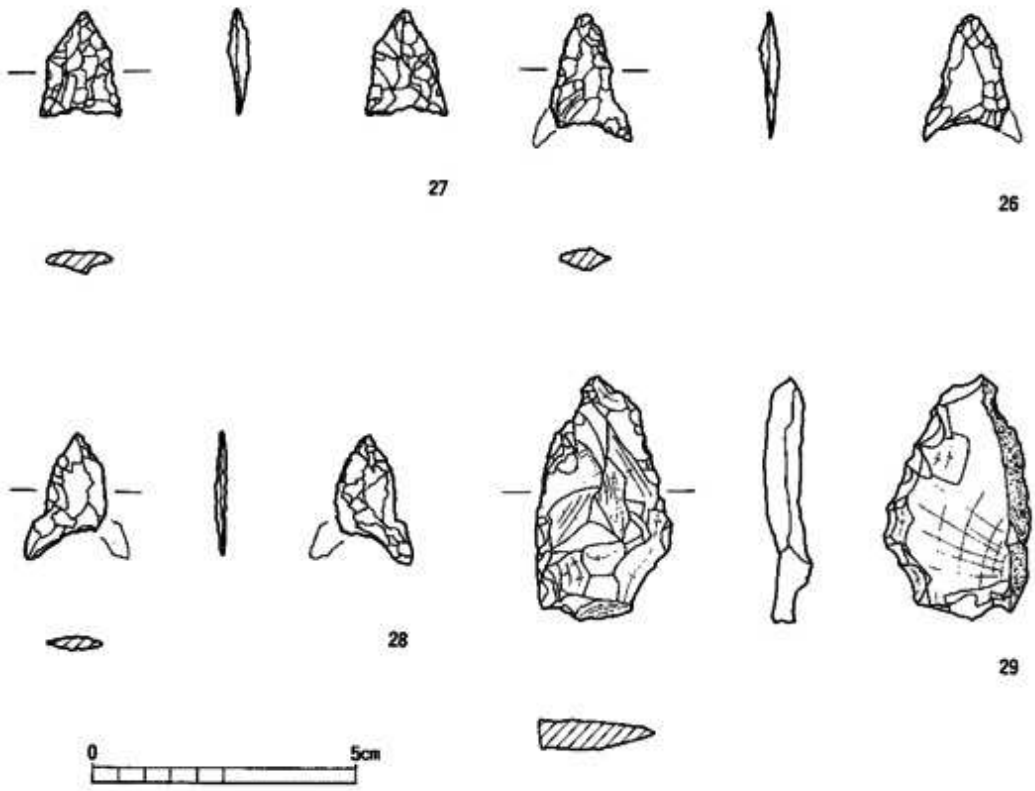
次に、B区の遺物について述べてみたい。（第30図）

30は、SD02より出土した中世の土師器の皿である。底部は指頭圧痕、そのほかはナデによって仕上げられる。口径は、9.0cmを測る。

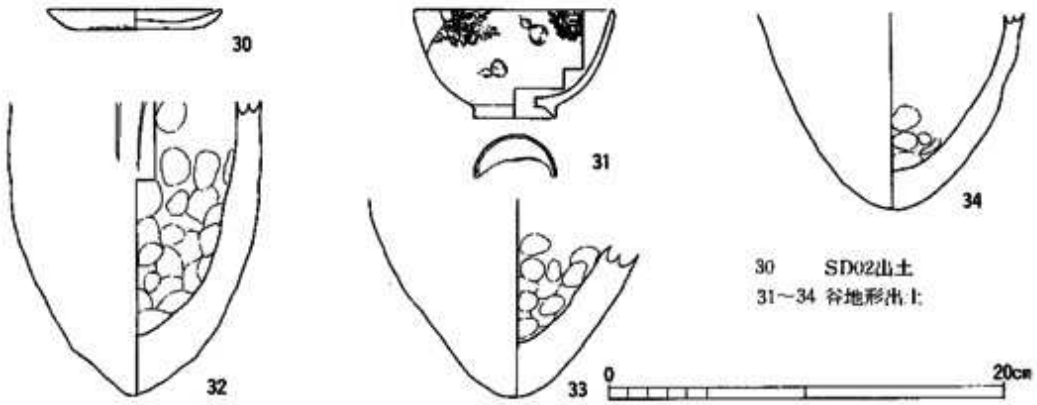
31～34は、B区の海側に位置する谷地形から出土している。

32～34は、砲弾型を呈した真蛸壺である。いずれも口縁部は欠損している。外面は、摩滅が著しいが、32は、外面にヘラ記号を有している。内面は、指頭圧痕によって仕上げられている。胎土は粗く、橙色または淡黄橙色を呈する。

31は、染付の椀である。波佐見焼系と考えられ、近世以降の所産である。



第29図　第3調査区出土の石器



第30図　第３調査区Ｂ区出土の遺物

なお、Ｂ区において、包含層から出土した遺物は、図化し得なかった。

註　①　西口陽一「近畿・有舌尖頭器の研究」『考古学研究38－１』（1991）

②　泉南市教育委員会「②中世の土器」『海会寺』（1987）

③　永井久美男『中世の出土銭』兵庫県埋蔵銭調査会（1994）

④　③と同じ

第Ⅴ章　まとめ（ＰＬ．１、第31・32図）

第１節　遺跡の推移

三年度の長きにわたる今回の調査は、総延長約650m、幅16～22mの巨大なトレンチを洪積段丘面上に拡がる広大な水田地帯を縦断する形で設定・掘削する結果となった。これにより、ほとんど知り得なかった市域の段丘面上、特に樫井川左岸のこの地域の開発の歴史を解明する上で、非常に大きな成果を上げることができた。今回の成果で、岡田西遺跡・氏の松遺跡は、現代までどのような変遷をたどってきたのかまとめてみたい。

出土した中で最も古い遺物は、第１調査区のＢ区より出土した有舌尖頭器である。これにより縄文草創期頃には、すでにこの地域に人間が生活していたことが確実となった。泉南地域の尖頭器の分布を見ると、滑瀬遺跡[1]、海営宮池遺跡[2]、阪南市神光寺（蓮池）遺跡[3]、玉田山遺跡[4]など、段丘面や丘陵上など地形的にも非常に似通った点が指摘でき、泉南地域の段丘や丘陵上のかなり広範囲に人々の生活基盤があったものと推定できるだろう。これ以降の縄文時代の遺物は、試掘調査において晩期の突帯文を持った深鉢と考えられる土器片（図６）が１点のみで、本調査においてはまったく確認することはできなかった。市域においては、縄文時代を通して遺物の出土はやや希薄な傾向があり、この傾向が本遺跡においても認められると言えるだろう。

弥生時代では、第３調査区Ａ区において試掘調査でもまったく予想しなかった前期の土器とその集落を検出することができた。詳細については次節にて述べるが、市域においては、男里遺跡などで遺物がごく僅かに出土しているだけで、和泉全域においても、第Ⅰ様式の中段階に遡り得る土器で、しかも集落を伴うものはさほど知られていない。今回の成果は、集落の立地や集落構成とその消長の特異性、出土土器の特異性からも今後、泉南地域の稲作文化の伝播を理解する上で重大な問題提起がなされたと言えるだろう。

この後の弥生時代の遺構・遺物は、まったく確認されておらず、再び人間の生活の痕跡は途絶えることとなる。

古墳時代になると前期や中期のものはまったく出土しなかったが、後期の６世紀半ば頃から再び遺物が散見されるようになる。第２調査区出土の器台（ＰＬ．11　４）などが最も古いものになるだろう。しかし、僅かな出土であるものの、最も多く遺物が確認できたのは、古墳時代末期の６世紀末から７世紀初頭までが中心となる。周辺の樫井川左岸の遺跡に目を向けると、北東約１kmに位置する岡田東遺跡でも、ほぼ同じ時期の竪穴住居や掘立柱建物の集落が確認されている[5]。また、南東に位置する海会寺跡の集落が開始されるのも、この時期に前後[6]している。海会寺跡のさらに東方の同じく樫井川左岸の樫井丘

陵においても、この時期までさかんに古墳が造営されていたことも指摘できる⑦。このほか男里遺跡においても、掘立柱の掘方⑧や大規模な溝⑨など、弥生時代中期に引き続いて実態のある遺構が確認され始めるのもこの時期からである。

特に、岡田東遺跡では、6世紀末まで竪穴住居を使用していたにもかかわらず、ほとんど時期を置かず、100㎡を越える南面に庇を持つ巨大な掘立柱建物が出現していることからもわかるように、この時期、樫井川左岸のみならず泉南地域で大規模な変革があったと考えてさしつかえないだろう。

本調査においては、遺構はまったく確認できず、遺物もかなり摩滅したものが多く原位置を保ったものは少ないが、この大きな変革の中、樫井川左岸の段丘面を生産地にすべく最初の本格的な開発の手が入ったことを物語っているだろう。

この時期以降、奈良～平安時代においては、遺物は前時代同様にわずかながら出土しているもののさほど大きな変化があったとは言えない。

岡田西・氏の松遺跡において最も大きな画期を迎えるのは、平安時代末から鎌倉時代、つまり中世の開始と同時である。

遺構からの遺物がほとんど出土していないため、検出された潅漑用水路が掘削され、鋤溝が形成され始めた正確な時期をつかむことは困難であるが、僅かに鋤溝から出土している第1調査区出土の遺物（1・2）をみると、概ね13世紀代から14世紀初頭であろう。包含層出土の遺物からは、最も時期の良くわかる東播系の鉢や瓦器椀から見て、12世紀半ばを上限としており、11世紀代のものは出土していないことがわかる。

次に、遺構との関係を見てみたい。第1調査区のSD02・03は、最も大型の水路であるものの、下層は粘性土や有機物がかなりの量堆積し、掘り返されたような形跡も認められていないことから、実際に水路として機能していたのは比較的短期間であっただろうと推定できる。その後、上層の埋土からは、この水路を埋め戻す作業を行っていたことが看取された。さらに、溝を埋め戻した土の上にも鋤溝は形成されており、再び耕地として使用されていたこともわかっている。つまり、開墾前の荒れ地に巨大な水路を築き大量の水を引き入れることで、広い面積を一挙に水田に作り変えるものの、やがて耕作が順調に行えるようになることで、このような巨大な素掘りの溝の必要性はかなり低くなり、比較的短期間で放棄され、埋め戻されたとみてよいだろう。そして、これ以降は小規模な溝、第1調査区SD05～07や第2調査区SD01・02、第3調査区SD01などに潅漑機能を移管していったと考えることができるだろう。

以上のことから、この地域の開墾は、ほぼ12世紀の初め頃、第1調査区SD01のような巨大な水路が各所で掘削され始めたことで始まると見てよい。やがて、耕作が続けられる

につれ、大規模な溝は廃棄され、小規模な溝による現在のような潅漑システムが形成されていったと考えられるのである。これは、近接する中小路南遺跡の調査においても大規模な溝は埋め戻されている[8]ことから、樫井川左岸の段丘面上のほとんどで行われていたと考えられる。

その後、耕作は延々と続けられることが確認されているが、14世紀末から15世紀初頭において突然、第1調査区SE01や第2調査区SE01のように、明らかに水田に水を供給したと思われる素掘りの井戸が掘られるようになる。第1調査区のSE01からは、遺物は出土していないが、埋め戻しの状況からして第2調査区のSE01とまったく同じであり、この時期、各所でこのような井戸が掘削されたと考えてよいだろう。しかもこれらは、開墾時に掘削された大規模な溝と同じく、さほど長期間機能したようには見られず、最終的には埋め戻し作業を行って、その後は、再び耕地として使用しているのである。

このことは、当該期における潅漑形態の変化、あるいは自然環境の変化による水の不足を補うための一時的な手段であったのではないかなど、いくつか理由が考えられるが、岡田西・氏の松遺跡だけではなく、近接する岡田遺跡においてもほぼ同じ時期の井戸状の遺構[9]が検出されていることから、今後の資料の増加や文献からのアプローチを待たなければならないであろう。

この井戸についてもう1点つけ加えることとして、第2調査区SE01の最下層から出土したマツ材の植物遺体がある。これが出土したことで、当該期のこの地域はかなりのマツの木が存在したことが推定できる。現在、岡田・中小路地域においては、松林はほとんど見られないことから、自然環境の変化も考慮できるだろう。

さて、これらの水田の開発主体であるが、大規模な潅漑用水路を樫井川左岸の堅い地山に築けるような、かなりの技術力と労働力を組織的に動かすことのできる集団であることは想像に難くない。

和泉においては、大和・河内などよりかなり遅れ、鎌倉時代以降に荘園が立荘する傾向[10]にあり、泉南地域は、文献史料より摂関家系・寺門系の荘園がいくつか存在したことがわかっている。特に、13世紀前半に立荘した日根荘は、考古学的にも大きな画期を12世紀から13世紀に求めることができる。[11]泉南市域は、日根荘とは直接関係ないものの、ほとんどの泉南の荘園が鎌倉時代以降に立荘し、日根荘と同様に開発を行っていることが想定できることからして、この樫井川左岸の大規模開発も、荘園を有した摂関家あるいは有力寺院など中央からの強い力によって行われたと見てほぼ間違いはないだろう。今後は、当該地域がどの荘園に属するものなのかなどを文献資料とのつき合わせによってさらに明らかにして行かなければならない。

次に、中世の遺物の中で、かなりの割合を占めるものとして鍑壺と土錘などの漁労具の出土がある。市域において、中世の遺跡の調査にはかならず、かなりの割合でこれら漁労具が出土する。本遺跡においても同様の傾向を示し、大規模な水田開発で耕作地を手に入れながらも、漁労に携わる半農半漁の生活が窺い知れる。

近世以降も、水田としてまったく変わることなく耕作は続けられている。また、一部で近世から近代にかけて、煉瓦などを焼くための粘土の採掘が行われているが、基本的に現代まで地形及び土地の利用法が、ほとんど変わっていないことは、第Ⅰ面及び第Ⅱ面で検出されたおびただしい数の鋤溝と水路の方向が、まさにそれを物語っているのである。

今回の調査により我々は、これまでまったく知ることができなかった当該地のさまざまな歴史の情報を得ることができた反面、これまで眠ったまま保存されてきた遺跡が、今回調査を行った部分だけでなく、道路の新設による周辺の今後の開発により大きく損なわれる可能性のあることも認識しなければならない。

かつて中世の大開発によってこれまでなし得なかった段丘面の耕地化によって景観が一変したのと同じく、再び20世紀末の現代において関西国際空港という巨大開発によって大きく変化を遂げようとしているのもひとつの歴史事実として今後に語り継いでいかなければならない。

第2節　弥生集落について

1．時期と集落構成

第3調査区において検出された弥生集落の時期と集落の構成についてまとめてみたい。

掘立柱建物に関連するピットから出土した遺物は、4・5だけであるが、これは時期的には、第Ⅰ様式の新段階でもやや古式に属するものと考えられる。その他は、SK02の遺物（1・2）だけが、中段階の新相に遡り得るものでやや古くなる可能性があるが、いずれも概ね新段階の古式におさまることから、第Ⅰ様式の中段階後半から新段階の初め頃までのかなり限られた時期に営まれ、廃絶した集落であると言える。

検出された建物は、すべて掘立柱建物であり総数5棟を数える。面積は、SB01が最大で約25.2㎡、最小はSB04の約10.8㎡である。

それぞれの建物の関係は、SB02・03が近接しているものの、その他の建物は、ほぼ数m間隔の比較的均等な距離を保っており、同時併存した可能性は十分にあるだろう。建物の方向性は、それぞれまったく柱筋の一致していないものばかりだが、周辺地形と比較するとほぼ現地形に沿って建物の軸が一致することがわかる。

建物の構造をみてみると、SB01と04には、いずれも片方の妻側に棟持柱と考えられる

ピットを有する。棟持柱は、切妻屋根先端の棟木を地面から直接、柱で支える工法で、さらにこれらは、近接棟持柱・独立棟持柱・屋内棟持柱などの形式が存在することがわかっている。

近接棟持柱は、主に平地式の建物に採用され、切妻の屋根を固定し、建物の強度を確保するためのものと考えてよい。一方、独立棟持柱は、主として高床の建物に採用され、同じく建物の構造的機能を果たすと同時に、軒先を大きく張り出させることで、意匠上の効果を上げる機能を果たすものでもあるとされている。[8]

今回の調査で検出された棟持柱は、ＳＢ01は近接棟持柱、ＳＢ04は独立棟持柱に相当するものと考えられる。これらのことと、桁行の長さから想定して、ＳＢ01は平地の住居、ＳＢ04は高床の倉庫または祭祀用建物と考えてさしつかえないだろう。なお、ＳＢ01には棟持柱のラインに対応して、ピットが２つ並んで検出されているものの、屋内棟持柱は、古墳時代以降の大形建物に用いられる場合が多いため、現報告段階では、これらを屋内棟持柱とは考えずにＳＢ01とは他のピットであると判断したい。

以上のことをまとめると、今後、周辺の調査により竪穴住居が検出される可能性はあるものの、現状では今回の調査地が、集落の中心であることは間違いないことから、この集落は掘立柱建物だけで構成される集落であるといってよい。そして、この集落は最も大きな平地住居（ＳＢ01）を中心に、倉庫やその他の小さな建物を有した単位集団のムラであると判断できるだろう。

２．泉南地域における弥生時代の開始

弥生時代前期において掘立柱建物を持つ集落は、河内平野の新家遺跡[9]、山賀遺跡[10]、美園遺跡[11]、やや時代は下るものの守口市八雲遺跡[12]などでかなりの数確認されている。特に、河内平野においては、縄文晩期においては竪穴住居が一般的であったのに対して、農耕文化伝達とともに、掘立柱建物が主体となる集落が見られるようになることで、渡来文化の一現象としてとらえることが可能であるという指摘がある[13]。このことは、今回検出された弥生集落は、泉南地域でこれまで考えられてきたような弥生時代の開始ではなく、河内地方と形態を同じくした弥生文化の到達方法を想定してよいのではないだろうか。

この考えを肯定する材料としてさらに２つ程の事実が挙げられる。ひとつは、今回出土した土器が中期以降、和泉南部で出土する土器の胎土とはかなり異なるもので、かなりの数が搬入品である可能性がある。同時に、10や19などロ縁部のわずか下方に、刻目突帯をめぐらせるという瀬戸内の影響を強く受けた土器がある[14]ことである。

もうひとつは、これまで泉南地域の集落の例として泉佐野市船岡山遺跡Ｂ地点[15]などの

ように、第Ⅰ様式の新段階まで縄文系の突帯文上器が伴出するのが普通であったが、今回の調査においては、集落部分からは一片の縄文晩期の土器も出土していないことである。

以上のことは、西からの最も進んだ文化の影響を受けた集団の直接的な当地への到来であることを十分立証できるだろう。つまり、泉南地域における弥生文化の伝播方法としては、2つの形態が想定できるのである。まず、従来のとおり、河内や和泉北部に第Ⅰ様式の古段階または中段階の古い時期に上陸した弥生文化が、陸路を伝わり新段階までに縄文晩期段階にあった泉南地域を、暫時弥生時代へと変えていったとするものと、今回の調査成果のように、瀬戸内方面から、和泉北部の影響を受けずに、直接弥生文化が第Ⅰ様式の中段階にはすでに到達していたという考えである。

しかし、後者の場合、到達した地域では本格的な弥生文化は根づかずに、この集団はごく短い期間で集落を放棄している。もともと、この段丘面上は、農耕には不向きな土地であるということは、その他の時代の調査成果からも明らかなように、さらに水利の良い耕作地を求めて移動していったと考えられる。

3．周辺微地形から見た集落立地と生産地（第31図）

次に、集落周辺の微地形を見てみたい。第31図は、周辺の水田の高さを各地点で実測の上、コンターに置き換えてみたものである。さらに、水田段差の傾斜の方向を調査し、いずれの方向へ下がっているかを示し、コンターと合わせ、谷地形の範囲を限定したものである。これによると、同じ樫井川左岸に拡がる大きな洪積段丘面というものの、かなりの微地形が隠れていることが指摘できる。検出された弥生時代の集落は、まさに谷地形と谷地形の間にはさまれた舌状の微高地の先端部分であることが言えるだろう。段丘が海に向かって落ち込む地点までは、約150mを測り、レベル的には7.5～8.0mに限定することができる。第Ⅳ章において先述のとおり、さらに小さな微地形では、海側へ向かってわずかに高くなり再び落ち込む部分までに遺構が検出されていることを考えると、集落は、非常に計算された場所に形成されているといっても過言ではないだろう。

さらに、この集落の経営した水田について考えてみたい。この時期においては、緩やかな谷地形を利用し小規模な水田を営んでいたことは、ほぼ間違いないだろう。周辺で確認された2つの谷地形のうち、南西側にあるものは現在でも比高差約4m以上を測る。このため、この部分での水田の形成は、かなり困難なものと考えられることから、集落の北東に位置する、現在の比高差約1.5mの谷地形が最も有力な生産地であると言えるだろう。これについては、この付近は、岡田遺跡と岡田西・氏の松遺跡のちょうど境界付近であり、現在まで、さほど調査は行われておらず、今後のデータの収集を待たなければならない。

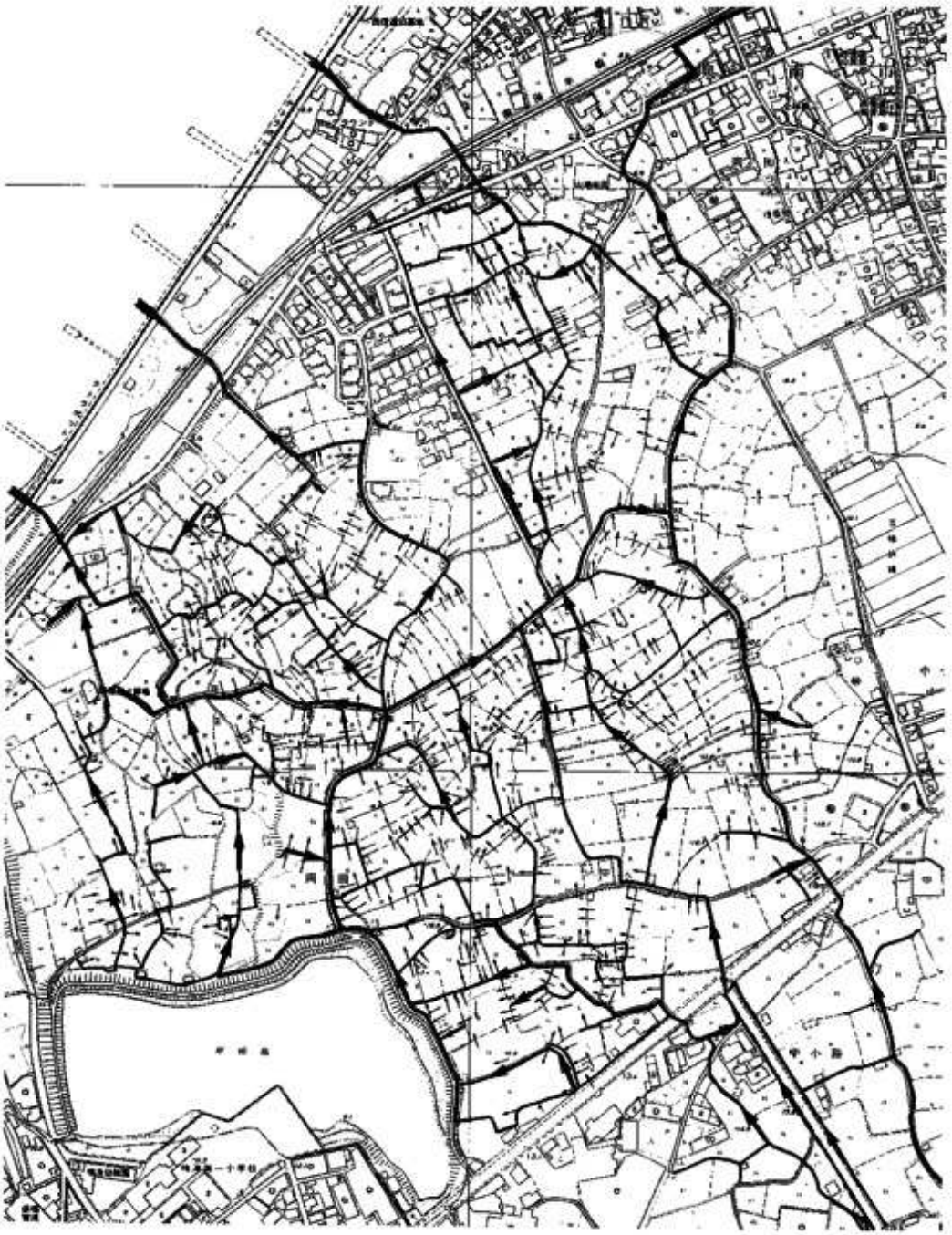
第31図　調査区周辺の微地形

第３節　水路と水の流れについて（第32図）

調査区の周辺では、現在でも非常に多くの水田が残されていることは、既に述べたとおりである。検出した水路及び鋤溝の方向と、現在使用されている水路及び耕作の方向は、密接な関係があるということも先述のとおりである。また、今回の道路新設は、これまでほとんど動かされることなく使用されてきた水路や水の流れを大きく変化させることとなるため、将来の周辺調査において、同様の水路が検出された場合に既に方向を変えられてしまっている水路や水田の採水口からは、当時の状況を復元するのは困難であろう。そこで、第32図は、調査区周辺の水路の方向と水田の採水口を現地調査し、今後に活かそうと

いうものである。

これと、調査の結果とを重ね合わせてみると、まさしく現在の水の流れは当時の水路の方向と一致していることがわかる。そしてこの水はどのあたりから供給されたかを見てみると、南西に位置する座頭池からの水路は、調査地付近へはまったくかかわっておらず、おもに中小路や信達大苗代方面から伸びてきている水路より供給されていることは明確で



第32図　調査区周辺の水路と水の流れ

ある。そして、中小路・大苗代・北野などは、現在すべて大苗代に所在する海営宮池を水源にしている。

岡田付近の現水路が、中世の段階からほとんど変化していないという発掘調査による事実は確認することができた。このことから、同じ水利権をもつ中小路や大苗代地区に存在する水路も、中世の開発によって整備されたものと考えることができるだろう。道路用地から山側約250mの中小路南遺跡の調査⑮においても、同じような水路が検出されていることもこれを裏付けている。つまり、現在海営宮池を中心として維持されている樫井川左岸における水田の大半は、12世紀の段階で既に耕作が始まっていたと結論づけられる。そして、既にこの段階で海営宮池は、現在程の規模があったかは不明であるが、水を供給し始めていたことになるだろう。

註

① （財）大阪府埋蔵文化財協会『滑瀬遺跡』（1987）
② 泉南市史編纂委員会『泉南市史　通史編』（1986）
③ 泉佐野市教育委員会『泉佐野の遺跡－原始・古代編』（1993）
④ ③と同じ
⑤ 泉南市教育委員会「岡田東遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』（1993）
⑥ 泉南市教育委員会『海会寺』（1987）
⑦ ②と同じ
⑧ 泉南市教育委員会「男里遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XI』（1994）
⑨ 泉南市教育委員会「男里遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書X』（1993）
⑩ 泉南市教育委員会「中小路南遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XI』（1994）
⑪ 泉南市教育委員会「岡田遺跡の調査」『泉南市遺跡群発掘調査報告書XII』（1995）
⑫ 宮川満「荘園の動向」『大阪府史　第三巻』（1979）
⑬ 石橋広和「日根野・机場遺跡の調査について」『大阪府下埋蔵文化財研究会（第22回）』（1990）
⑭ 宮本長二郎「弥生時代・古墳時代の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物－本編－』（1991）
⑮ （財）大阪文化財センター『新家（その1）』（1987）
⑯ （財）大阪文化財センター『山賀（その3）』（1984）
⑰ （財）大阪文化財センター『美園』（1985）
⑱ 大阪府教育委員会『八雲遺跡発掘調査概要・1』（1987）
⑲ 中西靖人「河内の掘立柱建物」『弥生時代の掘立柱建物－本編－』（1991）
⑳ 上井孝之氏の御教示による。
㉑ 泉佐野市教育委員会『船岡山遺跡B地点発掘調査報告書』（1985）
㉒ ⑲と同じ

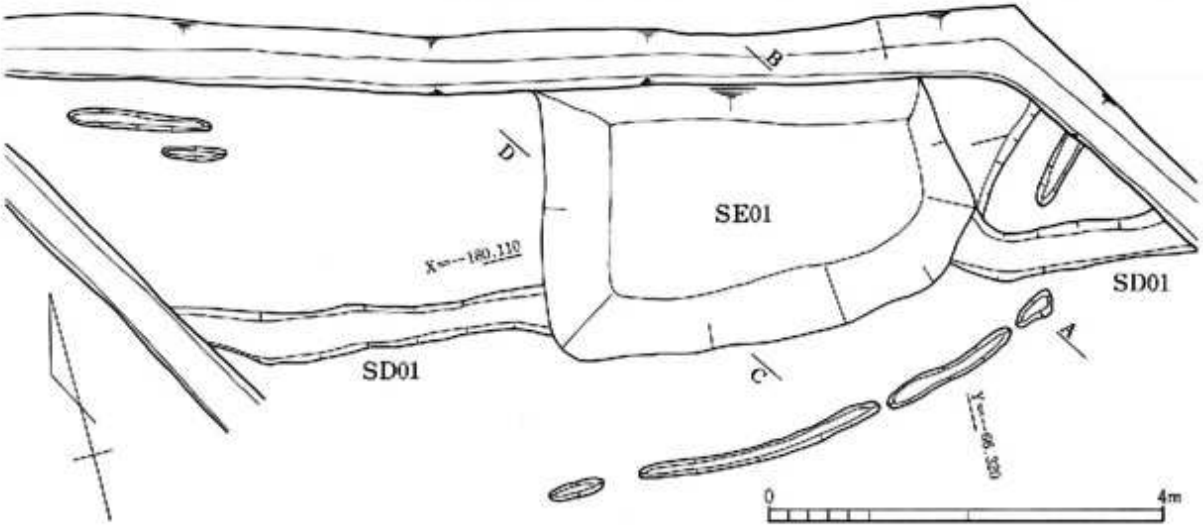
文化財一覧表

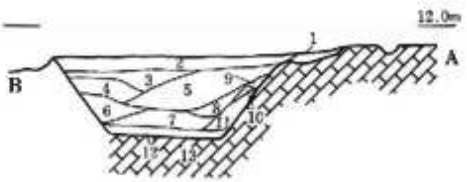
1	岡田西遺跡	46	羽倉崎東遺跡	91	別所遺跡	136	男里北遺跡	181	黒田南遺跡
2	氏の松遺跡	47	羽倉崎遺跡	92	高野遺跡	137	戎畑遺跡	182	鳥取南遺跡
3	口無池遺跡	48	嘉祥神社本殿	93	引谷池窯跡	138	男里遺跡	183	黒田西遺跡
4	東円寺跡	49	羽倉崎上町遺跡	94	川原遺跡	139	光平寺跡	184	三味谷遺跡
5	降井家屋敷跡	50	船岡山遺跡	95	昭和池遺跡	140	光平寺石造五輪塔	185	師道谷遺跡
6	大久保C遺跡	51	岡本廃寺	96	中小路北遺跡	141	男里東遺跡	186	小口谷遺跡
7	中家住宅	52	船岡山南遺跡	97	新伝寺遺跡	142	上代石塚遺跡	187	石田山遺跡
8	大久保A遺跡	53	道ノ池遺跡	98	一岡神社遺跡	143	平野寺（長楽寺）跡	188	三升五合山遺跡
9	山ノ下城跡	54	岡ノ崎遺跡	99	中小路遺跡	144	山ノ宮遺跡	189	塚谷古墳群
10	倭屋遺跡	55	中島獺遺跡	100	北野遺跡	145	幡代遺跡	190	戎遺跡
11	北尻遺跡	56	岸ノ下遺跡	101	海会寺跡	146	幡代南遺跡	191	箱作ミノバ石切場跡
12	中嶋遺跡	57	諸目遺跡	102	下村遺跡	147	長山遺跡	192	貝掛遺跡
13	岡口遺跡	58	城ノ塚古墳	103	大苗代遺跡	148	前田池遺跡	193	金剛寺遺跡
14	小塚遺跡	59	ダイジョウ寺跡	104	海営宮池遺跡	149	向出遺跡	194	箱作今池遺跡
15	十二谷遺跡	60	禅興寺跡	105	仏性寺跡	150	高田西遺跡	195	飯ノ峯畑遺跡
16	大坪遺跡	61	一軒屋遺跡	106	岡田東遺跡	151	高田山古墳群	196	井山城跡
17	丁田遺跡	62	上之郷遺跡	107	向井山遺跡	152	雨山南遺跡	197	山中渓石切場遺跡
18	新池尻遺跡	63	意賀美神社本殿	108	孤池遺跡	153	奥ノ池遺跡	198	四郎太原遺跡
19	宮ノ前遺跡	64	向井代遺跡	109	上村遺跡	154	林昌寺瓦窯跡	199	田山東遺跡
20	市堂遺跡	65	向井池遺跡	110	上野中道遺跡	155	岡中遺跡	200	箱作古墳
21	野々宮遺跡	66	道ノ池遺跡	111	芋掘遺跡	156	岡中西遺跡	201	箱作南遺跡
22	北ノ前遺跡	67	田尻遺跡	112	石ヶ原遺跡	157	馬川北遺跡	202	茶原遺跡
23	八王子遺跡	68	夫婦池遺跡	113	高倉山南遺跡	158	馬川遺跡	203	福島遺跡
24	屯田遺跡	69	樫井西遺跡	114	岡田遺跡	159	福島遺跡	204	箱作細谷石切場跡
25	慈眼院金堂・多宝塔	70	春波遺跡	115	中小路西遺跡	160	下出北遺跡	205	田山遺跡
26	日根神社遺跡	71	樫井城跡	116	中小路南遺跡	161	堂宮遺跡		
27	西ノ上遺跡	72	下村北遺跡	117	座頭池遺跡	162	正方寺遺跡		
28	十丸遺跡	73	下村1号墳	118	市場遺跡	163	向山遺跡		
29	陸ノ山遺跡	74	奥家住宅	119	本田池遺跡	164	和泉鳥取遺跡		
30	末廣遺跡	75	新家オドリ山東遺跡	120	坊主池遺跡	165	高田南遺跡		
31	安松遺跡	76	下村2号墳	121	林昌寺跡	166	自然田遺跡		
32	長滝遺跡	77	新家オドリ山遺跡	122	林昌寺跡降出土地	167	南山遺跡		
33	植田池遺跡	78	新家遺跡	123	信之池遺跡	168	尾崎海岸遺跡		
34	郷ノ芝遺跡	79	新家オドリ山南遺跡	124	清願遺跡	169	皿田池古墳		
35	日根野遺跡	80	新家古墳群	125	六尾遺跡	170	内畑遺跡		
36	机場遺跡	81	フキアゲ山西遺跡	126	六尾南遺跡	171	神光寺（蓮池）遺跡		
37	垣外遺跡	82	兎田遺跡	127	金熊寺信達神社	172	西畑遺跡		
38	棚原遺跡	83	フキアゲ山東遺跡	128	金熊寺遺跡	173	井関遺跡		
39	母山近世墓地	84	フキアゲ山1号墳	129	童子畑北遺跡	174	寺田山遺跡		
40	母山遺跡	85	フキアゲ山2号墳	130	童子畑遺跡	175	玉田山遺跡		
41	川原遺跡	86	兎田古墳群	131	楠畑北遺跡	176	玉田山古墳群		
42	梨谷遺跡	87	池尻遺跡	132	楠畑遺跡	177	玉田山須恵器窯跡		
43	向井山遺跡	88	中の川遺跡	133	キレト遺跡	178	鳥取北遺跡		
44	鏡塚古墳	89	岩の前遺跡	134	天神ノ森遺跡	179	西鳥取遺跡		
45	総福寺天満宮本殿	90	別所北遺跡	135	高田遺跡	180	鳥取遺跡		

図　　版

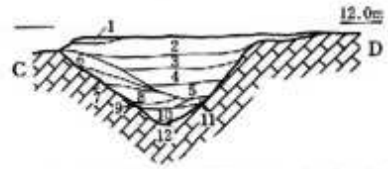
PL.1　泉南地域の文化財

PL.2　第1調査区　SE01・SD01・SD05　平面図・断面図

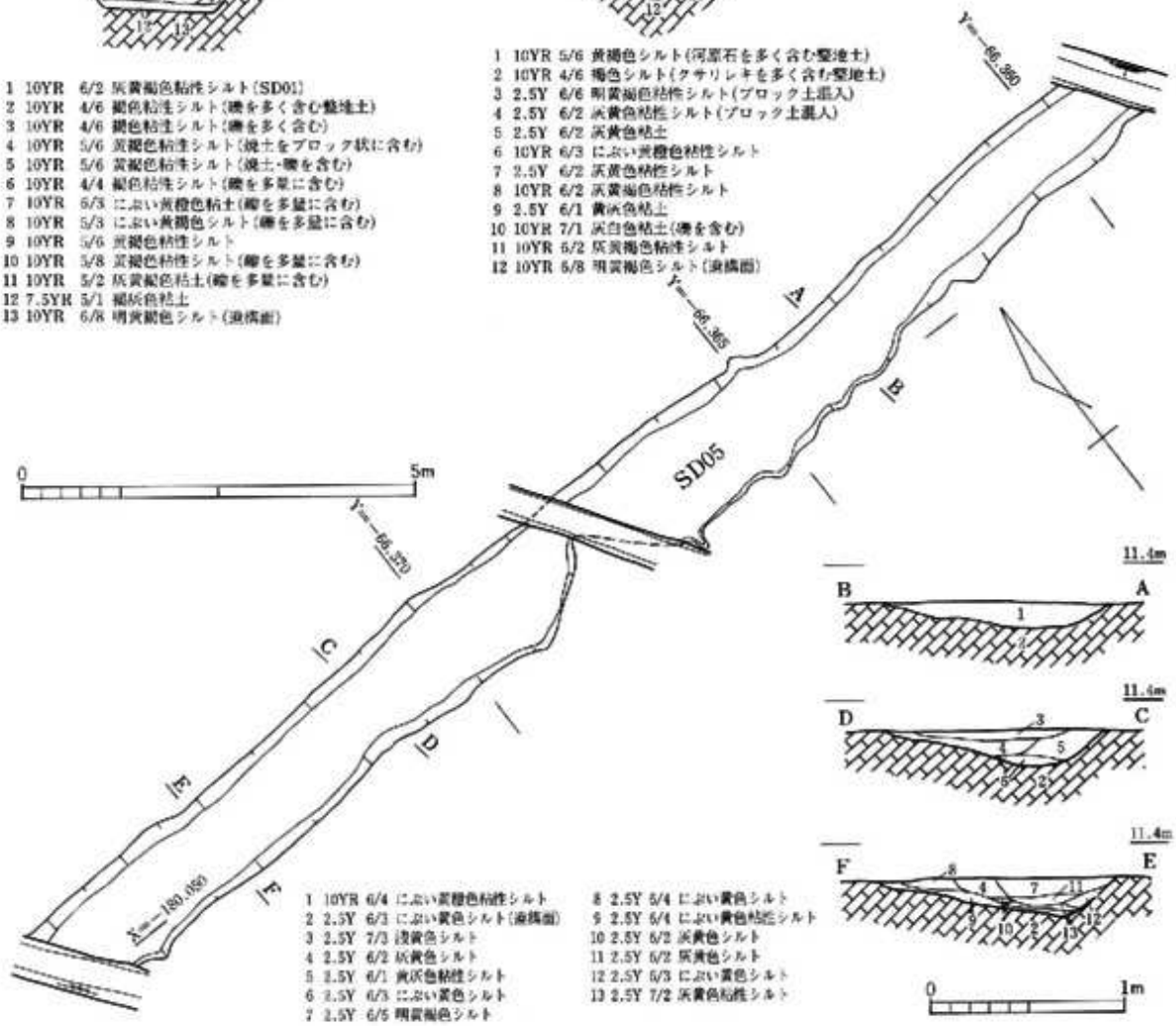




1 10YR 6/2 灰黄褐色粘性シルト〔SD01〕
2 10YR 4/6 褐色粘性シルト(礫を多く含む整地土)
3 10YR 4/6 褐色粘性シルト(礫を多く含む)
4 10YR 5/6 黄褐色粘性シルト(焼土をブロック状に含む)
5 10YR 5/6 黄褐色粘性シルト(焼土・礫を含む)
6 10YR 4/4 褐色粘性シルト(礫を多量に含む)
7 10YR 6/3 にぶい黄橙色粘土(礫を多量に含む)
8 10YR 5/3 にぶい黄褐色シルト(礫を多量に含む)
9 10YR 5/6 黄褐色粘性シルト
10 10YR 5/8 黄褐色粘性シルト(礫を多量に含む)
11 10YR 5/2 灰黄褐色粘土(礫を多量に含む)
12 7.5YR 5/1 褐灰色粘土
13 10YR 6/8 明黄褐色シルト(遺構面)



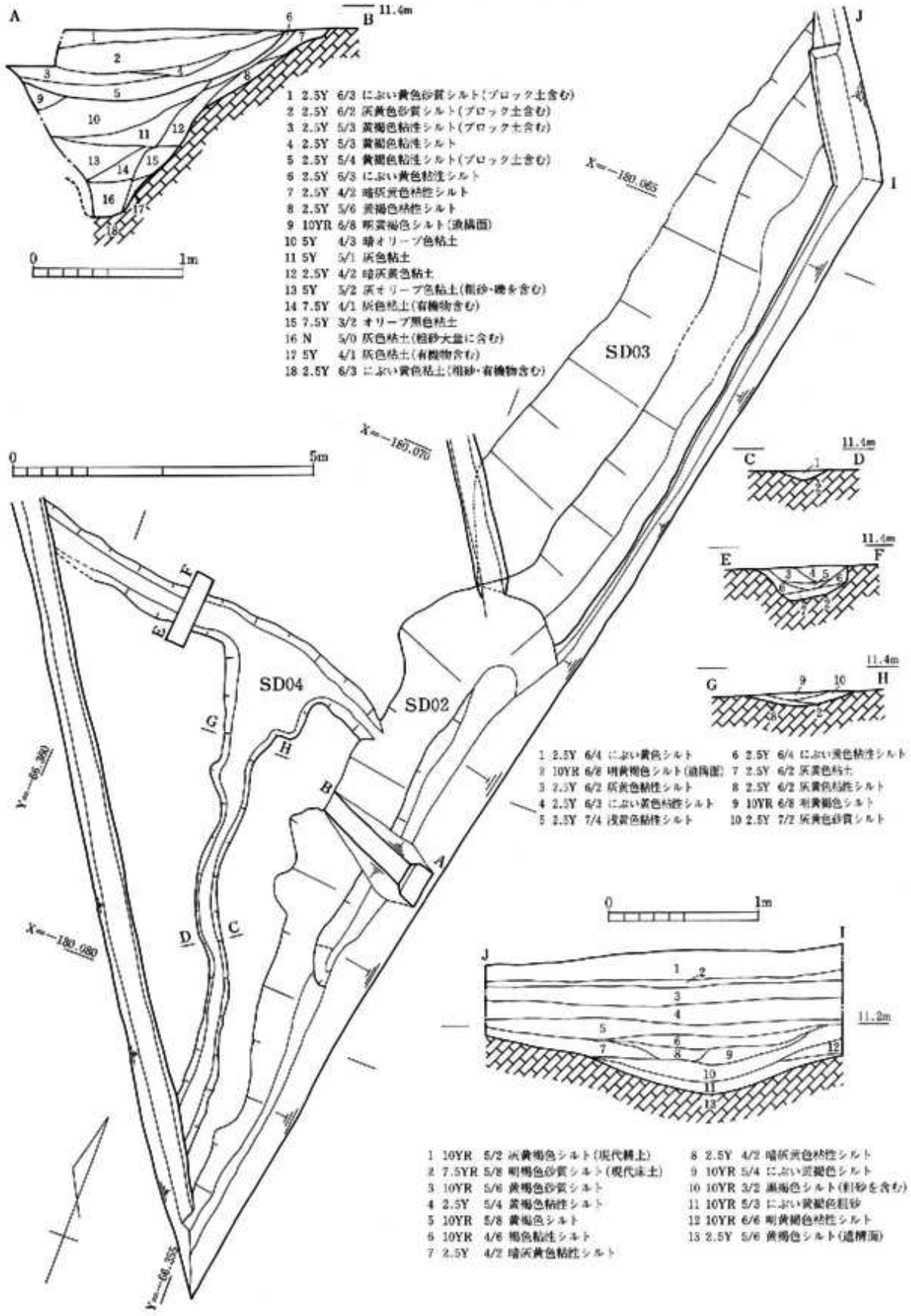
1 10YR 5/6 黄褐色シルト(河原石を多く含む整地土)
2 10YR 4/6 褐色シルト(クサリレキを多く含む整地土)
3 2.5Y 6/6 明黄褐色粘性シルト(ブロック土混入)
4 2.5Y 6/2 灰黄色粘性シルト(ブロック土混入)
5 2.5Y 6/2 灰黄色粘土
6 10YR 6/3 にぶい黄橙色粘性シルト
7 2.5Y 6/2 灰黄色粘性シルト
8 10YR 6/2 灰黄褐色粘性シルト
9 2.5Y 6/1 黄灰色粘土
10 10YR 7/1 灰白色粘土(礫を含む)
11 10YR 5/2 灰黄褐色粘性シルト
12 10YR 5/8 明黄褐色シルト(遺構面)



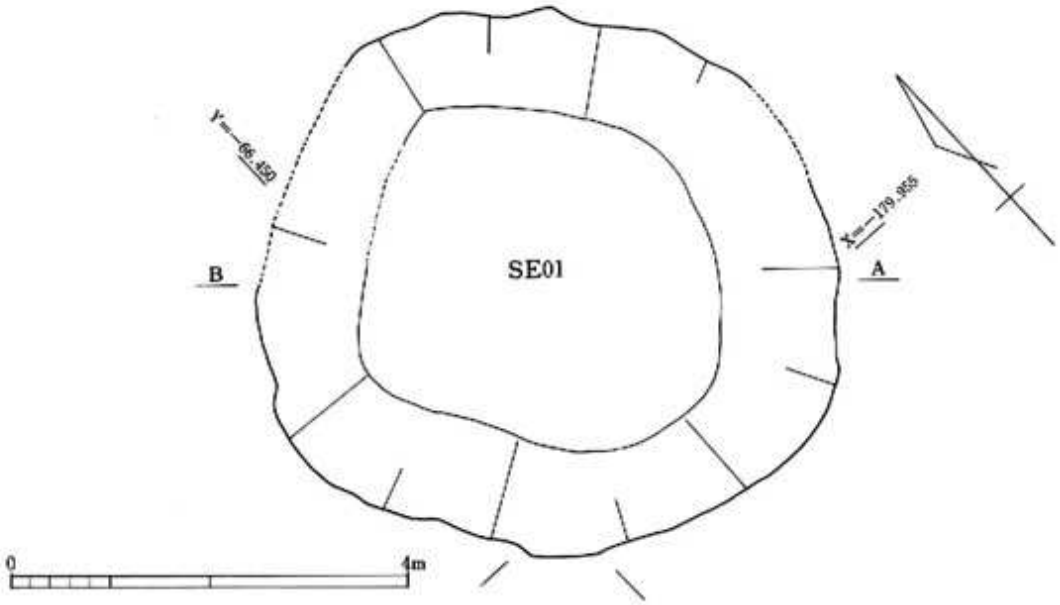
0　1m

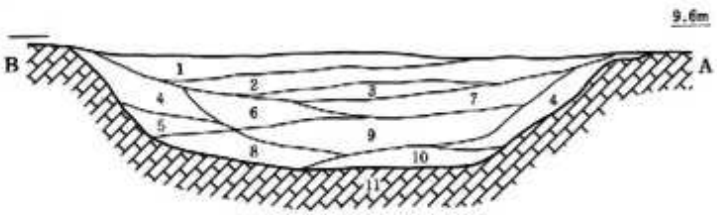
1 10YR 6/4 にぶい黄橙色粘性シルト
2 2.5Y 6/3 にぶい黄色シルト(遺構面)
3 2.5Y 7/3 浅黄色シルト
4 2.5Y 6/2 灰黄色シルト
5 2.5Y 6/1 黄灰色粘性シルト
6 2.5Y 6/3 にぶい黄色シルト
7 2.5Y 6/5 明黄褐色シルト
8 2.5Y 5/4 にぶい黄色シルト
9 2.5Y 5/4 にぶい黄色粘性シルト
10 2.5Y 6/2 灰黄色シルト
11 2.5Y 6/2 灰黄色シルト
12 2.5Y 5/3 にぶい黄色シルト
13 2.5Y 7/2 灰黄色粘性シルト

PL.3　第1調査区　S D02～04　平面図・断面図

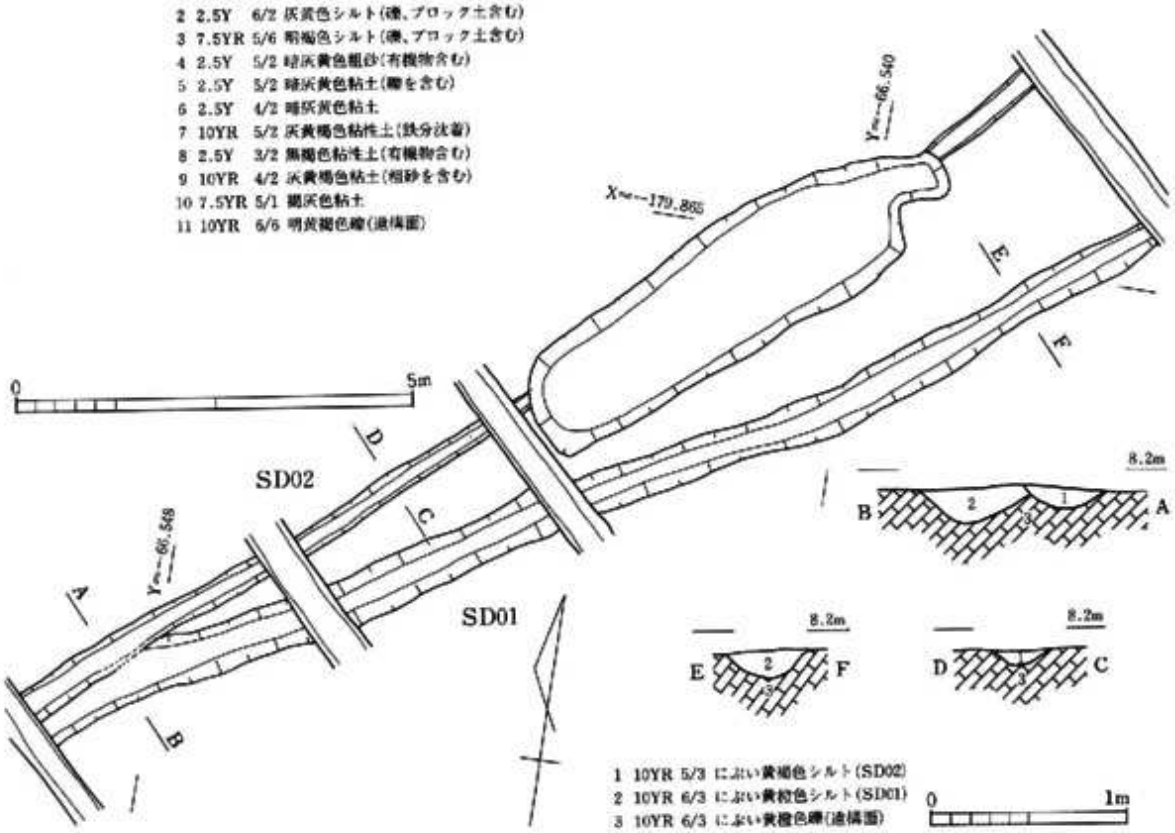


PL.4　第2調査区　S E01・S D01・02　平面図・断面図





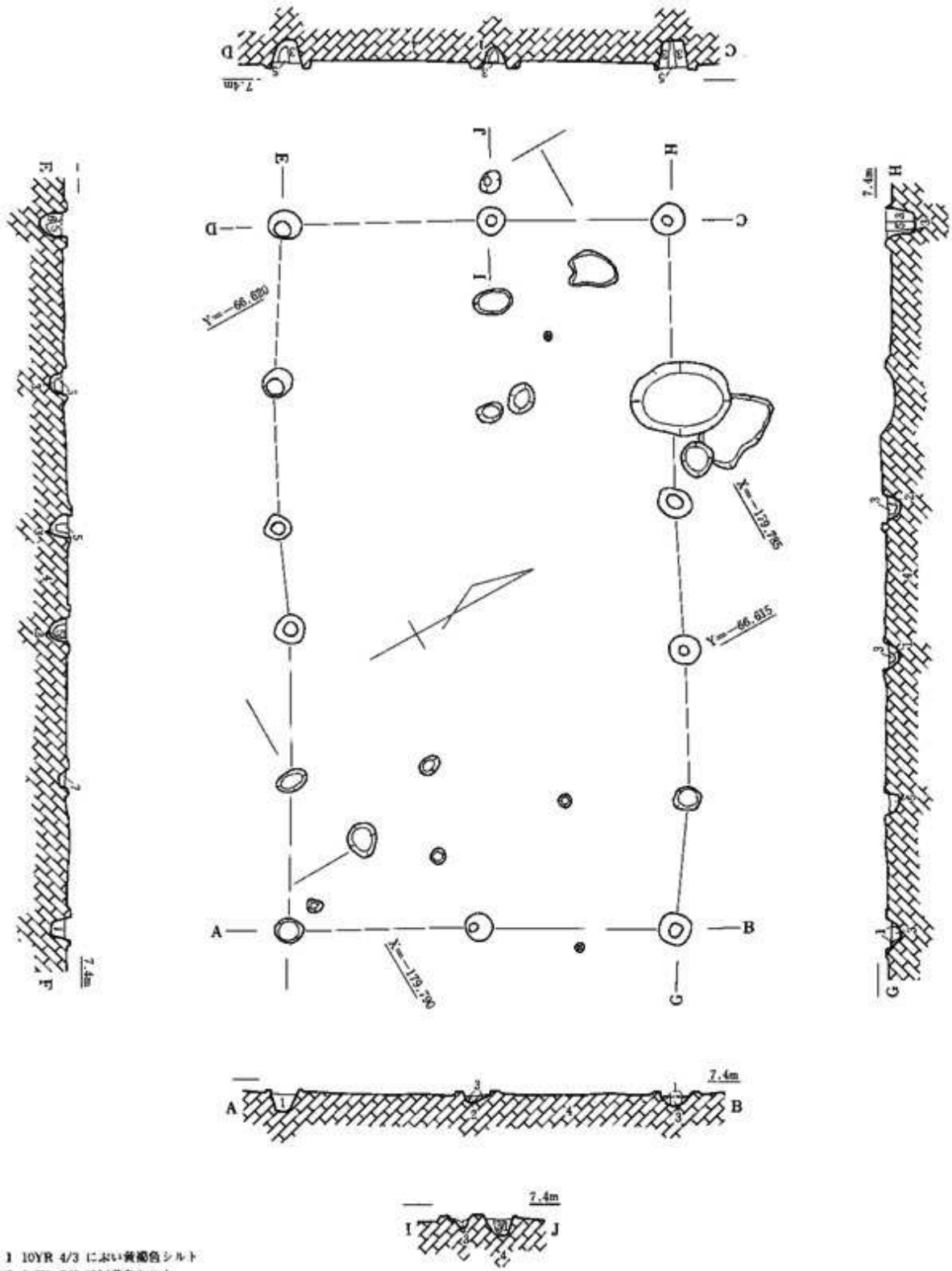
1 10YR 6/2 灰黄褐色シルト(礫、ブロック土含む)
2 2.5Y 6/2 灰黄色シルト(礫、ブロック土含む)
3 7.5YR 5/6 明褐色シルト(礫、ブロック土含む)
4 2.5Y 5/2 暗灰黄色粗砂(有機物含む)
5 2.5Y 5/2 暗灰黄色粘土(礫を含む)
6 2.5Y 4/2 暗灰黄色粘土
7 10YR 5/2 灰黄褐色粘性土(鉄分沈着)
8 2.5Y 3/2 黒褐色粘性土(有機物含む)
9 10YR 4/2 灰黄褐色粘土(粗砂を含む)
10 7.5YR 5/1 褐灰色粘土
11 10YR 6/6 明黄褐色礫(遺構面)



1 10YR 5/3 にぶい黄褐色シルト(SD02)
2 10YR 6/3 にぶい黄橙色シルト(SD01)
3 10YR 6/3 にぶい黄橙色礫(遺構面)

0　1m

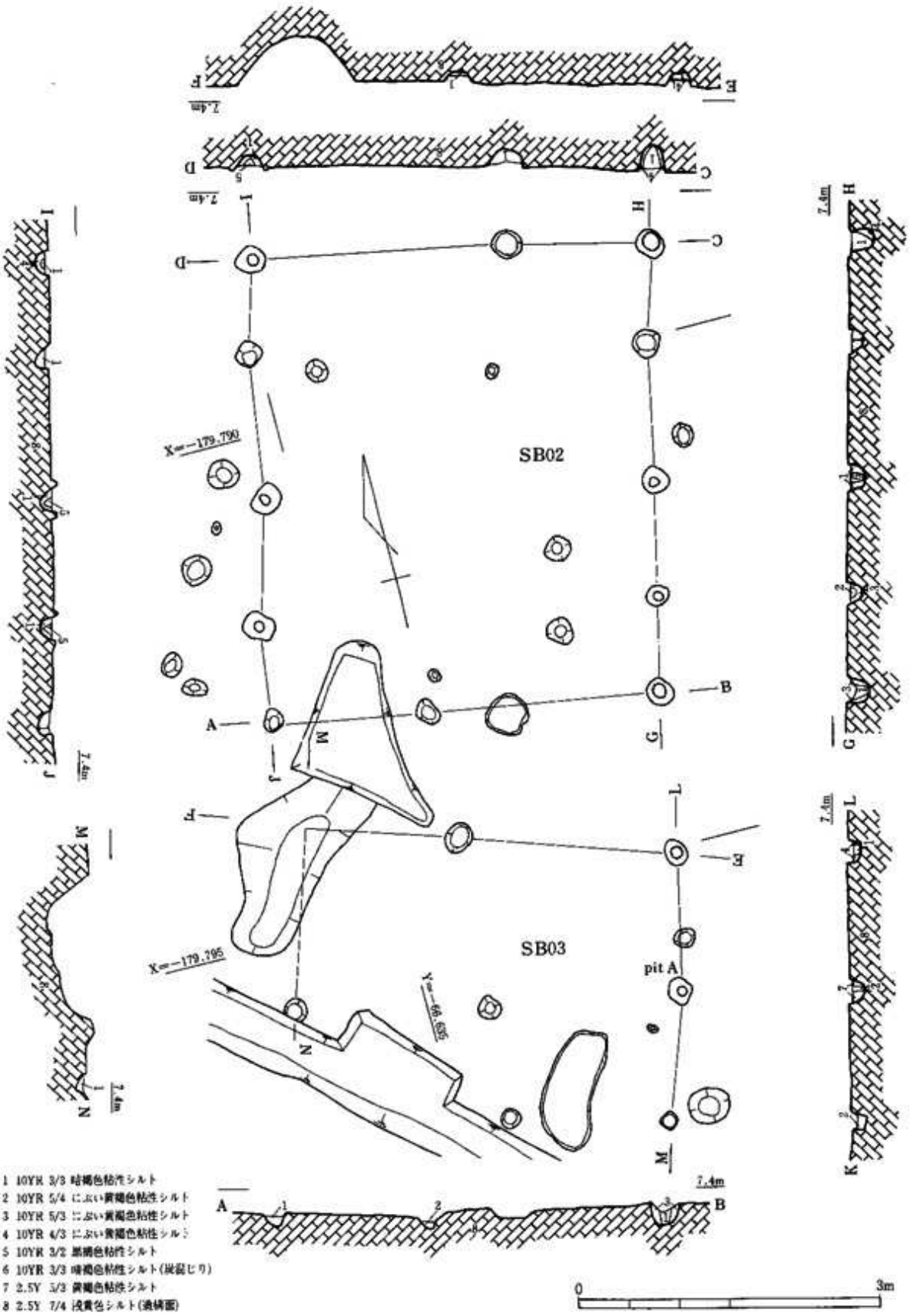
PL.5　第3調査区　A区　SB01　平面図・断面図



1 10YR 4/3 にぶい黄褐色シルト
2 2.5Y 5/2 暗灰黄色シルト
3 10YR 3/3 暗褐色シルト
4 2.5Y 7/4 浅黄色シルト(遺構面)
5 10YR 3/2 黒褐色シルト
6 10YR 3/3 暗褐色シルト(炭混じり)
7 2.5Y 6/3 にぶい黄色シルト

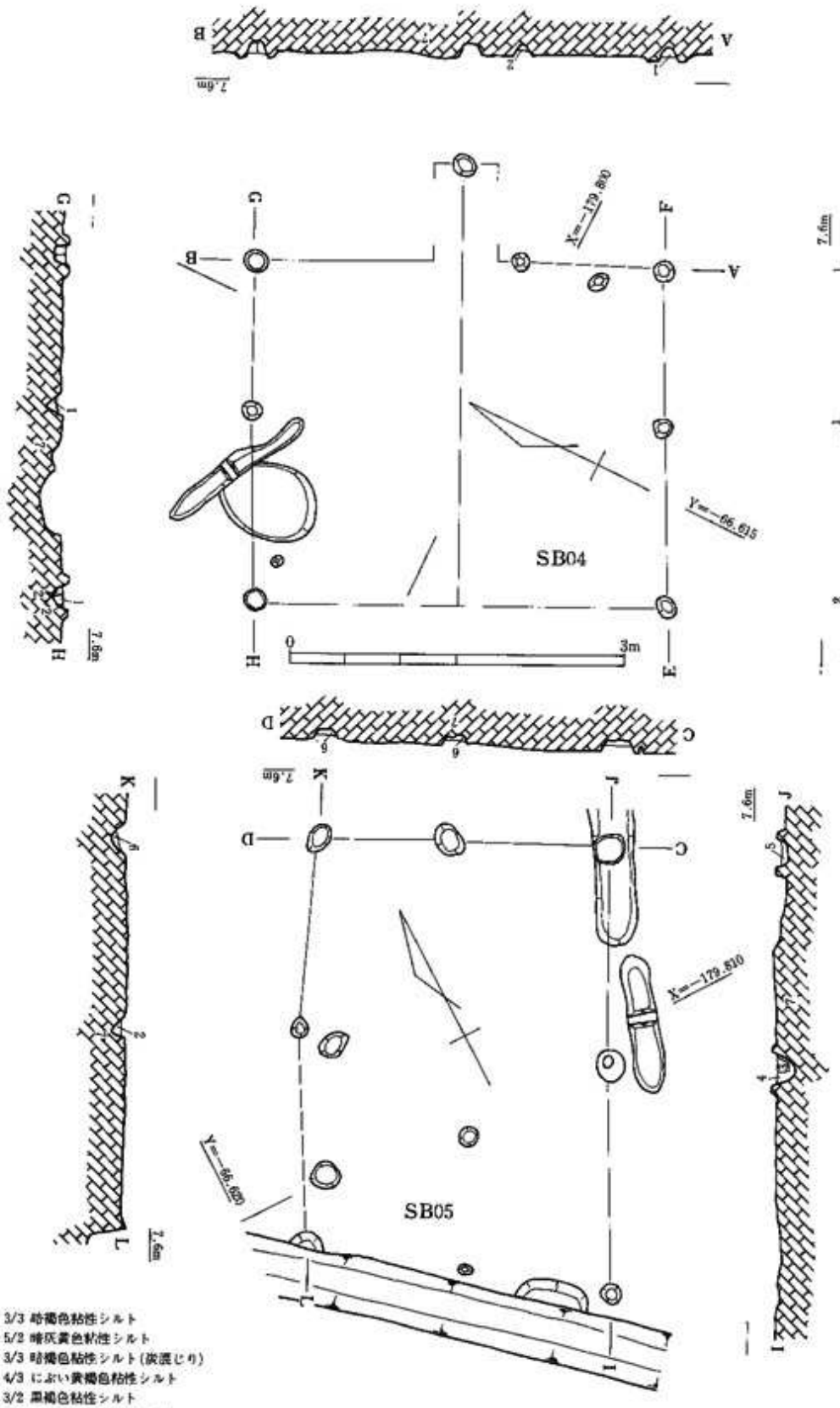
0　3m

PL.6　第3調査区　A区　SB02・03　平面図・断面図



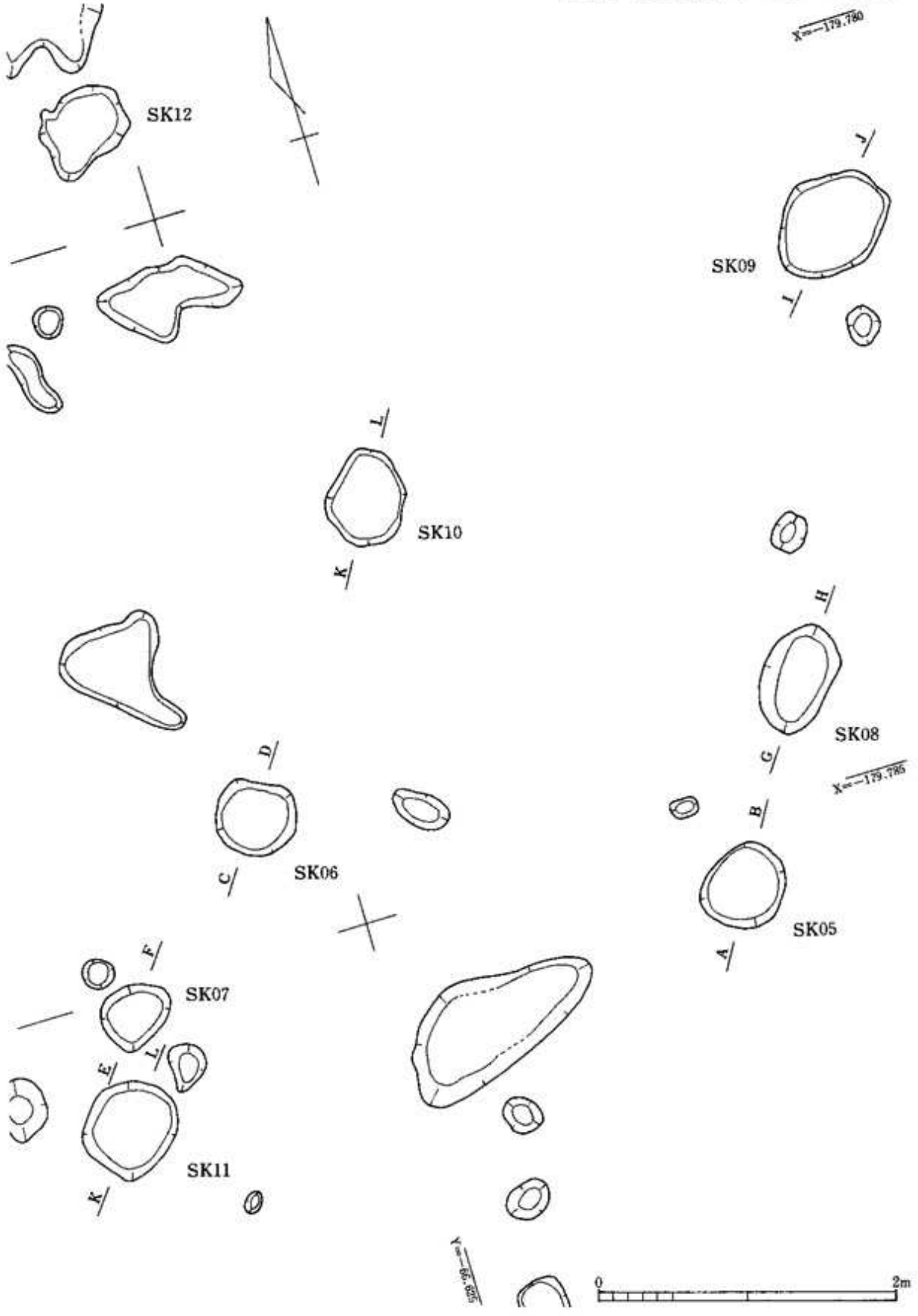
1 10YR 3/3 暗褐色粘性シルト
2 10YR 5/4 にぶい黄褐色粘性シルト
3 10YR 5/3 にぶい黄褐色粘性シルト
4 10YR 4/3 にぶい黄褐色粘性シルト
5 10YR 3/2 黒褐色粘性シルト
6 10YR 3/3 暗褐色粘性シルト(撹乱ぢり)
7 2.5Y 5/3 黄褐色粘性シルト
8 2.5Y 7/4 浅黄色シルト(遺構面)

PL.7　第3調査区　A区　SB04・05　平面図・断面図

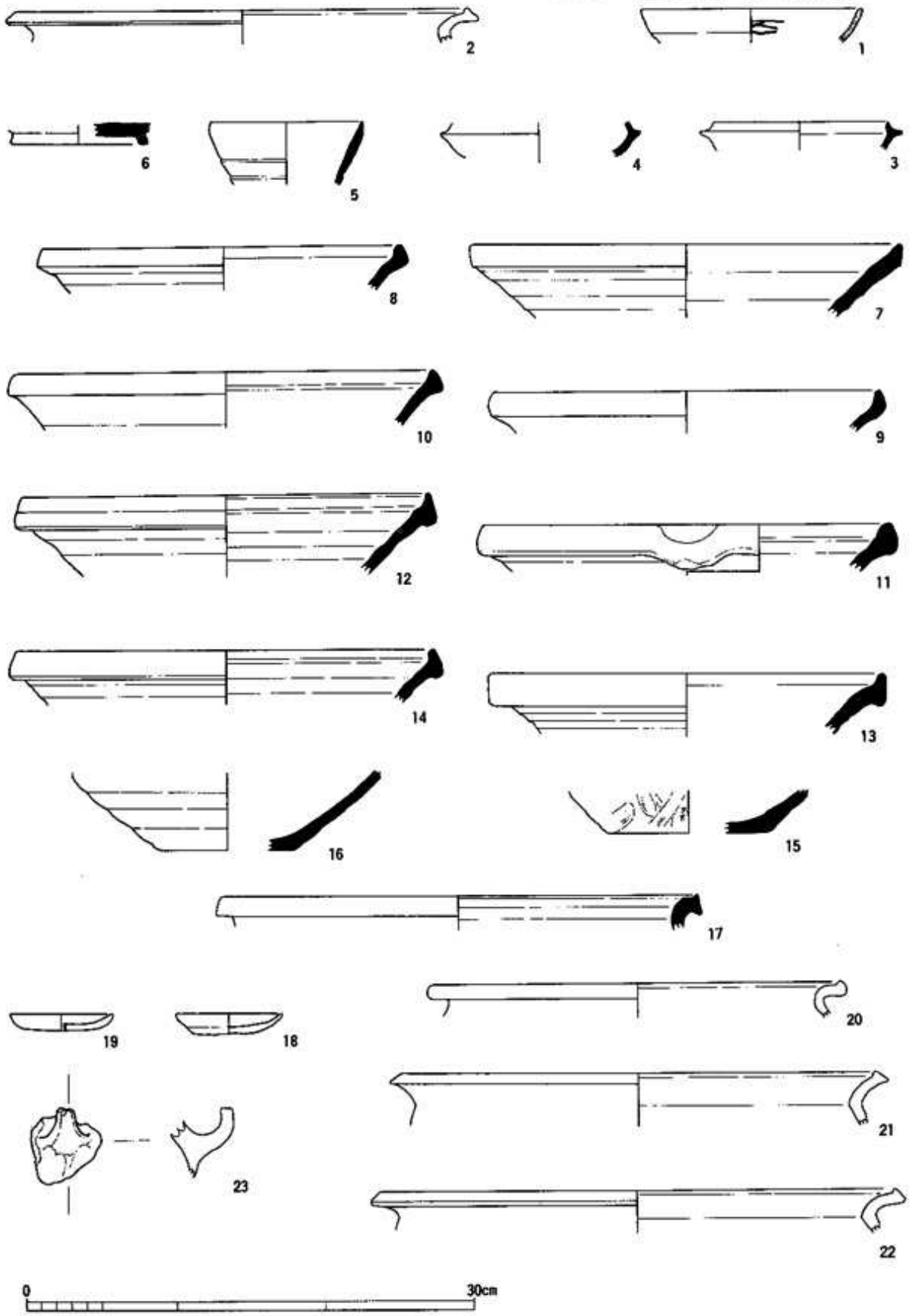


1　10YR 3/3 暗褐色粘性シルト
2　2.5Y　5/2 暗灰黄色粘性シルト
3　10YR 3/3 暗褐色粘性シルト(炭混じり)
4　10YR 4/3 にぶい黄褐色粘性シルト
5　10YR 3/2 黒褐色粘性シルト
6　10YR 6/3 にぶい黄橙色粘性シルト
7　2.5Y　7/4 浅黄色シルト(礫混じり)

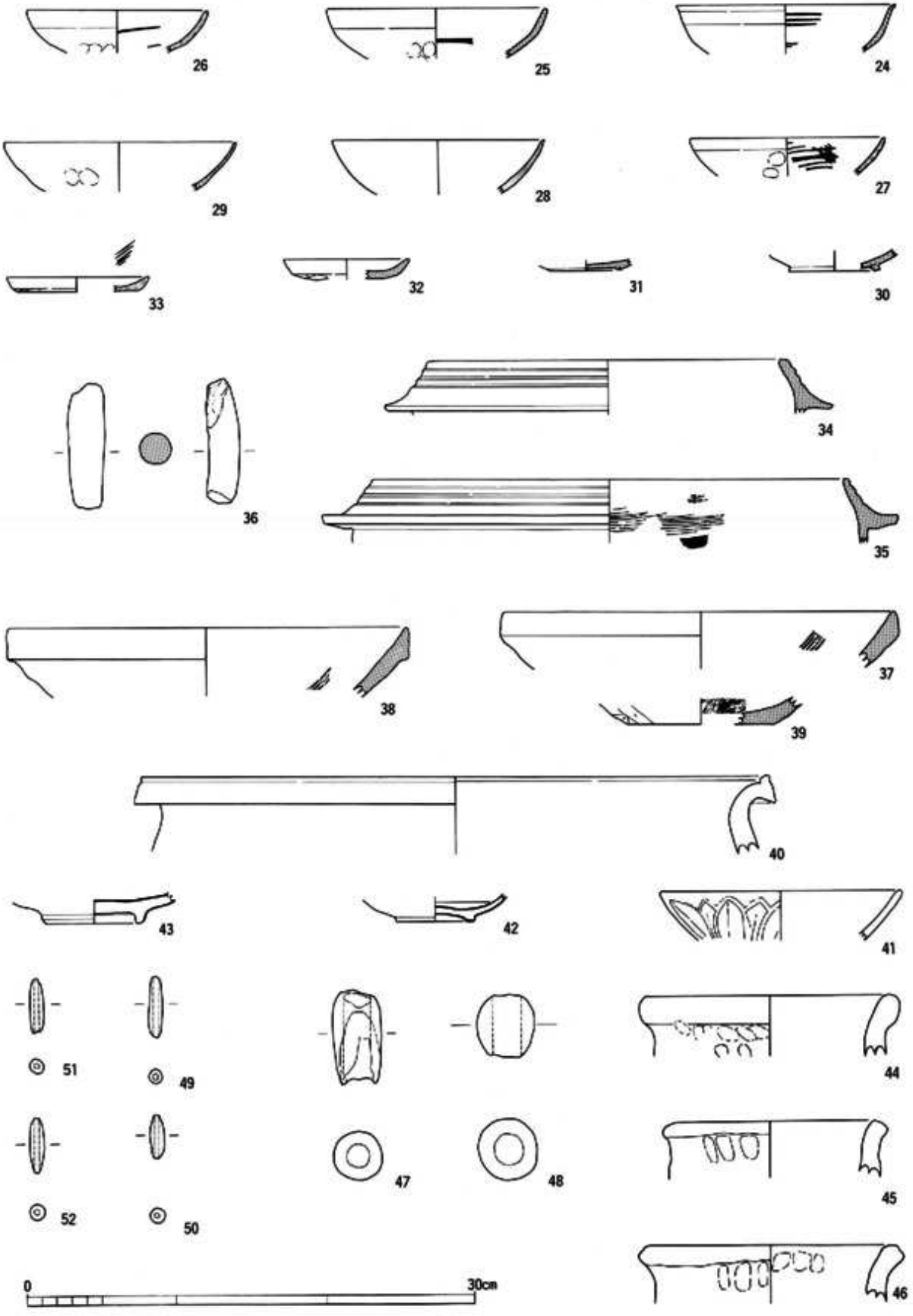
PL.8　第3調査区　A区　土坑群



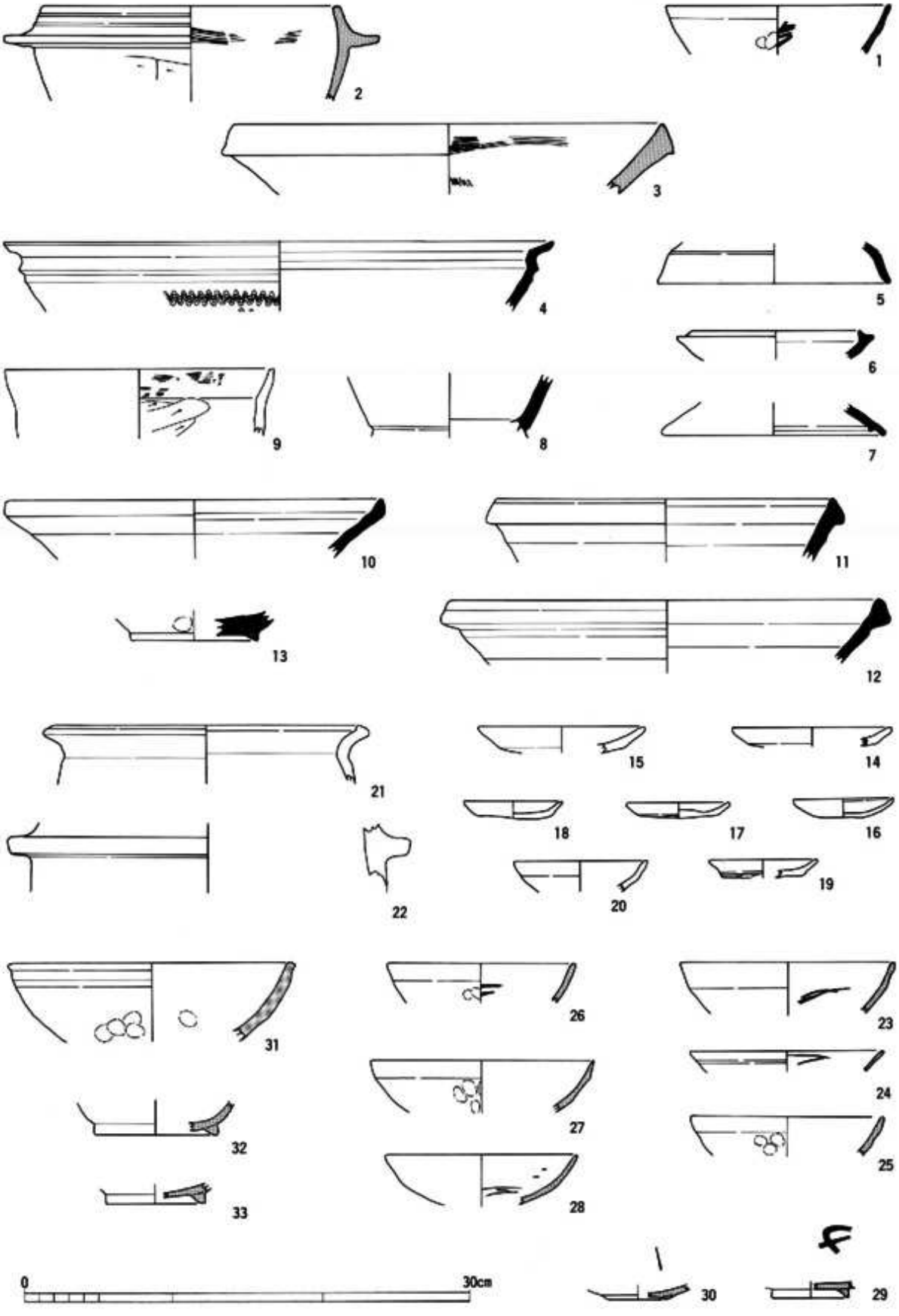
PL.9　第１調査区出土の遺物　1

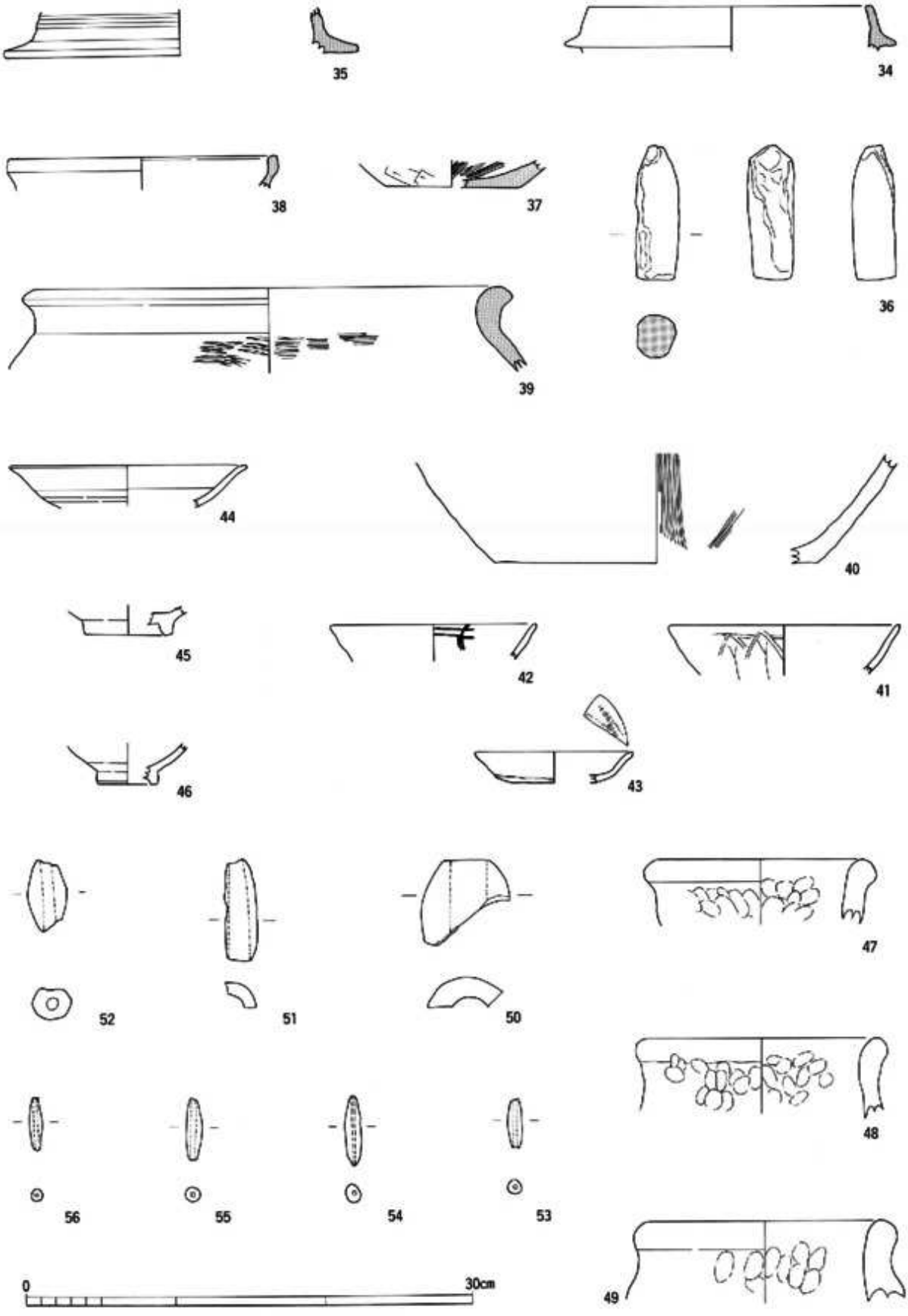


PL.10　第1調査区出土の遺物　2

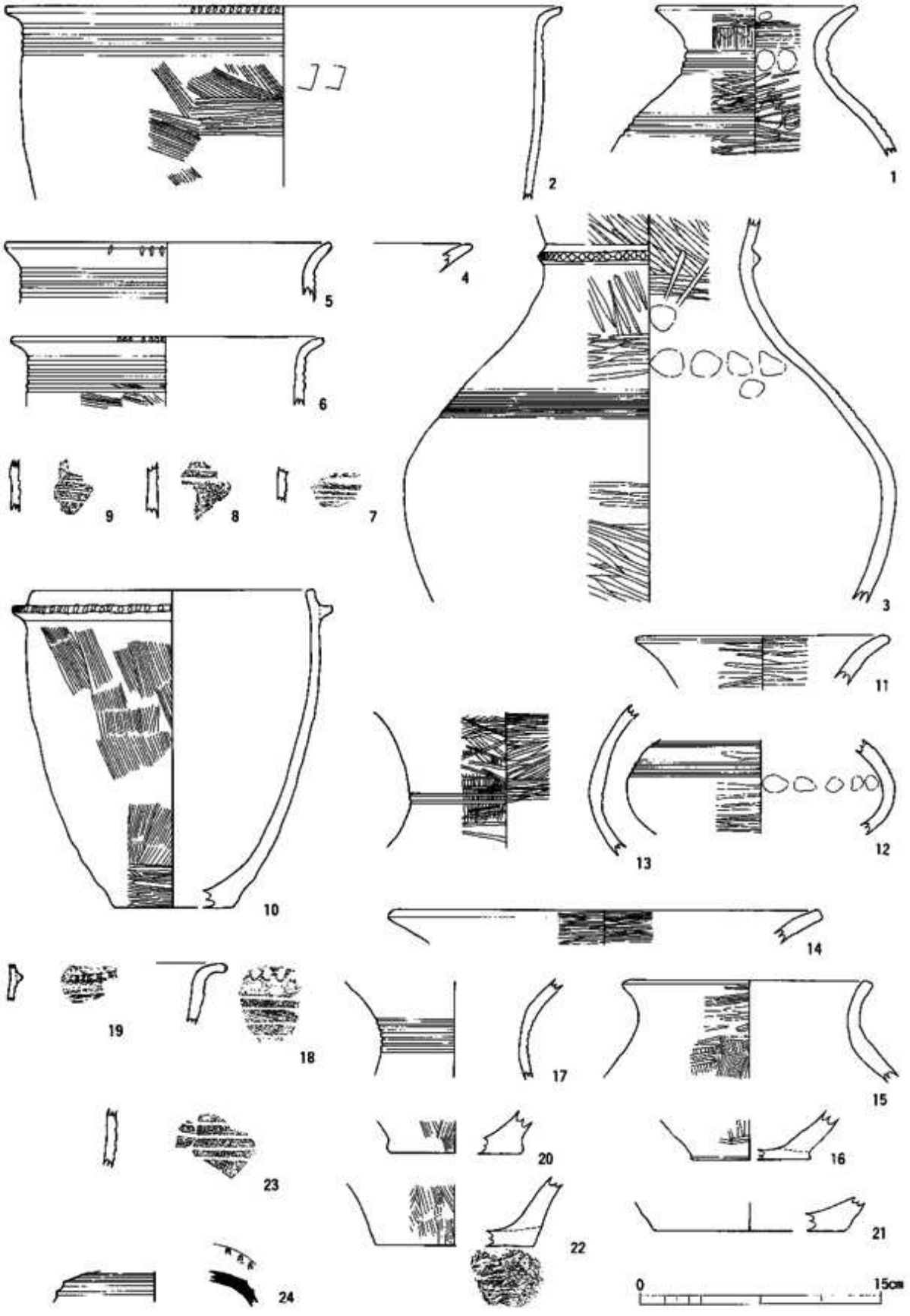


PL.11　第２調査区出土の遺物　1




35
34
38
37
36
39
44
40
45
42
41
46
43
47
52
51
50
48
56
55
54
53
0
30cm
49

PL.13　第3調査区　A区出土の遺物



PL.14　第1調査区　全景

（真上から）

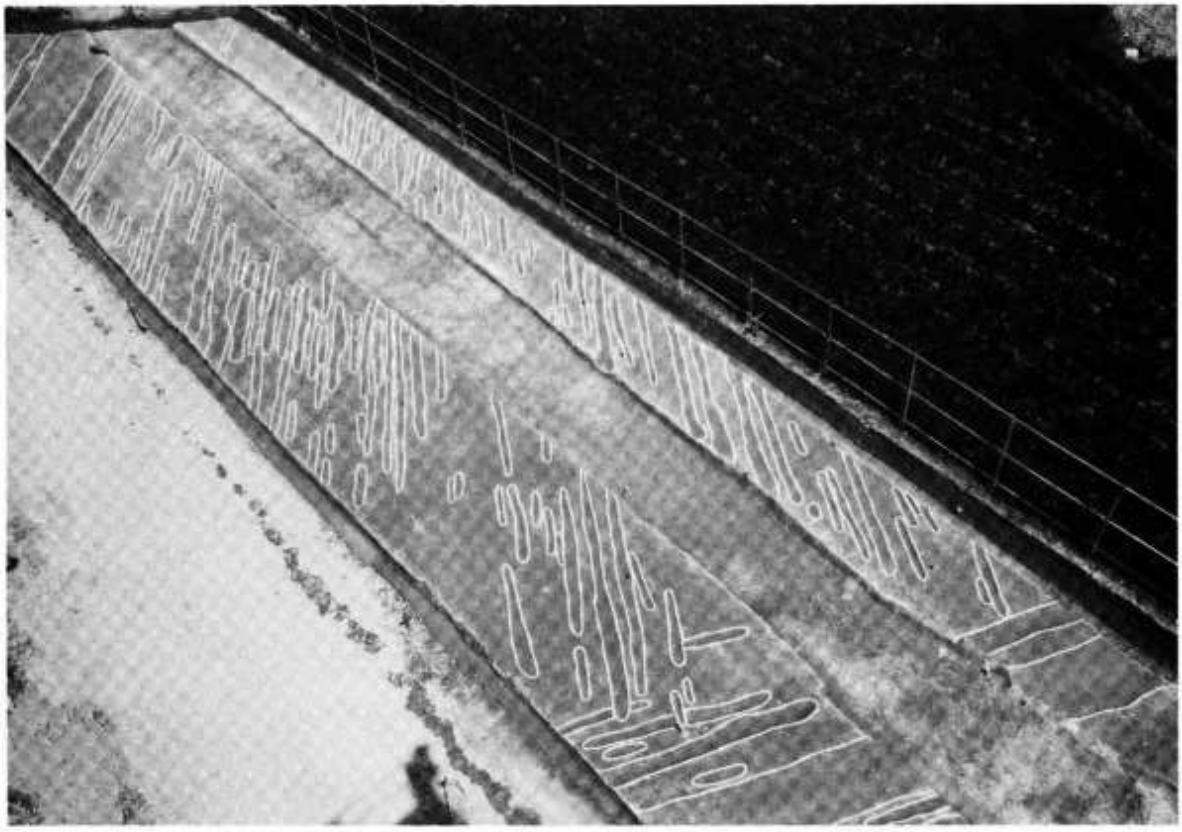
（山側から）

（山側から）

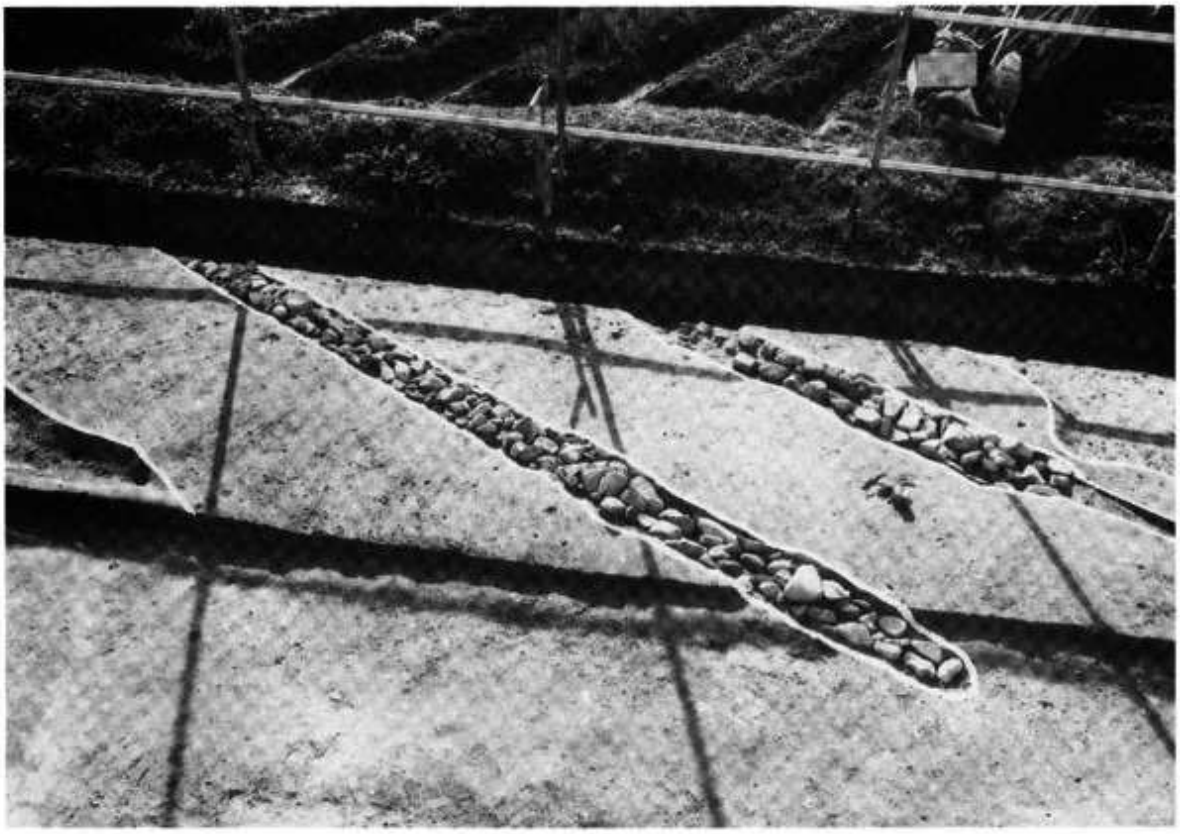
（海側から）

（山側から）

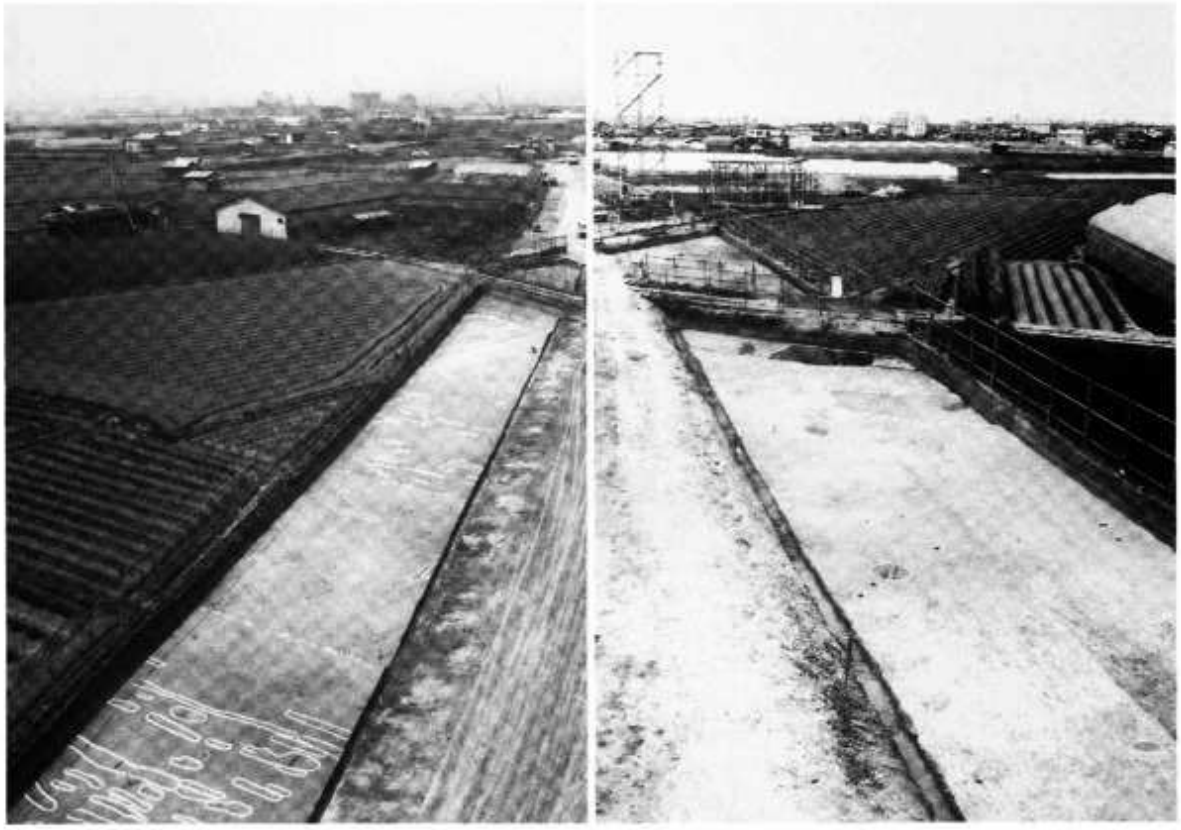
（海側から）



鋤溝群（北から）



石組暗渠（北から）

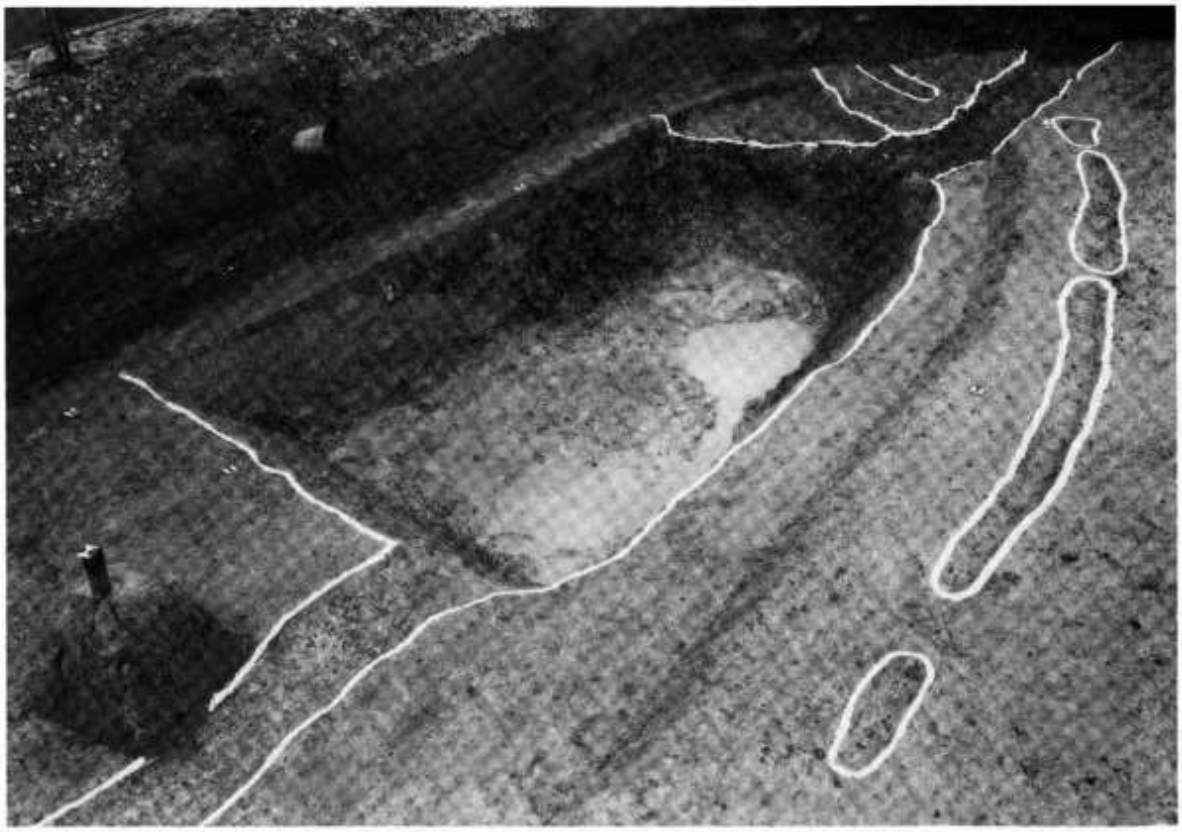


（山側から）

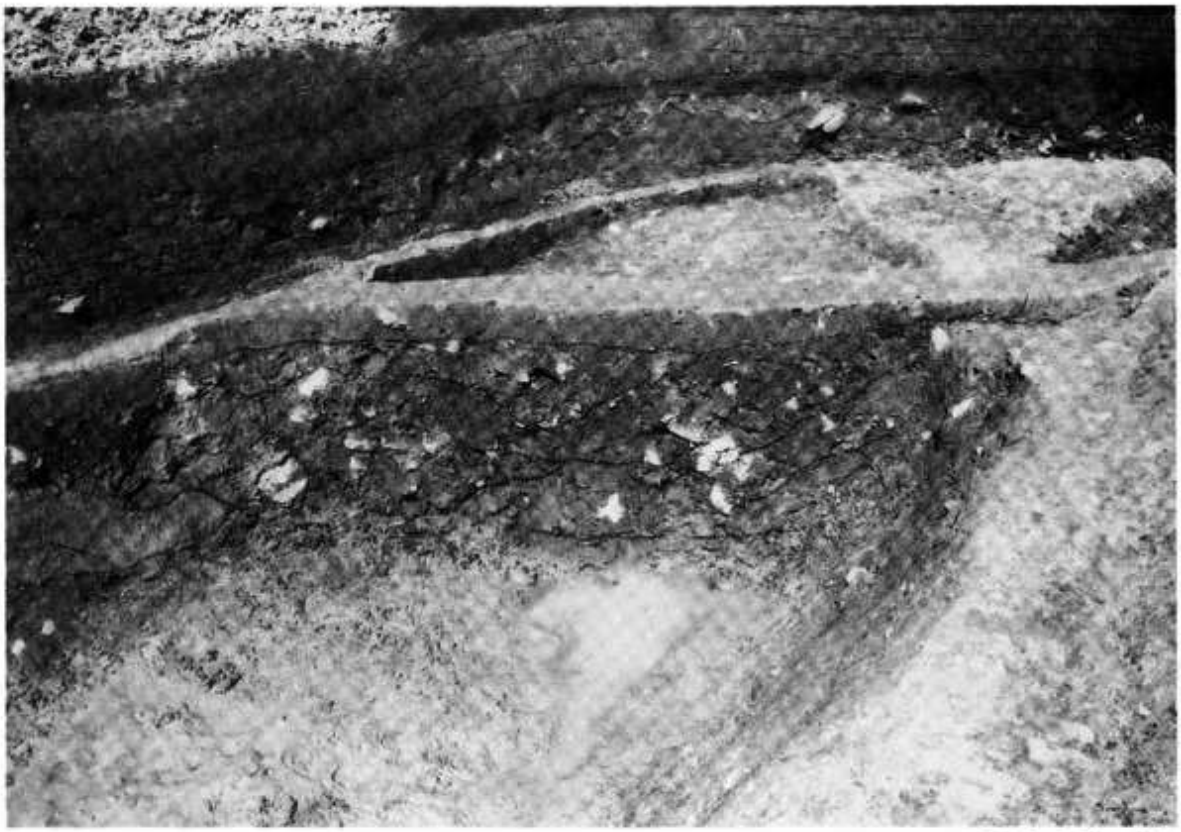
（海側から）

（山側から）

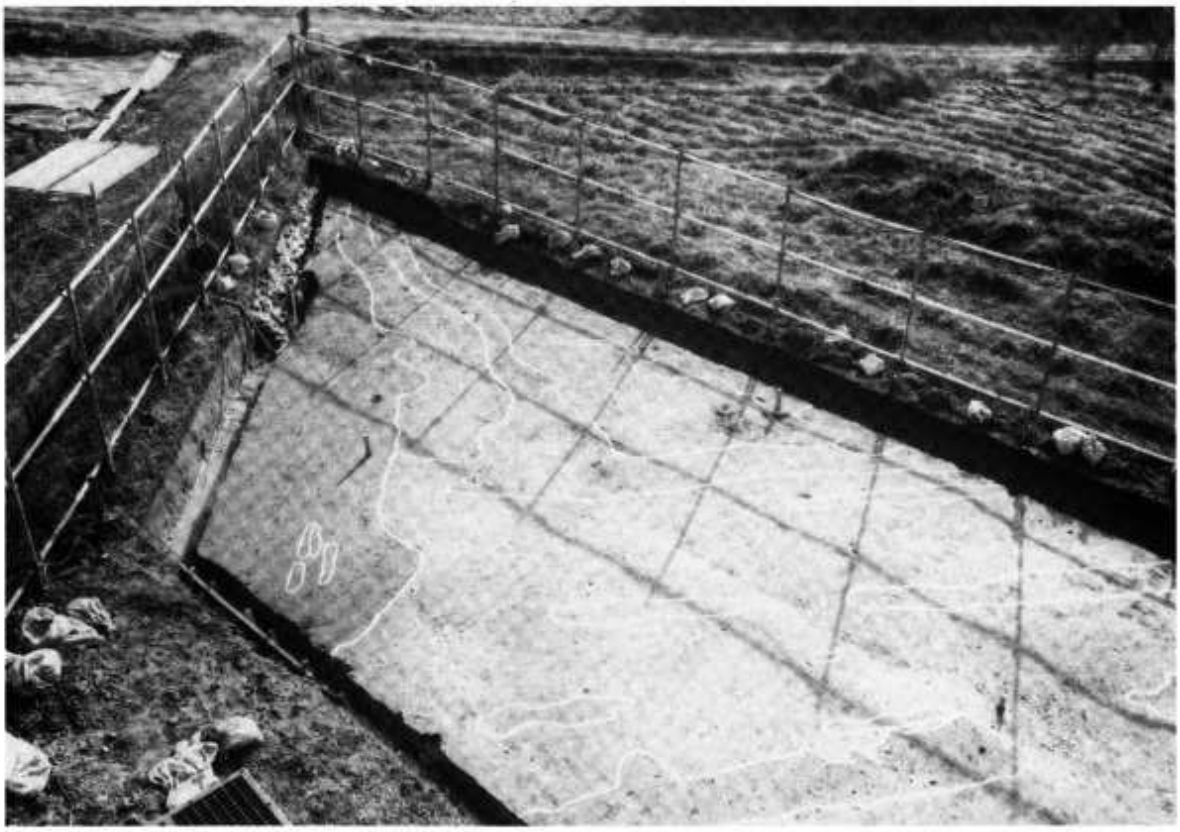
（海側から）



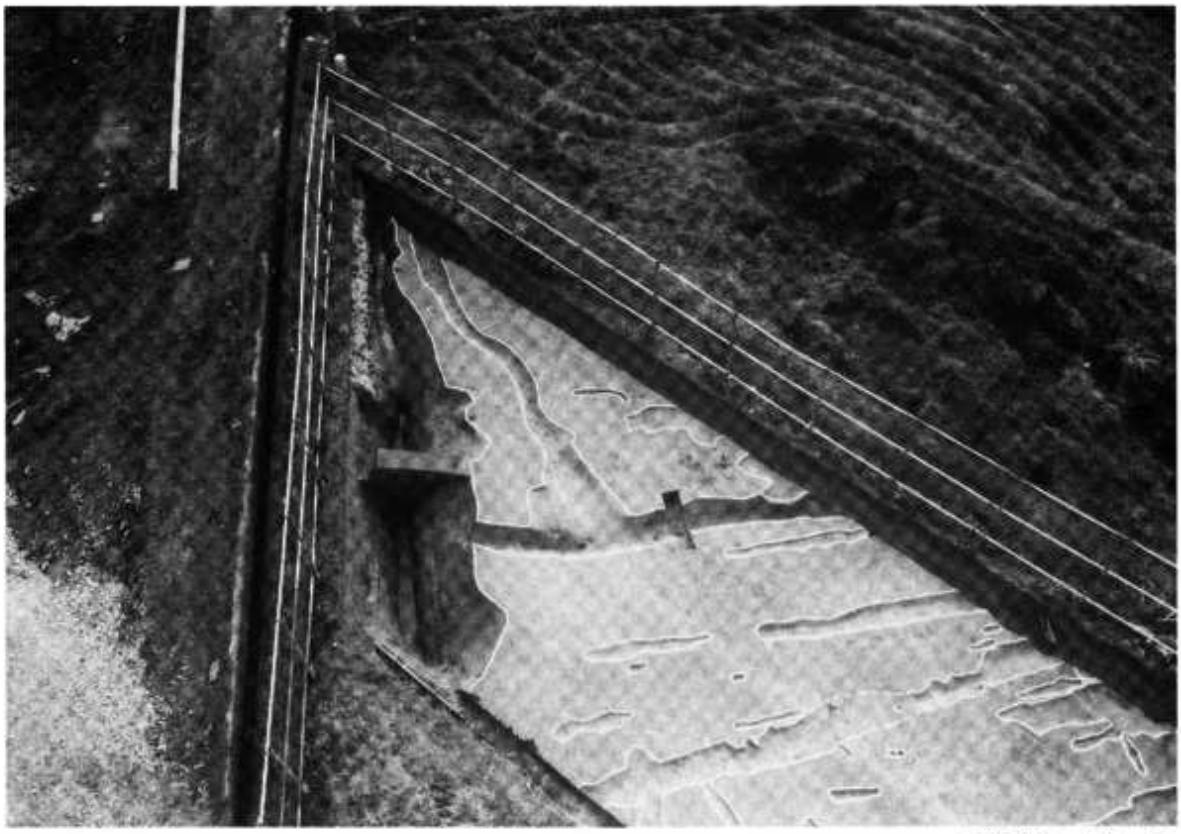
（南から）



土層断面（南から）



検出状況（北から）



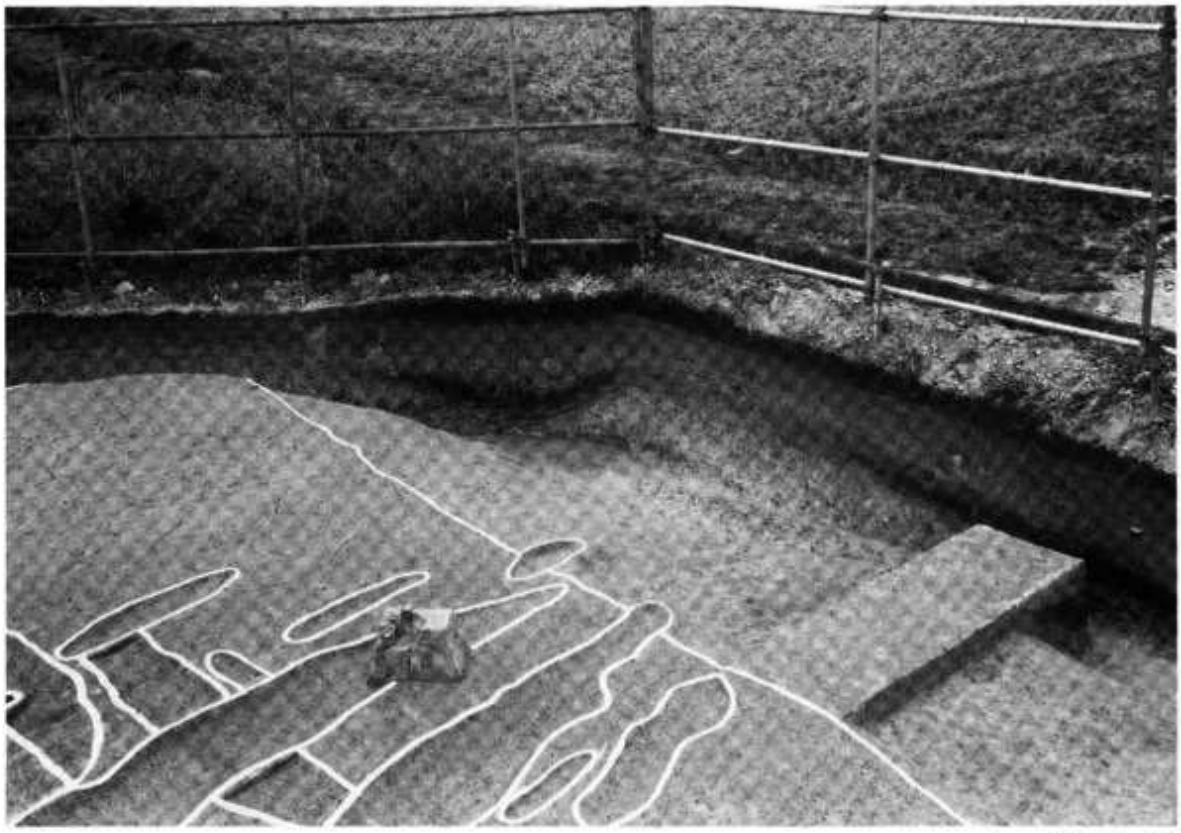
同掘削後（北から）

PL.22　第1調査区　SD02土層断面

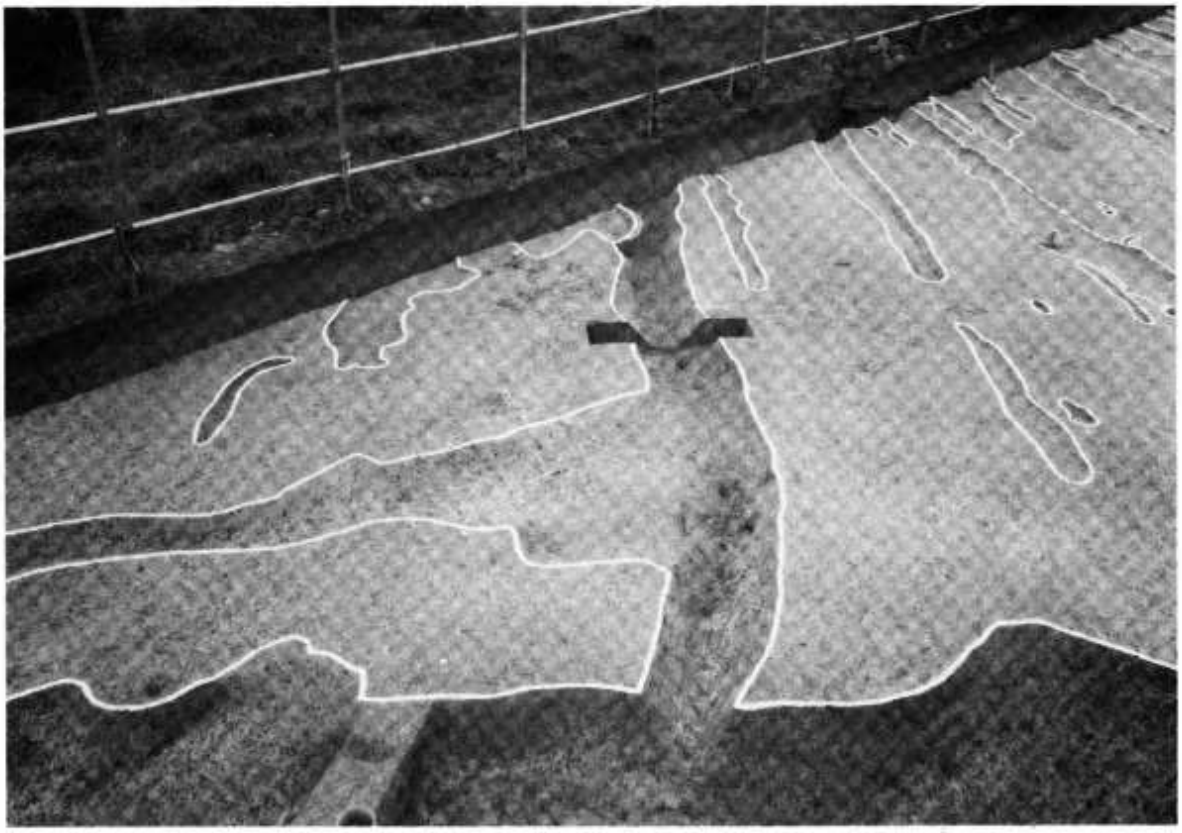
（北から）

（西から）

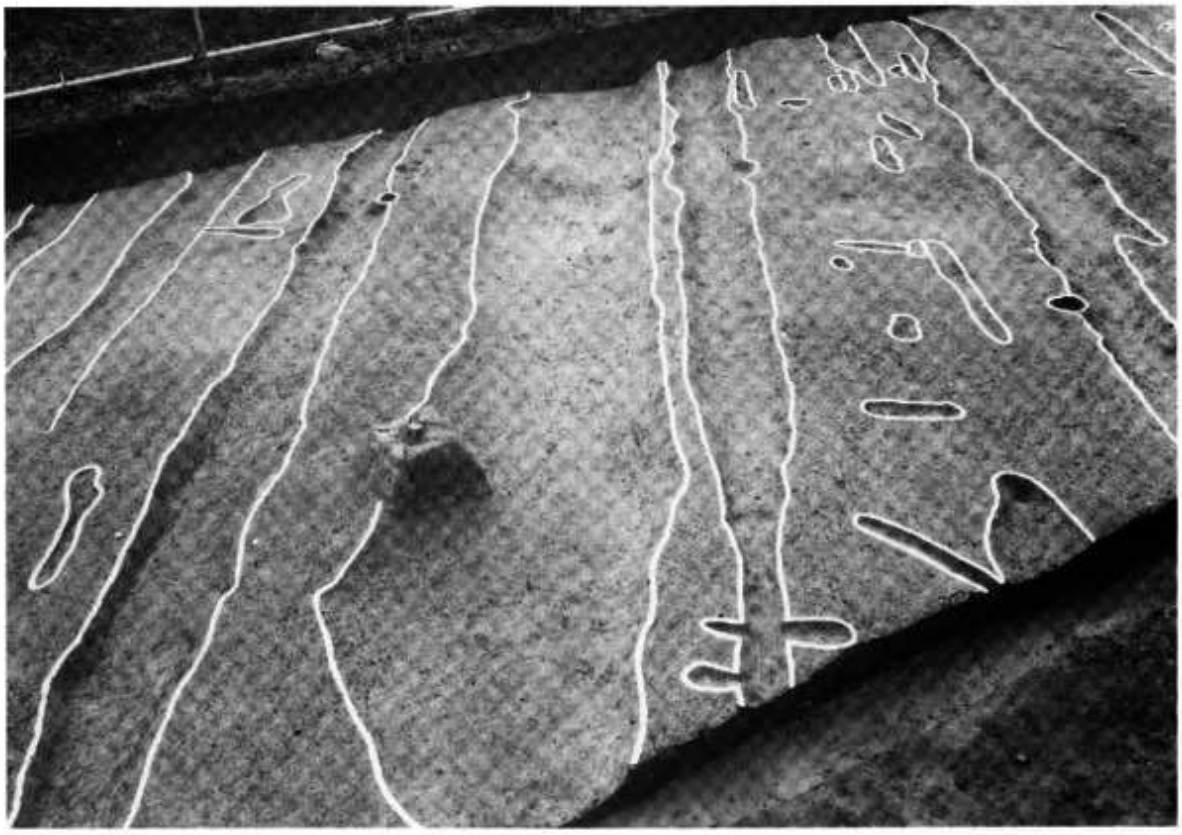
（南東から）



（南西から）



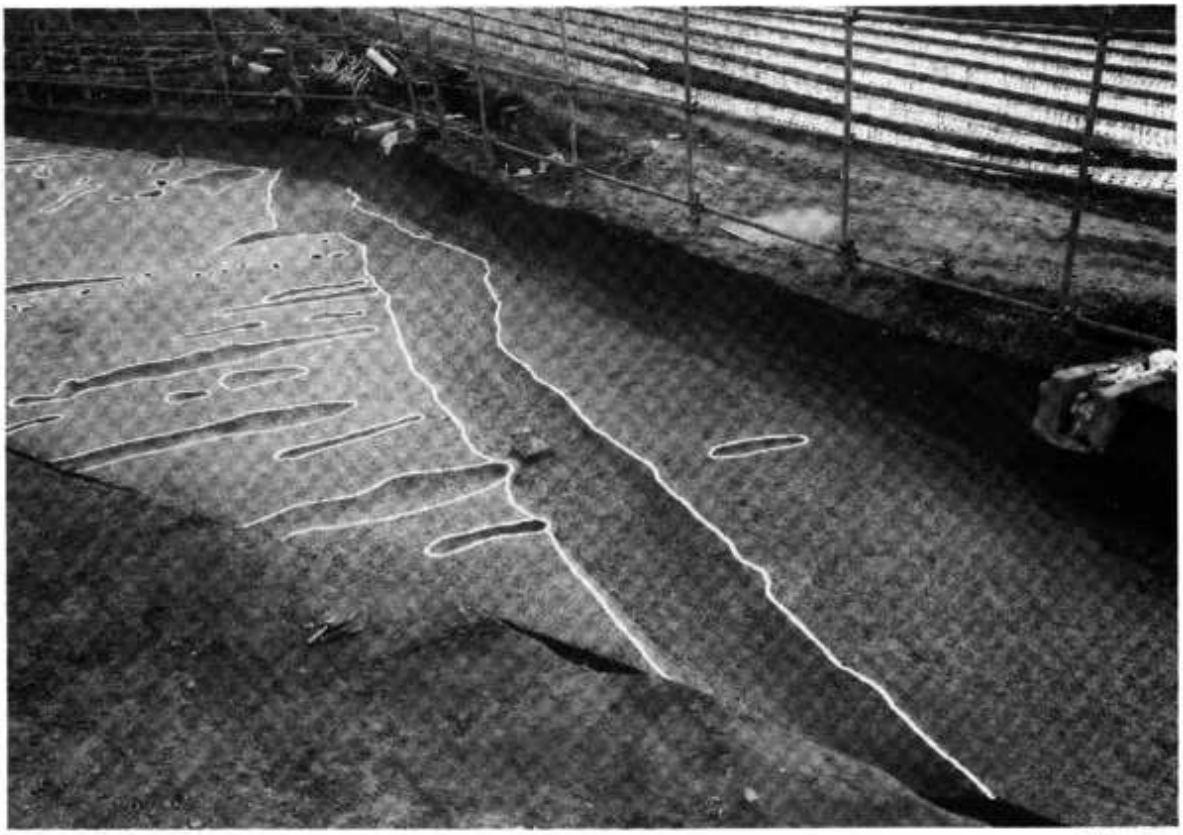
SD04（東から）



SD05（東から）

PL.25　第1調査区　S D06

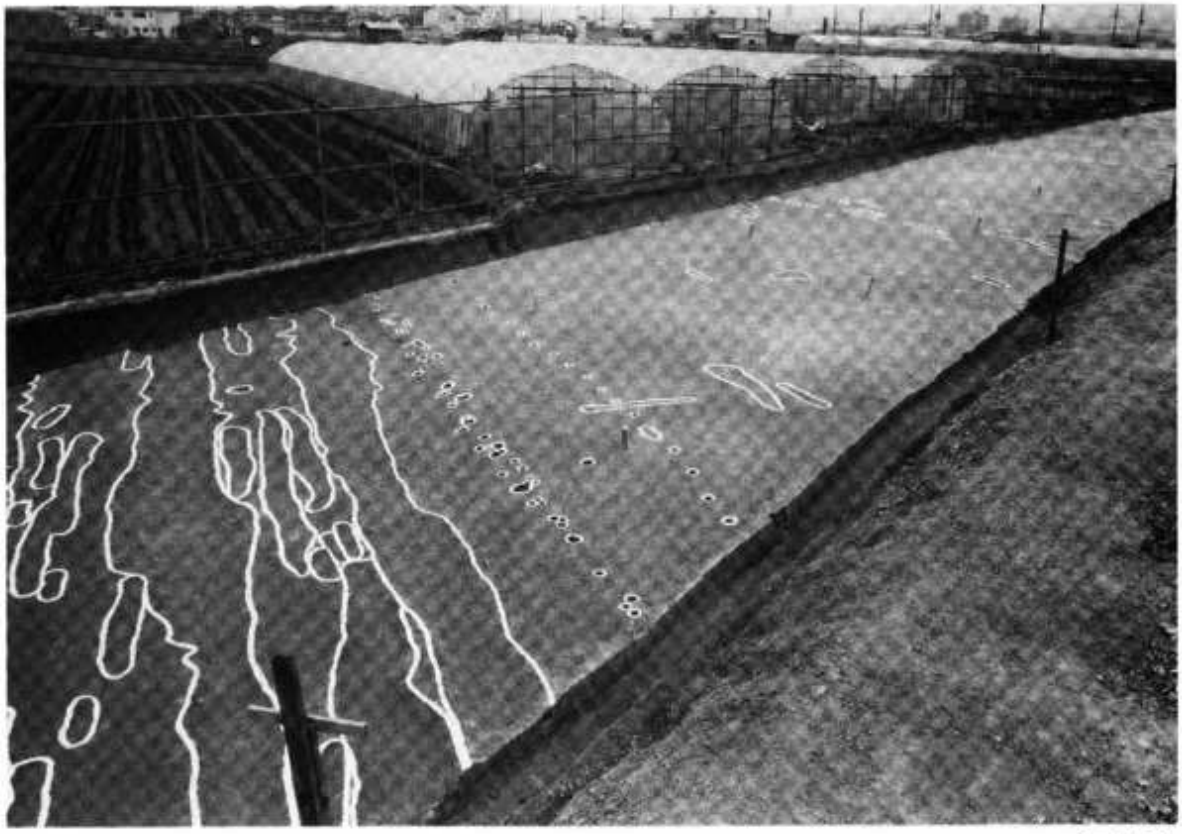
（南から）



（北から）

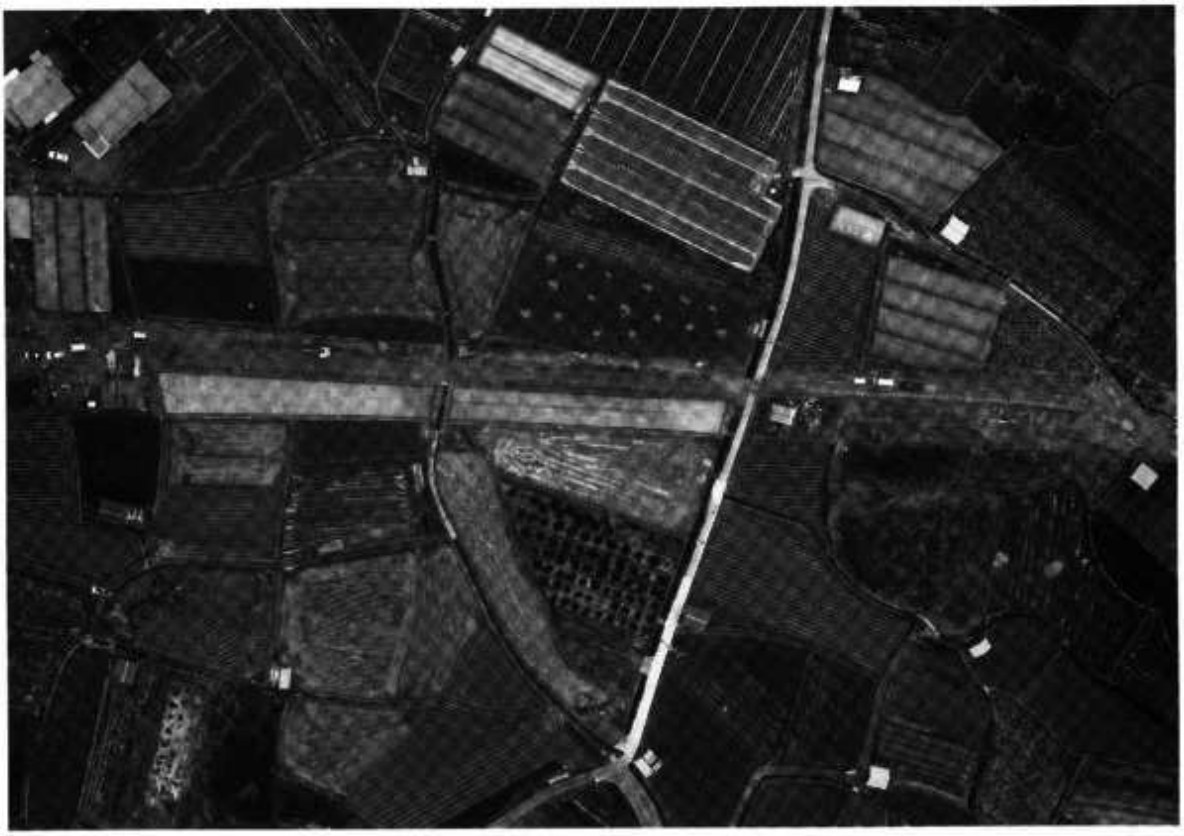
PL.26　第1調査区　S D07・鋤溝群02

（西から）



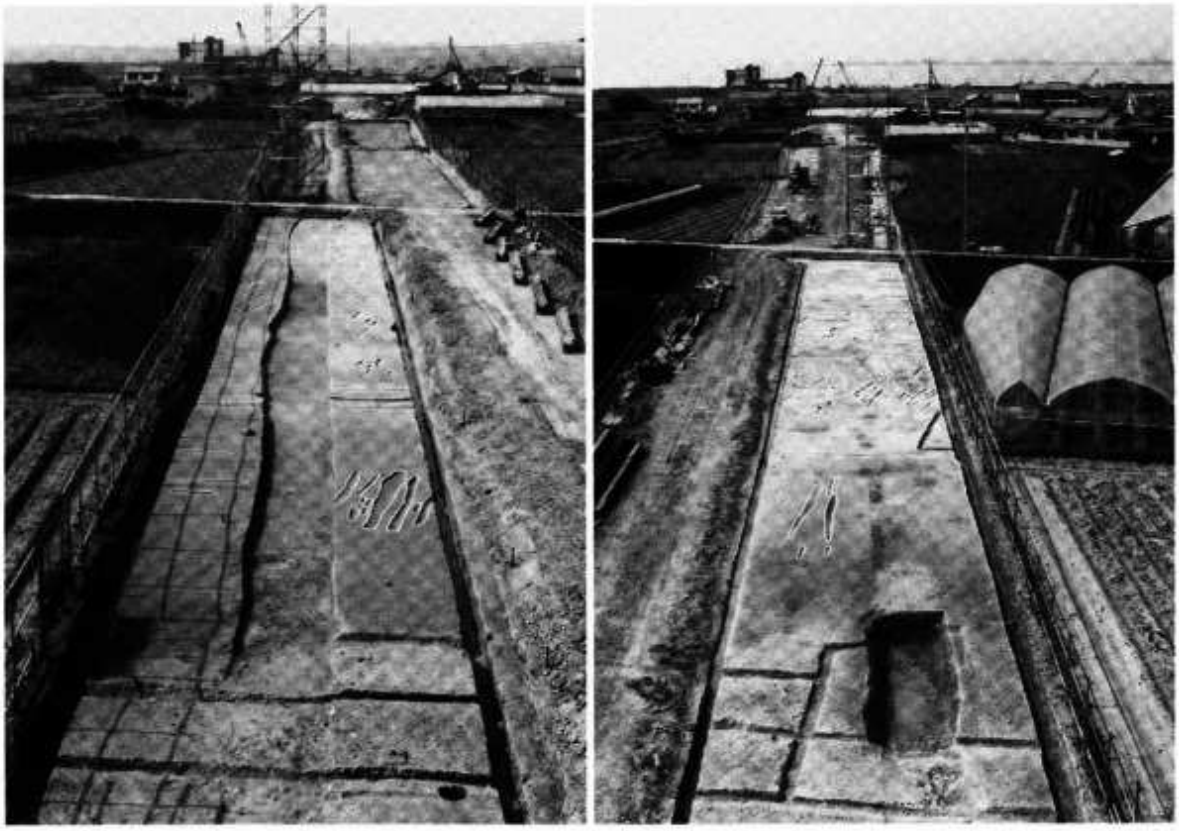
（西から）

PL.27　第2調査区　全景

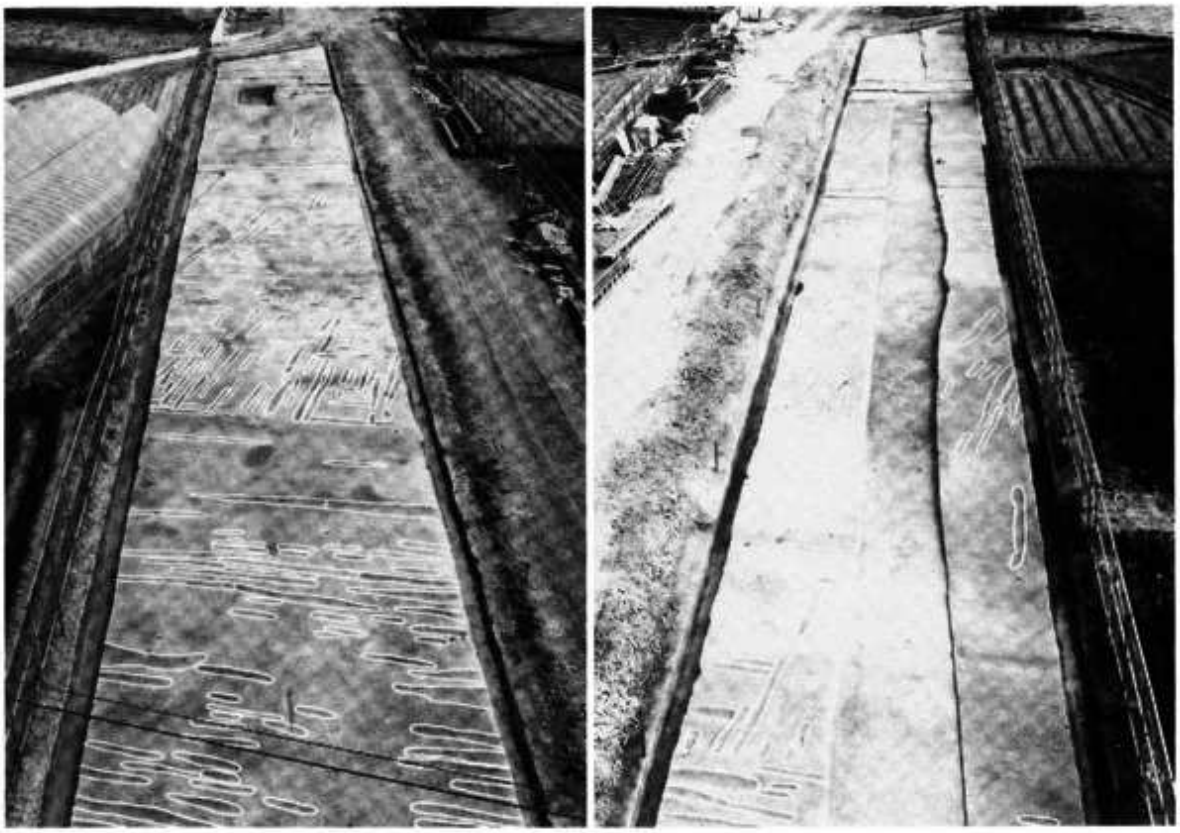


（真上から）

（山側から）

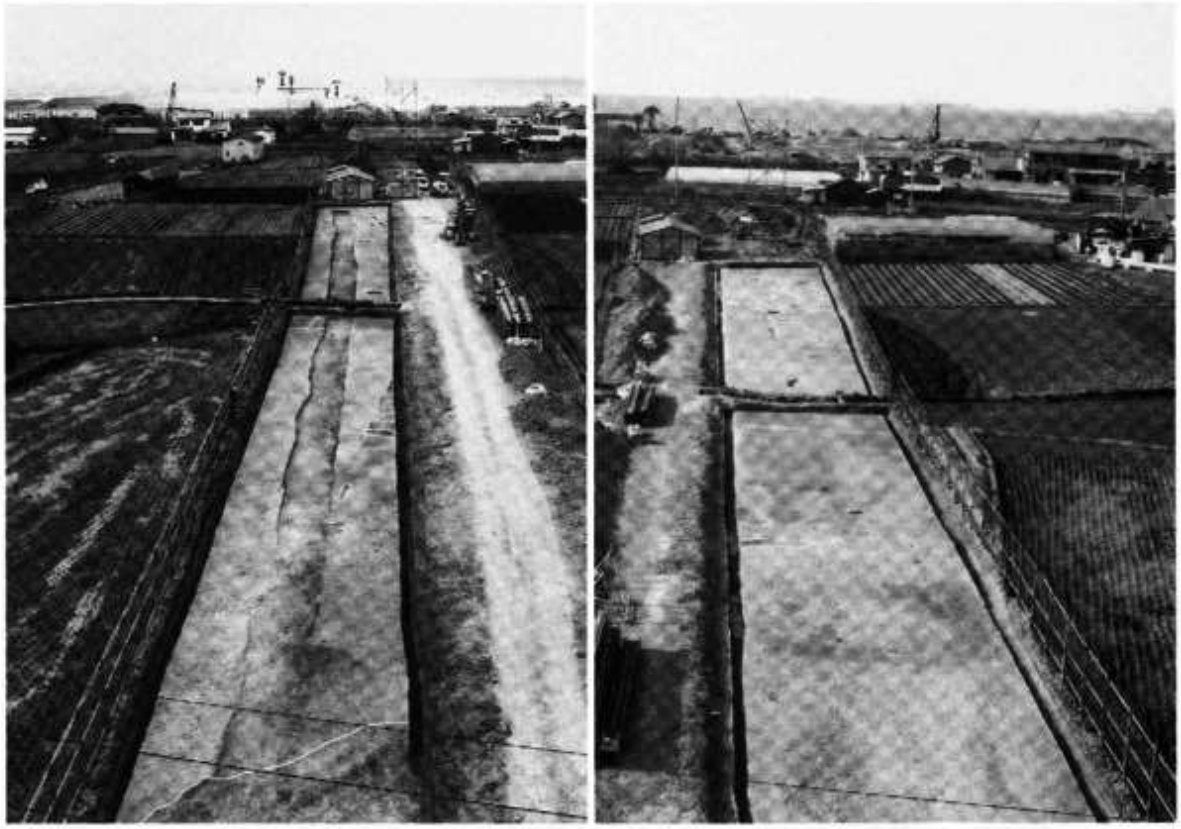


（山側から）



（海側から）

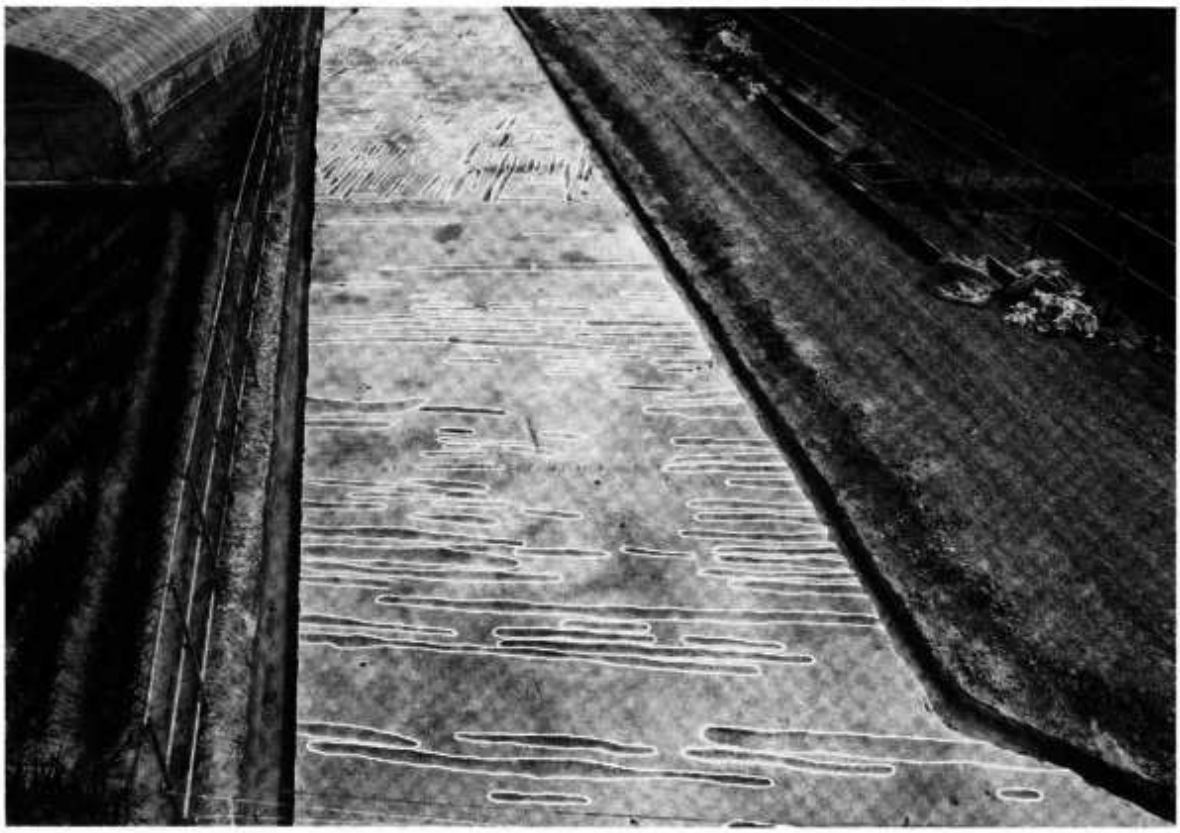
PL.29　第2調査区　B・C区　第I面



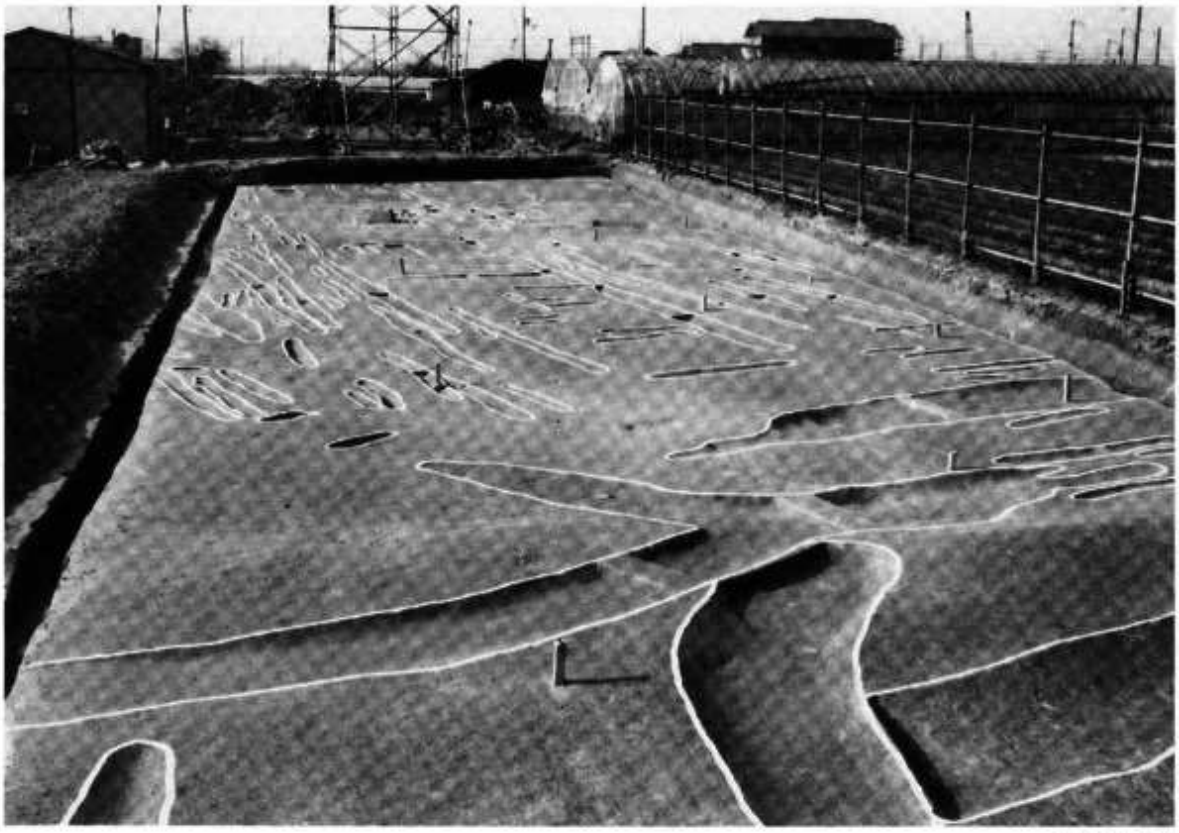
（山側から）

（海側から）

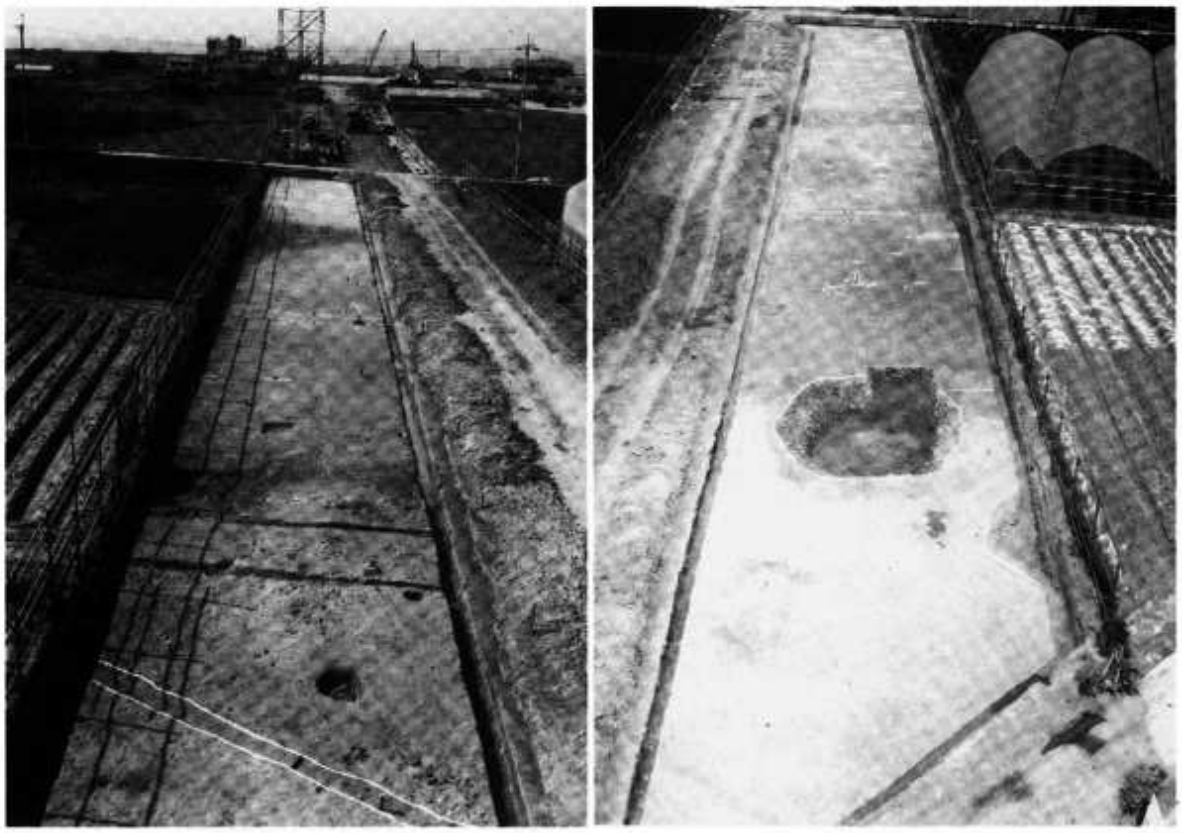
PL.30　第2調査区　第Ⅰ面　鋤溝群



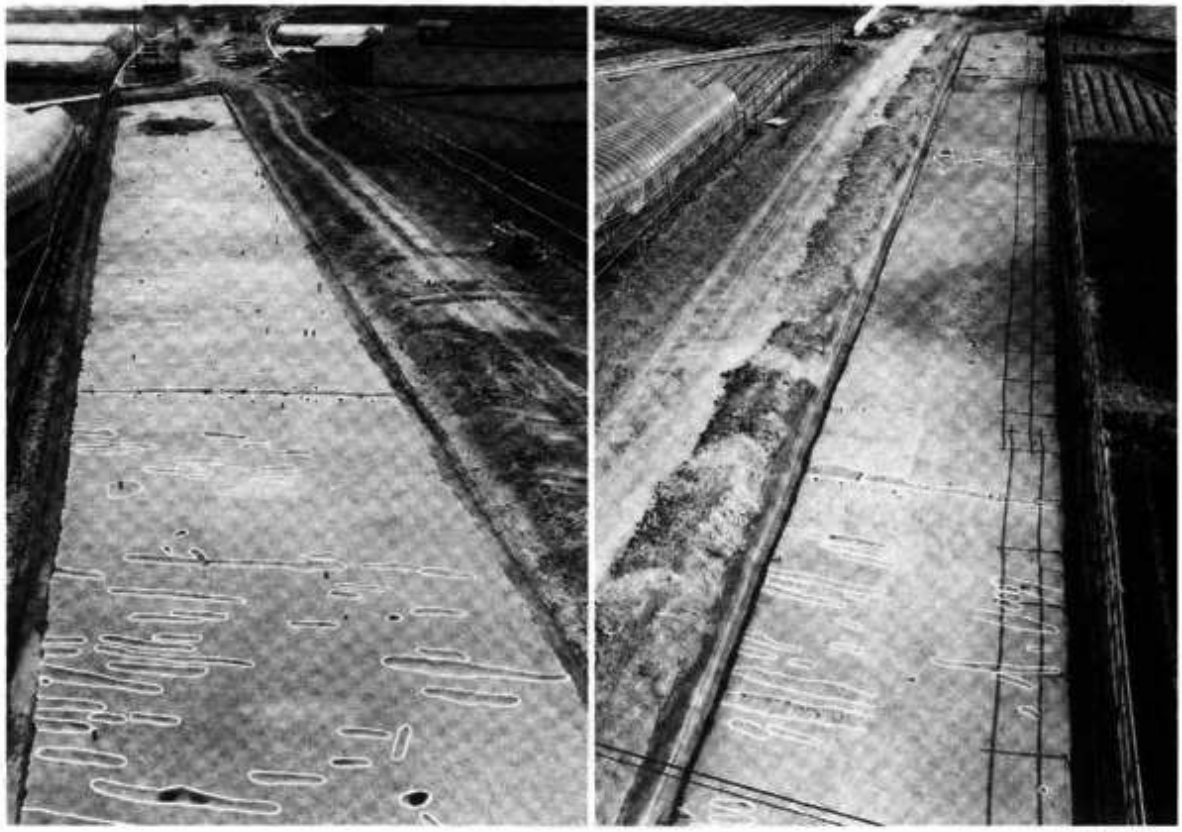
（北西から）



（南東から）

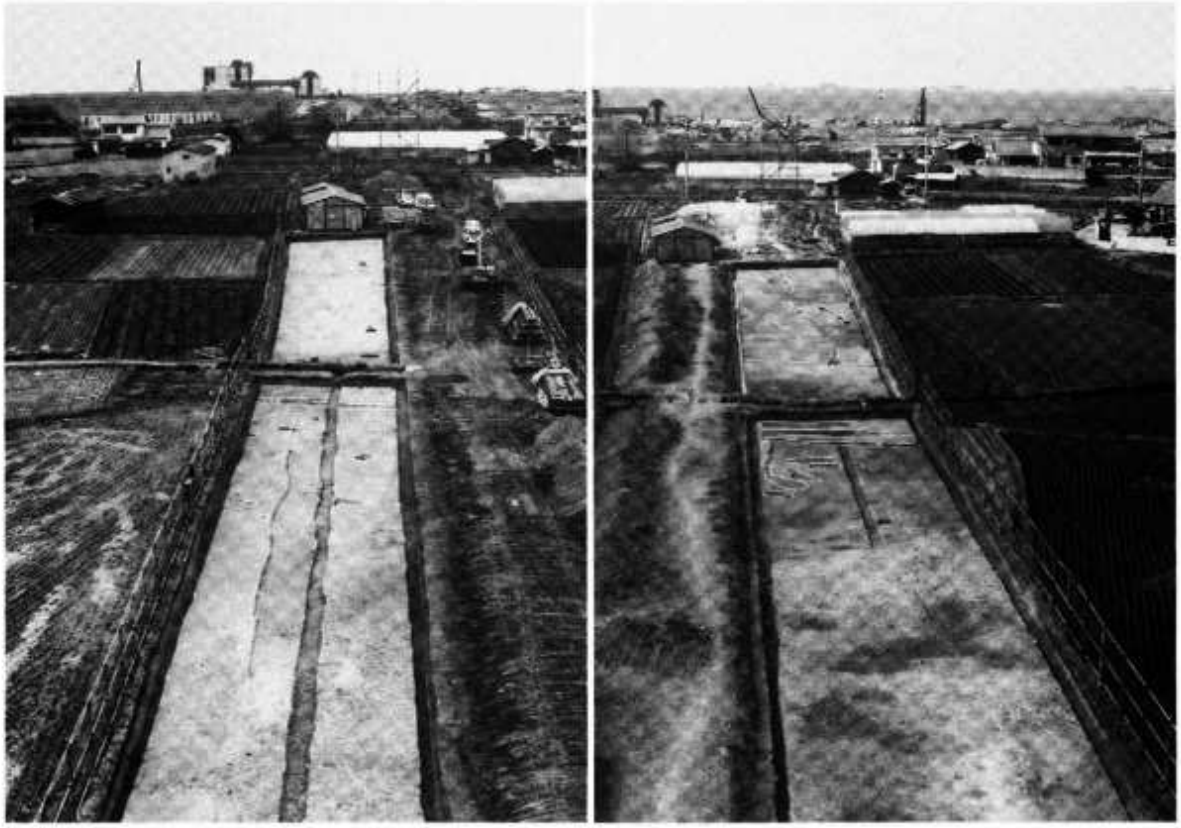


（山側から）

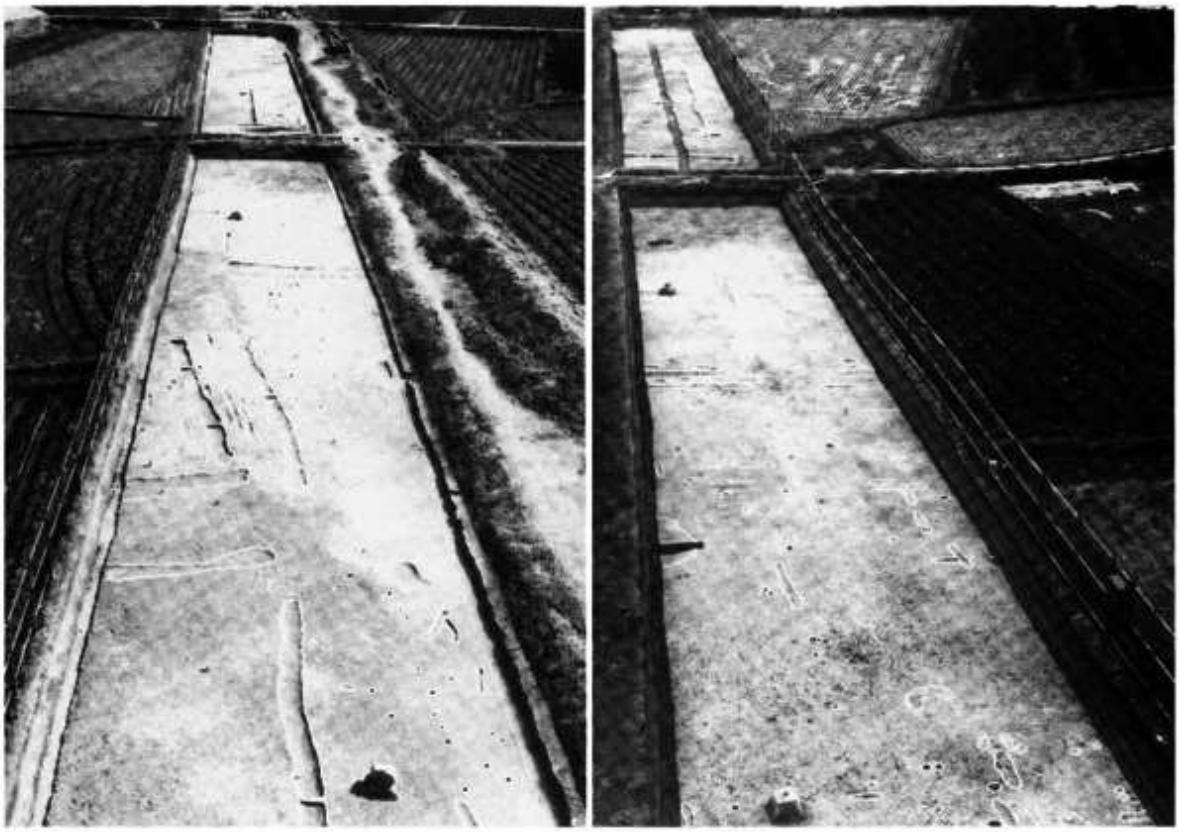


（海側から）

PL.32　第2調査区　B・C区　第II面

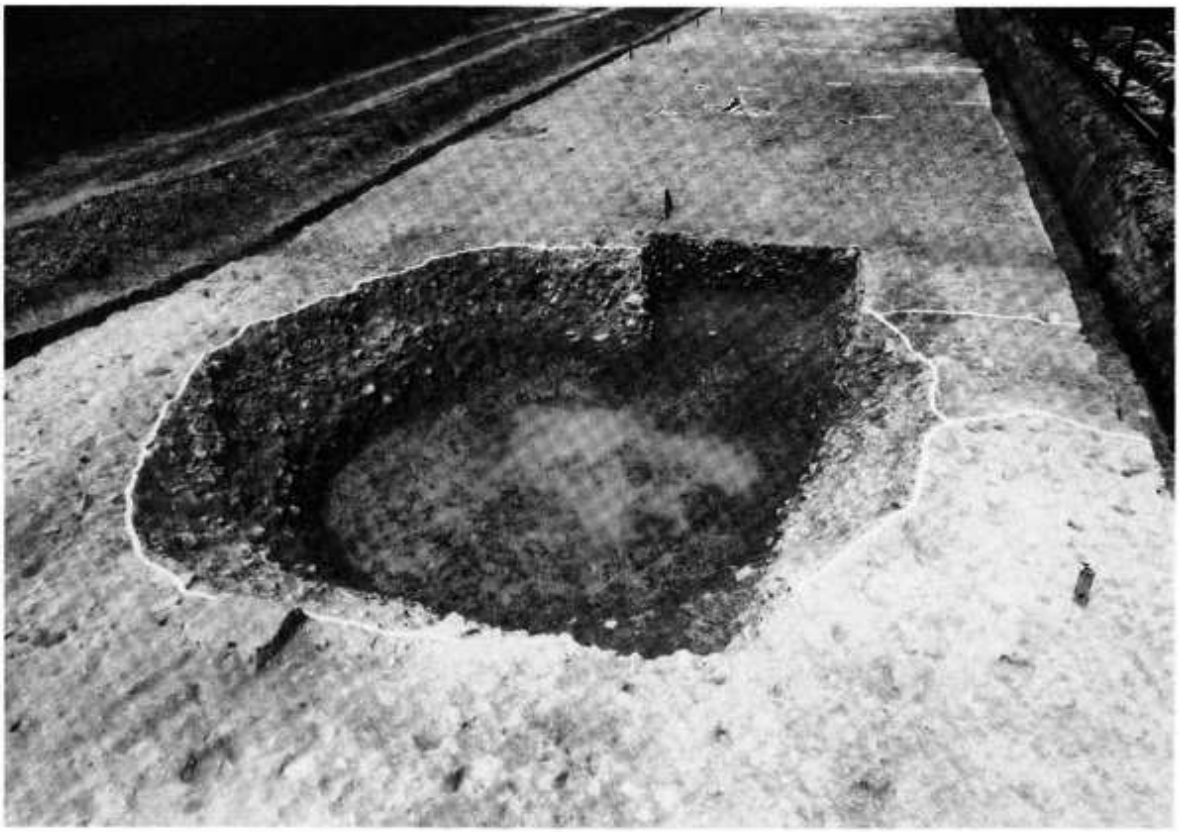


（山側から）



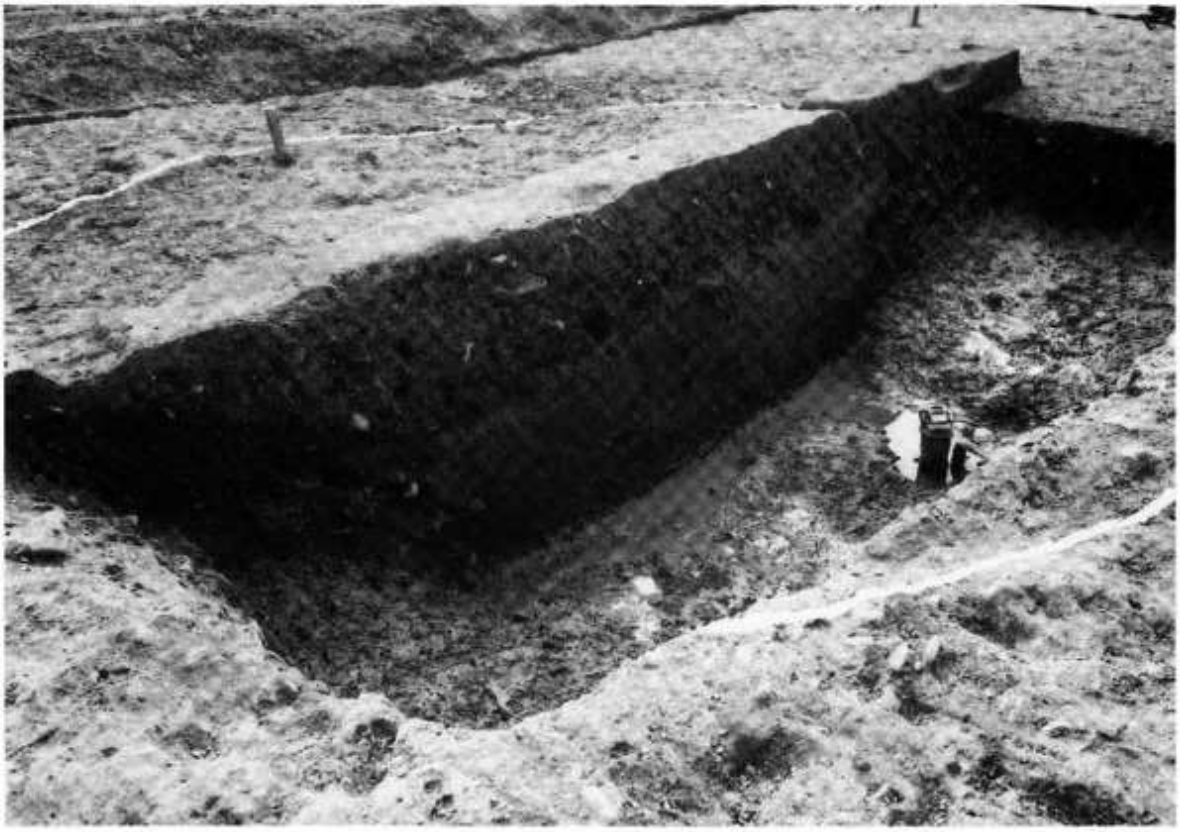
（海側から）

（西から）

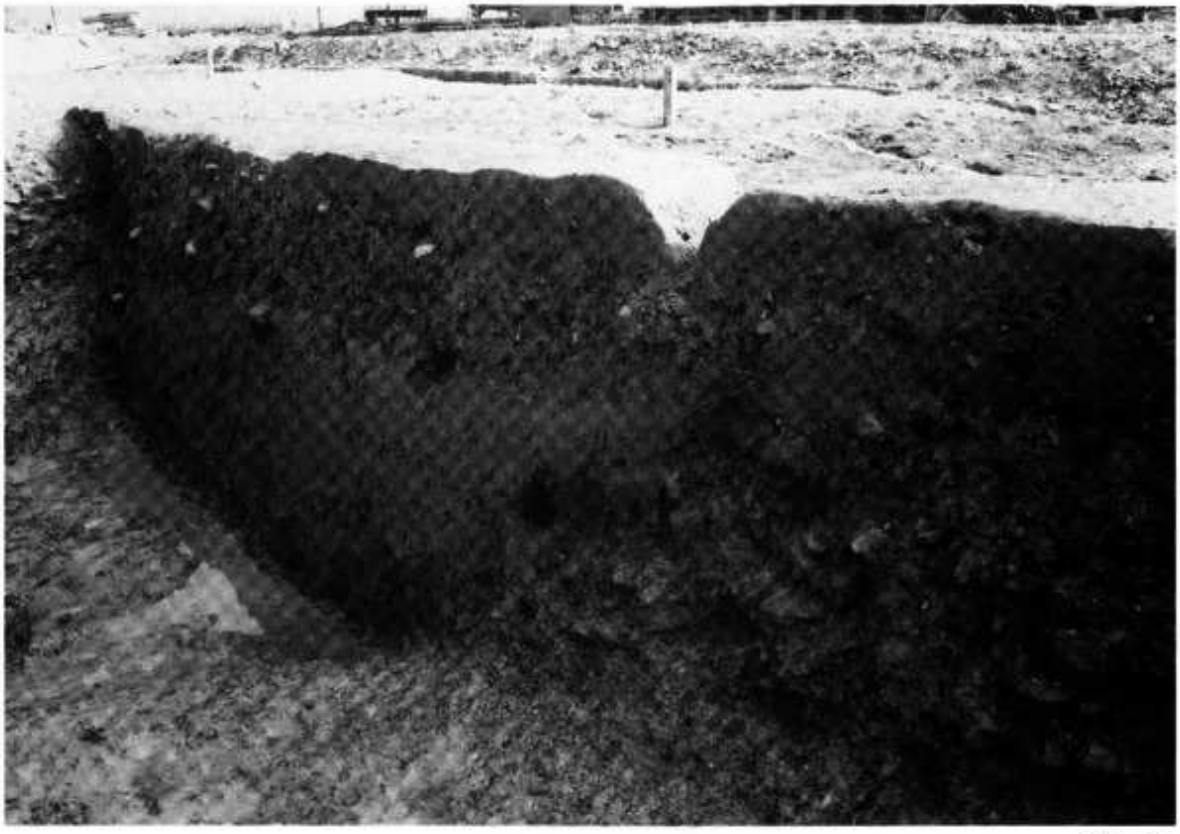


（南西から）

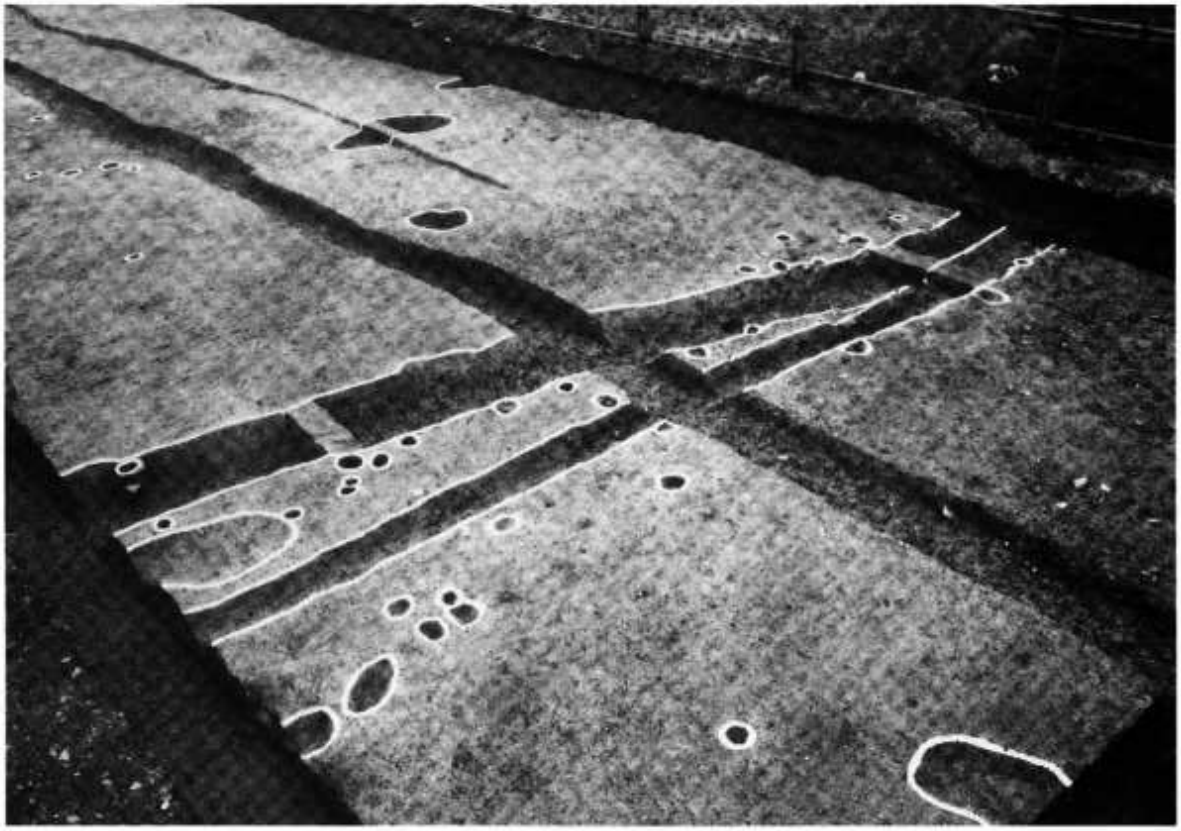
PL.34　第2調査区　SE01土層断面



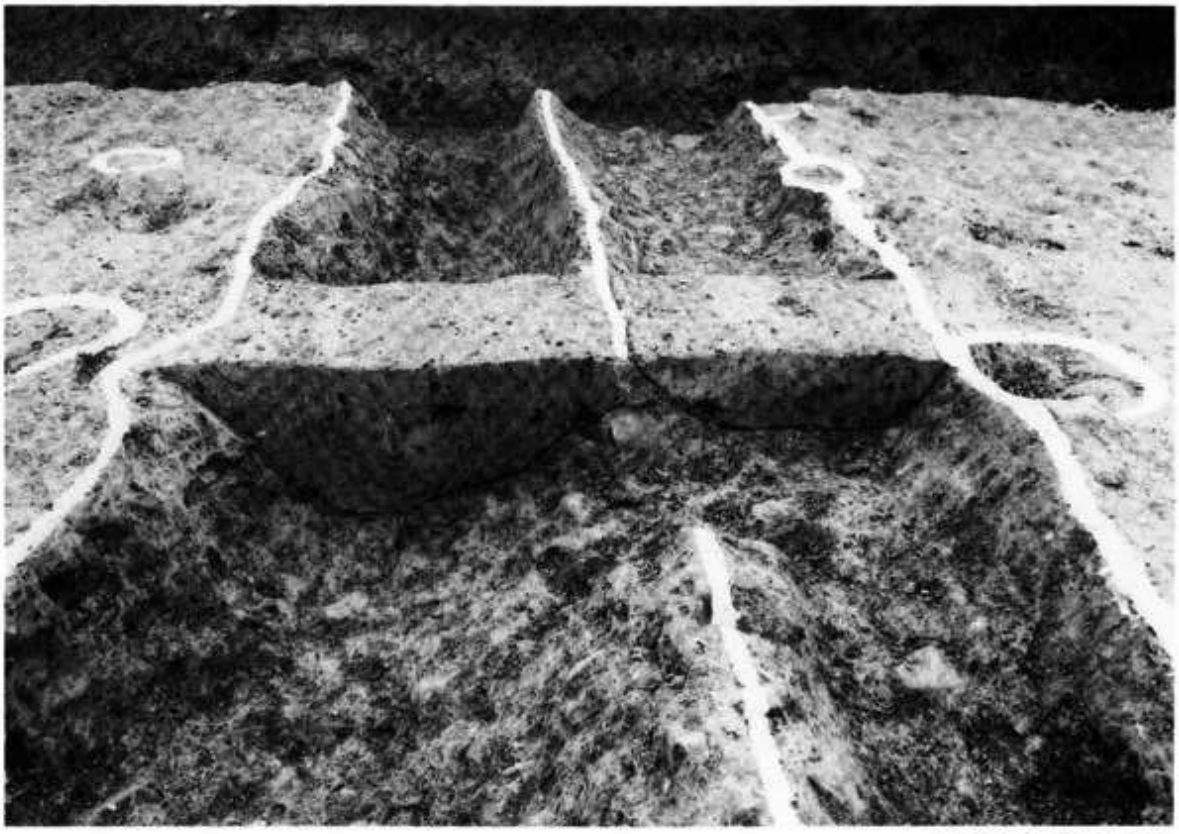
（西から）



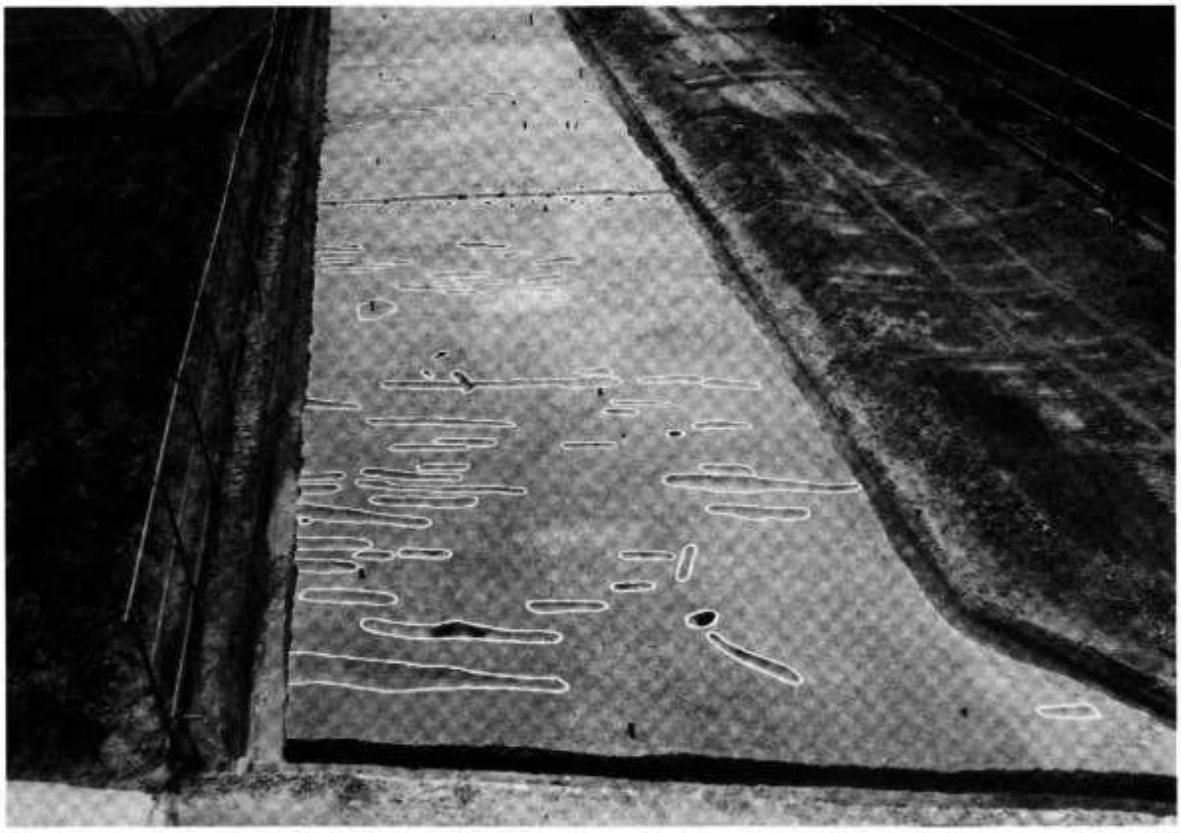
（北から）



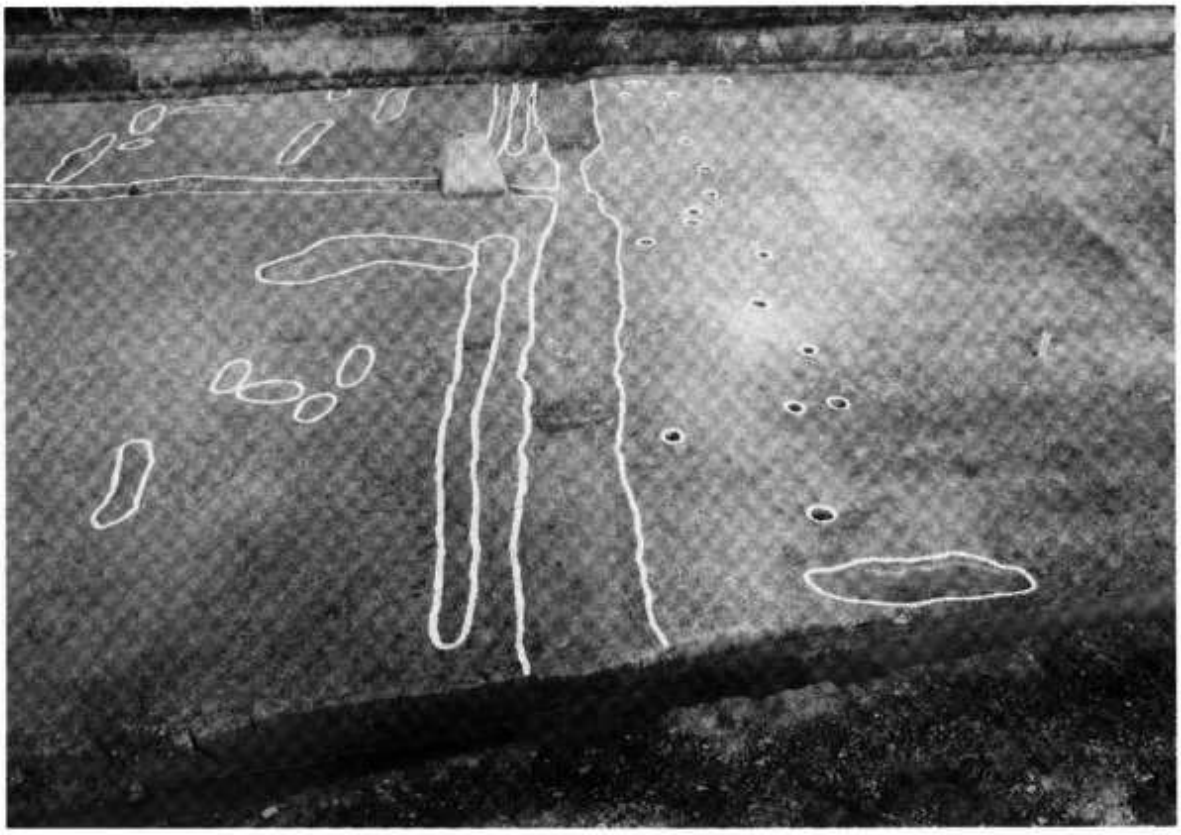
（北から）



土層断面（北西から）

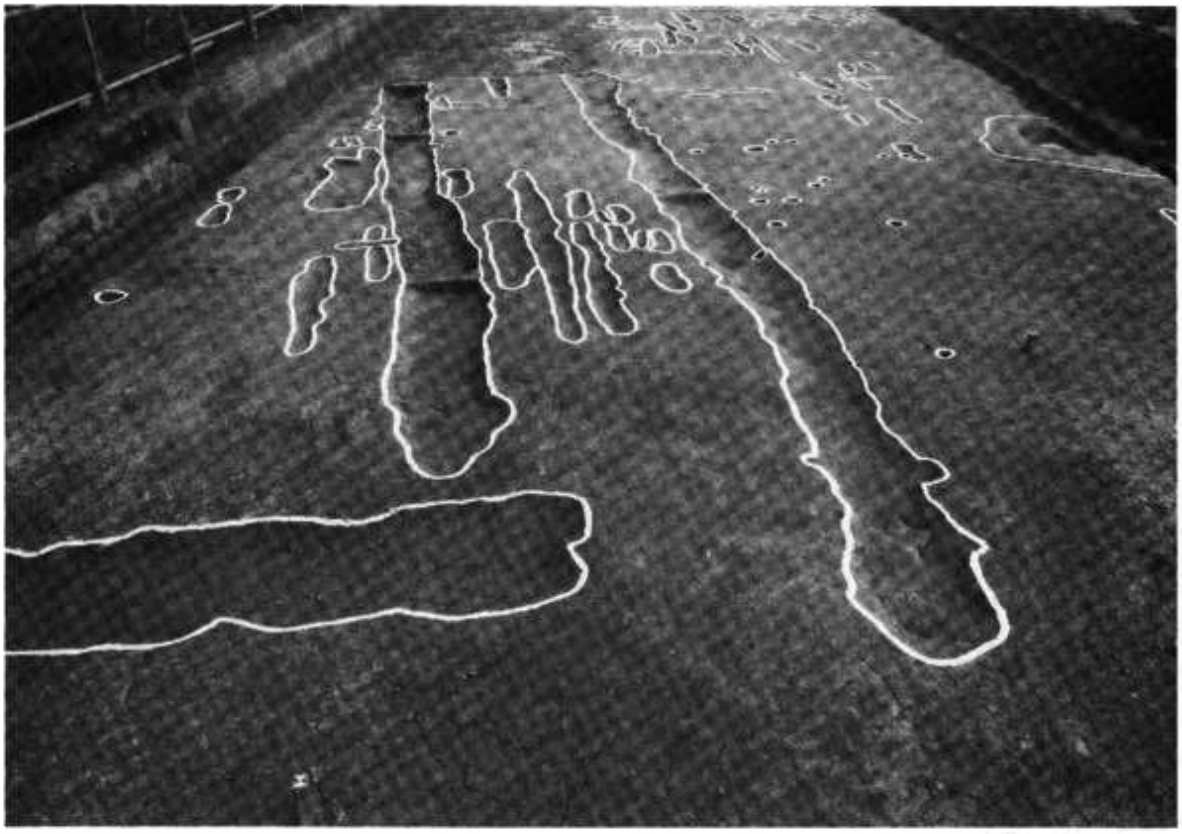


S D03・鋤溝群01（北西から）

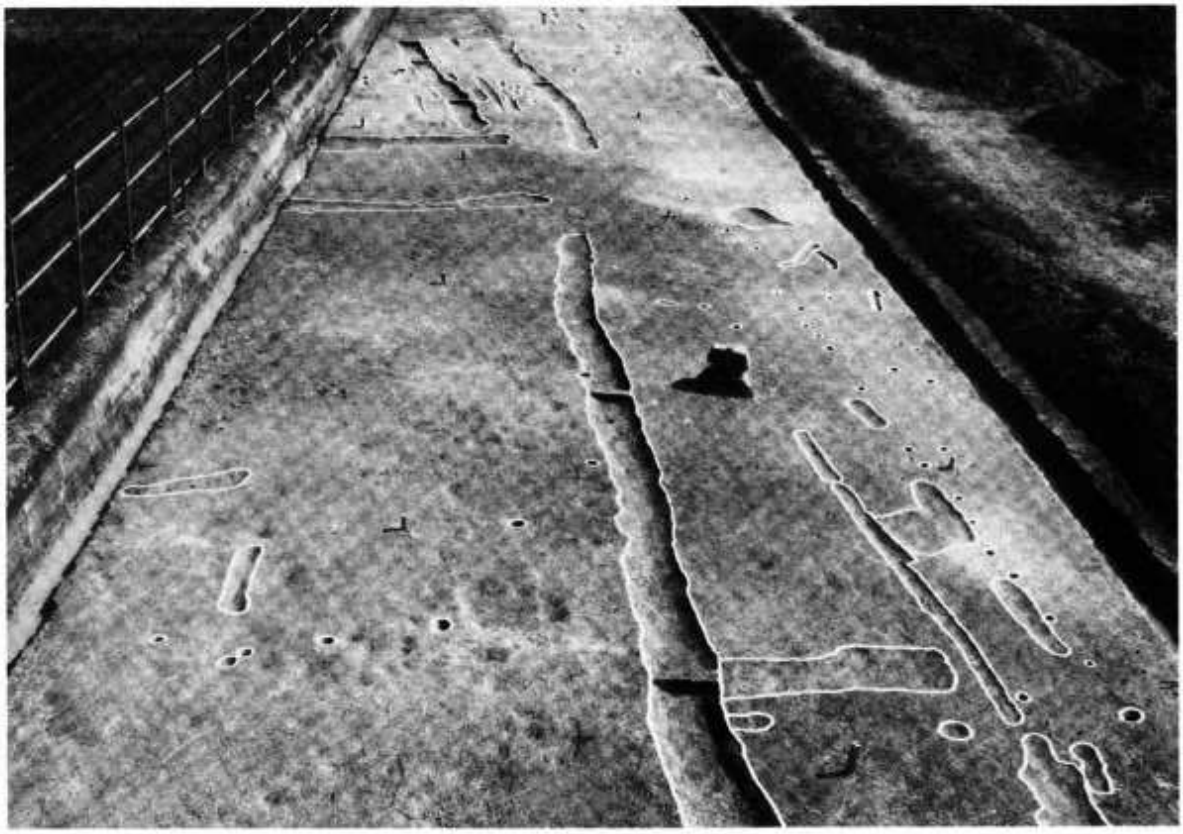


S D04（南西から）

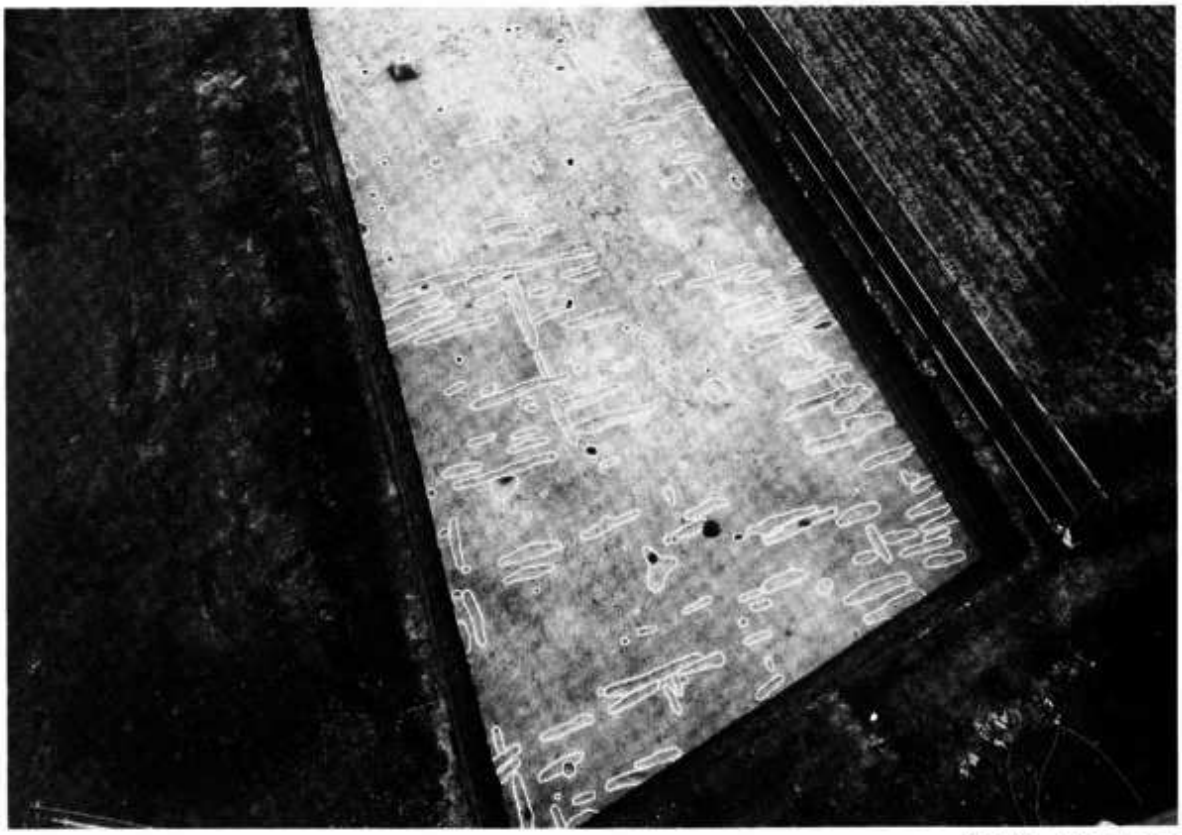
S D07・08・09（西から）



同詳細（北西から）

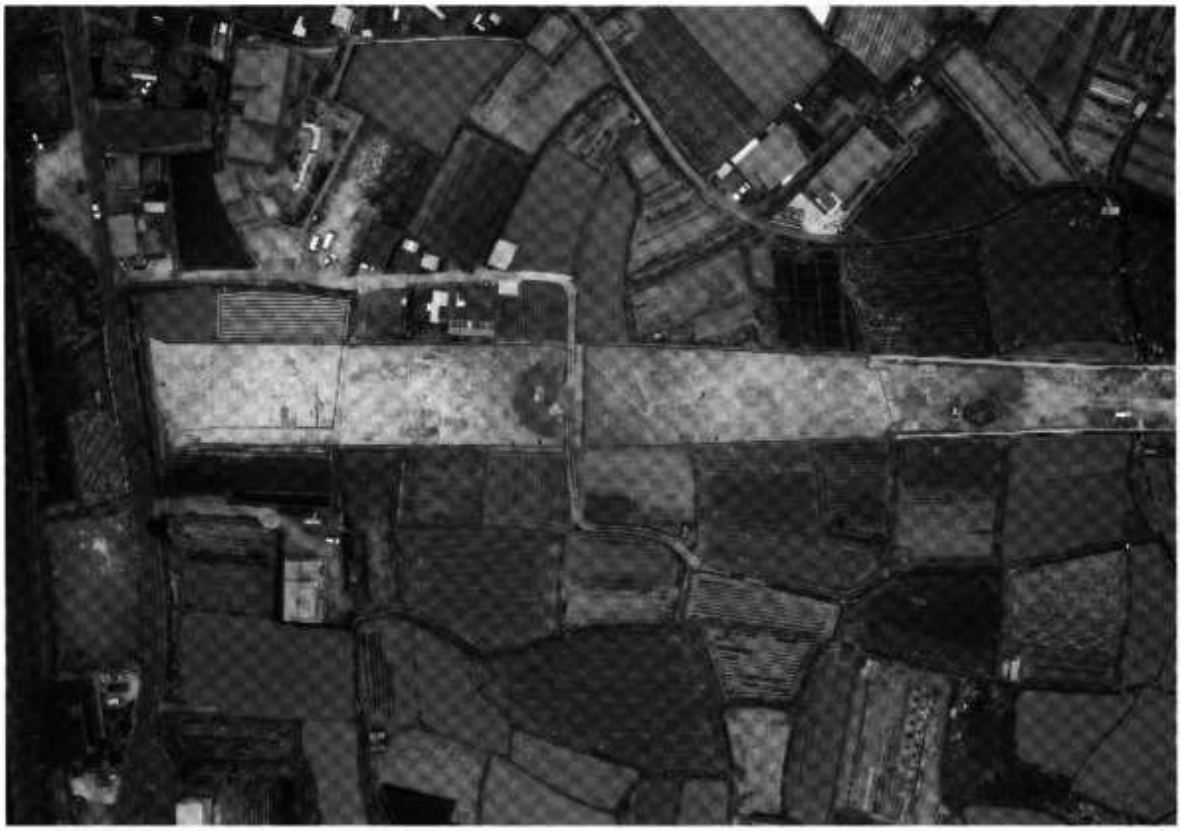


SD11（南東から）



鋤溝01（北西から）

PL.39　第3調査区　全景



（真上から）

（海側から）

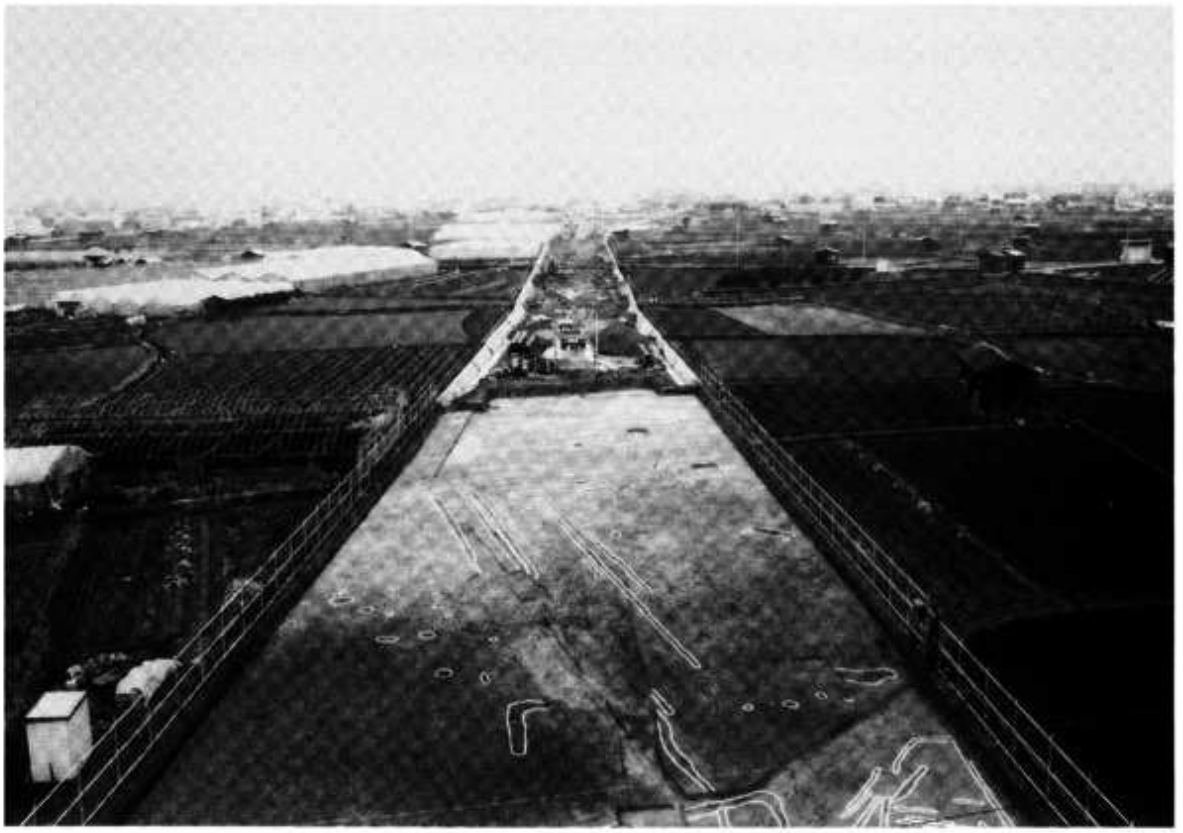
PL.40　第3調査区　全景

A区（真上から）

B区（東から）

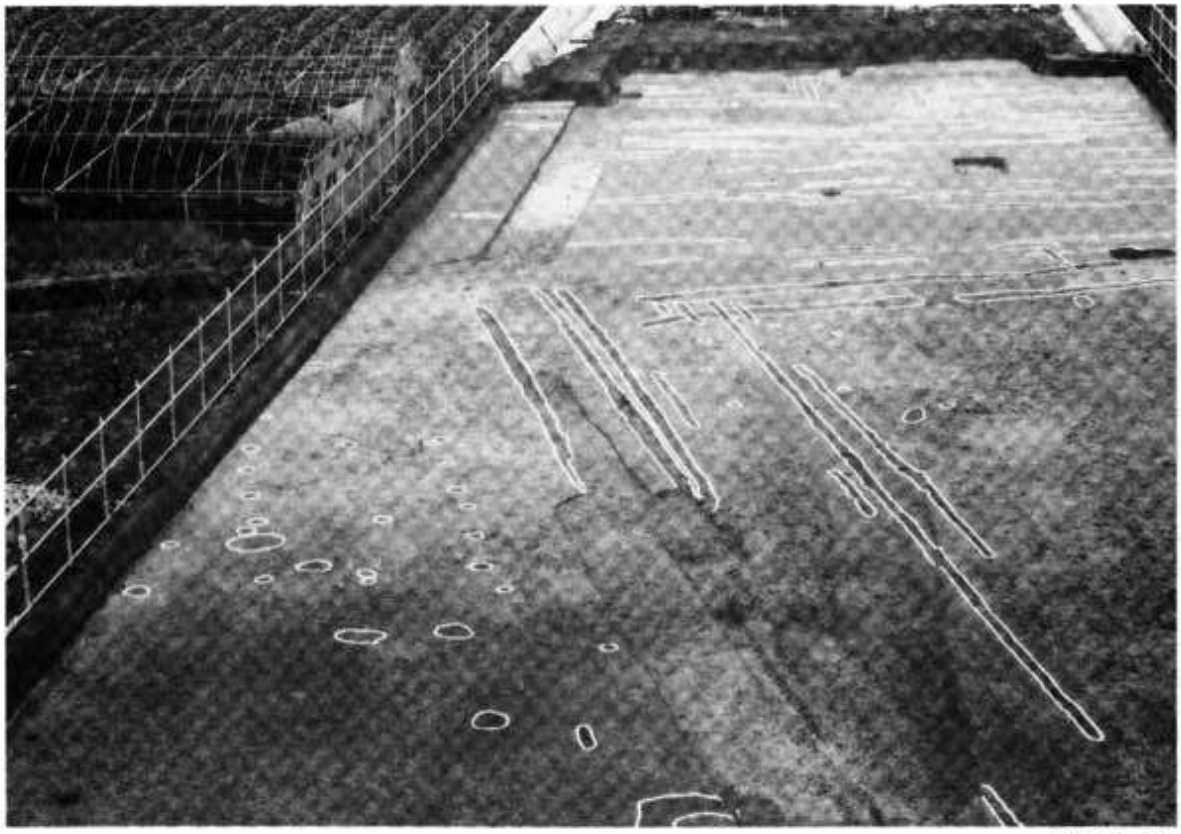
PL.41　第3調査区　A区　第I面

（山側から）

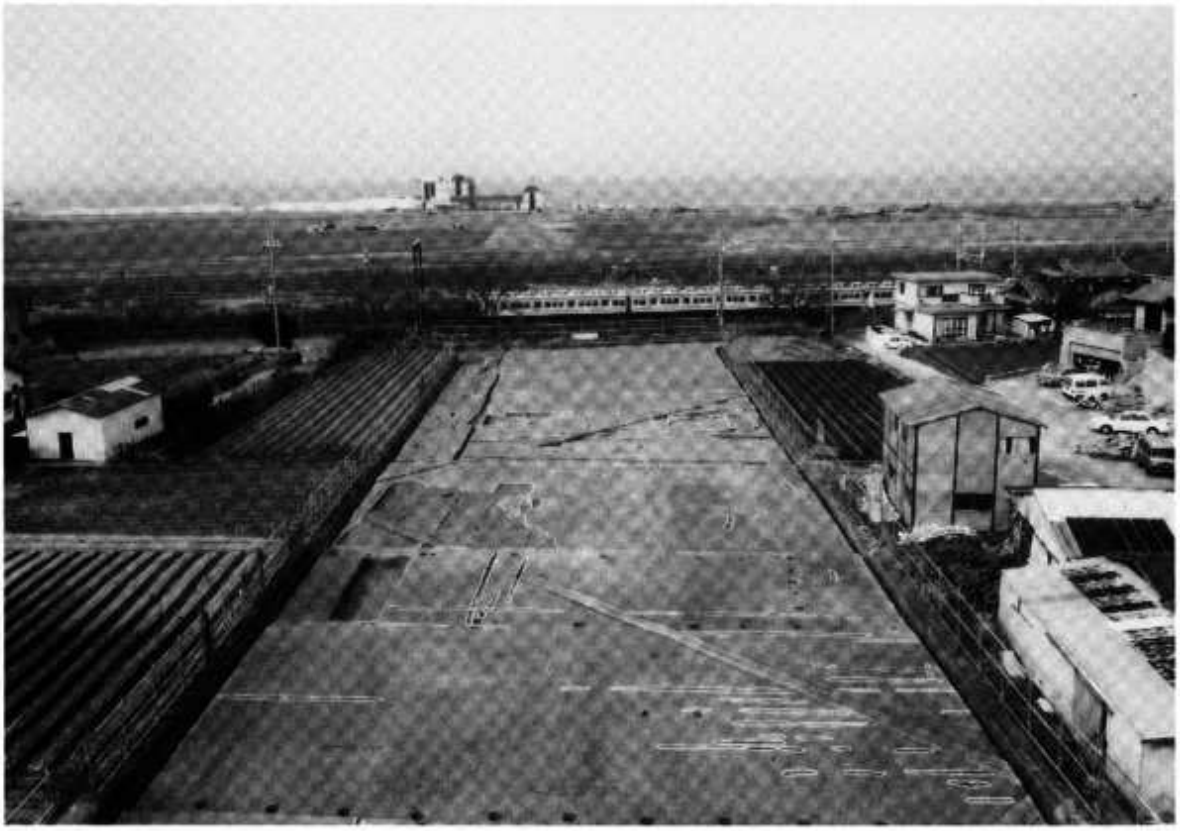


（海側から）

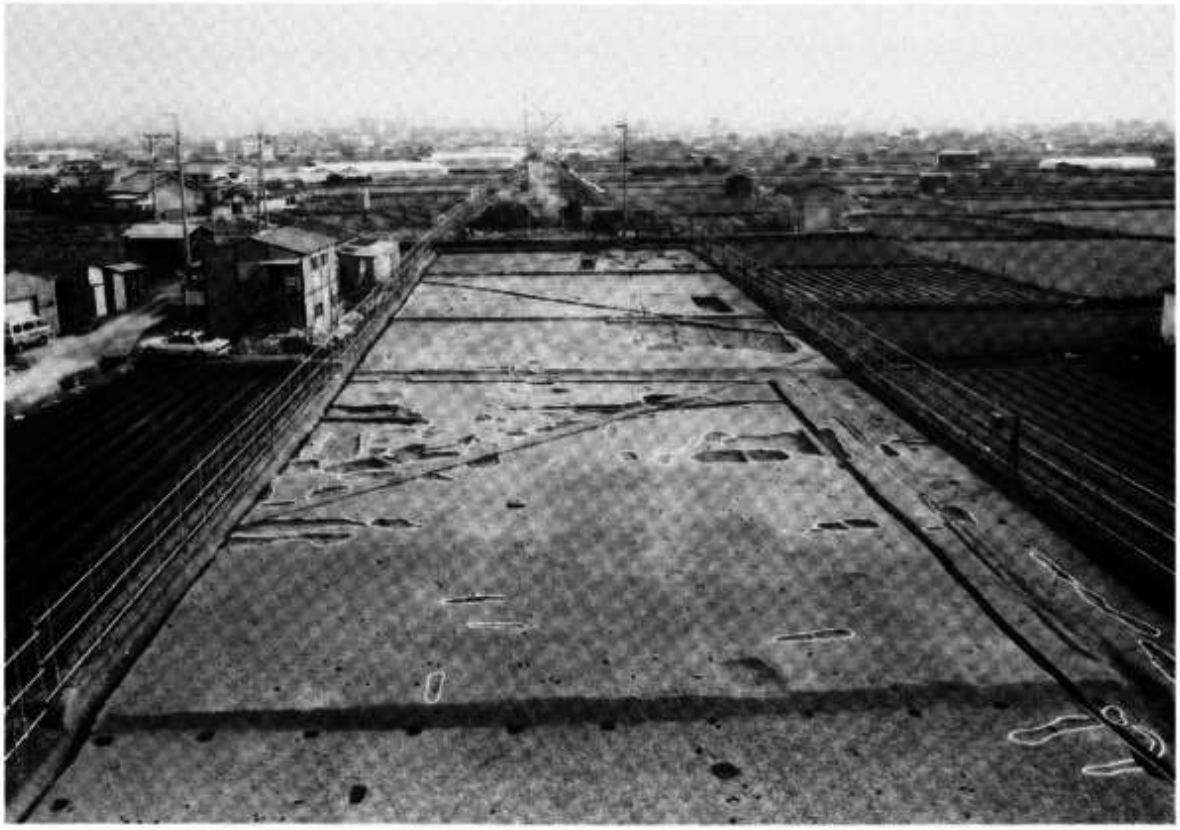
（北から）



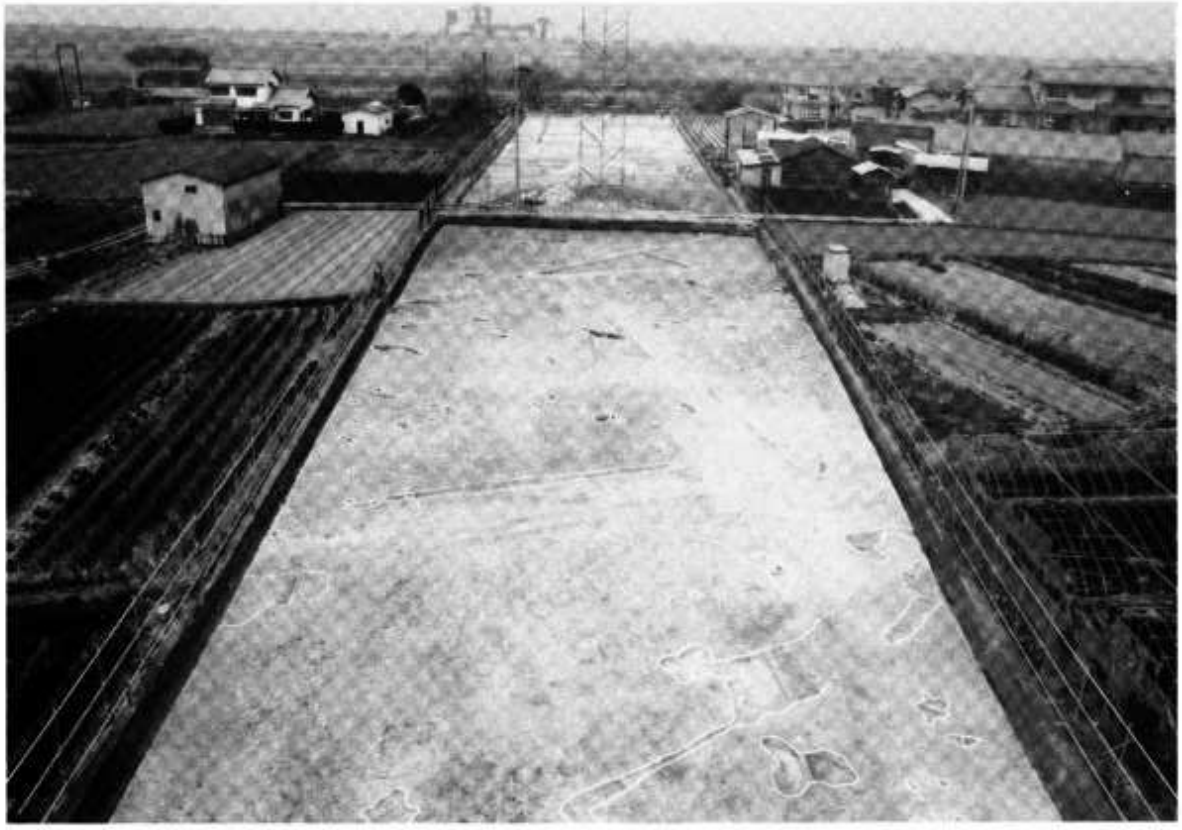
（北西から）



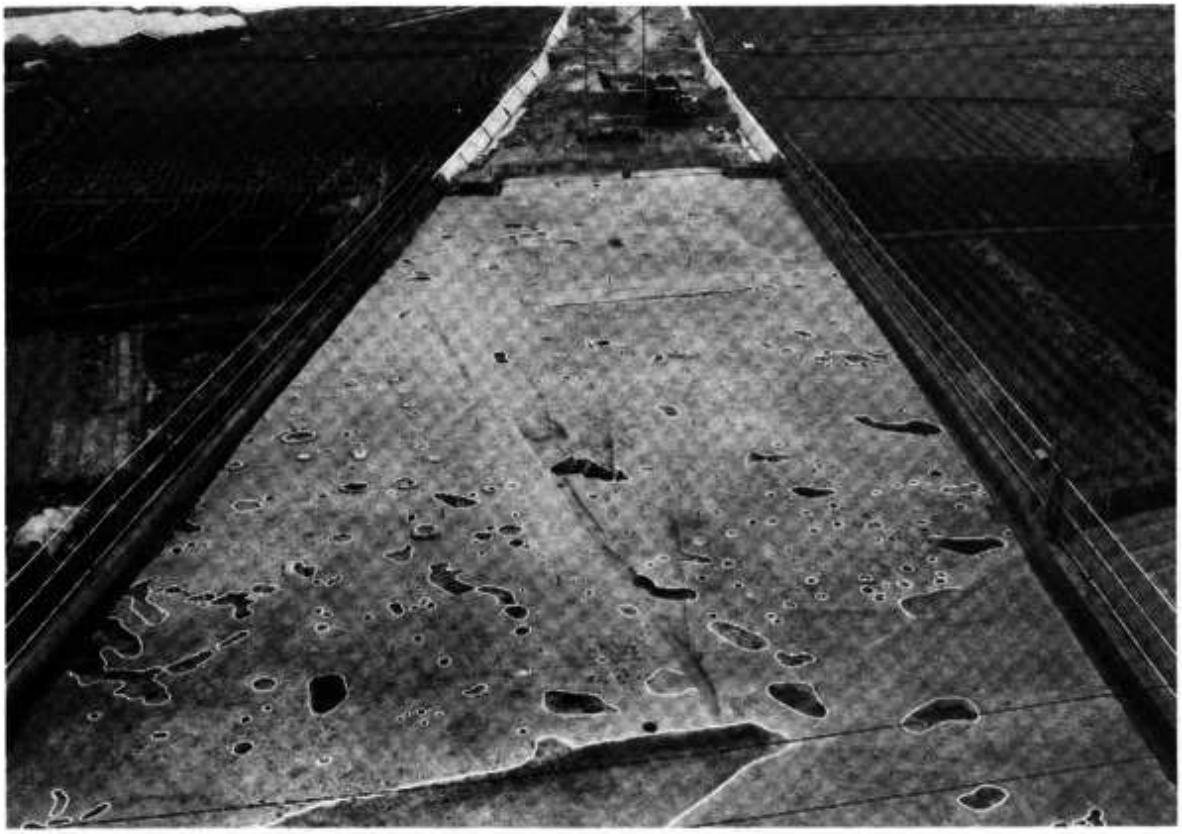
（山側から）



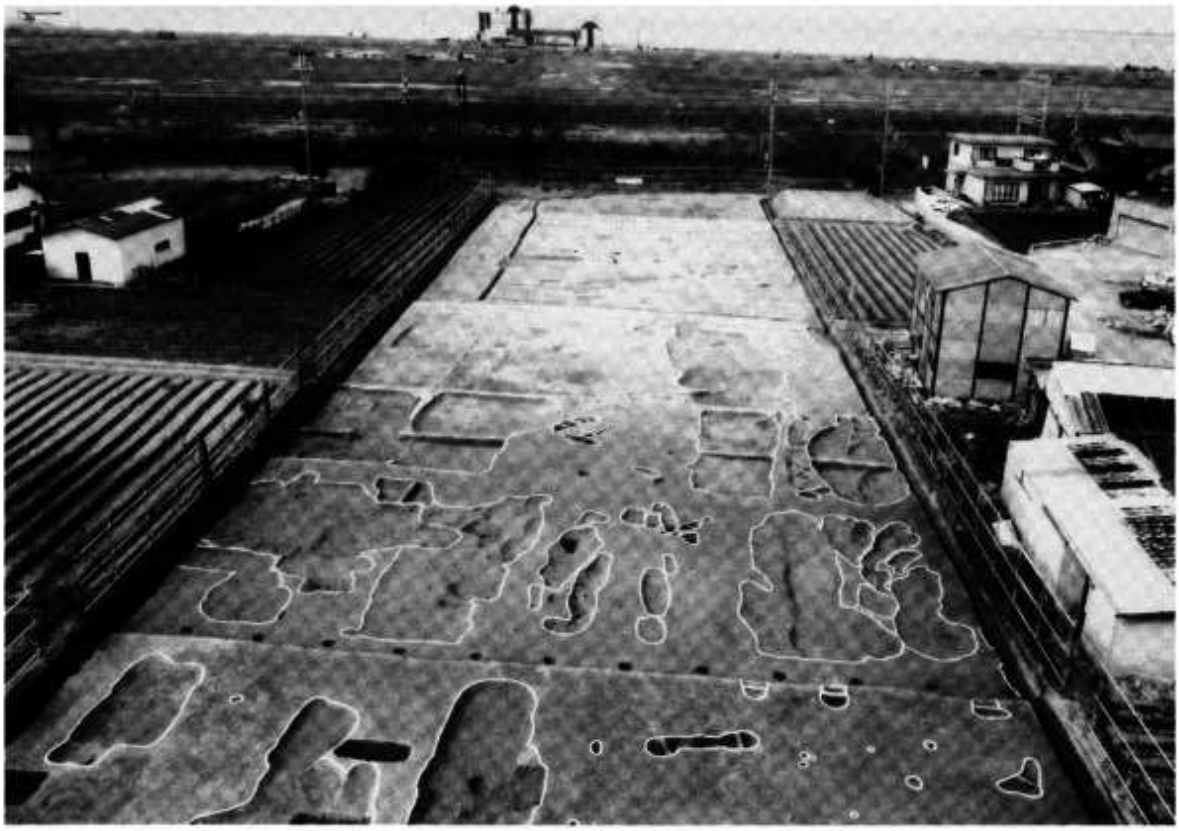
（海側から）



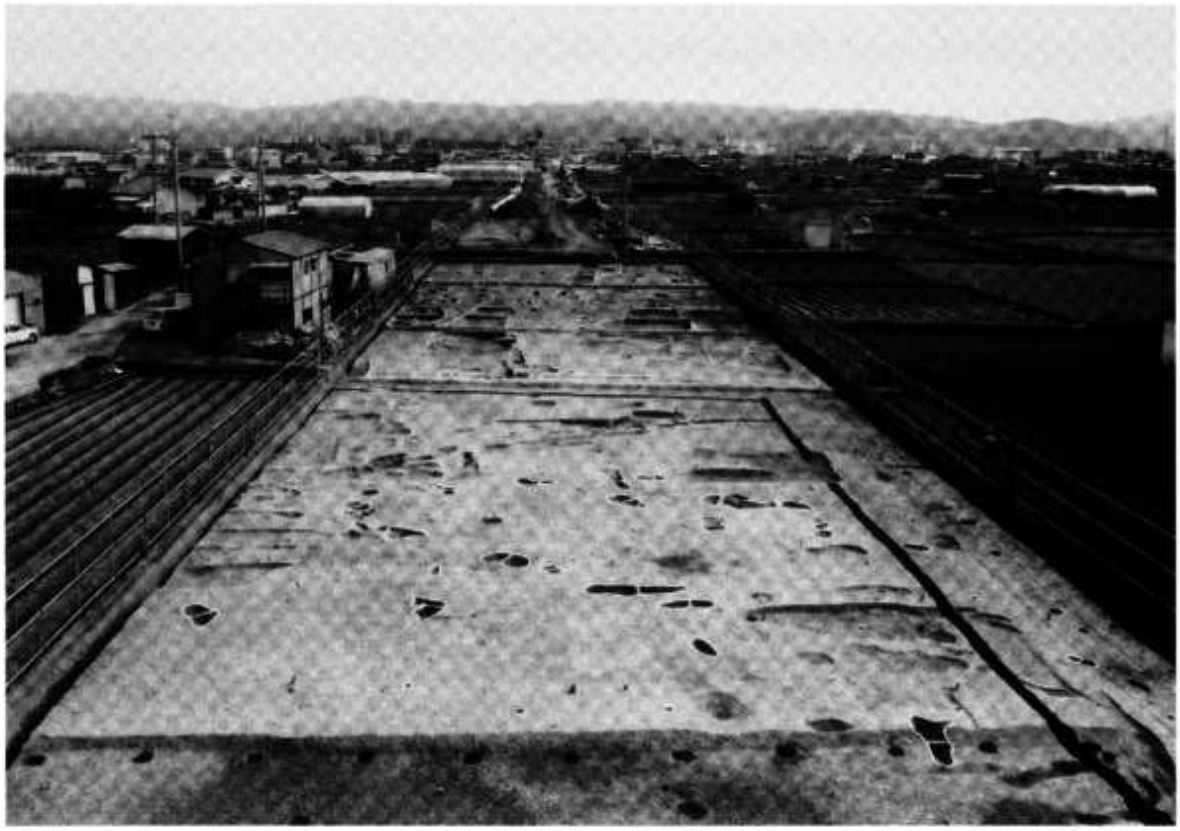
（山側から）



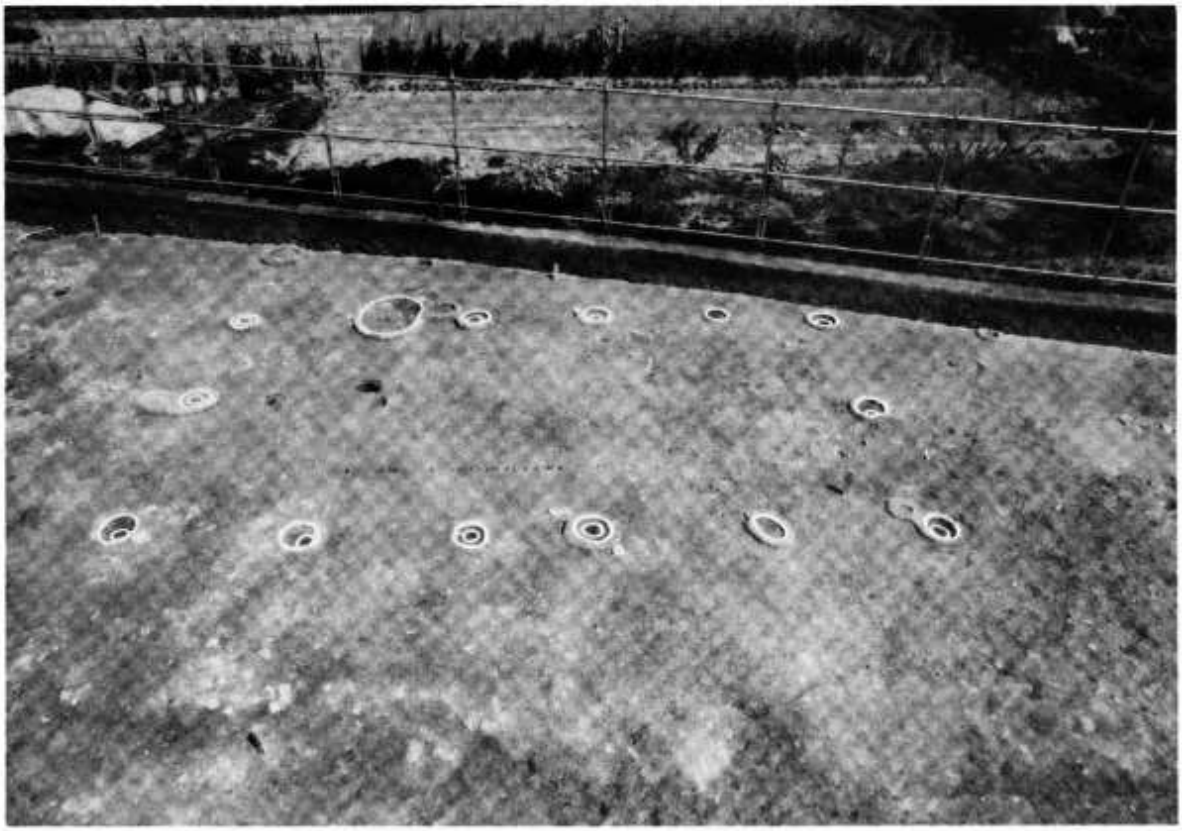
（海側から）



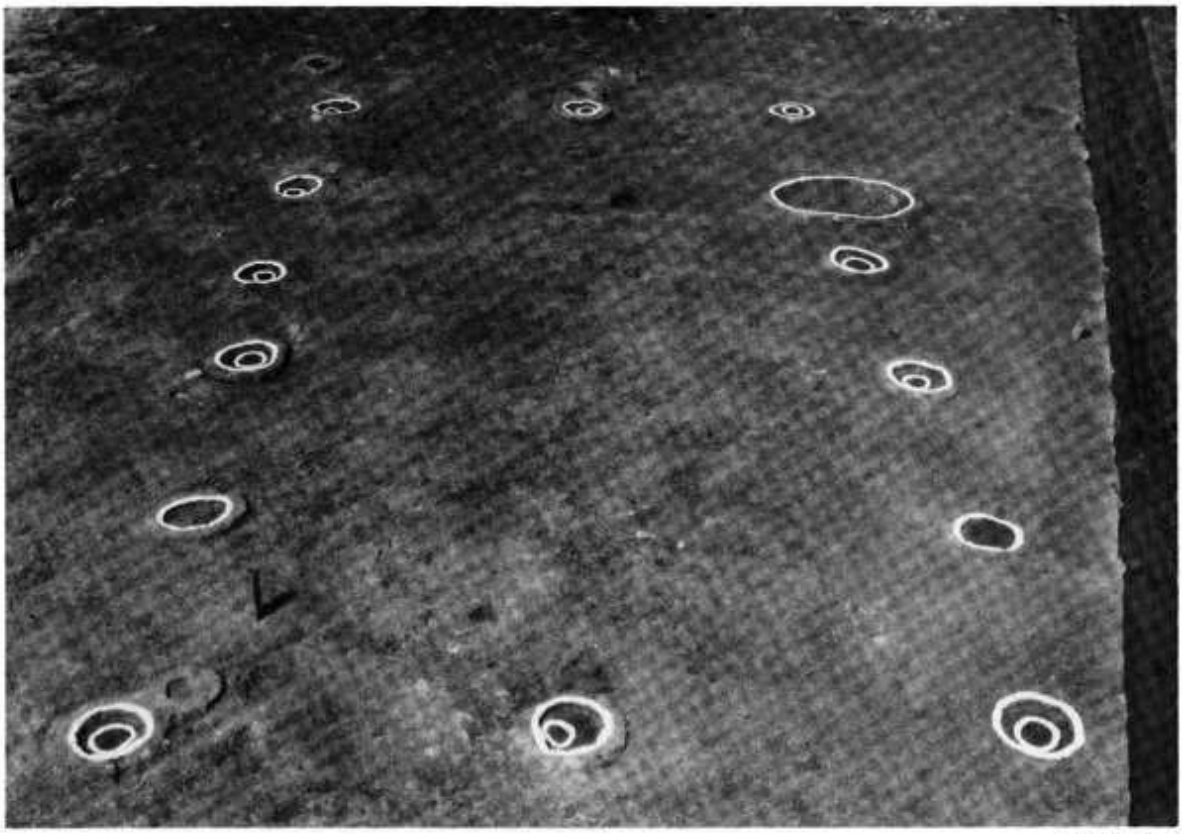
（山側から）



（海側から）

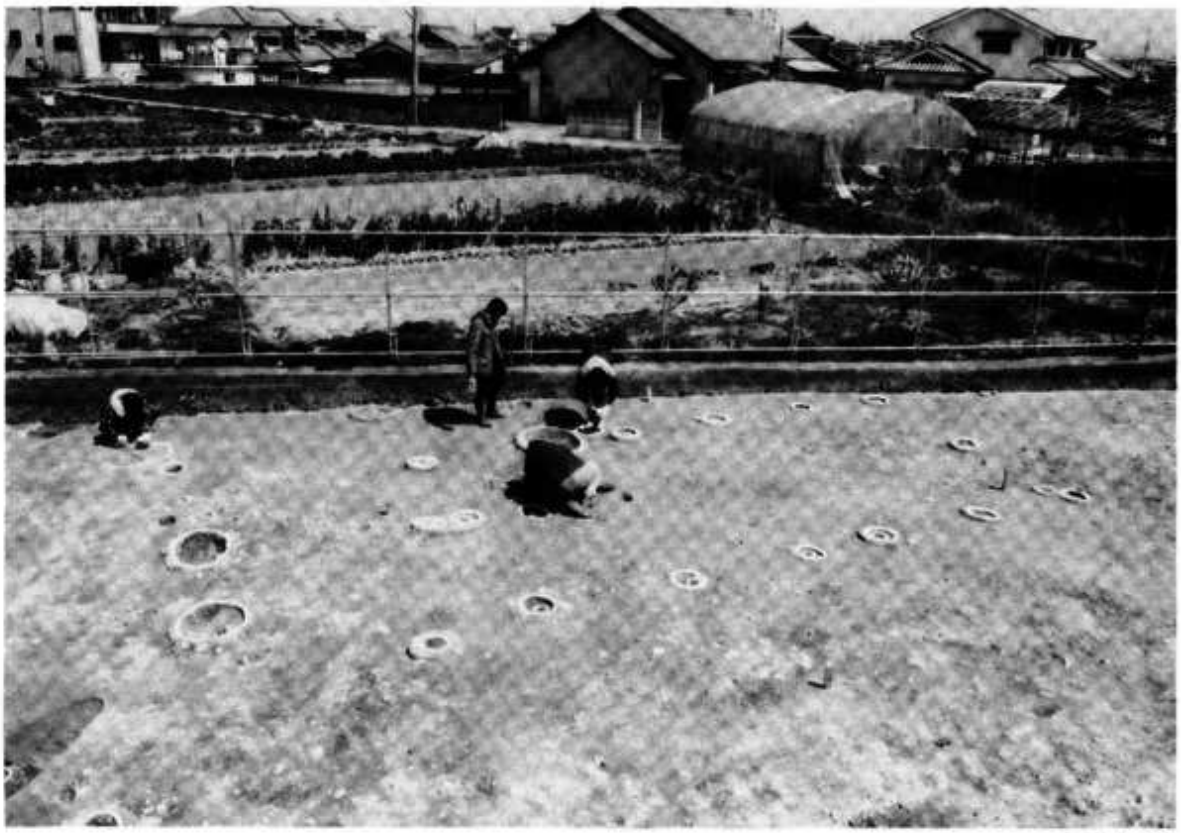


（南西から）

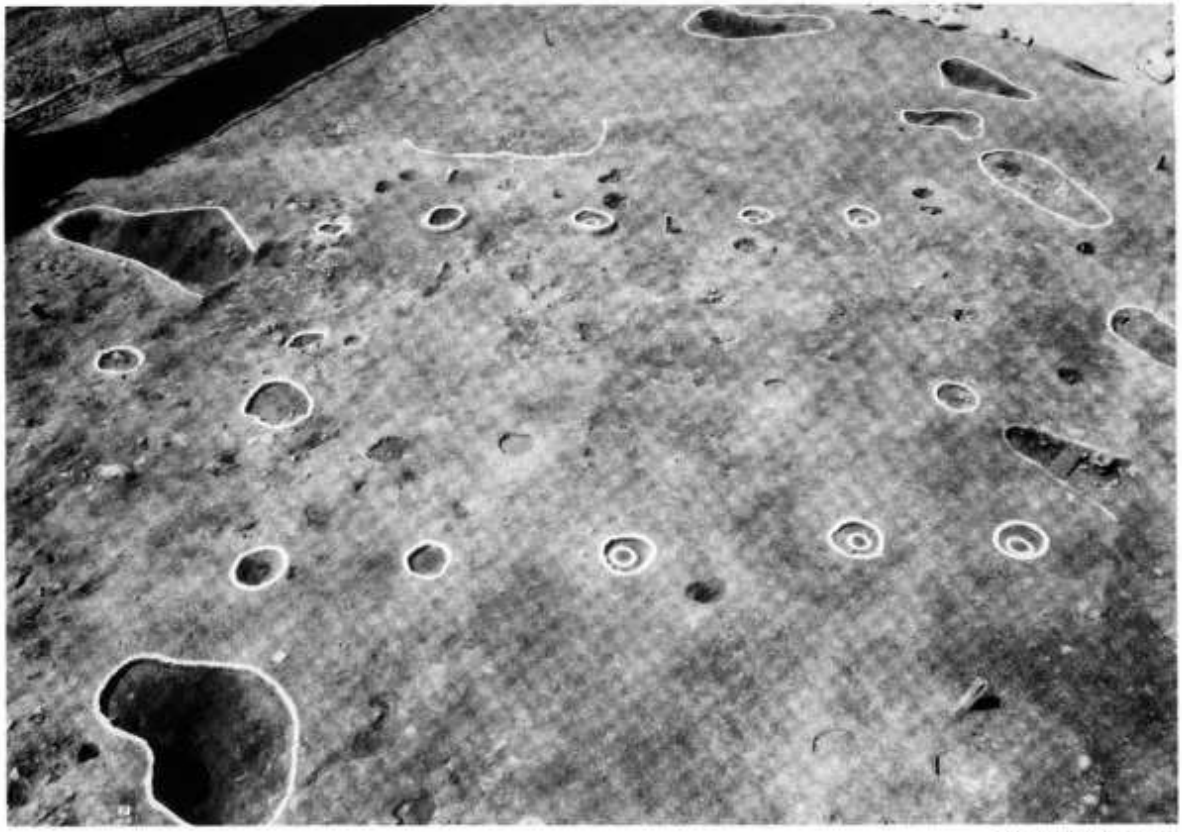


（南東から）

（北西から）

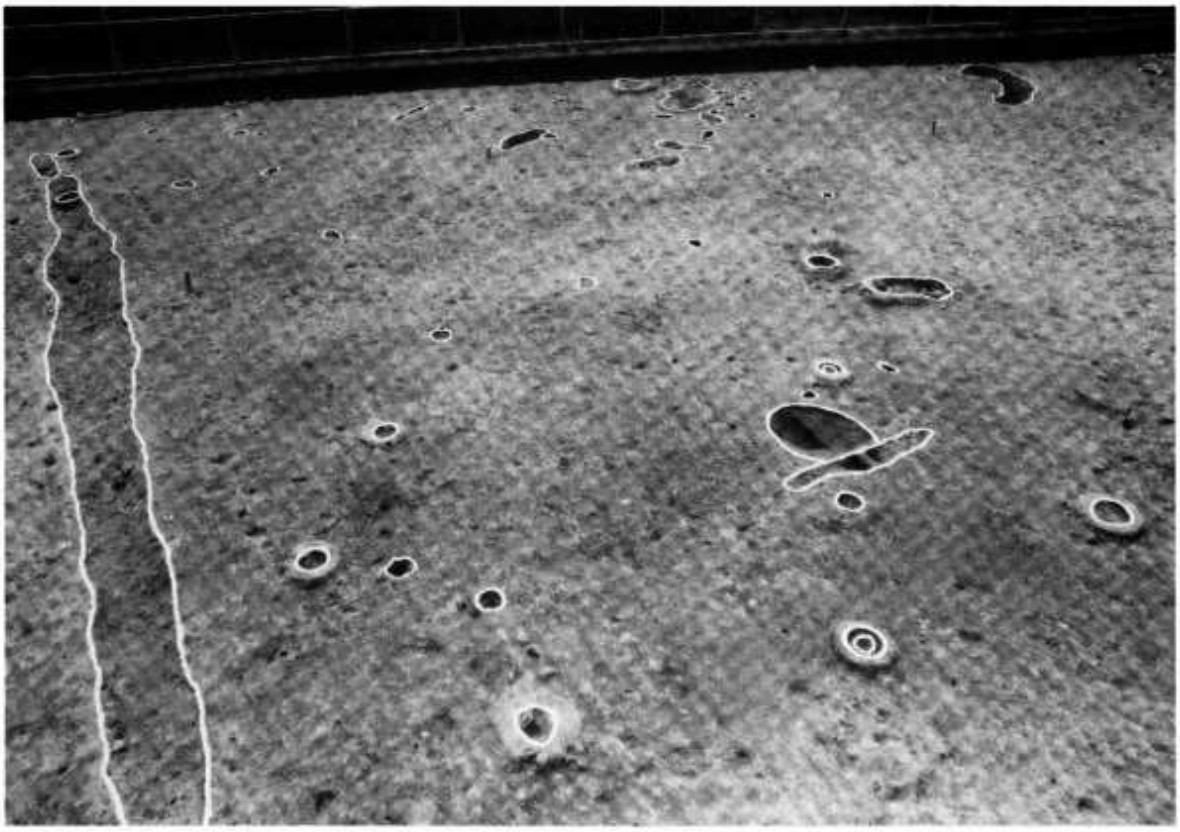


（西から）

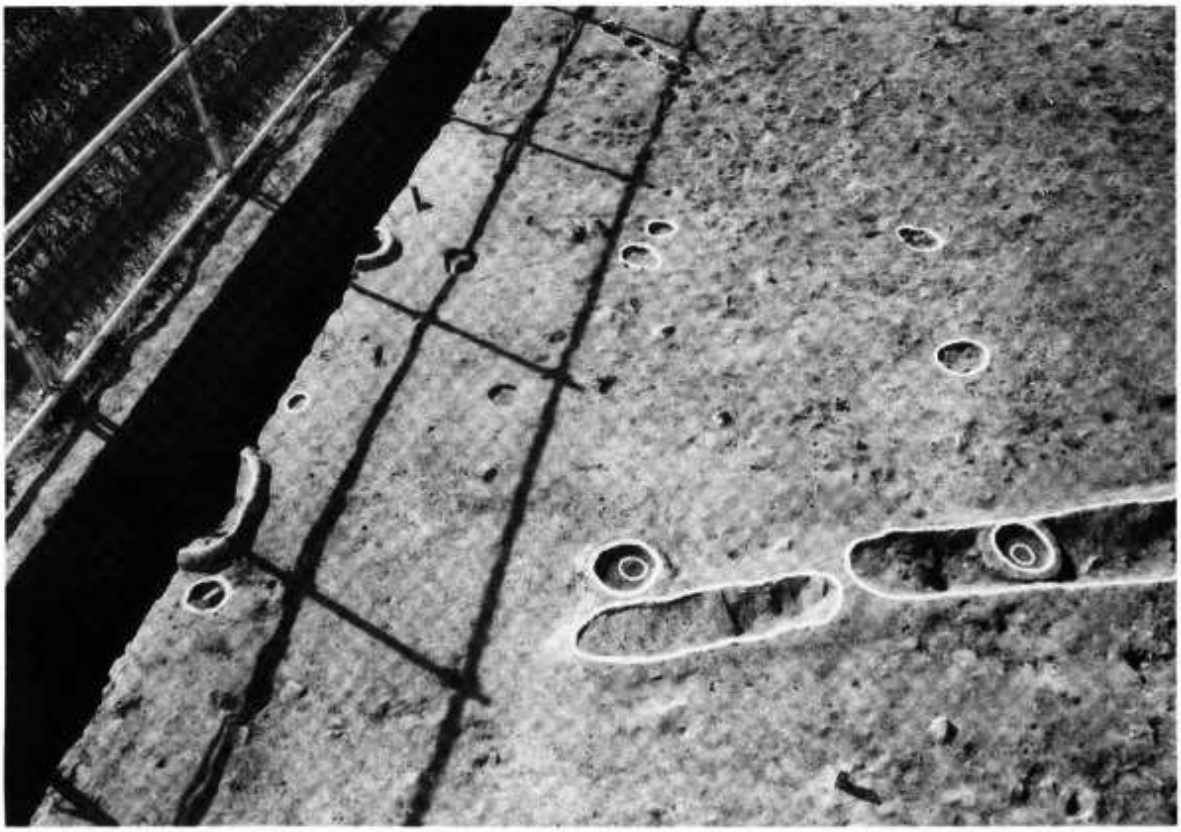


S B02（西から）

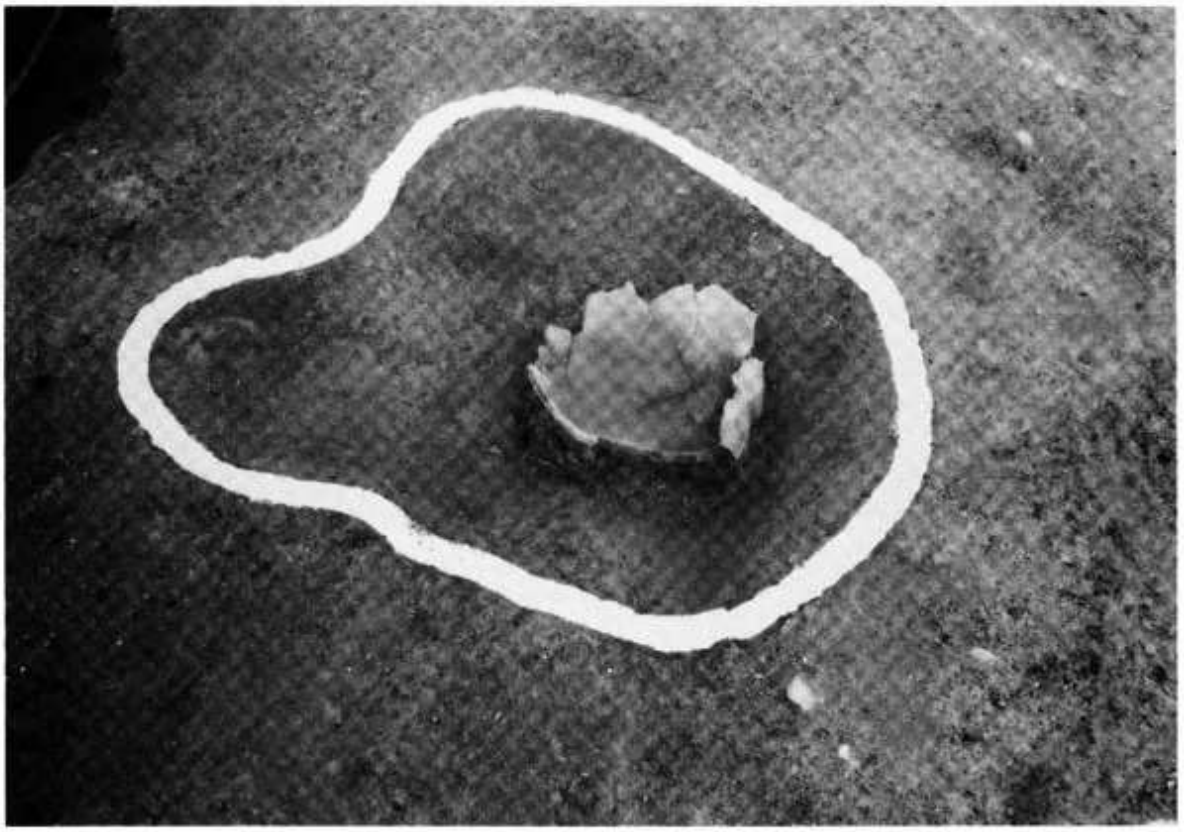
S B03（北東から）



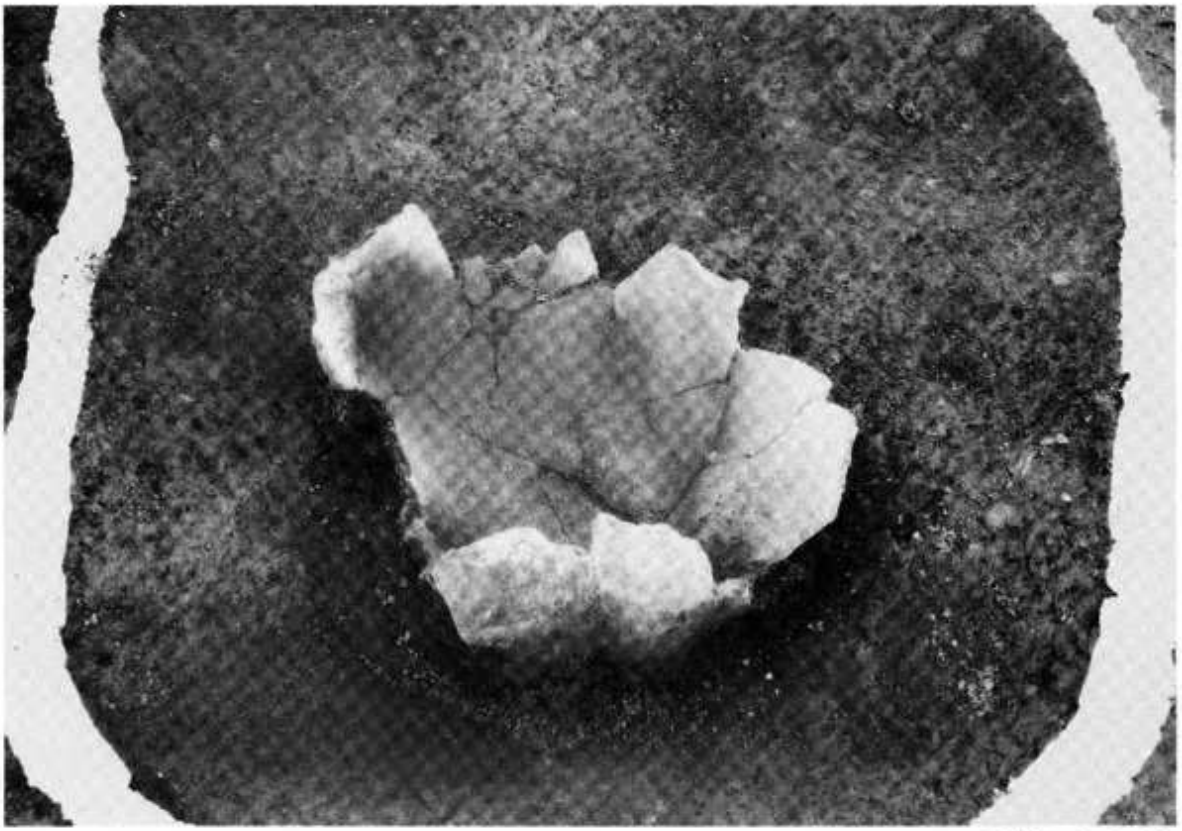
SB01（北東から）



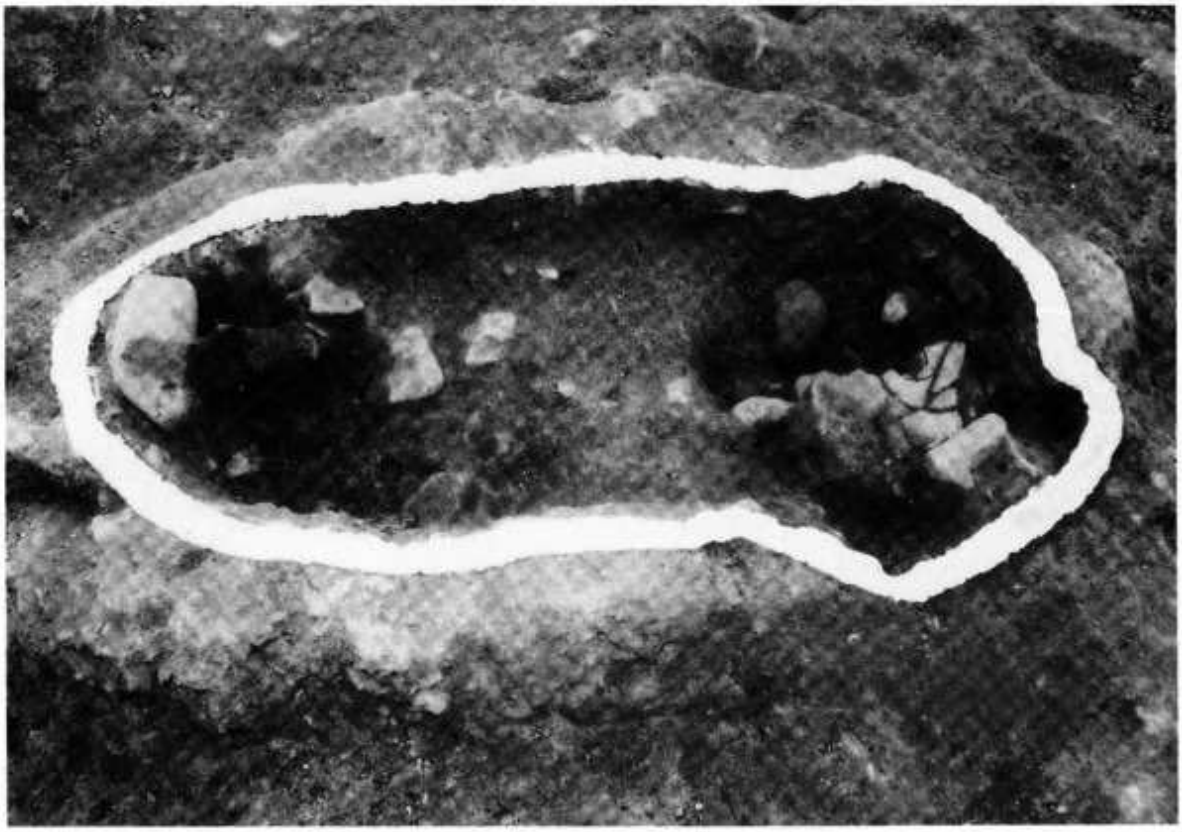
SB05（南東から）



（東から）

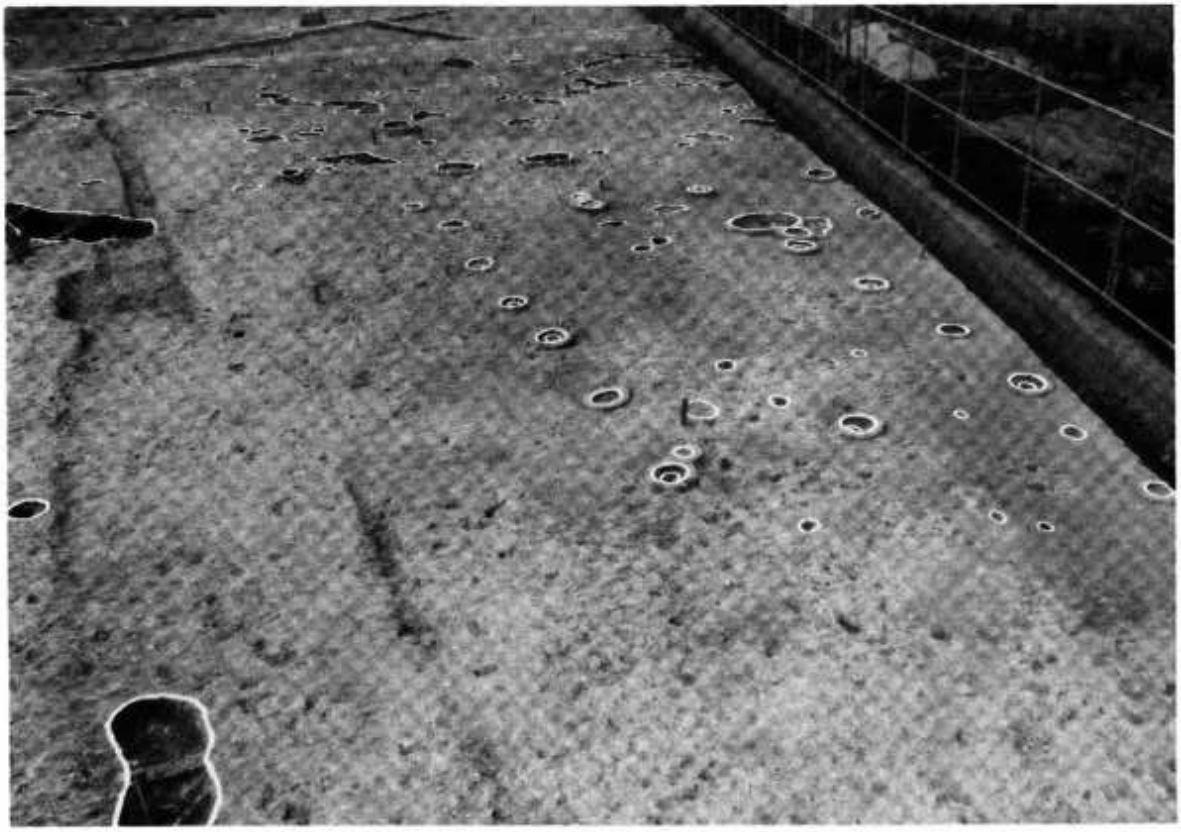


同詳細（西から）

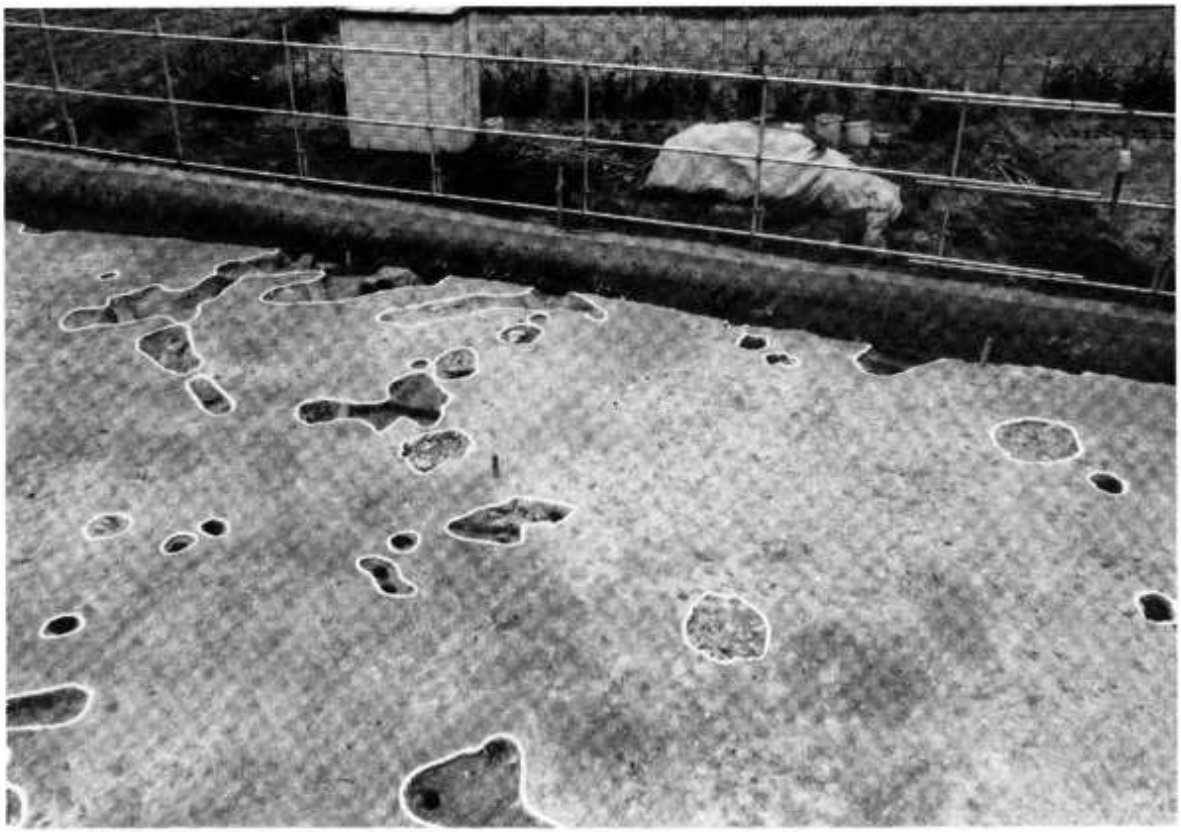


（北東から）

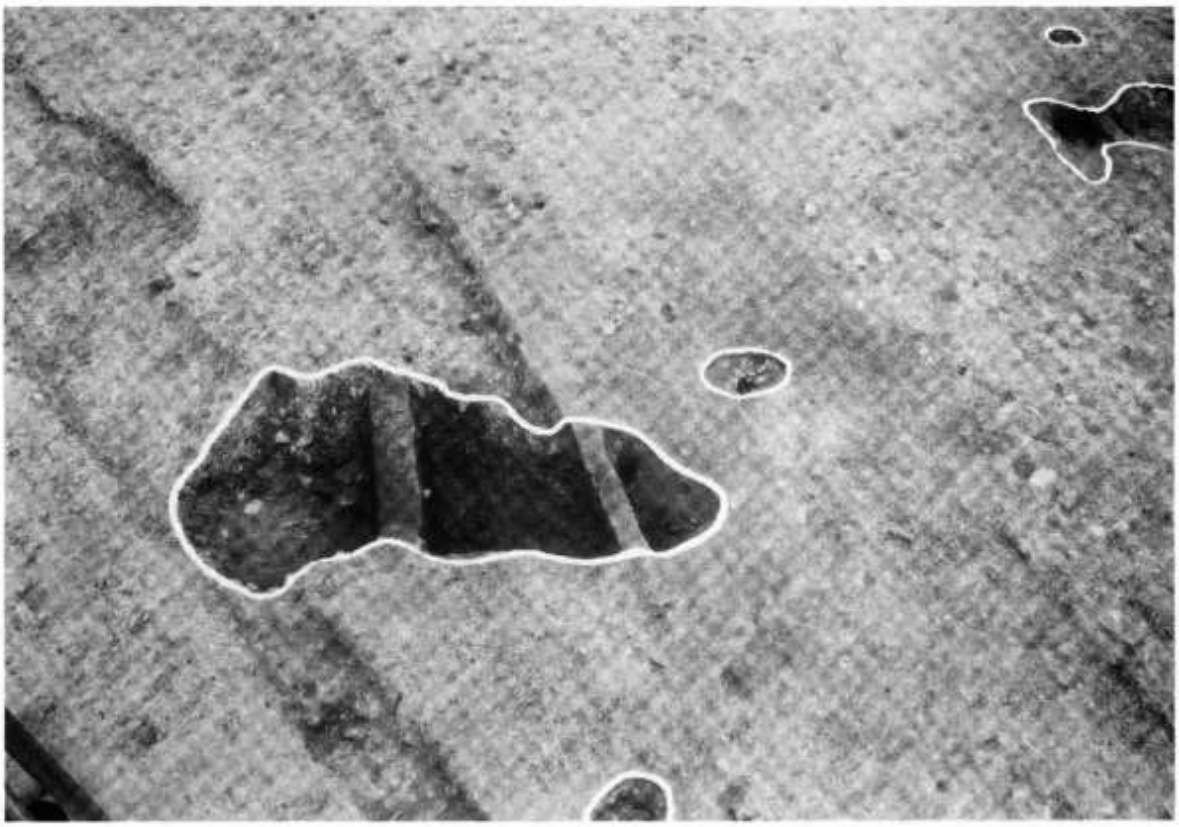
（北西から）



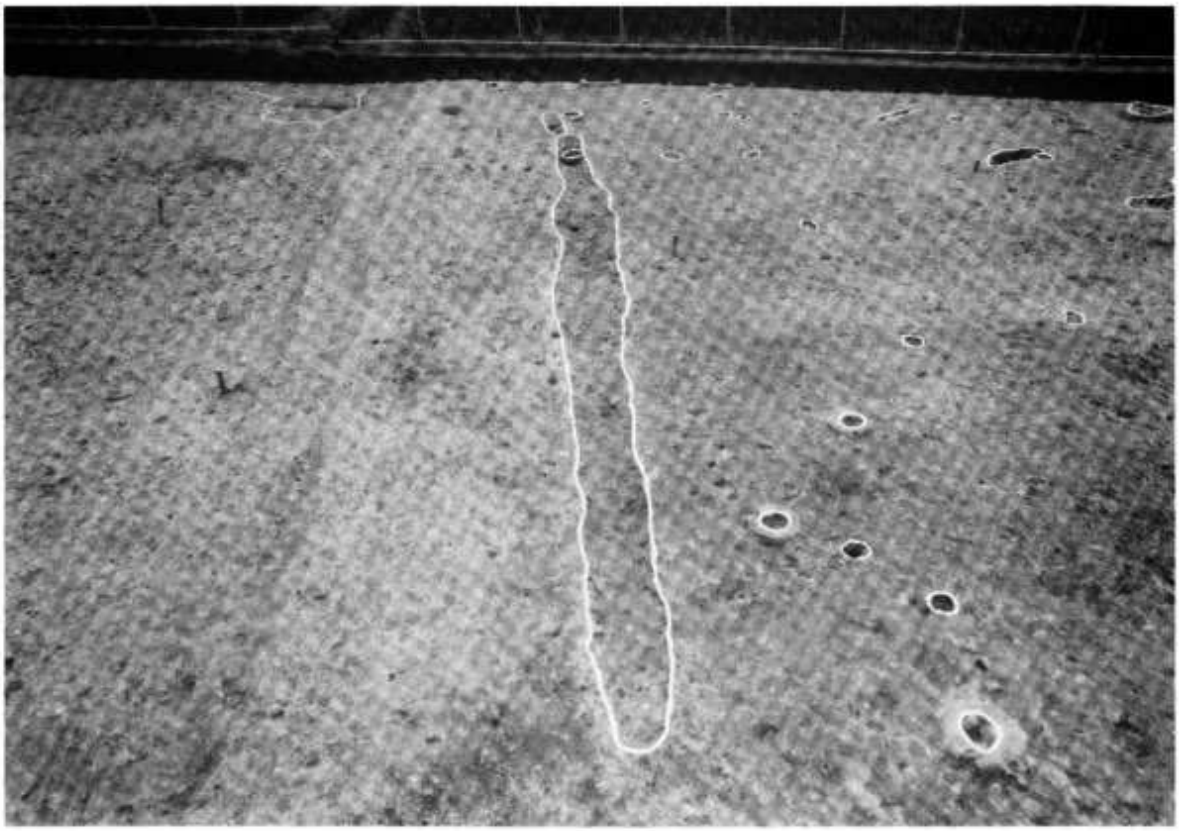
（南東から）



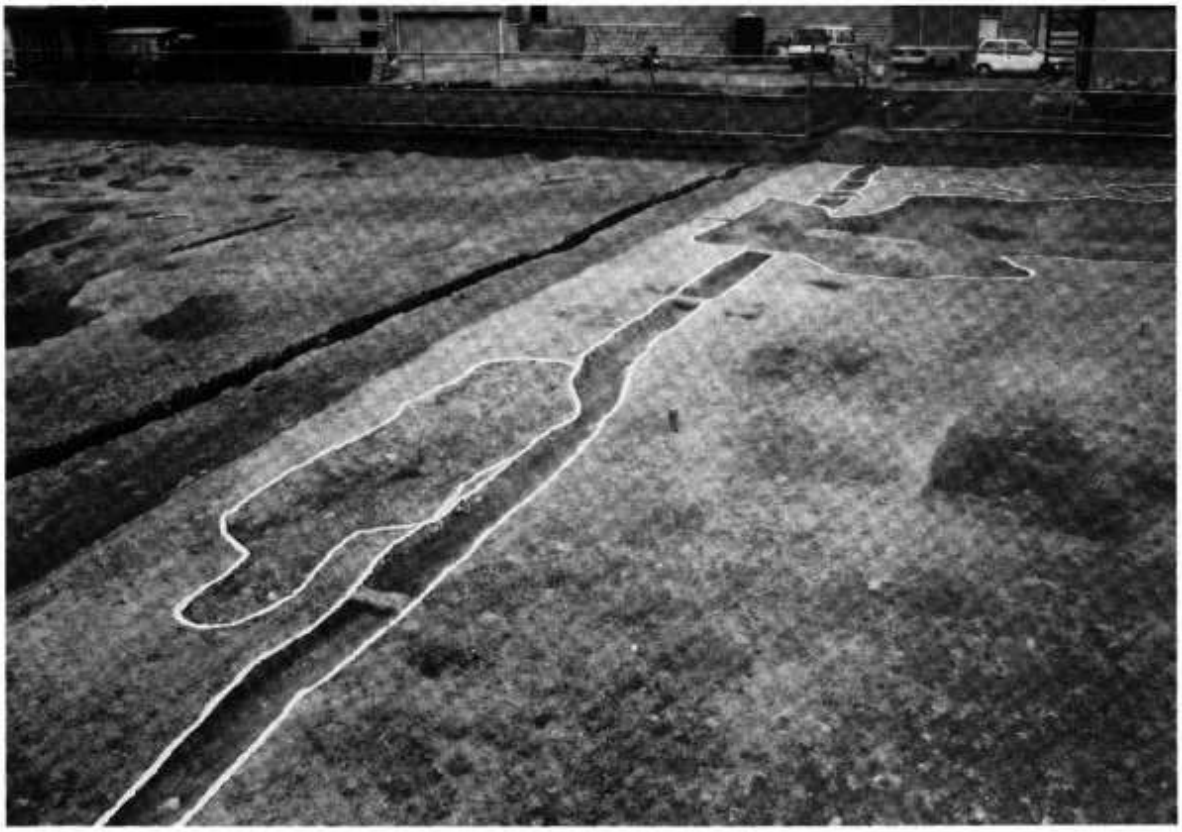
（南から）



S K13（北から）

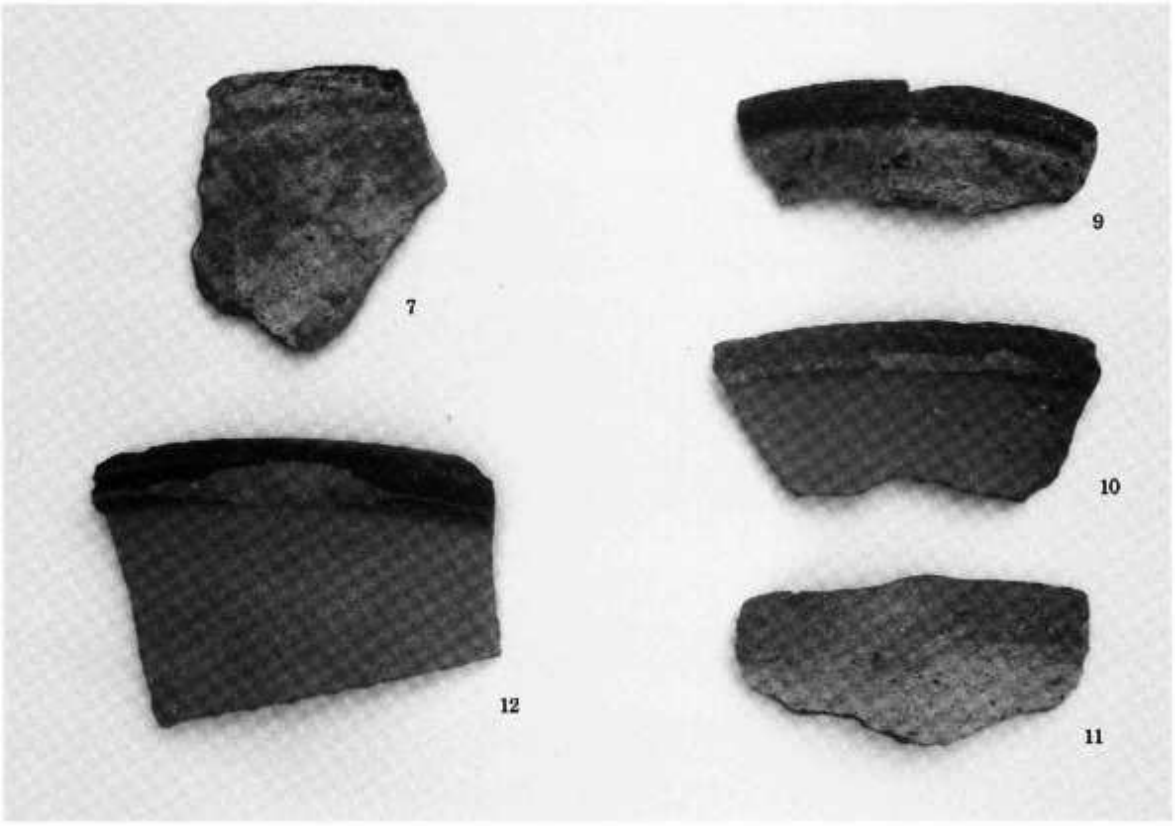


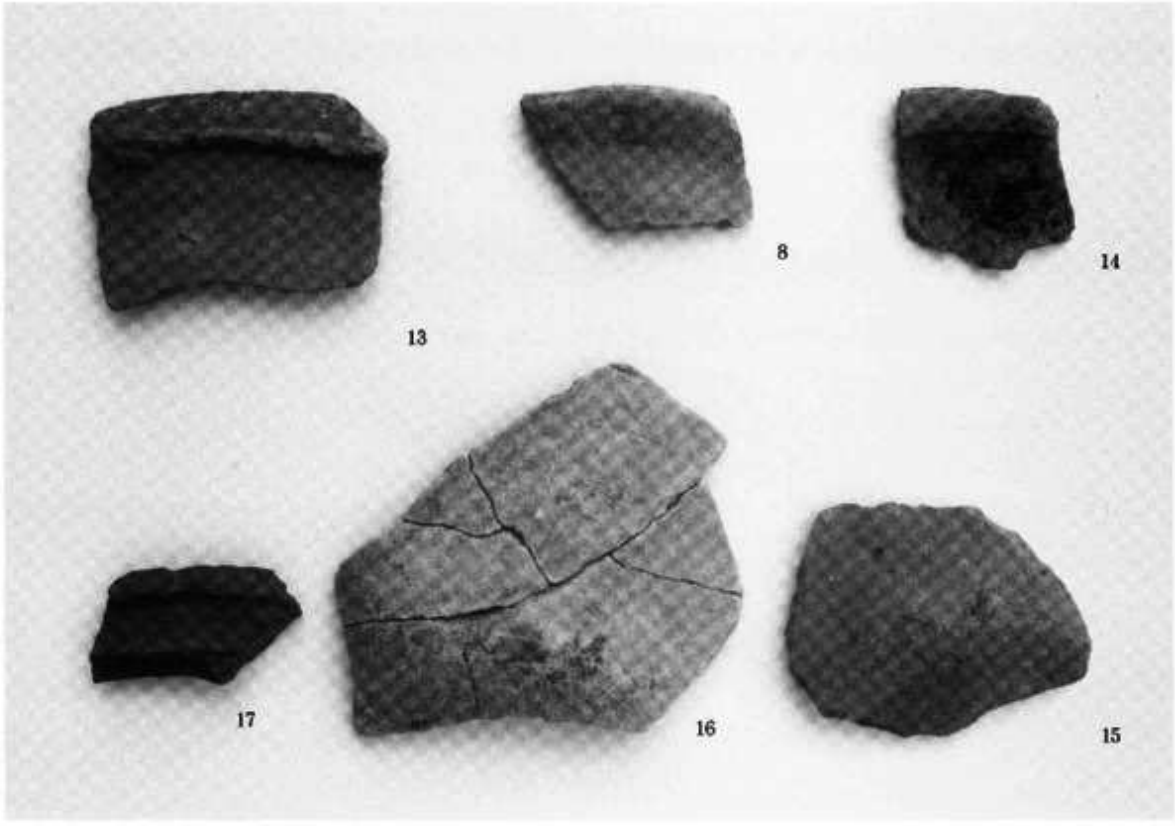
S D01（南東から）

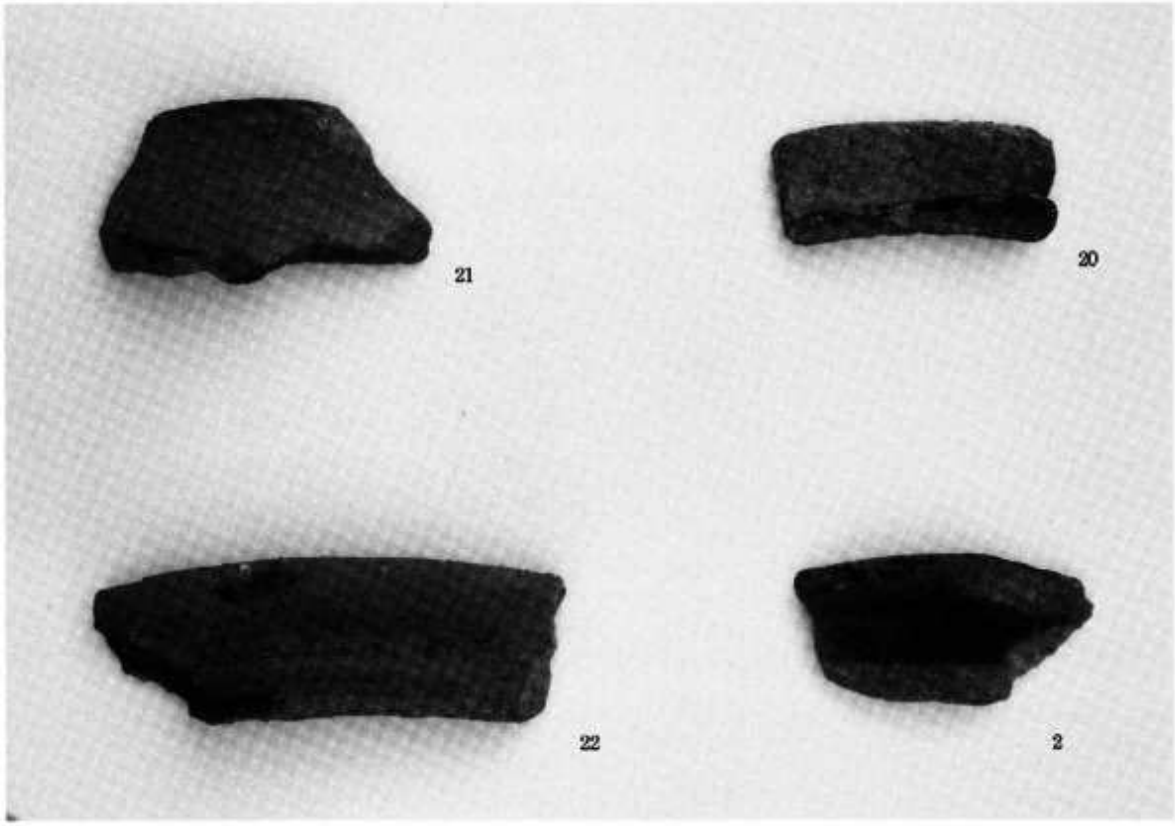


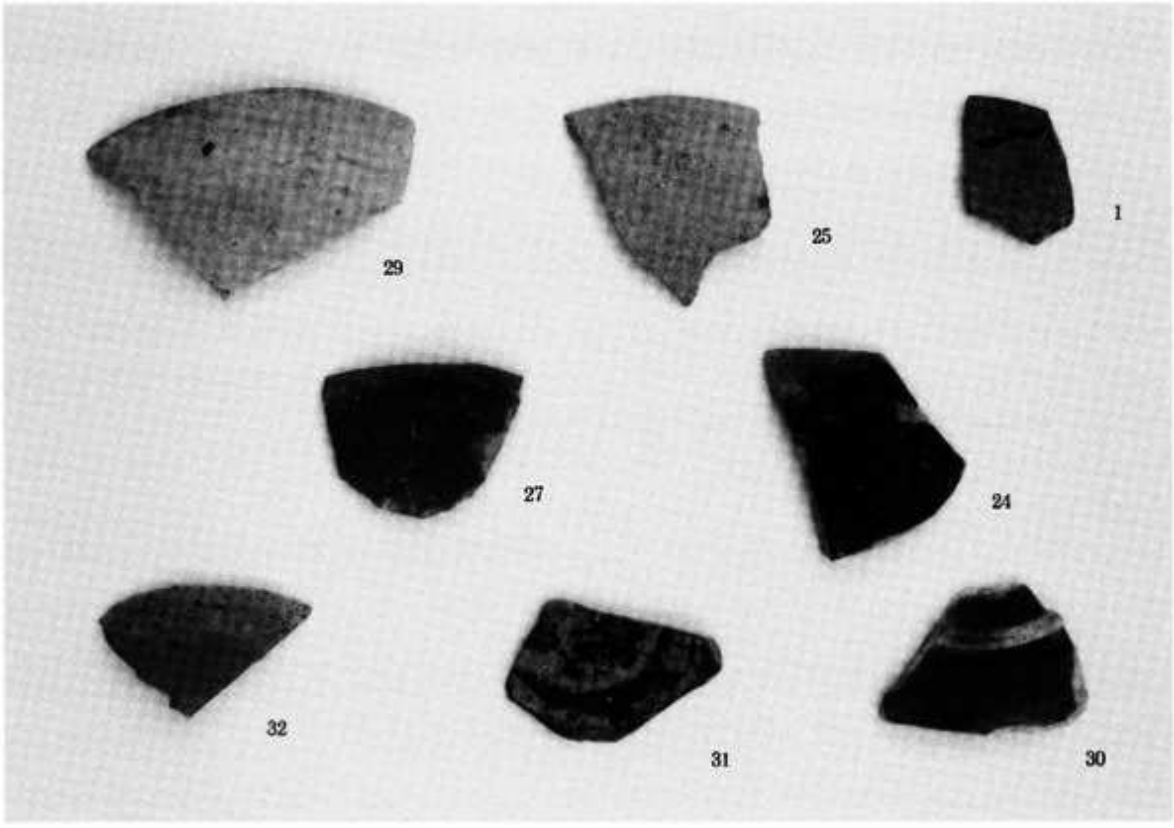
SD02（北から）

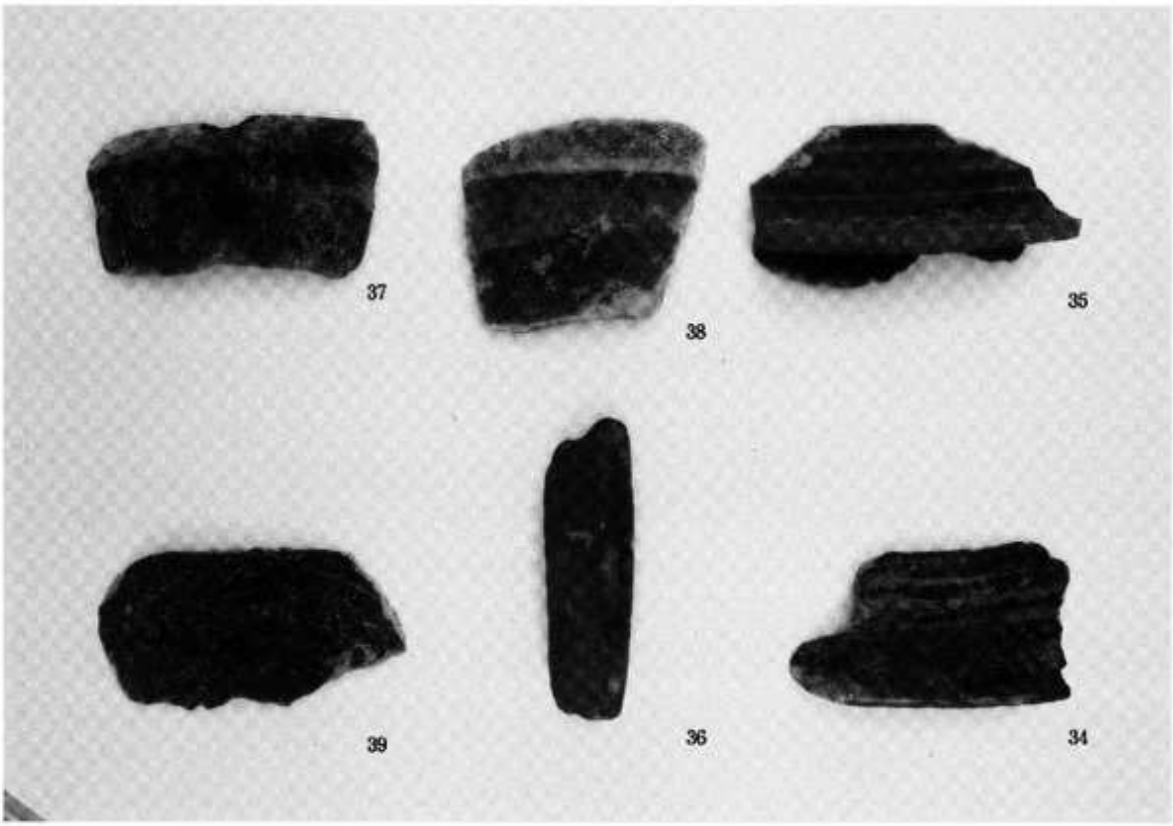
B区谷地形（東から）

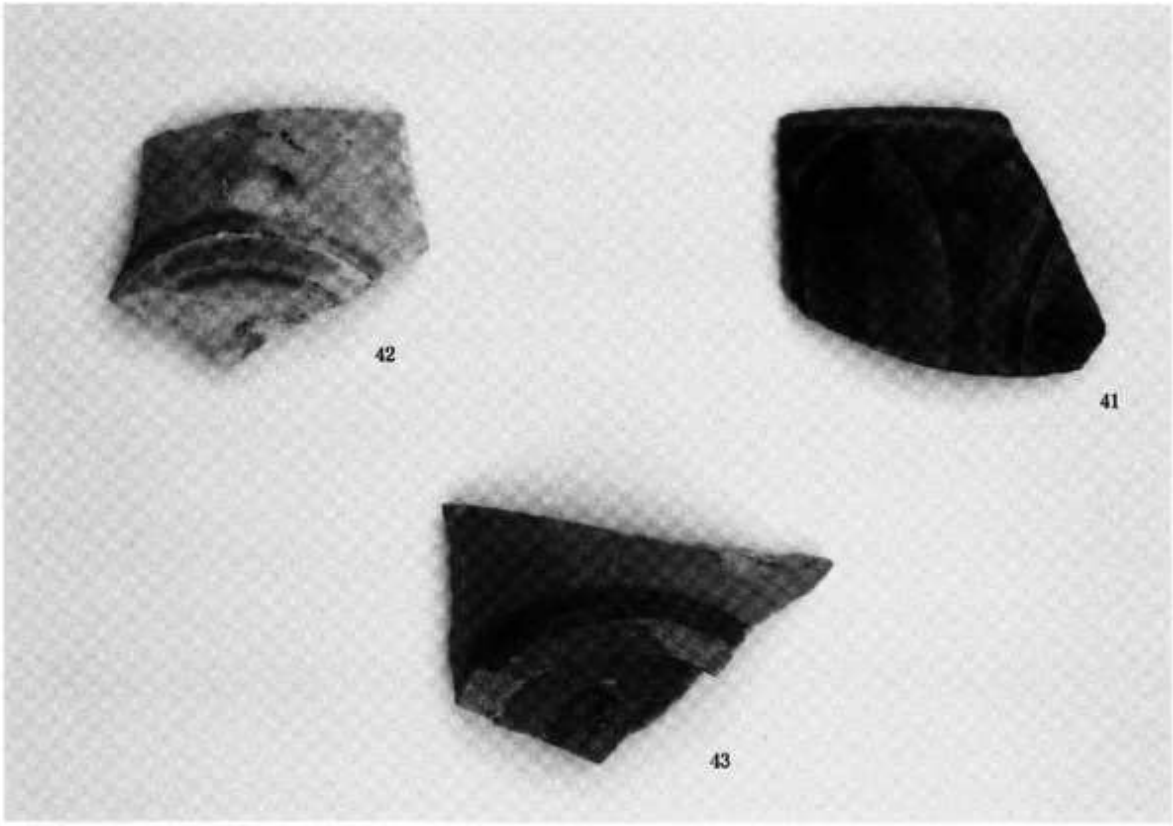

7
9
10
12
11

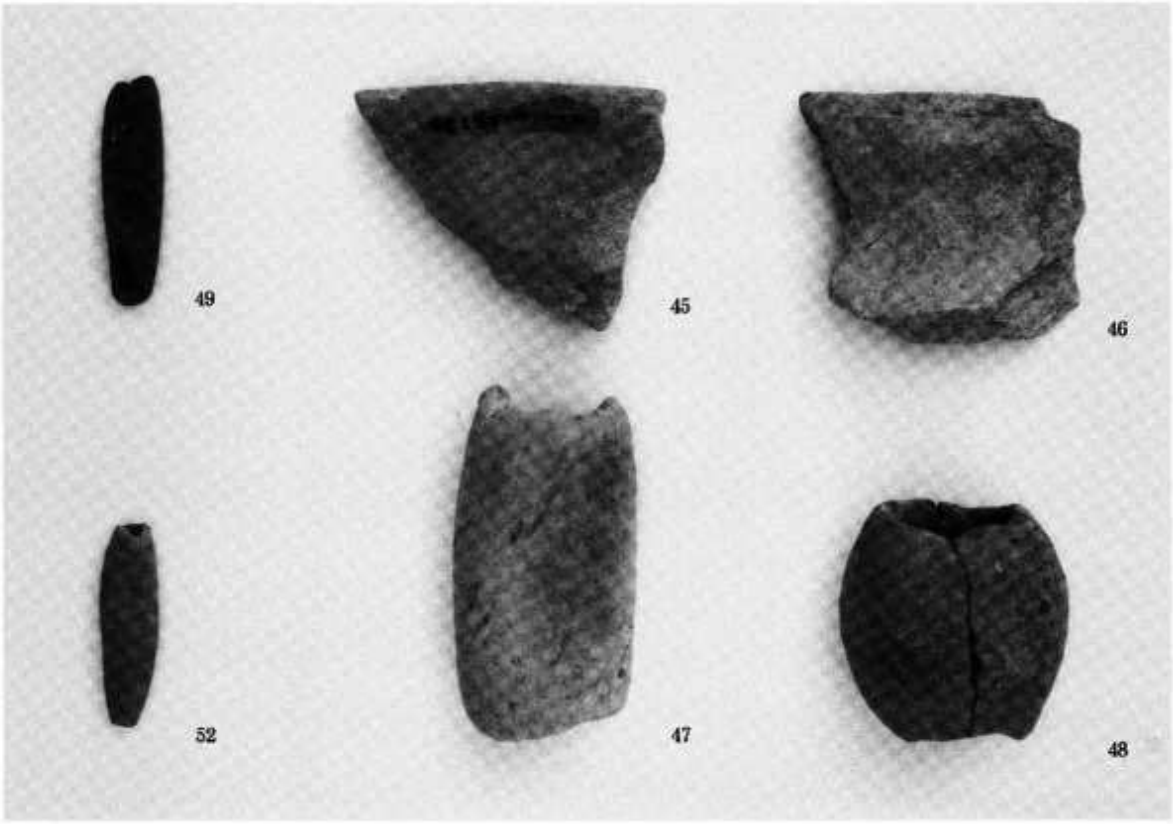

13
8
14
17
16
15

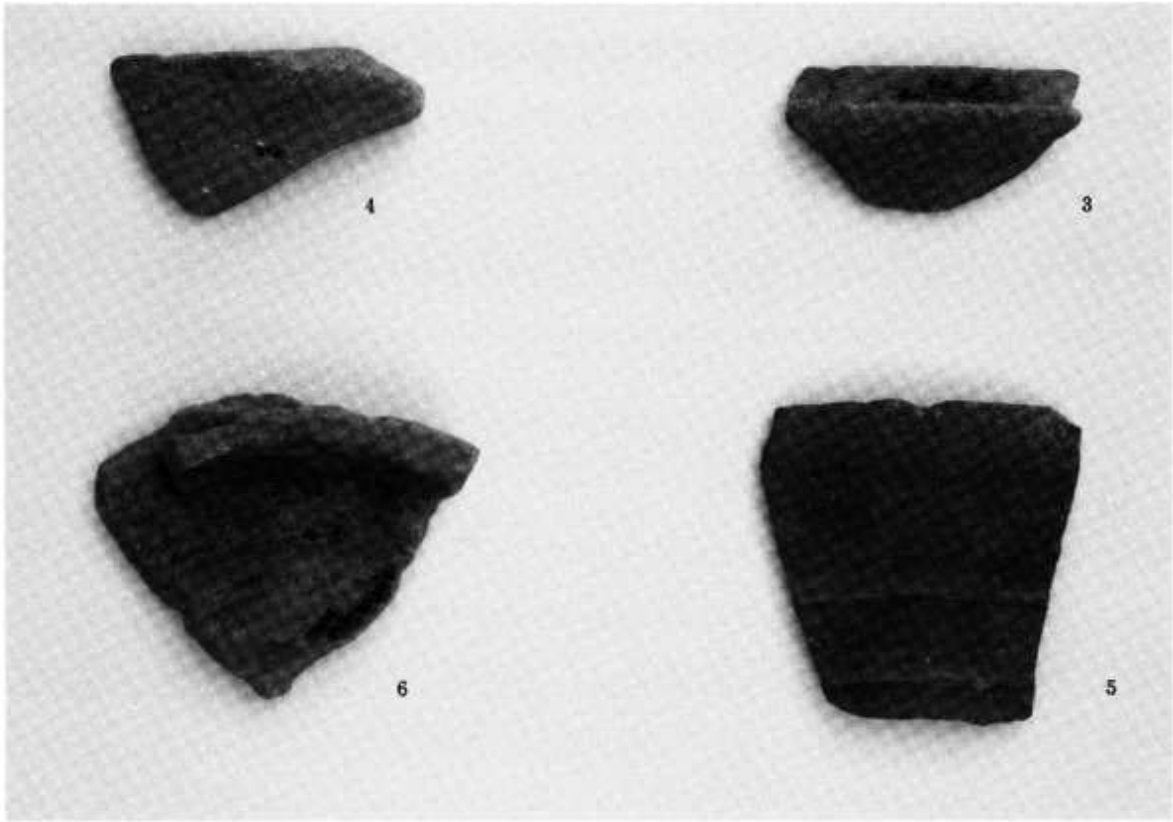

21
20
22
2

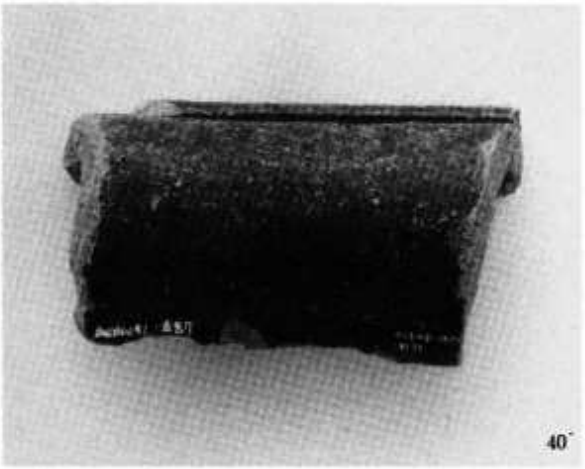

29
25
1
27
24
32
31
30

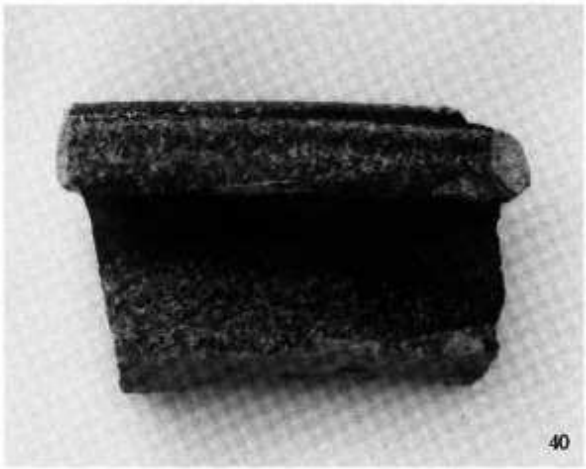

37
38
35
39
36
34

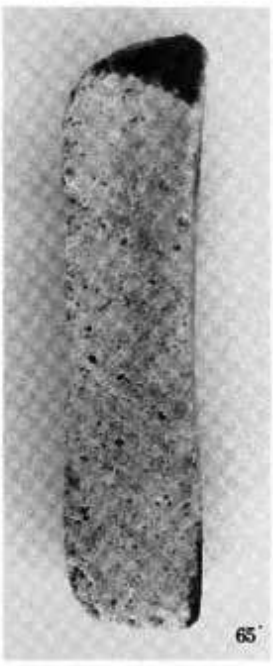

42
41
43

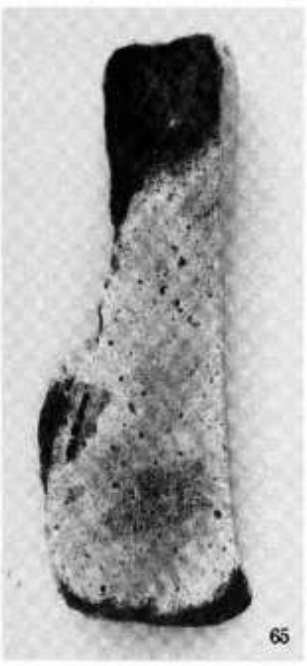

49
45
46
52
47
48

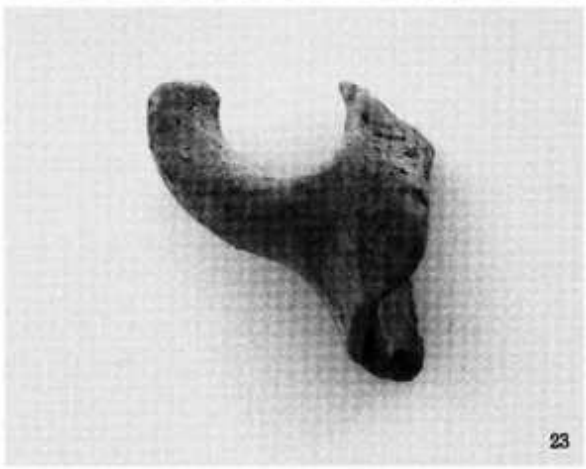

4
3
6
5

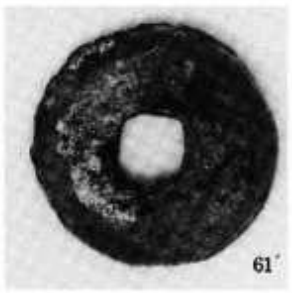

40'

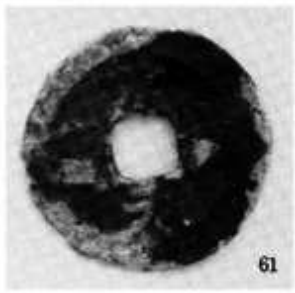

40


65'


65


23

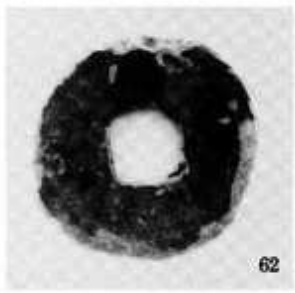

61'


61

58'

58

62'


62

18

59'

59

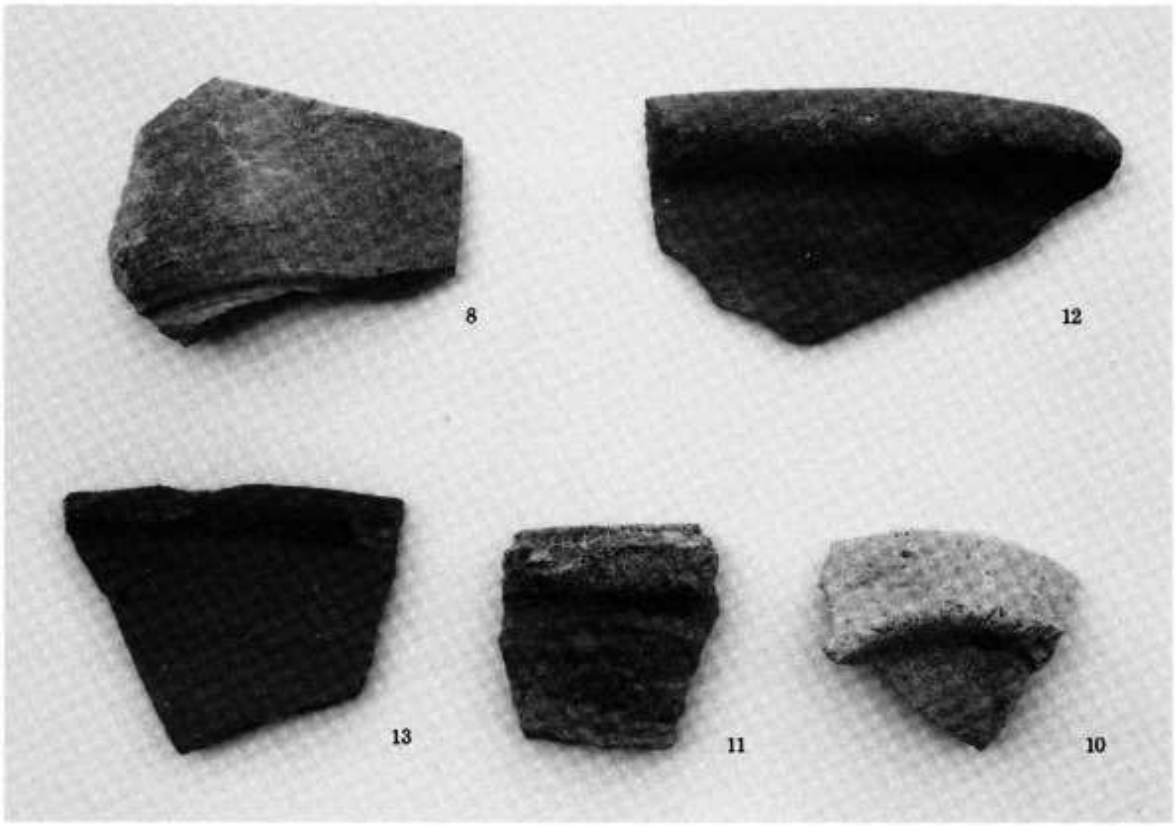
54

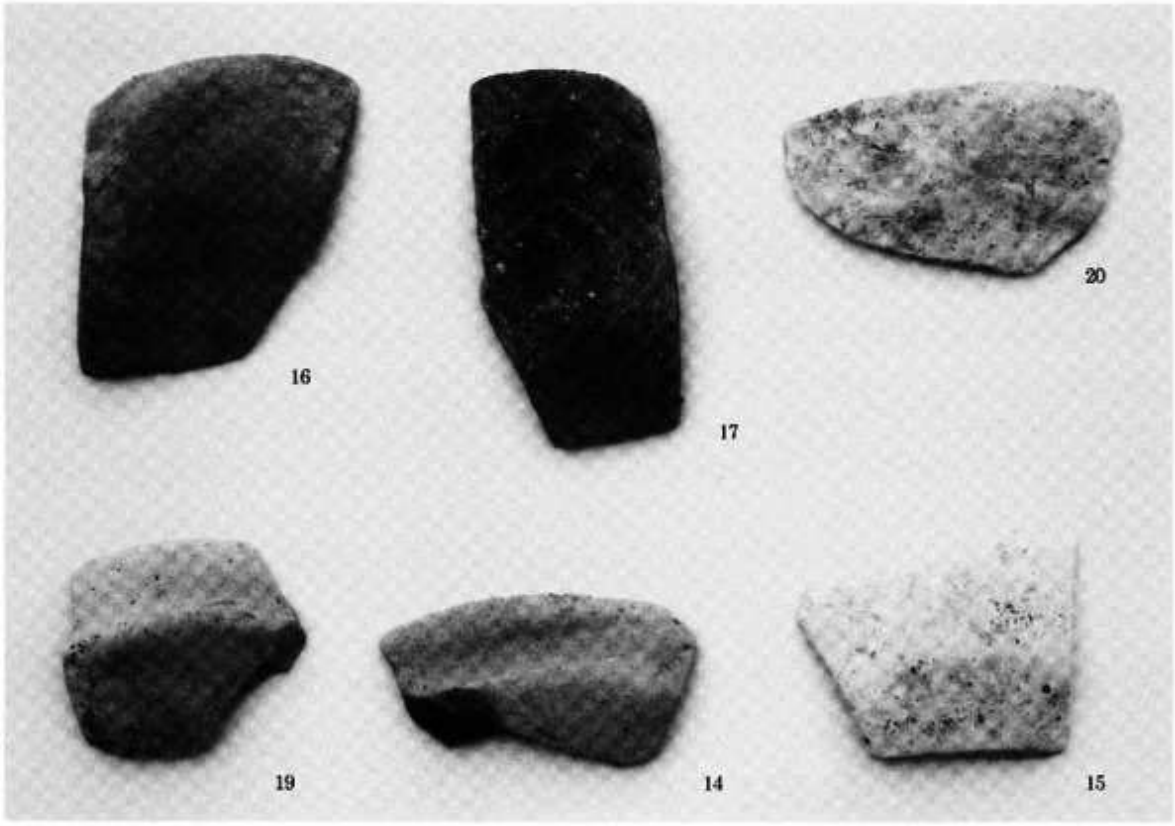
56

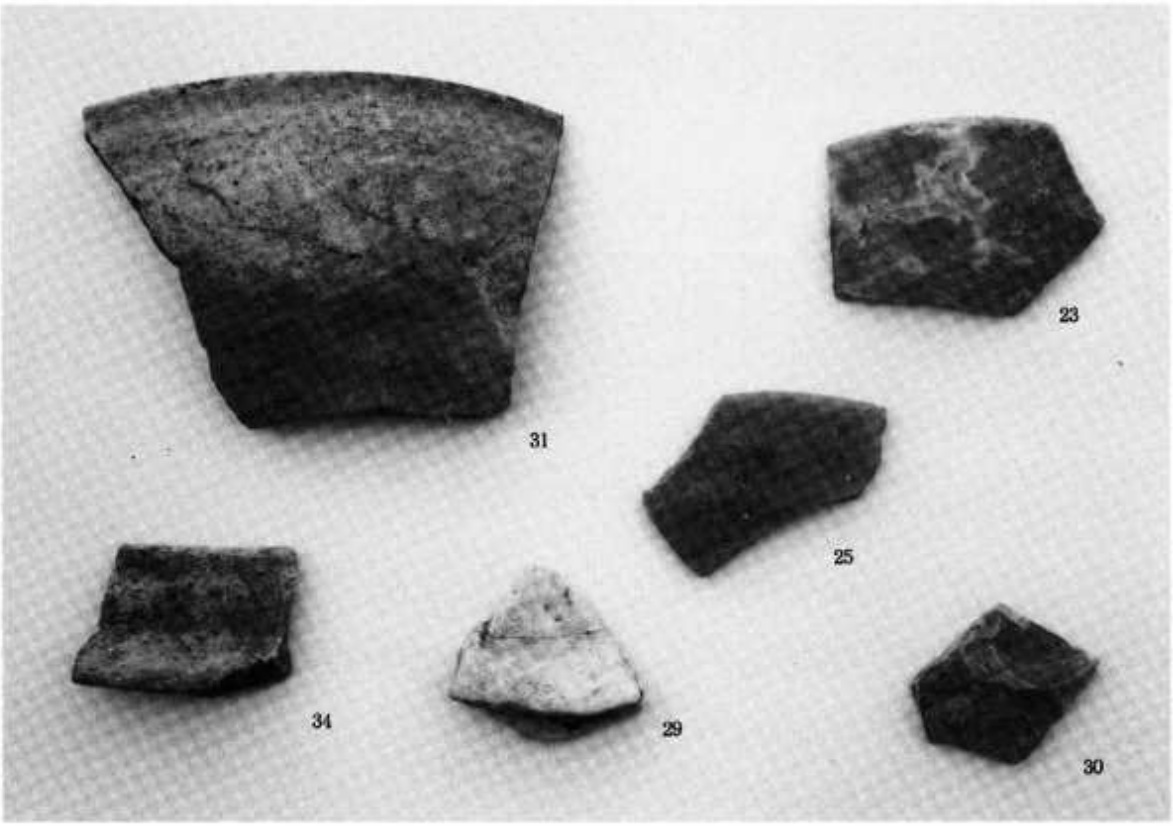
53

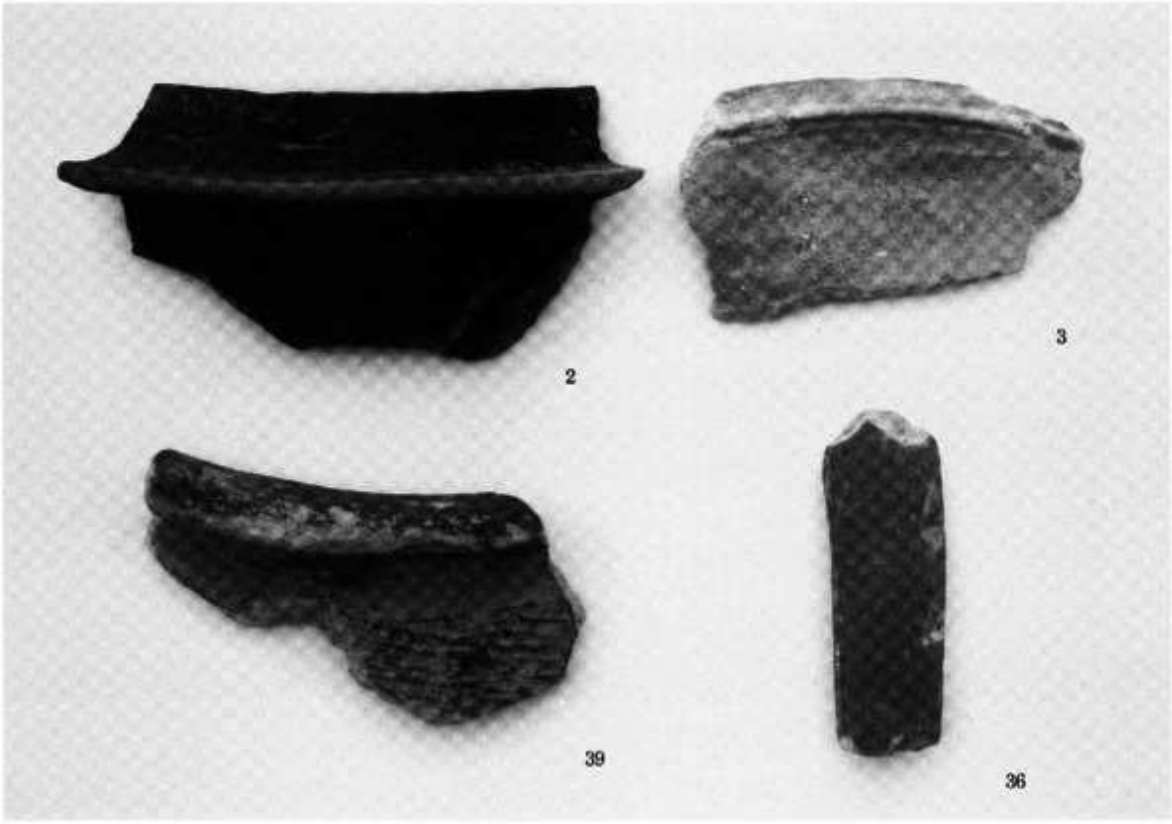
57

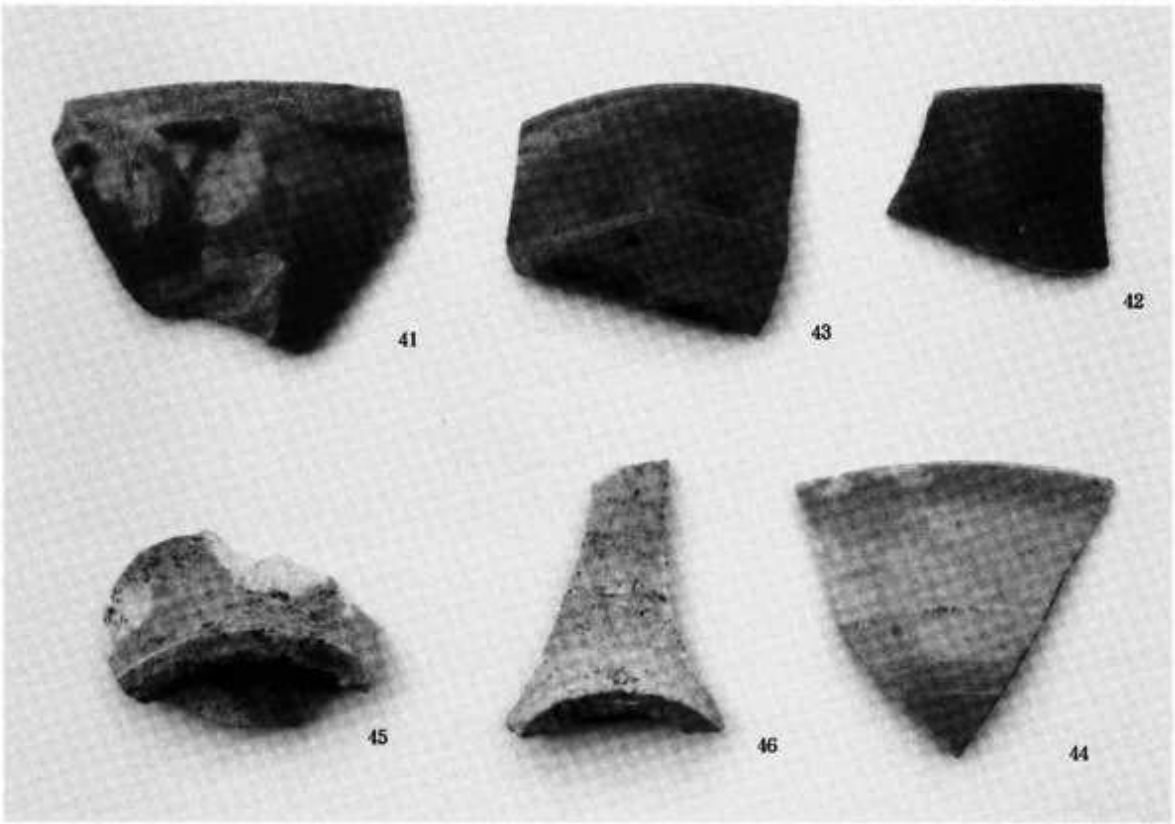
55

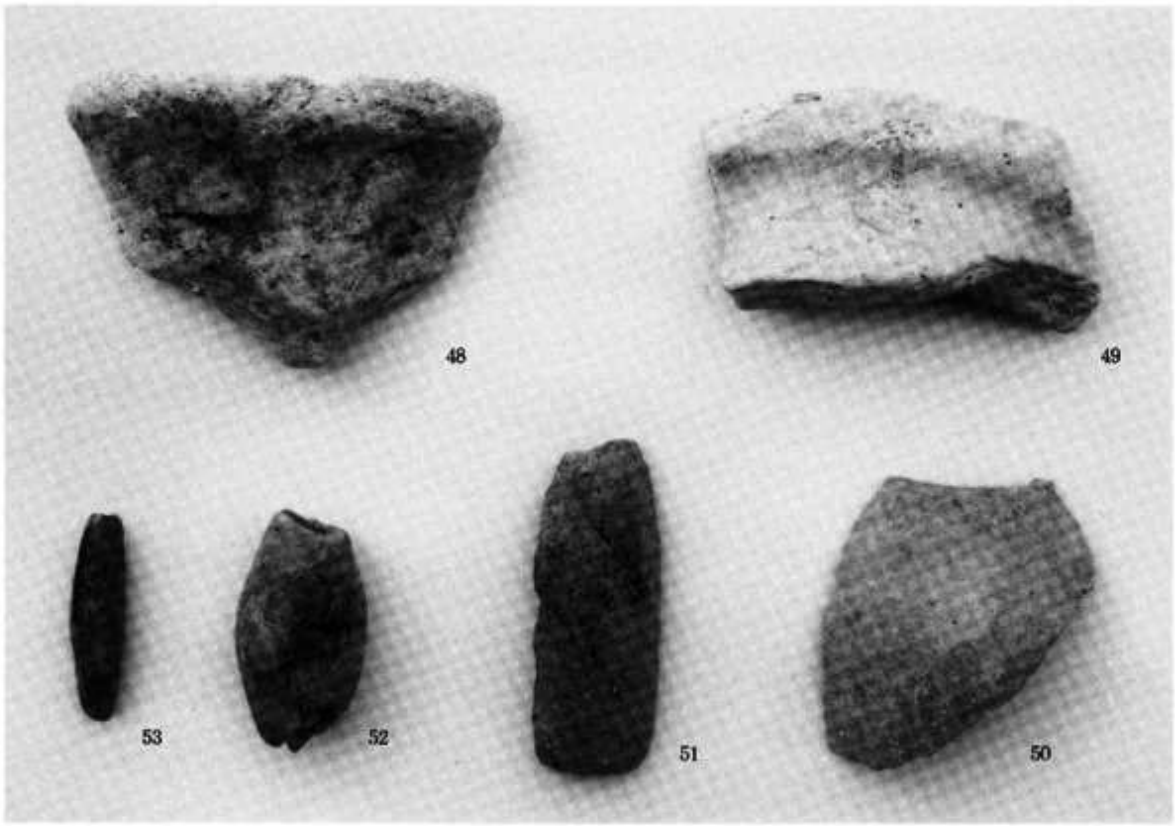

8
12
13
11
10

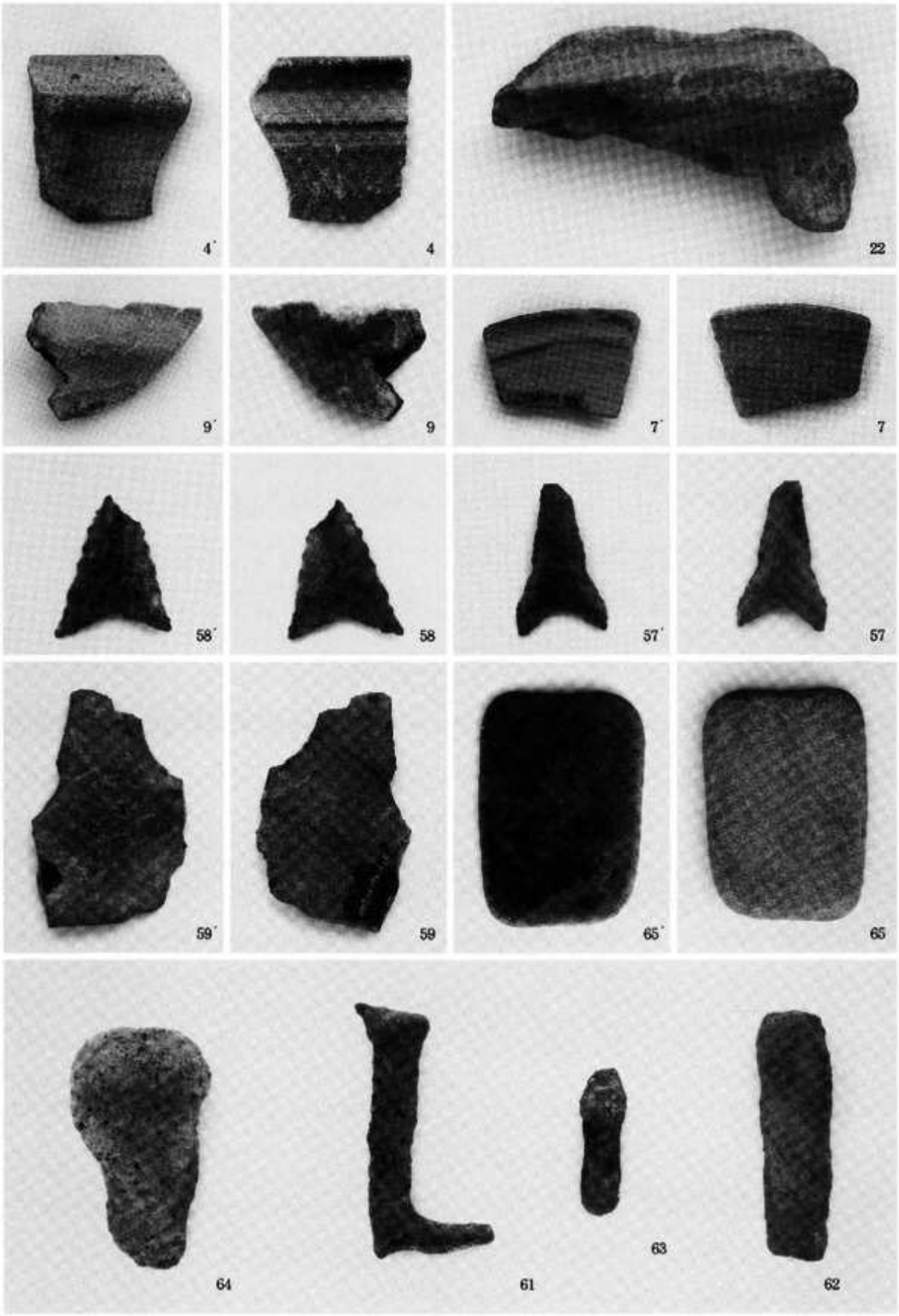

16
17
20
19
14
15

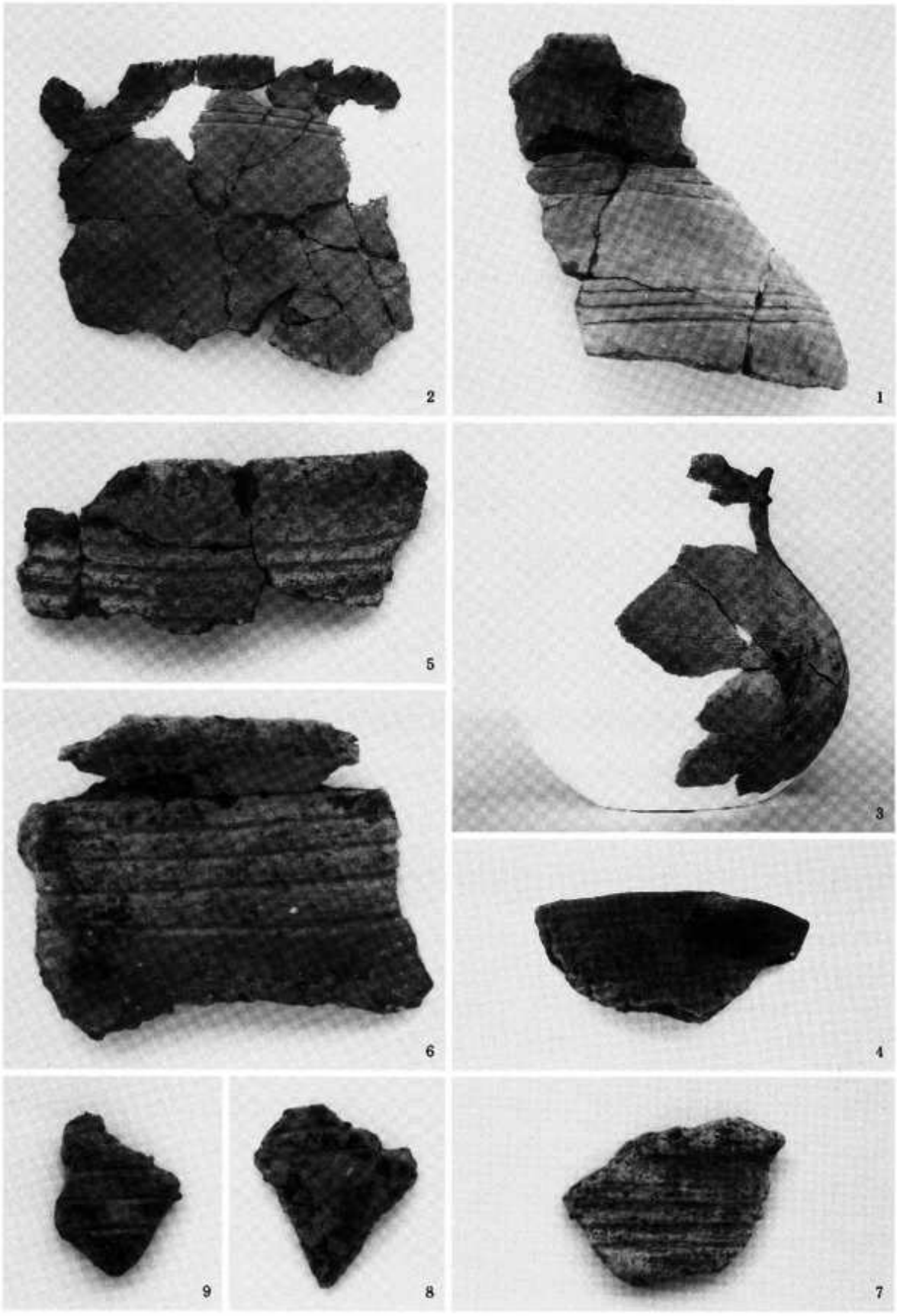

31
23
25
34
29
30


2
3
39
36


41
43
42
45
46
44


48
49
53
52
51
50

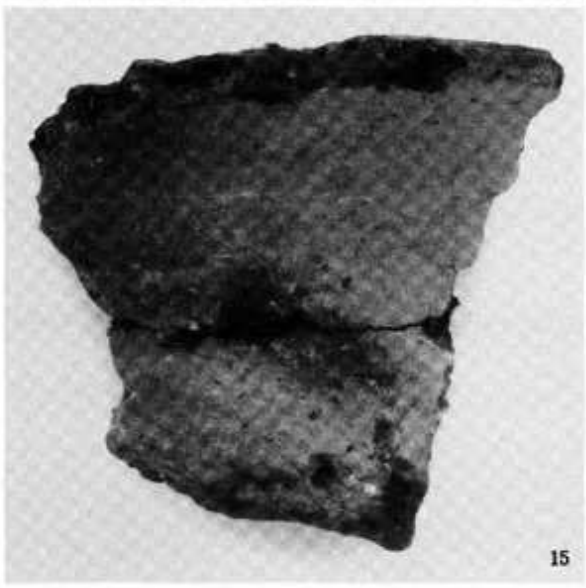

4'
4
22
9'
9
7'
7
58'
58
57'
57
59'
59
65'
65
64
61
63
62


2
1
5
3
6
4
9
8
7

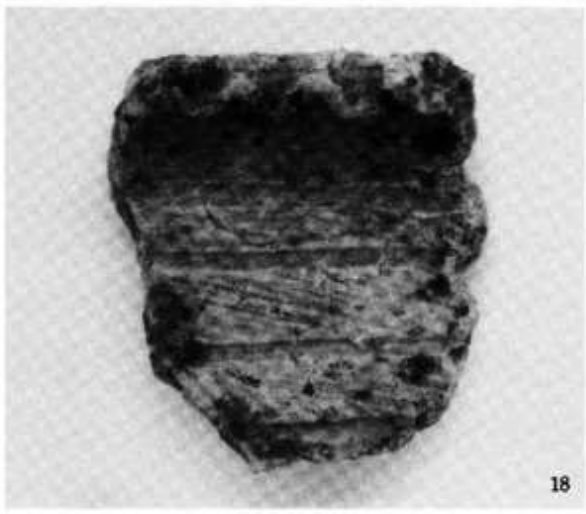
11

10

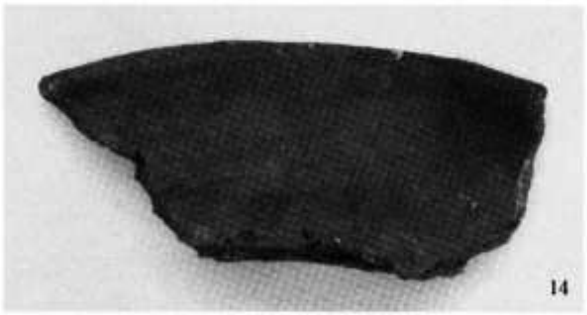
12


15

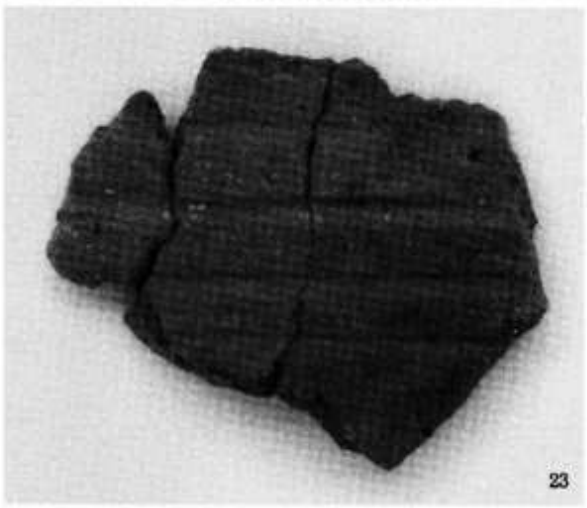
13


18

17


14

19

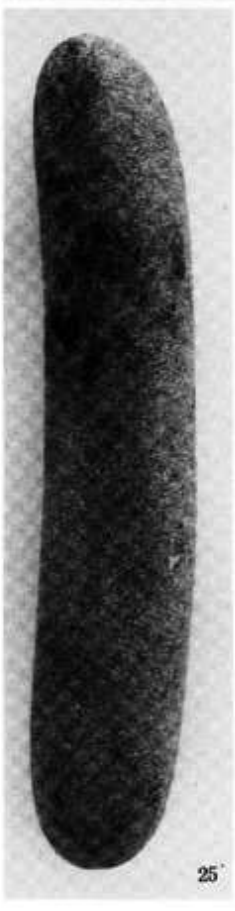

23

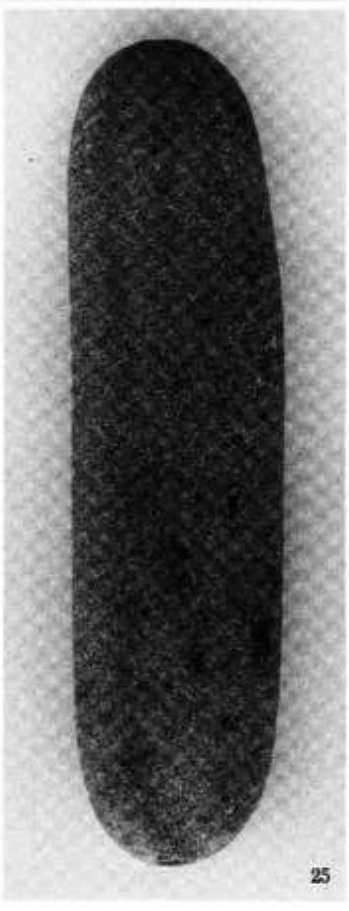
28'

28

26'

26


25'

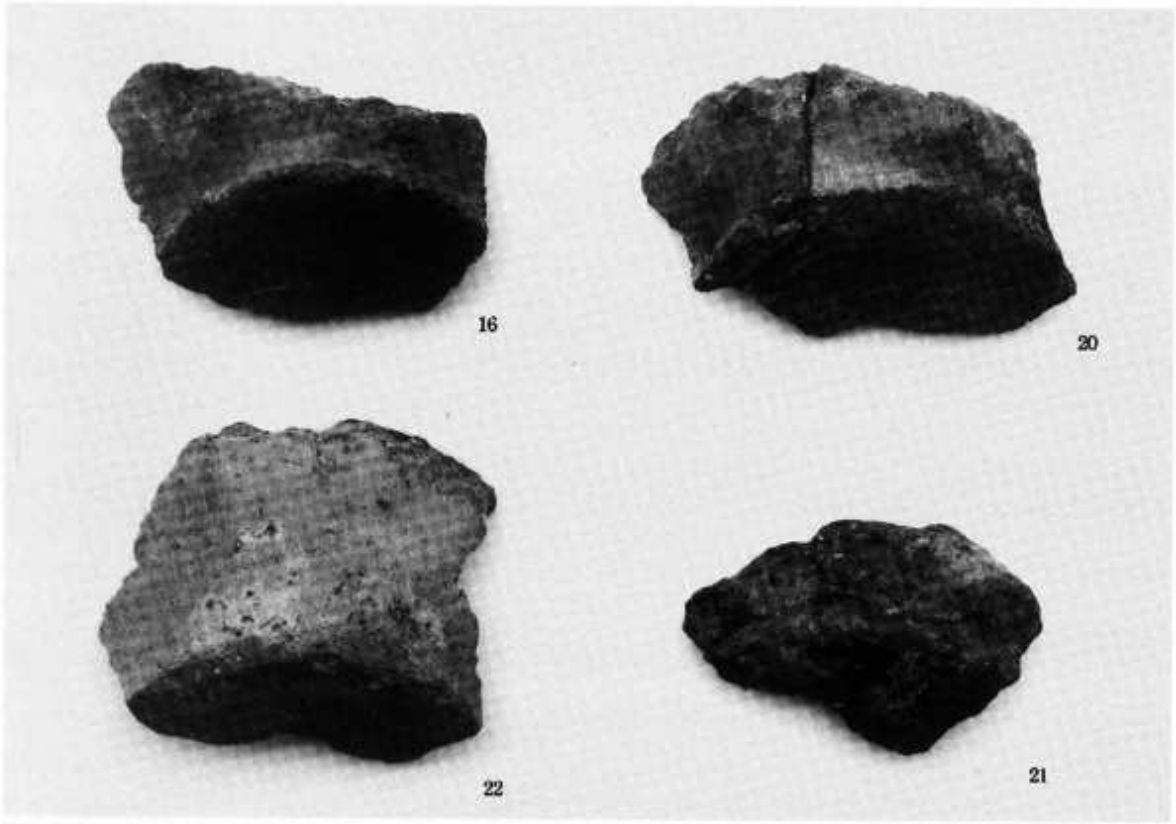

25

27'

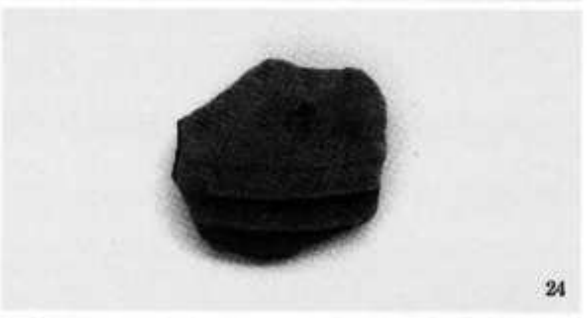
27

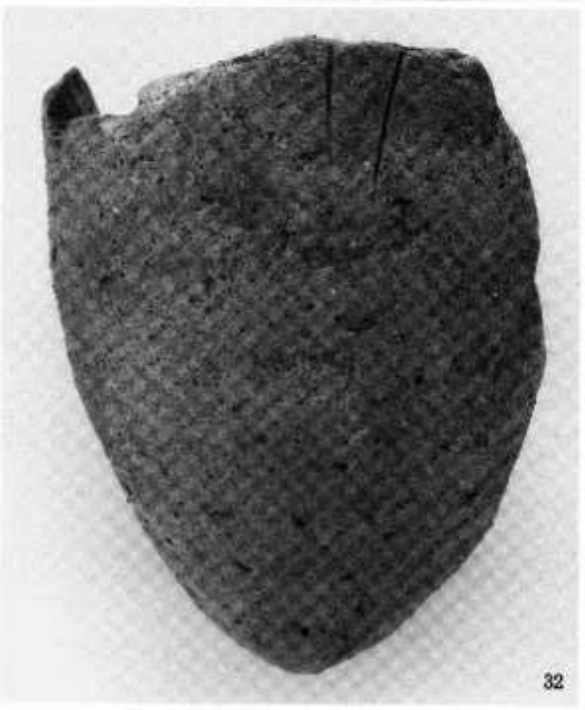
29'

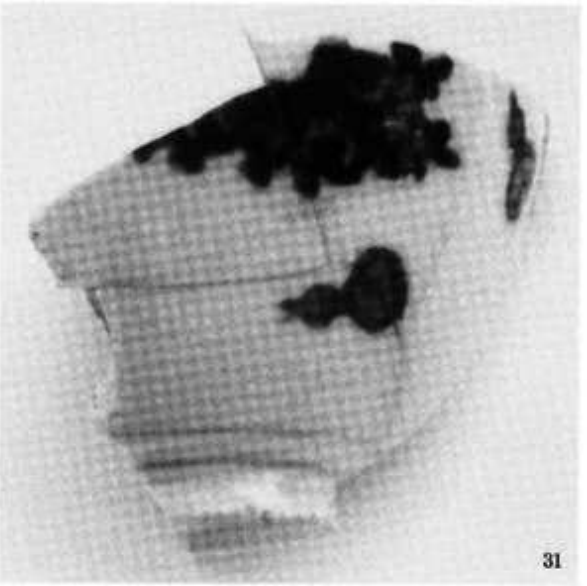
29


16
20
22
21

30


24


32


31

報告書抄録

ふりがな	しどういちばおかだせんしんせつ ともな おかだにし うじ まついせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	市道市場岡田線新設に伴う岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書
副書名	――――
巻次	――――
シリーズ名	泉南市文化財調査報告書
シリーズ番号	第２８集
編著者名	石橋広和・河田泰之
編集機関	泉南市教育委員会
所在地	〒590－05　大阪府泉南市樽井一丁目１番１号　℡.0724(83)0001
発行年月日	西暦　１９９５年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
岡田西遺跡	大阪府泉南市中小路・岡田	27228	OKDW	34度22分27秒	135度16分39秒	第１次調査 199110～199203 第２次調査 199210～199303	第１次 3,631.71㎡ 第２次 3,565.39㎡	道路新設
氏の松遺跡	泉南市岡田	27228	UJ	34度22分36秒	135度16分33秒	第３次調査 199310～199403	第３次 4,206.97㎡	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
岡田西遺跡	集落 生産遺構	中世・近世	井戸、水路、鋤溝群、粘土採掘坑など	須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・陶磁器・貨銭・石器など	中世以降、水田開発と経営の実態の一端を確認。
氏の松遺跡	集落 生産遺構	弥生 中世・近世	掘立柱建物、土坑、溝など 水路、鋤溝群、粘土採掘坑など	弥生土器・石器など 須恵器・土師器・瓦器・瓦質土器・陶磁器	市域初の弥生前期の集落確認。 中世以降、水田開発と経営の実態の一端を確認。

市道市場岡田線新設に伴う
岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書
泉南市文化財調査報告書　第28集

1995年3月31日　発行

編　集　　大阪府泉南市教育委員会
発　行　　泉南市樽井1丁目1番1号
　　TEL　0724－83－0001
印　刷　　中島弘文堂印刷所